

あゝ楽しんであれ、も
んくえ世界津々浦々

点=嘘

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者がもんくえ世界を冒険する話です！

以上!!

供給が少なすぎるもんくえ小説に飢えきつた限界オタクが自分なりの「こういうのでいいんだよ」を詰め込んで発散するだけの小説。

一般人からちよつとずつ強くなっていく主人公くんの頑張りとかを眺めていただければと思います。

更新は遅いかもしれませんが楽しく書きます。感想欄にコメントなどあったら是非。

※現在書き溜めにつき更新休止中……

目次

プロローグ

第1話

2

第2話

10

前章

第一節

三話

24

第4話

32

第5話

47

第6話

62

第7話

75

第8話

92

第9話

102

第10話

116

第11話

128

第12話

143

第13話

159

第14話

170

第15話

181

第16話

200

第17話

212

第18話

224

第二節

十九話

235

第20話

247

第21話

263

第22話

277

第23話

290

第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話 第24話

461 448 436 424 411 400 384 364 353 340 329 315 304

第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話

596 586 571 553 538 527 513 500 485 474

プロローグ

第1話

気が付いたら異世界に転生していた件。

集落の広場で謎の女神に祈りを捧げている連中を横目に見ながら、俺は死んだ目で前世日本人の暮らしに思いを馳せていた。現実逃避とも言う。

「おお、イリアス様……どうか御加護を……」

「我々を救ってください……」

何かの前触れがあつたかどうかも定かではないが、本当にいつの間にか俺はこの村の男子として生まれていたので。

村人の話を聞く限り、聞き慣れない神様の名前だったり魔物とかいう生き物の存在だったり俺たちの暮らしにかなりのウェイトを占めている様子で、そこからどうやらここが異世界らしいぞ、ということ俺は悟った。

いや、異世界ってこと自体は別にいいんだ。前の人生にそこまで未練があるわけでもなく、むしろその異世界というフリーズに少しばかりの冒険心がくすぐられていたことは否定できない。

俺も大人になったら魔法とか使えたりするのかな、とか、やって来たからにはこの世界を周って冒険してみたいな、とか？　そういつた事も考えないことはなかった。

しかも話に聞く限り、この世界の魔物とやらはとんでもないドスケベ生物の集まりって事じゃないか。それもまた非常に気になる。

何でも彼女らは殆どが美しい女の見た目を併せ持つていて、人間の男から精をむさぼる事を何よりの喜びとするのだとか。一度捕まれば生きて解放されることは無いと言ってもよく、搾り殺されたり飼われたりすることが割とよくあるという話だ。

もうその時点でこの世界が何かのエロゲーの舞台的なアレなんじゃねとは思ったものの、今となっては確かめようもなく、搾り殺されるのはどうかと思うが、そういう事情もあって俺はこの世界にけっこう夢と希望を抱いたりしていたのだ。

今が原始時代じゃなければな！！！！

もう本当に勘弁して欲しい最悪な状況なんだが！　正真正銘に文明がゼロ状態なん

だよ!! 中学校とかの歴史の教科書で言うならマジもんの1ページ目に載ってる感じのアレだ!!

……ていうか、それよりもずっと遅れてるかもしれないぞ、この時代。だって信じられるか? まだ火の概念が存在しないらしいぞ。

吹けば倒れるような草ぶきの屋根に身を寄せ、冬は寒さに耐えるばかり。死ぬ思いをして狩ってきた肉も生で食べるような、もうハードモードとかそれ以前の話である。

もし神様とやらが実在するんだったら思い切りブン殴ってやりたい。……まあ、この世界の住人はもれなくイリアスとかいう女神様をガチで信仰しているらしく、そんな事を口走った翌日には村の入り口で吊られているだろうから間違っても何も言えないのだが。

「くそ……寒みいよ……」

俺は確信した。こんな世界じゃ長く生きられない。

他の誰の為でもなく、俺の為にやれる事をやらないときつと死んでしまう。他でもない俺が、この世界の文明を発展させなきゃいけないんだ。

「はあはあ……」

それでさつきから鼻水を垂らしながら俺がセコセコとやっているのは、火起こしだ。

人類の発展は火の発見から始まった。とりあえず命の危険を遠ざけるのに一番の近

道だろうという判断もあつて、俺は真つ先に火を手に入れることを試みた。

「くつそマジか！ デイ○カバリーチャンネルとかじゃ点いてたのに！」

しかし木の棒と板を擦り合わせるだけで火が起こせるとも思っていなかったが、これほどとは。

予想外に難しい問題になるかもしれないと、本腰を入れて挑戦を始めてからそこそこ経った気がする。ちよつとチリチリ焦げ目が付いたりっていうのは安定して出せるようになってきたが、これ以上が中々うまくいかないんだよな。

「……………」

色々とお試しておかげでじんわりと赤く晴れてきた手をさすっていると、どうしても嫌なことを思い出してしまふ。

——お前は毎日そればかり、何をやってるんだ！

——見ろよ、村の役立たずだ！

——そんな事をしている暇があつたら、イリアス様に祈りを……

俺のやっていることに理解を示すような人は誰もいない。大人からは怒鳴られ、同年代の子供達からは馬鹿にされ、実の親からさえ異端なものを見る目を向けられる。

彼らは悪くない。

ただえさえ集落は貧しく、子供とはいえ遊ばせておく余裕なんて無いんだ。他の子らが狩りを覚え、魚をとり、木の実を拾っている間にも、俺は僅かな時間を使って火起こしの練習をしているだけだ。

当然俺だって必死にやるべき事はやっている。

だけど現代の生活に慣れきった俺の仕事はどうやったってぎこちないものになるし、そんな俺が空いた時間に遅れを取り戻そうとするでもなく、誰かに教えを乞うでもなく、ただ一人で無意味に木のくずを弄って遊んでいるときた。

そもそも、やっていることを誰かに説明すらできなかつた俺が悪いんだ。

いくら相手が『火』が何かすら知らなかつたとしても、ちゃんと考えて説明すればもしかしたら分かつてくれたかもしれないのに。それを俺は怠って、結果さえ出せば良いんだと高を括り、予想外に時間をかけてしまった今となっては周りに口を利いてくれる人もいなくなつた。

俺は、間違つたことをしているとは思ってない。このまま無理をして原始人の暮らしを続けていたらいつか本当に死んでしまう。

「ただ……」

一人でいるのは、寂しいな。

そんな益体もない言葉を飲み込みつつ、俺は誰もいない村の外れで火起こしを続ける。秋も深まってきて、雪が降り始めたら家の外での作業もできなくなる。もちろん家の中で火起こしの練習なんてできるわけがないので、もしかすると春まで何もできないなんて事になるかもしれない。

その間、冬の寒さにも負けず劣らずの冷たい視線が俺に向けられ続けるのかと想像すると……あまりの心細さに思わず目尻に涙が浮かんでしまう。くそ、何泣いてんだ。本当はいい歳いつてるくせに。

「ううっ……」

「何を、やっているのですか？」

「……？」

何だ、女の子の声？

年齢の割にはやけに凜とした、しかしどこか緊張してもいるような、そんな聞き覚えのない声が頭の上から聞こえてきた。

冬に向けて忙しいこの時期にわざわざ俺をやっかみに来るような奴がまだいるとは思わなかったが……。

何にしても、俺は今少し気分が落ち込んでいる。どうせ何か言っても理解されるとは思わず、顔を上げないまま黙っていると。

「摩擦によつて生じる熱を……種火も魔法も使えないことが前提であれば確かにこの方法が……なるほど……」

「えっ……」

何だ、今何て言つた？

あれこれ考えを挟む余地も無く弾かれたようにただ顔を上げると——そこに居たのは、思わず目を疑うような格好をした少女だった。

まず目に入つてきたのは服装だ。

俺たち原始人の文明レベルを遥かにぶつちぎっているとしか思えない。こんな動物の皮を切つて貼つたような服っぽい何かとは根本から違う、まるで俺がもといた世界からそのまま持ってきたと言われても信じてしまうような暖かそうな服だった。

それだけでも卒倒ものの衝撃だというのにアレは何だ？　きれいに整つた赤い髪や垂れ目がちのかわいらしい顔立ちも確かに目を引くが、正直言つてそれどころの話では全然なかつた。

メガネ。

めがね。眼鏡。スペクタクルス。

俺がこれ以上何か言う必要もあるまい。何がおかしいかって、何もかもだ。そんな常識外れの権化みたいな格好をした少女が、なぜか「興奮を抑えられない」といったような上気した顔で俺の事情を見つめているじゃないか。

「はあああああああああ?!?!」

結論から言おう。この出会いは、俺の人生を決定的に変える一幕だった。

そしてこれから数百年にも及ぶ……俺とこの世界との因縁の始まりでもあった。

第2話

俺の絶叫も無理からぬことであろう。

当然の権利を余す事なく行使した後、俺は盛大にどもりながらも辛うじて疑問の言葉を絞り出すことに成功した。

「なんっ……!!? だ、誰だアンタは!!」

「ま、待つてください。落ち着いて。私は怪しい者では……!!」

何だコイツ……落ち着いてって言う割にはコイツが一番落ち着いてないぞ。そんな異常すぎる格好をした女が自分を怪しい者では無いとか、己を客観視できてないにも程がある。

「っかアレだろ、こいつ魔物ってやつだろ! 明らかにおかしい服装もそう考えると辻褃が合う。俺たち人間は魔物の事をほとんど知らないが、向こうの文化がどれだけ発達してるかによるとあり得ない話でもないだろう。」

……ってことはオイ、待てよ?

もしかしてこれ、そういう事が起こり得てしまうのか?

「や、やめて！ 俺にエッチな乱暴するつもりでしょ！ エロ同人みたいに!!」

「んなつ!? え、えろどーじんとするのは何の事か分かりませんが、私がそんな、魔物のような蛮行を働くわけじゃないでしょう!!」

ええ………当の本人からそう言われてもなあ。

「犯罪者はみんなそう言うんですよ」

「うっ……ええいうるさい！ 貴方のような人間ひとり私にどうこうできないと思わ………つちよちよ！ やめて、人を呼ばないでください!?!」

一瞬だけ上位存在っぽい雰囲気を出したかと思えば途端に泣きついて俺を止めてくる赤髪の少女。何だコイツ、可愛いかよ。

うーん、しかしどういう事だろう。少女の口ぶりからするとどうやら魔物ではないようだけど。

「分かった分かったよ、俺をさらうつもりならこんな呑気してないだろうし。それで、あんたは何者？ 名前は？」

「……私の名はプロメステイン。何者なのかという問いには……すみません、答えられません」

「ふうん……」

何やら訳ありの様子だ。これ以上聞いても意味がないだろうと見切りをつけつつ、別

の質問をする事にした。

「それで、そのプロメステインさんが一体俺に何の用？ 村一番の役立たずにそんなものがあるとは思えないけど」

口では適当な疑問を並べ立てながら、頭では全然別のことを考える。

一番最初に彼女が言つてたことを思い出せ。摩擦だとか魔法がどうか、未だに原始時代の人類から出てくる言葉とはやっぱり思えない。

「私は……」

魔物じゃないとは言うが、少なくともそれっぽい何かでは確実にあるんだろう。そんな風に何となくアタリを付けていると、プロメステインがまた胡乱なことを言い出した。

「私は、ずっと前から貴方の事を見ていました」

ふーむ、一筋縄では行かなさそうなセリフを簡単に言つてくれる。そんなん聞かされて俺はどうしろつていうんですかね。

とはいえ単にストーリーカーをやつていたという話でもなさそうだ。告白するように声を絞り出すプロメステインにとって、これはとても大切な意味を持つ話なのかもしれない。

「イリアス様の教えが多くの人にとって唯一の救いとなっているこの世界の中、貴方は

神の聖句にではなく、他ならない自分の力に救いを求めました。自分を見ているのかも分からない神に頼らず、たった一人で周りを変えようとした」

何だって？

まさか、この少女は俺が何をしようとしているのか分かってるっていうのか？

「貴方がこの世に生み出そうとしているものは、『火』と言います」

「火……」

「そう。恐らく貴方は見たことがあるのでしよう」

プロメステインはそこで目を閉じ、燃えるような激情をゆつくりと吐き出すようにこ
う続けた。

「落雷、火山の噴火、もしくは太陽の中にそれを見たのかもしれませんが。それはヒトとい
う種を大きく変える力。……私は、その進化が宗教的禁忌として阻まれる瞬間を何度も
見てきました。何度も、何度も！ 神の裁きにあやかろうとするな、神の神祕に近づ
くな、神の恵みに手を伸ばすな……！ そうやって自分たちを進化から遠ざけようとする
人間を、何度も！ …… 真実に近づく事で救われる命があるのなら、などという高尚
な考えは持っていないなかつたに違いありません。私は結局、愚かな連中に自分の正しさを
認めさせたかっただけなのでしょう。許されない事だと分かっているにしても、ヒトが自分
で歩みを進める事ができないのなら、私がそれを与えようとする……」

独白する少女の苦悩はその小さな体にはまるで不釣り合いなほど巨大で、積み重ねられた果てにあるものなんだろうと……俺は、そう直感した。

「ですが、貴方だけは違った。貴方だけは真実を……！」

「あー。ちよつと、ちよい待ってくれよ」

「つ………？」

だからこそ、俺はこの厄介者と真つ直ぐに向き合ってみたくなったのかもしれないな。

面白くなってきた。

自然と口角が上がってくるぜ。

「まず、俺はアンタが思ってるような意気込みで新しいモノを作ろうとしてたわけじゃない。詳しい事は省くけど……この火の点け方だって、俺はこの方法で『できる』って知っていたから、お手本になる正解ってやつを見たことがあるからやってるんだ。今でこそ色々と試してはいるけど最初は酷いもんだった。何も考えない、生み出さない、そんな不出来な猿真似ってやつさ」

そうだ。俺はまだ何も作り出してなんかいない。

まあ聞いてくれよ。自分のことを特別な目で見てくれる女の子を目の前にして、そこんとこを勘違いさせたまままでいるのだけは絶対に嫌なんでね。

俺はくると振り返り、よく乾いた木の棒と繊維状の塊を再度手に取った。

「俺は……そうだな、旅人と出会ったんだ。彼はここよりもずっと豊かな国で暮らしていて、そこで見聞きしたものをたくさん俺に教えてくれた。彼は既に死んでしまつて……彼のことを知っている人はこの世界に誰もいないけど、俺だけは別なんだ。旅人のことを知ってる俺だけは。……ごめんな、何言ってるのか全然わかんねーと思うんだけど」

困つたように笑う彼の言う通り、プロメステインは少年の言っている事が全く理解できなかつた。少年が彼女の浮世離れた格好を目の当たりにしたあの時と丁度同じくらいの疑問で頭が一杯になっていた。

ただ、それでも少年の次の言葉ただ一つだけは、不思議とすんなり胸に受け止められるような説得力が込められているようだった。

「俺は特別ななんかじゃない。たまたま特別な道を通つてきただけの、ただの普通の人間

だよ」

そうやって再び一本の木の棒を懸命に擦り始めた少年は、続けざまにポツリと呟いた。

「ただ、俺が人より少し違う所があるとすりや……夢がある」

「夢……」

ひたすら汗を流しながらも凄じい集中力だ。彼のことをずっと見ていたプロメステインからしても類を見ないと思えるほどに。

あるいは、彼は今までその夢を誰かに聞かせてやりたくて仕方がなかったのかもしれない。それは楽しそうに顔を緩めて、ただ作業に没頭していた。

「魔法だよ」

「えっ?」

「神様すら存在しない場所から来た『旅人』に聞いた話が全てだった俺にとって、どうやら自分が今いる世界にそんなモンがあるなんて話を聞かされた日にやあそれは大層な驚きだった。俺は震えたよ。興奮のせいで体が震えて止まらなかった。それからだな、俺の夢が決まったのは」

しかしその内容はあまりにも無謀で、雲を掴むように現実味の無いものとプロメステインは思った。あらゆる文明が未だ興ってすらいない人類が魔法を学びたければ、そ

の体系を自分自身で根本から開拓しなければならぬからだ。

未だに魔物の技術であるその秘奥の入り口にすら到達する事は人間の短い寿命ではとても叶わないと、分かりきっている。

「……不可能です。貴方がそこに至るまでの障害は多く、そして大きすぎます。……残念ながら」

「……そうか」

「——あつ」

目を伏せながら思わず事実を口にしてしまうプロメステインは、直後に顔を青ざめさせてその口を両手で押さえた。

（私は何を言っているの？ わざわざ彼を絶望させる理由なんか無い。寿命の短い人間が技術を発達させていくには彼のような犠牲がなくてはならないのに。むしろ、人間が前に進むことを望むなら、私はこんな犠牲が人の世に芽を出しつつあることを喜ばなくちやいけないのに……）

「あ、私は……っ」

「アンタはさ」

遮るように。

「ヒトが自分で歩みを進める事ができないのなら……っって言ってたけど、それは違うと

思う。俺なんか居なくなつて誰かがそれをやつていた。人間は強いよ。——それに、俺だつてその一人だ」

キラキラと、尚も楽しげに目を輝かせて。

「もし俺が死ぬまでに杖の一振りでも火花も散らせなくなつて、魔法のために努力してゐることを思うだけでワクワクしてくるんだ。俺はこの世界をもっと識りたい。生きていくのは苦しくて仕方がないけど、夢を見ている時だけは——勇気が湧いてくる」

スパア……ッ！ と。

その瞬間、木の板から今までと比べ物にならない量の白煙が噴き出した。

少年は額の汗もそのままに繊維状の木屑を押し付ける。今までの失敗からは考えられないほどの冷静さに、「こんな所で立ち止まつていられない」とでも言外に語るかのような強い決意を表しているようだった。

「俺はこれから人間に火を教え、車輪を教えて、金属の溶かし方を教える。そうやつて進み続けていけば、いつかは必ず夢のことを思い出すことができるから」

「だから、まずは生き抜くんだ」

静かで、それに丁寧な仕事だった。

あらかじめ念入りに準備していたのだろう。間違いなく緊張の中にあるだろうにその動きは淀みなく、石を並べて丸く囲んだ焚き火の炎は少しずつ勢いを増していく。油脂を多く含む針葉樹の木切れに燃え移らせて——そして、掲げる。

(ああ……)

歴史が刻まれたその瞬間をただ一人見ていたプロメステインは、彼の背中の中に確かに見た。

真理に足を踏み入れた、自分と同じ求道者の歎びを。

火を作る方法を考えたのは自分では無いと彼は言うが、それを押ししても未知に挑む姿に偽りは無かった。

人間や天使といった垣根は関係なく、生まれて始めて彼女は同族と目せる者を見つけ。故に自身でも気が付いていなかったのだが、同族を愛する心こそは彼女の生来の本質だった。

そして同時に……プロメステインは悲観した。初めて出会った同胞は、その志を決して果たす事の出来ないままに死ぬ。

彼がこの世を去り、永遠の別れが訪れれば、自分は再び悠久の時を独りで過ごすことになるだろう。異なる道を求める者とはいずれ必ず別れの時がやってくる。その最期を見届けても、自分の道が続く限りを進み続けなければならない。

だが、しかし。

同胞の最期をただ見届けて満足するには——彼女は若すぎる。

固く目を閉じ、震える腕を押さえ付け。余りにも大きな感情をこらえながら、ヒトに火を与えるはずだった少女は音も無くその場に背を向けた。

パチパチと火の粉を散らす松明を、少年は目を細めながらただ仰ぎ見ていた。ヒトに齎された最初の炎。手の中で静かにまどろむ熱に浸っていると、不意に鼻の頭にヒヤリと冷たさを感じて驚いた。

「雪、か……」

空から静かに舞い落ちる白は、美しくも残酷な冬の訪れを告げる証。多くの人々がその極寒に倒れたが、もはや人間は死に怯え、震えるだけの存在ではない。抗う術はもうこの手にある。

「……なあ、言っただろ？ 俺には夢があるって。こうして先に進んでる限り、俺は絶対に諦めずにいられるんだ。だから……」

振り返ると、そこには誰もいなかった。

しんしんと降りしきる雪が残響をも吸って、空を見上げて果てのない雲が広がっている。

「……行った、か」

しばらく少女の居た場所をぼんやりと眺め——村の中央に踵を返す。いつか彼女とはまた会えるような気がしていた。この日語った夢を追い、道を歩き続けるその限りは。

???????

あの日から数年が経った。

村は大きく豊かになり、俺はその中での尊敬を集めて地位を確固たる物にした。この若さで次代の村の導き手になる事すら願われたが、それを断って、代わりに山奥に小さな家を建てさせた。

俺はそこで静かに暮らし、この世界のことを少しづつ調べることにした。

この世界の人間も馬鹿じゃない、もう俺の代わりぐらいいは難なくやっていけるだろう。

「——よっし」

見慣れない植物や生き物、どうか交流を図ることのできた数少ない魔物の記録を記した分厚い本を机にしまう。そして新たな真つ白の本を革の鞆に詰め込み、それを背負った。

今日この日に至るまで、かつてあの少女に語った夢を忘れた事はない。あの途方もないと言われた夢のために、俺は今までやれる事はほとんどやってきたつもりだ。

俺は今日から、旅に出ようと思う。

まだ知らない外の世界を探索し、この世界の神秘を見つけ出してみせる。そのために新しい一步を踏み出す時がやって来た。

「……………」の家にも世話になったな」

再び帰ってこられるかも分からないが、これで思い出の詰まった小屋だ。…………いや、必ず帰ってくる。そうでなくちゃいけない。

あの日から少しも変わらない夢への熱意をそのままに、俺は家の扉をゆっくりと開ける。

その、時だった。

「……………!?!」

柔らかな光が辺り一面に広がる。

莊嚴、とも言えるような空気がその場に満ち、同時に空からある人影が降りてきた。その人影は、人の形でありながら人間とは全く異なる部分があった。腰から伸びる一對の翼、それ自体が光って見える頭上の輪。

前世の知識を借りるまでもない、この世界の人間にも広く言い伝えられているその姿は、まさしく『天使』そのものだった。

いや、もしかしたら、俺が本当に驚いたのはそこでは無かったのかもしれない。かつての記憶そのままの赤い髪、眼鏡をかけた少女の姿は……。

「プロ、メステイン？」

「私は天使。ヒトを導くもの」

結論から言おう。この出会いは、俺の人生を決定的に変える一幕だった。

そしてこれから数百年にも及ぶ……俺とこの世界との因縁の始まりでもあった。

「望むのであれば、貴方に魔の道を授けましょう」

前章

第一節 三話

「しつかし……旅の道連れつてのは思いがけずにできるモンだよなあ」

誰に向けてでもない言葉をぽつりと零す。いかんな、ずっと一人でいたからか思わず何でも口に出す癖がついているのかもしれない。

これからは独り言なんてする暇はそうないだろうに。そら、今じゃ返事が返ってくるんだからな。

「外に出て一歩目でしたもんね。たまたま降臨したのがその時だっただけで、そこまで意図して貴方を見張っていたという訳でも無いのですが……」

やたらと壮大な演出と共に地上に舞い降りた天使様は妙な所を気にしているらしい。やや気まずそうに目を伏せている懐かしの顔を眺めながら、俺はようやく長い旅路を歩み始めていた。

結局あの後、俺はプロメステインの話聞くべく一旦は旅立ったつもりの家に逆戻りするハメになった。「ここに戻ってくるのも一体いつになるだろうか……（しんみり）」みたいな語りを脳内に入れておきながら一分と経たずにトンボ帰りしてしまつた訳だ

が、こんな事になるんだったら仕方ないってもんだろ！

この世界じゃ未だに目を引きすぎる服装を隠すために俺がくれてやったフード付きの外套をいじり回している赤毛の少女に向かって、俺はひとまずの疑問を口にした。

「でも本当にいいのか？ 天使とやらにもお役目とかがあるんじゃないやねーの？ 俺に魔法を教えてくださいるところか旅にまで付き合ってくれるだなんてさ。……ヒマなの？ 天使使って」

「失敬な……これも私の努力の賜物ですよ。天界での品行方正な態度が認められて、特別に地上監視の任を数日に一度の報告で済ませられるように許可を貰ったんです。ですから時々は向こうに戻らなければならいんですが、それでもここまで漕ぎつけるのに数年かかったんですよ。全く」

「地上監視って……それ現在進行形でサボってないか？」

「愚鈍な連中を満足させる報告書の書き方なんてとつくに心得ていますよ。……それに私、表向きは“優等生”ですから」

いたずらっぽく笑う少女は旅のお供として大変眼福で結構な事だが、予想外の腹黒さに流石の俺も危機感を感じずにはいられない。それ、もしバレたら相当まずくないか？ 「まずいどころか、私たち天使が地上の者に何かを教えようとしたりしてる時点で終身刑ものですよけどね」

「は？」

え、何その管理社会。ヒトに何か教えたりとか、てつきりそういうのこそが天使の仕事なのかと思つてたんだけど。

つーかお前、俺と初めて会つた時に人間に火を教えようとしてたとか何とか言つてなかつたか？ まずい、こいつ割と思想が反社会的だ……!!

「大丈夫ですよ。地上遍く人々に知識を伝え広めるといふならまだしも、貴方個人に魔法を教えるぐらいでしたらバレっこありませんから。……でも、そういう意味では貴方は私の命の恩人という事になるかもしれないですね」

……随分肩入れするんだな、俺に。

いや、命の恩人うんぬんは置いといてもね？ 俺は天使サマに特別目をかけて貰えるような人間じゃないと思うんだ。大して取り柄がある訳でもなからうに、なーんでこんな奴に親切にしてくれるんだらうね。

まあ……そんな事口に出したりはしないけど。

何を重視するかは人それぞれで、俺が口出しするような事じゃない。危うい所もあるしイマイチ信用できるかは怪しいが、プロメステインは既に俺にとつては信頼するに足る奴だと思つている。それで十分だ。

「にしても、天使やイリアス様なんて本当にいたんだな。地上を監視する天使ね……」

そうなると旧約聖書でいうグリゴリの墮天使みたいなもんか。何となくイメージしつつ、数時間前に家で話し合った事を思い出す。

「まあ、お前がいてくれてホント助かるよ。正直言つて行く当てもない旅だったからな」
「……ふふん、頑張ったんですよ？ 貴方のためになる目的地を入念に調べておいたんですから」

そう、俺は家を出る前に簡単なブリーフィングを受けていたのだ。何しろこの世界の形すら知らなかった俺にとってこんなにも有難い話は無い。

プロメステインによるとこの星には三つの大陸があつて、今いるのは中心の一番大きい大陸なんだとか。俺の住んでいた集落『ヨロギ村』は大陸の中央東寄りに位置していて、東の海まで続く広大な森林と西の海まで続く山脈にちょうど隣接した場所にあるというこららしい。

まだまだ白紙が大半を占める本に言われるがまま書き写した簡単な地図、そして村で最近開発した方位磁石と睨めっこしながら、

「それで今向かっているのが『精霊の森』、そこで用を済ませたら一旦ヨロギ村に引き返し、最終的にはこの『ゴールド火山』が目的地になる……と」

「ええ、そうです。なぜその場所が貴方に必要なかは道すがら説明しましょう。何しろ魔法の基礎理論を習得しなければ仕方のない話ですから」

だから俺たちは南西に向かつてる訳だな。いやはや、プロメステインが出したこの答えに辿り着くまで、俺一人の力では一体どれだけ時間がかかったんだろうか。

いや、ここまで来れた保証なんてどこにも無い。場合によつては前世でいう怪しげなカルト研究会みたく、全然関係ない方向だと気付かないまま突っ走っていた可能性の方が高いと考えると空恐ろしい話ですらある。

「……何回だつて言うけどさ」

「？」

小首を傾げるプロメステインに向かつて、俺は眼鏡越しにその目を真っ直ぐに見て言った。

「俺の夢を助けてくれて、ありがとう」

本当なら道半ばで終わるはずだった。

それでも構わない、満足だと思っていた。

でもそれは、結局は仕方のない事なんだと自分を納得させようとしていただけに過ぎなかつたのかもしれない。確かに今まではそうだった。

だけどプロメステイン、お前は俺の前に現れてこう約束してくれた。私が導くと、貴

方の努力は報われると。

「その言葉にどれだけ救われたか分からねえ……だから俺も約束する。一人ぼっちでこの世界に放り出されちまった俺なんかを救ってくれた、他でもないお前の為いだ」

何となく分かっていった。この天使が危険を冒してまで俺を手助けしてくれるのは、生まれて初めて出会った“共感のできる夢”の行く末をどうしても見届けたかったからなんだろう。

だから俺がこいつにしてやれる一番の恩返しってのは、俺が途中で道を投げ出したりなんかしないとはつきり伝えて、こうして安心させてやることだ。

「俺はこの道を歩く事を絶対に止めたりしない。俺の人生全てを懸けた先の結末って奴を、いつか必ず見せてやるからな」

正直に、誠実に。嘘偽りの無いように思いの丈を真っ直ぐぶつけてみたつもりなのが、なにやらプロメステインは顔を伏せてブツブツと呟いている。どうも表情が窺い知れない。

「……貴方って、どこか擦^ヌれてるようで実は相当熱血ですよ。そういうセリフを恥ずかしげもなく言ってしまうあたり」

「は、はあ?!」

「うるさいです。ついこの間まで少年だったくせに」

こいつ、人が真剣に言ってるのに憎まれ口を叩きやがって……! おい、こつち見ろ

! ちゃんと顔見て話せよな!!

そう言うとプロメステインは当て付けかのようにフードをすつぽり目深に被って顔を隠してきやがった……野郎、全面抗争の構えか!!

「おい、野郎! そんな事のために服なんかくれてやった訳じゃねえぞ?」

「や、やめて……! ほんとにつ!!」

やや不意打ち気味に襲い掛かれたプロメステインは暫しの抵抗も虚しく、いとも簡単にフードを掴まれてその素顔を晒した。

ぶつちやけ、その中でどんな悪どい嘲笑を浮かべているだろうかとすつかり思い込んでいた俺は、本当のことを知っていればこんな真似はしていなかったくらいの良心は流石にあるのだと弁明したい。

「うう……」

物の見事に顔を真っ赤にし、瞳をうるうるさせて逸らしているメガネっ子がそこにいた。

「……………」

「……………あの、その、」

申し訳……………ありませんでした……………。

その後、俺は土下座しながら頭上より降りかかる天使様のお叱りを深々と胸に刻み込んでいた。

どうやら俺は、自分が時々いかに恥ずかしい事を口走っているのか自覚しておくべきらしい。

第4話

そうこうしている内に日が高く昇ってきてしまった。そろそろ昼飯の時間だな。

「よっ、はっ、と」

できるだけ川俵いに歩いていることもあつて釣りでもしようと思えば場所には事欠かない。いちいち持ち歩いている訳ではないが、釣り竿なんてのは紀元前一万年前からある品物だ。とつくに通過済みの技術である。

針と糸さえ持つてればその辺の枝でもナイフで削つてすぐ作れる。本当なら竹とかのロツドが良いんだけど、そんなもんこの辺にどうせ生えてないからな……。

そんなこんなで、ようやく俺は銀色の魚を釣り上げることに成功した。やったぜ。

「どうだっ上手いもんだろうー！」

「そうですね。少なくとも従来の手掴みよりはセンスがあるんじゃないですか。まだ望みはある方だと思いますよ」

ぐうつ、なんか当たり強くねえか……？

この反社天使には俺が“村の役立たず”と言われていた頃のことともバツチリ見られている。よって前世関連以外の隠し事も見栄を張ることもできやしない。過去の黒歴

史を並び立てられちまうと口喧嘩で勝てる要素が無くて困る。

「ふん……」

「やれやれ」

そっぽを向くプロメステインの当たっている焚き火の所まで魚を持ち帰る。申し訳程度の下処理をしてからさっさと食べてしまおうとするか。

うーん、こういう作業をしてると俺も変わっちゃまったと実感するな。前世では魚だとしても生き物の腹を掻っ捌いて内臓を引っこ抜くなんて機会はそうそう無いから抵抗感もあつた訳だが、今じゃ鶏くらいなら特に違和感もなく締められる。

確かに過酷な環境ではあるが、否いやが応おうでも人生経験つてやつが積まれていくな。今じゃちよつとしたアウトドアマニアにマウントを取れるぐらいにはなつたと思う。

ピチピチ跳ねる小癩な魚類どもを淘汰していると、プロメステインがチラチラと興味深そうにこちらを伺つていたらしく俄にわかかに目が合った。

「もしかして興味ある？ ほれ、中身見てみるか？」

「えっ、ええ……」

まな板代わりにしていた平たい岩の上に散らばつた内臓をおずおずと観察してくる。俺に教える立場つてことで忘れかけていたが、こいつも本当なら自分の知識欲を満たしたいと思つてるタイプのはずなんだよな。これぐらいの物ならいくらでも見せてやる

か。

けっこう躊躇なく臓物をくちくち弄ってくるメガネっ子にちよつとしたギャップを感じて微妙な表情になっている俺に対して、プロメステインは俺への確執なんて忘れ去ったかのように疑問を投げかてくる。

「人間はこれを取らないと食べられないんですよね？ それは健康に害があるからですか？」

「うーん、食べないこつちやないが普通は苦すぎるから取り分けるのが常套だな。えぐみの程度も種類によるんだが、まあ悪いやつを食つちまっても良いことはないしき。……つーか何、ずいぶん他人事みたいに言うけど天使つてモノを食わないわけ？」

「いえ、そうではありませんが……天使の多くは菜食主義なんですよ。魚を食べるどころか、こうして生き物の中身を見る機会なんて向こうでは滅多に無いものです」

何だ、食わず嫌いか？ そんなんだからチビっこいままなんだぞ。

そう言いながら頭を上からウリウリと肘で小突いていると、数年で身長差がすっかり逆転した少女はまるで獣のような目で睨んできた。こわ……。

「そういう話じゃありません！ というか私からすれば、貴方たち人間の子供がたったの数年でそこまで伸びる方がおかしいんです」

「うへえ、ベジタリアン……」

いやまあ、前世でよく見た人間の自分縛りとは違ってマジモンの天使様にあらせられる訳だからな。そりやそういう事もあるか。

しっかし面倒な事になった。旅の途中で獲れる食糧と云ったら肉や魚の方がむしろ簡単だ。この辺りでとれる野生の果物なんかは殆ど季節から外れてるし……。

どうしよつかないと考えつつ魚に串を入れてみると、勝手に俺のナイフを使って魚の内臓を解体しつつあるプロメスティンが何でもないように補足を入れてきた。意外と俺のこと良く見てるんだな、お楽しみ中だろうに。

「……私の分は大丈夫ですよ？　天使は人間と違って少しくらい食事を断つても平気ですし、もともと私は少食ですから」

はあ、それは結構な事で。

天使とかいう生き物の上位存在っぷりを改めて思い知るが、ついでにもう一つ聞きたい事がある。

「それって単に燃費が良すぎて食べられる量が少ないの？　それか食べようと思えば人並みには食べられる？」

「え？　……まあ後者ですけど、それが何か？」

ああ、それなら良かった。

口ん中から串をぶっ刺した魚を焚き火にかけた後、俺は手を洗ってからゴソゴソと鞆

の中身を探りだす。こんなに早く虎の子を開封しようとは思ってもみななかったが、まあいいだろう。

粗方作業を終えて一息ついてるプロメステインに、俺は全体的に褐色っぽい粒々の実を差し出した、

「ほれ、乾燥果物。甘くてうまいぞ」

旅立ちの日のために村で作らせたドライフルーツだ。道中で少しずつおやつに食べながら歩こうと思ってたんだが、やるよ。

「ちよっ……話聞いてました!? 私は食べなくていいんですってば! 貴重な食糧なんですから貴方が食べてください!」

「まあ待て、言わんとする事はわかる」

正直この時代、長旅だと食糧事情はカツカツだ。現に保存食があるのに魚なんて獲ってるのも、手軽さに胡座をかいていけば余裕で詰む恐れがあるからだしな。

でもさ、食わなくていいならそれに越したことは無いだろうって?

「へーきへーき。俺はいぎとなつたら野兎でも射て食えばいいから。どれ、そろそろ焼けたかな?」

「いや、あの……!」

だとしてもお前、目の前で女の子が手持ち無沙汰にしてる手前、飯をうまそうに食べるかよ。

「そーいや前に凄いいもんを作つてさア。お湯で戻すだけで野菜スープになるブロックが何袋かあるんだけど。よし、夕飯はそれにするか？ 我がヨロギ村産の最新技術だぞ！」

「えっ。何ですかそれ、凄いい……じゃなくて！」

「まあ毎度よろしく『旅人』の受け売りシリーズなんだけど。だからそれを再現しただけの俺はちよつとしか凄くないが、モノはやつぱり凄いいんだぜ。いやあ俺もよくやったもんだなあ……」

「その話も是非聞きたいのですが、そうではなく！」

「頼むよ」

「……………っ」

俺だつてこれが伊達や酔狂の話でしかないってことはもちろん分かつてる。でもさ、二人旅つてそういうものだろう？

ちよつとぐらいい楽しみながら歩いたつて、きつとバチは当たらないだろう。

「昼飯ぐらい一緒に食べようぜ。ほら、いただきませーす」

焼き魚にかぶりつきつつ横目でチラリと様子を伺う。流石に結構迷っていたけど、やがて意を決したようにこう言ってくれた。

「……いただきます」

「……………ツつあ！ すつ！ なにこれ酸っぱああい?!?」

「アツハツハつは!! 慣れねえ内はそんなもんだよ！ よーく味わってりやそのうち甘くなる！」

「うううう……!! ひろいです……!!」

いやあ、楽しいもんだね、本当に楽しい。

異世界に来てから一番うまい飯だよ、これは。

「……………あのあれ、もうちよつと頂けませんか？」

「おい待てもう結構食ってるぞ!! 慣れろと言ったがいくら何でも慣れすぎだろカツカツなのは変わらねーんだぞ?!?!」

まずい、こいつもしや甘党か……?!? 慣れない刺激を与え過ぎてしまったのは失敗だったかもしれん……。

科学者キャラの例に漏れない設定に軽い頭痛を覚えながら俺たちは撤収の支度をしていた。焚き火を消し、広げた荷物を纏めてからでなきゃまだ出発はできないからだ。

「……どこが小食だよ、食いしん坊め」

「んなっ!? 私はまだ、未知の感覚に興味を掻き立てられただけで……そもそも最初から量はあまり無かったじゃないですか……!」

まあ、食いしん坊は流石に言い過ぎかもしれないが。そういう所も含めて楽しめたし、これはこれで。

「よし、じゃあそろそろ……っ?」

「? どうしたんですか?」

……ちよつと失敗しくったかもな、こりゃあ。

流石に騒ぎすぎたか? 匂いが出るものを広げてたのが不味かったか……そういうのは後で考えるべきか。いや、取り敢えず。

「そのの……茂みから今、音がした」

「え？」

原っぱで呑気に遊んでる場合じゃなかった。ここは村の中でもなく、ましてやピクニツクに来てる訳でもない。

街道の整備なんてされてる筈もなく、未だに外は魔物の領域。とくればその音の正体は分かりきっていて——草むらから、一つの人影が飛び出した！

オオカミ娘が現れた！

「あらあ……？ 迂闊なコかと思っただけど、カンが良いのね」

「くそ、そりや出でくわ会わささないとは思ってなかったが……！」

人影はその真つ黒な長髪と同じ色の体毛に覆われていて、その中で真つ白モフモフな毛が奥から覗く二つの大きな耳が頭のとっぺんから生えている。褐色の肌に瞳は黄金色、そのグラマラスな体つきは黙っただけでも過剰なまでに扇情的な印象を叩き付けてく

る。

チラリと覗く白い牙を輝かせて舌なめずりをする様子はどう見ても穏やかではない。思わず見入ってしまうほど綺麗な瞳に情欲の色を溢れんばかりに浮かべさせながら、前世じゃ絶対お目にかかれぬ天然物のケモノ娘はこう言った。

「でも関係ないわ。ぐちゃぐちゃに犯し尽くして、このオマンコにピューピュー種付けさせてあげる……♪」

魔物を見たのは初めてではないが、それでも頭がクラクラする。果たしてこれが現実か？ くそ、おっぱいがでけえ……。

「今、何か」

旅の同行者が決して持ち合わせないものを備えていることに対して何か特別な感情を抱いているわけでは特にならぬかどうかその眩きは聞かなかったことにさせてくれ。

当然だが、ここで俺が密かな鍛錬を積んでいた結果として実はかなりの実力を身につけており多少の苦戦をしつつも序盤の魔物程度は打倒できる、などという展開は……無
い!!

いくら天使サマに買われるような振る舞いをしていようが所詮は前世日本人！ 人間の戦士どころか下手すりゃそらの村人Aより貧弱な男だ。魔物というだけで強さはそれぞれであり、必ずしも目の前の敵に勝てないとは限らないと理屈ではそうなるの

だが、こりやどうせたぶんきつと無理だ！ 勝てない！

……かと言つて諦める訳にもいかんのだが。

まあ大丈夫、流石に俺も無策で旅なんか挑んでるわけじゃないさ。

「そいつはお断りだ。ちゃんと戻つてこれるんなら興味もないことはないが、そこに溺れちまうと戻つてこられる自信がちよつとないんでね……」

「関係ないつて……言つてるでしょ？」

ふう、流石に圧が凄い。じりじりと後ろに下がつてもその分だけ追い詰められていることに変わりはないし。昔に夜なべして作った狩猟弓を指出しの革手袋越しで後ろ手に握るが、これまた汗がじんわりと滲んでしょうがない。

やつこさんも下手に飛び込んで傷付くのが嫌なのか様子見がちだが、発情してトロンと歪んだその表情を見るに時間の問題であることは間違いあるまい。そうやって睨み合っていると――

「去りなさい、下賤な狼。彼は渡しません」

俺の前に守るように立ち塞がったのはプロメステインだった。どうも痺れを切らしたのか刺々しい口調だ。

「はっ、あいにく女に興味はないのよ。この爪で引き裂かれたくなかつたら、そこを退くことね」

「それは此方のセリフです。断言しますが、貴女では私に勝てません」
「人間ごときが偉そうに……!」

どうやら敵はプロメステインのことを人間だと思っているらしい。そりやあ翼も輪っかも出していないのに分かるわけではないか。

「……………ふん」

「がる……」

どうでもよさそうに相手を見下すプロメステインと、敵意を剥き出しにして唸り声をあげるオオカミ娘。緊張が張り詰める中、最初に動いたのは……………

「あーッ、あんな所に元気で健康的な五人のかわいい男の子が今から誰かに襲われるなんて考えもしないで無邪気に川辺で遊んでるーッッッ!!!」

「がう!? がるぐるう?!♡♡♡♡」

「逃げるぞプロメステイン!!!!」

「ハア……ハア……完璧な作戦だった……」

「はあつ、ど、どこが!! っていうか、フード、引つ張らないでくだ……逃げ切れてる?!?」

一度に三箇所とは、中々のツツコミ力じゃないか……俺と、ハア、コンビを組むなら合格だ……。

「ふざけてる場合じゃなく!!」

「おえっ……し、仕方ないだろ……俺、あの人に勝てる気しないし……」

「っ、そうじゃありません! 私に任せておけば良かったと言っているんです!」

うん……言わんとする事はわかるよ。

天使なんて超常存在、もしかしなくても俺なんかより凄い力を持っているんだろう。

あのまま二人が戦ってしまえばプロメステインが圧倒してカタが付く、本当はその程度の話なのかもしれないが……

「でも……お前、アイツが近づいてるのに、俺が言うまで気付かなかったよな」

「えっ……?」

そっだよ……いくら凄い力を持ってたって、お前は戦いなんて無縁の世界で生きてきたんだろ? だから、お前を戦わせたくないと思った。だって何が起こるかわからない

じゃないか……。

「逃げられれば、逃げるに越したことは無いって話だよ。ほら、むしろ後ろにいた俺の方が危なくなってたかもしれないし。……そういう、自分がかわいいって理由で言ってるわけでもあるしさ」

「……………ごめんなさい」

今になって色々と気付いたらしいプロメステインが恥じいるように俯くが、そんな必要は全然ない。なにせ、どっちかと言うとあんなんで逃げ切れる方が確率は低かったろう。私情を挟んで動いたのは俺の方だ。

「まあ、勝算が高くなかったって事もないけどな」

「それはどういう……?」

「ああいう手合いは、まあ、頭がセックスのことで一杯なんだよ……まあ魔物なんて大抵そんな感じだけど、冗談みたいな馬鹿しかない。俺が見てきた獣系の魔物は、特にそんなんばつかったからな……」

つくづく思うが、どうなってんだよ。この世界……。

「ぐあるる……どういう事!? 男の子なんていないじゃない!!」

平原にて。

存在しない少年の群れを探して軽く半刻以上も周辺をかぎ回っていたオオカミ娘は、ようやく自分が騙されたことに気が付いた。

「ぐぐぐう……あの男、許さない! どこまでも追いかけて絶対に犯してやる!」

それは逆恨みというものだったが、つい同時刻ごろに『冗談みたいな馬鹿』などと槍玉に挙げられていることも知らない彼女にとつてはどうでもよい事ではなかった。

この上なくつまらない失態で千載一遇の機会を逃した獣欲の塊は、次なる目標に完全に狙いを定めてしまった。

「オオカミ娘の恐ろしき、存分に見せてやるんだから……」

己の影に重なるようにそこに居る、もう一つの影に向かって。

「ね、あなたもそう思うでしょう?」

第5話

「おお……ヨロギの賢者様！ ようこそお越し下さいました!!」

「はっはっは。長老も壮健そうで何よりだ」

おい、そんな目で俺を見るなよプロメステイン。そんなに俺が大衆に敬われているのが変か。

「うっ」

「賢者さま、そちらのお連れ様は……」

「ああうん、俺の旅の同行者だよ。急で悪いが、俺と同等にもてなしてくれると嬉しい。あ、彼女肉類や魚類とか食べられない感じだから。そこんとこ良い感じによろしく」

「承知いたしました!!」

オオカミ娘との遭遇から数日後、俺たちはヨロギと縁のあるとある集落に立ち寄っていた。

というのも、俺の現代知識は何もヨロギ村という閉じコン内だけに限定して火を噴いたという訳では当然なく、かねてより交流があつた周辺の集落にもその技術が少しずつ

ではあるが波及していく形となっていた。

結果として俺の名声は止まる事を知らず、こうして方々で賢者だのなんだのと持て囃されるまでになってしまったのだ。いやあ過ぎたる技術つてのは怖いね……

『精霊の森』にもそこそこ近い位置だろ？ 補給がてら、長旅で疲れたろうし休憩も必要かなって」

「それは構いませんが……事情を聞いていたとはいえ、違和感が凄いですよこの状況。貴方つてもつとこう雑に扱われて然るべきみたいなイメージでしたから」

「ま、外じゃ飾るものが無いだけそう見えても仕方ないかもしれんが……それはそれとして潰す」

ぎゃあぎゃああ！ と唐突に取っ組み合いを始めた俺たちを見る村の連中の生暖かい視線は無視するとして、持ち合わせの食糧が尽きるまでにここまで来れたのは助かった。

久々にゆつくり休めそうだと、俺は肩の力を抜くのだった。

数時間が経ち、時刻は夜。

辺りもすっかり暗くなった筈なのだが、この村の広場ではどういふ訳か煌々と明るさが保たれていた。

「……………ちよつと、これは」

流石に想定外だった。

という俺の眩きを前にして繰り広げられるのは、歌えや踊れやの大騒ぎ。巨人の焚き火みてえに馬鹿でかいキャンプファイヤーが凄いい勢いで燃やされていて、白い煙をモクモクと大量に吐き出していた。

凄いなあれ。目算でざつと高さが3メートルはあるぞ。あんなもんを急拵えする村の連中の意気込みも凄い。

「貴方、この勢いだと後世に名前を割としつかり残しちやいそうじゃないですか……？」
「ど、どうしよう。かつて天から遣わされし者とか何とか言われてるうちに千年後にはイリアス様の斜め下あたりに澄まし顔で侍らされてたりしないだろうな。宗教なんてそんなもんだぞ」

借りパクの現代知識でここまでされると流石に寢覚めも悪い。よし、これからは技術提供も自重しよう。そう心に固く誓うしかなかった。

燃え盛る火柱を遠い目で眺めつつ注がれた酒をチビチビ飲んで胡座をかいていると、先ほど俺たちを歓迎してくれたこの村の長老がニコニコと穏やかな笑みを湛えながら

近づいてきた。白くなりつつある髪とヒゲを蓄えた、いかにも好々爺といった感じの老人だ。

「改めまして……ようこそお越し下さいました、賢者様。ええと？」

「ジェーンといます。どうぞ宜しく」

こいつ偽名で通す気か。明らかに今適当に考えたような名前を口走った不良天使を思わず見るが、当の本人は涼しい顔だ。

まあ確かに厄介な身の上ではあるし別に良い、というかむしろ当然の判断なんだろうが、それならせめて事前に言つといてくれよな。うっかり本名言わないように気を付けねーと……。

「ジェーン様ですか。お初に御目に掛かりますが、賢者様が女性をお連れになるとは珍しいですな。もしや、お二人はご夫婦なのでは……」

……………。

「それはない」

うん、そういうのじゃないから。つーかいきなり何言つてんだこの爺さん……

確かにこいつはかわいいやつだし割と気が合うしなんか自然に距離感も近いけど、そういう惚れた腫れたみたいな浮ついた関係とはまた違う。

どっちかっていうと絆とか友情とかの方を感じる機会が多いと思う。そこらへん誤解されるのはちよつと心外だ。

しかし、俺とこいつと言ったら一口にどういう関係だ？ 夢と志に共感しあつて一緒に旅をしている、言うなれば……

「……仲間？ 盟友？ って感じの」

「ですね」

「そ、それは失礼致しました。老爺心ながらつい」

ま、恋愛感情とかは抜きにしてもプロメステインの事は好きだけだな。それは多分向こうも同じだろう。だからってそれを口に出したりすると「恥ずかしい事言うな！」って怒られるんだが。

少年期以来に再会して早々胸に刻まれた教訓。苦い失敗の記憶を再確認していると……

「そういえば賢者様、実は御耳に入れておきたい事がございまして」
「ん？」

何やら神妙な面持ちで長老が佇まいを直してきた。一体どうした？

「こちらに来るまで、もしや狼の魔物に襲われはしませんでしたか？」

ふむ？

それはもしかしくなくとも俺たちを襲ったオオカミ娘のことだろうか？ 詳しい話を

聞かせてもらいたいな。

「この所、奴による被害が後を絶たぬのです……村の男衆は外に出るだけでも危険が付きまとい、木こりや採集にも出られぬ始末。かといって女たちにこれ以上の仕事で負担をかける訳にもいきませんまい」

へえ、あいつつってそんなにヤバい奴だったのか。やっぱり戦わなくて正解だったかな。危ない所だったと怖がったものか安心したものか悩んでいると、プロメステインが眉根を寄せながら口を挟んできた。

「あの魔物が？ ……あれがこちら一帯で幅を利かせているというのは、少し妙ですね。見たところ特別に強力な妖魔という事も無さそうでしたし、多少の反撃を覚悟できるのであれば男数人で囲んで叩くだけで案外倒せそうなものですが」

「な、なんですと!？」

天使様の見立てがどこまで正しいのかは不明だが、少なくとも山狩りでどうにかできるレベルの相手ではあるらしい。しかし、その評価を聞いた長老のこの驚きっぷりはどういうわけだ？

「随分意外そうだが、この村ではそいつを退治しようって話にはならなかったのか？
普通の魔物ならそういう話になるはずだけど」

「い、いえ。ただ……恐れているのです。御二方は、ここに来るまでに奴以外の魔物には
襲われなかったのではありませんか？」

ん……？　　そういえば、確かにそうだ。

あのオオカミ娘と遭遇して以来、俺たちは道中で別の魔物に襲われる事無くここまで
来れた。単に運が良かったと思っていたが、そうではないのだろうか？　　思わずプロメ
ステインと顔を見合わせていると、長老はおおざと切り出した。

「奴がよく目撃されるようになってから、どうやら他の魔物の動きが弱くなっているよ
うなのです。我々はそれを、奴が同じ魔物からも恐れられているからなのではないかと
考えたのですが」

「魔物同士の縄張り争い、か……」

しかし、プロメステインによるとあのオオカミ娘にそこまで幅を利かせられるほどの
力はないらしい。これは一体どういうことだ。

「……分からないけど、旅の途中で分かったことがあれば知らせるよ。最も、俺としても
そんなのにまた出会いたくはないけどさ」

しかし、そうなると今度こそ戦いになるだろう。流石に同じ手が二度も通用して逃げ

られるとは思えない。あまりプロメステインを矢面に立たせてやりたくはないが……これからはそうも言っていられないかもしれない。

話は終わつたと離れていく長老の背中を眺めていると、プロメステインが密かに耳打ちをしてきた。何だよもう、くすぐつたいな。

「貴方、私が居なかつたら一人旅だったんでしよう？　ここまで慕われているなら旅の供に男手でも募ろうと思わなかつたんですか？　こういう面倒な事になるかもしれないなら尚更ですよ」

あ、うん。

まあ確かにヨロギ村にも魔物の襲撃に備えて戦いを生業にする人は結構いたし、同行を願い出てくるような人達もいなくはなかつたけどさ。

「大成してから名前が知れ渡つたところら一带と違つて、ヨロギには昔に俺を冷遇してた人が多くてなあ……彼らも今じゃ大半は俺のことを畏れたり敬つたりしてくるんだけど」

「ああ成程。過去にいざこざがあつた連中とでは、確かに愉快的な旅路にはなりそうにありませんね」

いや、そういうのはちよつと違う。

そもそも俺は出自からしてブルやデタラメみたいなもんだし、そういう行き違いがあ

るのはある程度仕方ないと割り切っている。いるんだが……

「……大半はそうでも、中にはまだ過激な連中が少なからずいたりしてさ。下手に人を募るとワンチャンそういうのに後ろから刺されるかもしれないって思うと気が引けて……」

「うわあ……」

おい、気の毒なものを見る目で俺を見るな。実際自分でもかなり気の毒な状況にいるとは自覚してるが、それでもだ。

宴会を抜け出し、村の外れで密かに会話をする影が二つ。言うまでもなく俺とプロメステインだ。

「……というわけで、そろそろ天界に帰らないといけないんです」

「ああ、そういうやそんな事言ってたっけ」

なんでも天界の仕事を済ませるため定期的に提出しなければならない書類があるとかで、数日に一度は離脱するって話だったよな。

「それにしても、向こうに帰られる前に村に到着できて良かったよ。俺はこのまま何日

でも滞留しとくから、ゆっくり仕事済ませてこいよ」

「つまらない監視報告なんてすぐに終わらせてきますよ。こちらにいる方がよほど楽しいですから」

そう言うtopロメステインは着ていた外套を俺に預け、前に降臨した時と同じように天使の翼と輪っかを顕現させ、そのまま一直線に飛んでいつてしまった。久しぶりにアイツの天使っぽいところを見た気がするな。

あれで俺を目的地まで飛んで運んでいつてくれないか一回聞いてみたんだが、どうもあいつの場合人を一人持って飛べるようにはできてないらしい。思ったよりは非力な奴だ。

さて、その間に俺が何をして時間を潰せばいいのかというところ……

「大復習会だな、こりゃあ……」

道中にメガネっ子の先生様から教授された魔法理論。あの空白の本にノート書き取りよろしく初歩的なところを言われるがまま写してはみたが、まだあまり理解しきれていないというのが実情だ。

もつとも、プロメステインにはその理解の早さを大分驚かされたものだったがな。どうも人間がこういう学問的な理論を身につけるのにはもつと時間がかかると思っていたらしい。

それは恐らく前世で身につけた教養ってやつのおかげだろう。

教育を受けた人間とそうでない人間ってのは、たぶん論理的な思考能力が根っから違う。単に物事を飲み込む力だったり多角的に物を見る力だったりがこの世界の人々より強いのは、まあ考えてみれば当たり前の事だ。

だからって俺自体は特別頭が良いってわけでも、ましてや天才ってやつでも無いのに変わりは無い。こういう時に時間をかけて一人でじっくり復習する時間を貰えるってのは、プロメステイン曰くつまらない天界の事情ってのも善し悪しかもな。

よし、じゃあ早速例の写しを——……

「いんばんは」

つどうわあッ!?　ちよ、ビックリしたあ!!

い、いきなり背後から声をかけられたぞ。プロメステインの事もあって人が来ないか

気を張ってたつもりだったんだが、見送ったすぐ後で気が緩んでしまったのか。

……いや、本当にそうか？

それにしたって、気配なんて今までほとんど感じられなかったような……

「ど、どうも！ こんな所に何か、用事でも……っ？」

後ろを振り返って見てみると、声をかけてきたのは小柄な女性のようだった。

癖つ毛がちな淡いブロンドの髪と空色の瞳をした、それは綺麗な女性がそこにいた。どこか神秘的な雰囲気さえ纏っているような感じがするのは気のせいだろうか。

いや、こんな所にマジで何の用だ？ まさかとは思うが、プロメステインが翼を生やしてパタパタ空に飛んでいく所を丁度見られてやしないだろうな……。

「さっき飛んでいったあの子は、もしかしたら天使なのではありませんか？」

ウツ……!!

転生してからの過酷な生活で幾分か強靱になったはずの胃袋がキリキリと音を立てるのを感じる。思わず脇腹を押さえた俺は絶対に悪くない。

「ああいやあのそのなんというか別にそのちよつと」

「お、落ち着いてください」

逆に心配されてしまった……っつていやいや、どうすんのこれ。天界に今までの所業がバレたら不味いらしいあいつのためにも、ここは何としてもこの話を広められる訳には

いかない。

旅を始めてから一番つてぐらい必死に頭を高速回転させていると、神秘的な女性は何やらプロメステインが飛んでいった方向を眺めながらこう言った。

「あの子は……貴方と随分仲が良さそうでしたが、どうして天使と人間がそのような関係になれたのでしょうか。それに、彼女は墮天使なのですか？」

「えっ……と、その、墮天使っていうかなんつーか」

ええい、落ち着け俺。ここでもつても何も好転しないぞ。喋る内容なんてのは喋りながら考えろ。

「……アイツにも聞いたことがあるんだけど、墮天使っていうのとは違うらしくて」

「えっ?」

「俺の旅を手助けするのが大罪だって分かっていながら、どうも今のところは上手いと隠して向こうでもやっていけてるんだとか」

そこで初めて女性の表情が驚きが変わった。……人が翼生やして飛んでいくのには動じないくせに。

「そんな危険を犯してまで、あの子は どうして……」

「……理屈なんてもんじゃないだろ」

「?」

「心の動きなんてのは誰にも止められねえよ。どんなに強い力で上から押さえ付けられたって、それに反抗したがる奴の性根なんてのはどうやったって変えられない」

そういう頭抜けたような頑固者だからアイツは俺のところになんて来ちまったんだろうな。まったく呆れるような話だが、そのおかげで今の俺がいる。

「アンタも何か、もしかしたらだけど……覚えがあるんじゃないか? 俺らみたいに道を極めようとしてる訳じゃなくても、具体的な理由なんてものは無くて、ただ居ても立ってもいられなくなったただけだって……きつと、人はその時になったら身体が勝手に動くんだよ」

「……ふふ。面白い人ですね、貴方は」

よく言われる。不本意ながらだが。

「居ても立ってもいられなくなって……ですか」

「……なあ、ここで見た事は忘れてくれないか。俺の夢、アイツとの約束なんだ。それを壊されたくない。……頼むから」

俺は誠心誠意をもって頭を下げた。これ以上は俺にできる事はない。しかし言いたいことは全部言った。

これで駄目なら……プロメステインには申し訳ないが……

「貴方とあの子は、強い絆で結ばれているんですね」

「ああ、大切な仲間だ」

「人間と天使の間でも、それだけの信頼を築くことがあっても良いというのですか……」
そこで女性は、小さくだが、ふっと笑みを溢したような気配を見せた。

「安心してください。貴方たちの事は……誰にも言えませんよ」

「あつ、……………」

感謝の言葉を伝えようと顔を上げた時——女性はすでに、そこに居なかった。

ついさつきまでそこに居たはずの人が、まるで最初からそんな事実は無かったかのよう
うに綺麗さっぱり消え去っていたのだ。

「今のは……」

あれは俺が見た幻覚に過ぎなかったのか、それとも人に化けた妖魔だったのか。ついで
本当のところは分からなかったが、あの雰囲気はどこか……まるで……

プロメステイン、と似ていたような……？

第6話

「——ま、た——聞いて……ますか?!」

明け方のこと。

未だに太陽が顔を出さない時間帯だが、青白んだ空は十分に目の前を明るくしている。キャンプを片付けて歩き始めた俺は、耳元で大きな声を出されて意識がにわかによろめいた。

「はっ!? すまん聞いてなかった!!」

「……だと思いましたよ。眠気が残っている訳でもないでしょうが、何か考え事でも?」
ああ、冷えた空気でむしろ頭が冴えるくらいだ。

どうやら妙な俺の様子を見て只事ではないと思っただけであろうプロメステインが訝しむように目を覗き込んできたが、俺は黙って首を横に振るしかなかった。

考えるのは勿論、何日か前に俺たちの秘密を知ってしまったあの女性の事だ。あの時、俺はあの人の言葉を確かに聞いた。誰にも言わないと。

無論、見ず知らずの人——あるいは人間かどうか分からない——の言葉など無条件で信用してはいけないのかもしれない。後で長老にも確認してみたが、そのような女性

は村にはいないとの事だった。

だが……その通例に、あの女性はなぜだか当て嵌まらないような気がしたのだ。

あの人に感じた不思議な雰囲気、というのだろうか。それがどうも俺の危機感を煽らない。きつと大丈夫だろうと安心させてくれる何かがあった。

まあ……俺の勘はけっこう当たる。プロメステインにこの事はまだ話してないが、いわずらに心配をかけるよりは黙っていた方がいいだろうな。

「大丈夫、大した事じゃないさ。たぶん」

「多分って……まあ、切り替えが速いのはいいですけどね」

朝の澄んだ空気を目一杯吸い込みつつ、……よし！俺は差し当たっての目的について意識を向けた。どういう話だったっけ？

「ええ、貴方たち人間が魔法を実際に行使する際に生じる問題についてです。理論を学ぶだけではどうしても補えない点があるのは、今までの座学で理解していますよね？」
「それを解消するために俺たちは旅をしてるんだよな。少なくとも、机に齧り付いて呪文を唱えてるだけじゃ駄目なんだろう？」

「はい。おさらいですが、その問題とは大きく分けて二つ。人間が魔法の行使において唯一汎用的に転用可能な大気中におけるマナ濃度の抜本的な低さによる弊害と、あと一つは？」

「これから解決する、人間の体が抱える魔力適性の脆弱性……つてやつ？」

「正解です。魔力を比較的身近に置く天使や魔物と違い、人体の構成物質は体内の魔力を魔法としてスムーズに出力する適性に著しく欠けている。これを無視するには人間としての体質を真つ向から否定しなければなりません。これを無視するには私たちにできません。ゆくゆくはヒトという種そのものに魔力適性を獲得させるための研究などが実現できればいいのですが、そのような技術は未だに取っ掛かりさえも掴めて……いや、生物としての進化の過程を数世代かけて再現できるとしたら？ 適度な刺激を継続的に与えることで形質そのものの改良を……ただ、短命種ならともかく人間を素体にするには流石に時間がかかりすぎる。もつと根本的な、遺伝の段階から外部からの介入を加えるという手段がもしあるとすれば……」

「おい!! 帰ってこい!!!」

「はっ?」

!!!!!!

「はっ?! じゃねーよこの馬鹿!! 一周回ってもう馬鹿!! ついでに言うなら前世知識のせいで言ってる事を半ば理解できたことを後悔しとるわ!!!」

え、何こいつ? ヒト相手に品種改良とかゲノム編集とかしようとか密かに企んでんの?? 21世紀ですら物議を醸す最先端技術に何うっかり手が届きかけてんの???

それもう何段飛ばしっつーか何百万段飛ばしなわけ? つい最近まで人類が原始時

代の暮らしを送っていたこと忘れてない？ しかも倫理的問題とか1ミリも頭によぎらないまま突っ走ってるよねこの子？ 俺がいない世界線では人間に火を教えて早々に幽閉されるらしいが、もしや俺はとんでもない奴を自由にしてしまっているんじゃないか？

「ご、ごほん。それで、何の話でしたか」

「いや、人のカラダは魔法使いに向いてないよねって話……」

これぐらい話を簡略化して奴の氣勢を削がないと取り返しのつかない方向に脱線してしまう。

破滅の未来を少しでも食い止めるべく必死に語彙をアホにしつつある俺の懸命な策略には気づかない様子で、超絶厄災級天才マッドサイエンティストの卵は得意げに話を進めてきた。待つてこれ進めさせていいと思う？ 大丈夫？

「そうです。魔物がするように魔法をそのまま使おうとすればきつと不具合が起きるでしょう。つまり、『媒介』が必要になります」

「……ようは魔力の通りが良いものをクッションにしてから魔法として力を注ぎ込むってことだろ」

「その通り！ 例としては鉱石や魔物の肉体などが挙げられますが、特定の性質を含んで溜め込みやすいというそれらの性質はプレーンな術式形成に影響を与えかねません。

計算の上で特定の用途に特化した魔道具に仕上げるともりなら問題ありませんが、そうでないなら……木材などが最適でしょう」

ここまで来ればお分かりだろうか。俺が夢見た魔法の道、その記念すべき最初の一步とは……そう、杖作り。魔法の杖だ。

なんとも浪漫のある話じゃないか。俄然やる気が出てきたぜ。

「見えてきましたよ。世界で最も豊富に魔力を吸って育つ樹木の森林……精霊の森が」

「は、こう見ると流石に雰囲気あるなあ」

「雰囲気だけでも分かっていただければ今は十分です。さて、どこから手を付ければいいのかのやら……」

鬱蒼と生い茂る木々の神秘的な威容に圧倒される。俺たちはついに最初の目的地である『精霊の森』の入り口に辿り着いたのだ。

まあ、感慨深いものがあるのは確かだが、魔物の領域であまりうかうかとはしてられないよな。

「早速だが、杖を作るにはどうすればいい？　まず杖自体の大きさとか、あと枝の剪定と

か」

「最初のうちは皮膚と接する面積と全体の体積が魔力の通しやすさに殆ど依存するでしょうから、身の丈と同じぐらいの長さかつ両手で抱えるようにして持つようなサイズ感のものになると良いですね。無論、これは訓練次第で小さくしていく事は可能です」なるほどね。今から作るのは長杖stairにあたるわけか。腰の曲がった魔法使いのお爺さんの杖なんかをイメージするといいだろう。

自分で上手く魔力をコントロールできるようなになれば、いずれは片手サイズで振り回せるような短杖wandだろうと問題なく操れるようになるのかもしれないな。ハリー○ツターとかでよく見る感じのアレだ。

これから俺の相棒と化するであろう木材たちをしげしげと眺めていると、突然ギコギコと何かを削るような音が響いてきた。

一体何事かと驚いて脇を見やれば、プロメステインが俺の薪割り用に持ち歩いている鉈なたで木の枝をまさに切り取ろうとしているところだった。またかよコイツ、手癖が悪いな。

「おい、また俺のを勝手に……」

「いいえ？ これは私のですが」

「は？」

よく見たら、どういうわけか俺の腰にはそっくりそのまま同じ鉈が確かに留めてあった。長いこと使ってきた道具だから見間違えようもない。二つとも俺のものに違いなかった。

狐につままれたような気分で呆気に取られていると、枝打ち姿が果てしなく似合わない科学者天使は種明かしをするようにこう言った。

「錬金術というものがありますね。以前から理論は知っていたのですが……旅が続くと入り用になる品が存外多いもので。良い機会ですし実験的に練習してはるんですが、どうですか？ 上手いものでしょう？」

希少な素材や魔法的な要素を含んだ物でもなければ大抵の物品は再現できると自慢げに披露してくるが、いや真面目に凄いなこれ。元になったであろう俺の鉈とほとんど見分けが付かないぞ。

今度それも教えてもらおうと決意しつつ感心していると、プロメステインは切り取った枝の断面をジロジロと眺めながら呟いた。

「微妙ですね。これでも他所の木材よりは魔法との親和性は高いのですが、やはり森の外周ではこんなものでしょう」

「つてことは、奥地まで進まなきやならないのか」

「ええ、ですが用心して下さい。ここに住んでいるのは危険度の低いフェアリーやアル

ラウネなどとはいえ、この薄暗い中では何が起こるか分かりませんからね」

「ああ」

木々に分け入って先に進みつつあるプロメステインの後を追いながら、ついでに喉が渴いたので水筒に口をつけると……チロチロとした僅かな感覚だけが喉を通ってくるのを感じた。ああもう、これからは面白いってのに。

「どうしました？」

「水が切れた。その川から汲んでくるからちよつと待つてくれ」

「了解です」

どうしてもかさ張る水は小まめに汲んでおかないと痛い目を見るからな。俺たちが出来るだけ川の近くを歩くようにしているのもそういった理由があつてのことだ。

革の水筒のフタを開けて内部に溜め込まれた空気を置換する作業に従事していると、自然に視線は河岸の水辺に移っていく。

随分と綺麗な水だ。精霊の森という土地柄のなせる技だろうか？ 水の匂いとそよ風が肌をくすぐって心地良い。川の水だというのにヨロギの井戸で汲み上げる地下水と遜色ないぐらいには澄んでいるようにも思える。

それはもう、水底の小石までハッキリと見えるぐらいで……

「……………ん？」

小石……あれは小石か。それには違いない。

ただ何となく目に入り、今しがた俺が手に取ったこの石ころは、どこかほんの少しの違和感を感じるような気がする。

水とは違う、硬い何かで強く打ち付けられたような。そういえばこちら辺の岩には粉のような跡がこびり付いている。石を削った跡だ。知性のない魔物の仕業じゃない。

これは……打製石器、か？

「まだですか？ はやく奥の木を見に行きましようよ——」

「プロメステイン！ 近くに誰かが……っ！」

ビスッ！ と。

言い終わるか終わらないかの瞬間、俺たちの足元に鋭い音が突き刺さった。

打ち込まれたのは矢じり付きの弓矢。これは……

「止まりなさい、慮外者！ 我々の森を脅かすなら容赦しない！」

そう遠くない草陰から弓を構えた金髪の女性が怒号を上げてきた。それに良く見たら耳が尖っているぞ。あれは人間じゃない。

「エルフ、か……」

森の守護者の別名を持つ魔族。プロメステインから存在は聞かされていたが、にしても前世でも散々目にしてきたエルフという特大のネームバリユー。それもこんな万人がイメージするようなコテコテのやつに弓を向けられているというこの状況、うーむ、言いようのない感情が湧き上がってくるな。

しっかし、プロメステインの話じゃエルフはそこまで人間に敵対的な種族じゃないって事じゃなかったか？ あちらさんだったらどう見ても敵意バリバリに見えるんだが……

「……待ってくれ！ 俺たちは君らに危害を加えるつもりは無い！ 話を聞いてくれ！」

「話……!?! 私には聞いていたぞ、森の奥地に踏み入ってまで何か良からぬ事をしようと思んでいるのだと！ ……貴様、その女が手に持っている物は何だ!!」

「あら」

大して慌てた様子でもなくプロメステインがパツと後ろ手に隠したのは、今しがたギコギコと切り落とした木の枝だった。

……あれ、もしかしてこれ。

（な、なあ。まさか俺たちって……）

（大丈夫ですよ。何とかします）

こ、ここは任せていいのか？ 流石に俺も自分を客観視してみても今がどういふ状況なのか分かつているつもりだぞ。

完全に私利私欲で森の奥地にまで踏み入ろうとして、挙げ句その樹木を切り取って持ち帰ろうとしている。彼女らに危害を加えたりしないとかなんとか俺も言つてはいたが、今更ながら本当にそうなのか怪しいもんだと自分でも思えてきた。

ま、まあコイツが大丈夫つて言つてるなら大丈夫だよな？ いくら知識欲のために倫理観とか軽く投げ捨てててそんな奴とはいえ、俺なんかより遥かに頭が良いのは確かなんだ。

今の俺たちの言動を顧みて、非を認めたと上でこの場を切り抜けるだけの対話をきつと見せてくれるはず——

「ひとまず何本か切り倒させてもらうだけで構いませんよ。貴方がた魔物には用が無い……もとい捕らえて解剖してみたくないと言えば嘘になります。少なくとも今日はそのために来た訳ではありませんからね、安心してください。出来れば千年以上は生きている樹木の中で吟味したいので案内してほしいのですが、低品質なモノであればここに廃棄していくので使いたければ御自由にどうぞ」

.....。

「んっ……」

こいつ、分かってねえ〜ッ……!!

勝手に人の住処に入って木を切り倒していくってことが悪いことだとそもそも分かってねえ……!! それどころか譲歩にもならん当たり前の話をさも当然のように譲歩になると思い込んで言ってるやがる! マジかこいつ、興味がない他人が相手だと人の立場になって物を考える能力がカスすぎる……!!

無自覚サイコパスをやる上でのダイヤモンド級の才能を目の当たりにして戦慄していると、徹底的に自分本位なカス天使の物言いに憤慨を新たにした森の守護者様が殺意すらもって弓を引き絞ってきた。いやもう全く、弁解の余地が無いぞ……

「ど、どうしたんでしようか。解剖なんてしないと云ってるのにあんなに怒って……」

「ばかバカこの馬鹿!! さっさと逃げ……!?!」

こいつ、自分の発言のせいで妙な空気になったのをこの期に及んでようやく覚つたらしいぞ。しかし四の五の言ってる暇などある筈もなく、おたおたしている馬鹿天使の

フードを毎度よろしく引っ掴んで逃げようとする——

「待って!!」

その場に響き渡った声は、幼い少年のものだった。

驚いて思わずその方向を見ると、そこには動物の皮を身に纏った原始人スタイルの格好をした男の子が小さな子供用らしき槍を片手にこちらを覗き込んでいた。

どういう事だ。あの子は……人間、なのか？

「ククリ!? あなた、まだ付いてきちやダメって言ってるでしょ!」

「その人たち外から来たんでしょ、お姉ちゃん! 撃たないでよ!」

意味が分からない。なんで人間の男の子がこんな所にいるんだよ。しかもその子は俺たちに近寄ってきたかと思えば、エルフに向かって何やらゴチャゴチャと口論を仕掛けているじゃないか。

俺たちへの異なる見解をぶつけあっている二人と、未だにぼかんとしているプロメステイン。それらの板挟みになりつつ、俺はいたたまれない気分で天を仰ぐことしかできないのだった。

第7話

「僕はククリ。この森に昔から住んでるニンゲンたちの子どもです」

そう自己紹介してきた男の子はやけにキラキラした目で俺たちの事を見つめている。奥の方で今にも矢を射掛けてきそうな殺意マシマシのエルフとはいっそ奇妙なぐらい対照的だ。

状況が掴めず困惑しながら立ち尽くしている俺たちを他所に、二人は謎の牽制をかけたっているようだった。

「ほら、お姉ちゃん」

「ここいらに名乗る名前なんて無いわ。……お願い、そこを離れて」

かれこれ5分程こんな調子だ。ええい、出来ればこのまま石になって事が済むのを待っていたかったが、そんな事では埒が明かん。

「く、ククリ。自分で言うのも何だが、俺らが君達やこの森を多少なりとも傷付けずに帰る保証はどこにもない。それなのにどうして俺らを庇ってくれるんだ？」

「外の話が聞きたいんだよー」

ぱあっと、勢いよく振り返って笑顔を見せてくるククリの言葉で俺は大体の事情を察

した。

この子はさつき、昔からこの森に住んでいる一族、というような事を言った。俺らが数日前に泊まった近場の集落ではそんな話は聞いてなかったから、彼らは恐らく外部との交流を断つて久しいのだろう。好奇心の強い子供が外の世界に憧れを抱くというのは、まあ自然な流れか。

「あなた、またそんな事を言つて……！」

「でも、お姉ちゃんっ！」

思わずプロメステインと顔を見合わせる。

なんだ、そういう事だったんだ。

「俺たちは」

「ッ、黙りなさい！」

いいや、黙らない。

「今、君らの想像もつかないほどの速さで進歩している外の世界からやってきたんだが」

ザクツツ!! と。

その瞬間、脳髓の奥が焼き切れるような痛みが俺の右脚に叩き付けられた。

「ぐっ……!!?」

「ああっ! お姉ちゃん!」

どさりとその場に崩れ落ちる俺に向かって、エルフの女は殺気すら滲ませながら怒鳴った。

「これがただの脅しに見えた!? あなたに向けられている物が何か分かっていないの!」

ああ……やばい、クソ痛い。

狙いも正確だ。膝の関節に噛ませるよう見事に撃ち抜かれちゃった。当然立ってなどいられない。まともに歩くことすら二度と出来なくなっちゃたかもしれない。

こんなに痛い思いをした事は今までに一度だって無い。喋っている間くらいは撃たないでくれるなんて甘えた考えがあつたことも否定できない。正直言つて今すぐ悲鳴を上げて辺りにのたうち回りたい。

色々な思考が危機感と一緒にずらずら溢れてきて、たった一つの激痛に頭が一杯になつているのが信じられないほど意識が過剰に冴え渡ってくる。たぶん、危険な兆候だ。

「子供の手前、殺しはしない！　それが分かれば二度とこの森には……」

「……雲に届くほどの煙を吐いた」

「っ！」

それでも俺は、決して口をつぐまなかった。

「荷物を死ぬほど乗せて荷車が走った。鉄の道具は石器と比べるのもバカらしくなるほど頑丈になった」

「何を……!?!」

「そこは……俺たち人間が行き着く場所だ。……知ってるか？　心の動きなんてのは、誰にも止められねえんだよ」

「……黙りなさい！　私達の暮らしを脅かす余所者め、死んでしまえ!!」

「……ッッ！」

再び、重い激痛。

胸の真ん中を狙い澄ました一矢が心臓を撃ち抜く軌道で飛び込んで来たが、ギリギリのところを咄嗟に翳した腕を貫かれるだけで済んだ。

俺の反射神経が急に鋭くなったわけじゃなく、アイツの弓の腕前を確信できたから腕を置いて心臓を守れたただけだ。その殺意のある意味信頼していたから起こった、半ば偶然の出来事だった。

皮膚を突き破った血液が頬に飛び散る。あまりの衝撃にもんどりうって、後方へバタリと仰向けに倒れ込んだ。

おそらく、次は無い。次は死ぬ。

「なっ……!?!」

しかし。

暴力的なまでに身を焼く激痛と恐怖に苛まれながらであつても——俺は立ち上がり、まともに動かなくなった右足を引きずりながら前に進んだ。

「君の怒りは……もつともだ。そこにある閉じた文化を壊すのは、いつだって外側からやってくる奴等だった。例え、それがどんなに尊くたつて……」

「く、来るな!!」

また弓を引き絞る音が聞こえる。今までバカス力撃ち込みやがってよお……まだ撃ち足りねーつつーなら申し訳ないが、俺はそろそろ……限界だ。

だが……ここまで近づいた甲斐は、あつた。

目も合わせられないほど遠くから、武器を恐れながら口にする言葉なんてのは……きつと、こいつには通じなかつた。

俺はその場で四肢を投げ出し、倒れ込むようにして頭を下げた。

「だけど、俺は今……死ぬ訳にはいかない。果たさなきやいけない約束があるとか、どうしても叶えたい夢があるとか……それだけじゃない。ここで今、『知りたい』って思いに応えてやりたいんだ」

「……っ？」

「俺も、最初はそうだった。どんなに知りたい事があつても……生まれた場所が、時代が、環境が……許してくれないんだよ。とびつきりの幸運に恵まれてなきや、俺は今でもそこに居た……」

はは、やべー。

何言ってるか自分でもよくわかんねーや。吐き出す言葉もグチャグチャで、まったく要領を得ない酷いセリフだってことは、こんな状態でもよく分かる。

ただ、それを伝えたい……って、思いだけは。

「俺は……どこに行つたらいいのかも分からない子供の手を、外から繋いで、引つ張つてやりたいだけなんだ。ただの自分本位で、身勝手な話かも知れないけど、それでも……頼む、許してくれ」

意識が浮上する。

ぼんやりと滲む視界から、こちらを覗き込む赤髪の少女の顔に目の焦点が合ってきた。

「氣い……絶、してた？ 俺」

「まったく、酷い演説でしたね」

「てめーにや言われたかねー。」

お前が初っ端でトチ狂った台詞を吐いてなきや、俺の出血はもう少し控えめになつただろうよ。

「アイツらは……？？」

「ん」

くいつと顎で指し示された先には、少年と女の二つの影が揉みくちやになりながら喚きあつていた。

「うわあああん!! お姉ちゃんの馬鹿!!」

「や、やめなさい! あれは仕方が無かつたの!」

溢れんばかりに瞳を潤ませたククリが涙目でエルフをポカポカ叩いているが……俺に敵意も向けてないってことは、大体上手くいったって事か。

「……ありがとな、手エ出さないでくれて」

「察しの良さには自信がありますからね。特に貴方が相手だと」

「あの有様で……俺以外の相手に対する察しの良さに自信を持つてもらっちゃ困るんだよ……」

顛顛こめかみをピキらせながらの俺の減らず口にサツと目を逸らしたプロメステインだが、ま

あ、今回は良く我慢してくれた。

俺に死なれちまつたら困るだろうに、良く。

「まあ……俺も俺か。ごめんな、この命は俺一人の判断で捨てていいモンじゃないって、分かってたはずなのに」

「謝る必要はありませんよ。貴方と顔を見合わせたあの時から、何をしようとしているのか私には分かっていたのに……それでも止めなかった私も私、ですから」

ああ。あんまり冷静だったとは言えなかった俺と違って、お前は人間が弓を向けられてるって状況がどれだけヤバいかちゃんと理解していただろうに……どんなに肝を冷やさせたか分からないが、本当に良く踏み止まってくれたな。

「俺は、我慢出来なかつたんだ。外の世界のことを知りたくても自分じゃどうしようもなく、そんな時に俺たちと出会ったあいつは、ククリは……まるであの時の俺みたいで」

「……………」

「……俺、いつか言ったよな。俺だけが特別なんじゃないって。遅かれ早かれってだけで、人間は皆が特別なんだって」

そんな時のお前の顔もよく覚えてる。

見事にまあ、「良く分からないな」って顔をしてたっけな。

「いつかは分かる時が来る、今は分からなくても良い……って思ってたけど、どうだ？ お前の目から見て特別に見えるか？ 俺個人じゃなく、人間……ってのは」

「……正直、まだあまり」

ただ、と続け、彼女が視線を向けた先には未だにぐずってエルフにあやされているククリがいた。

何を思い浮かべているかは大体予想が付く。俺が、外の世界で広まりつつある技術の話を並べ立ててやった時のことだろう。

人間の子供が浮かべてみせた、あの目の輝きを。

「あれが『人間』なら……確かに、特別なのもかもしれませんね」

分かって貰えりゃ、わざわざ手足を串刺しにされた価値もあるってモンだ。

さて……で、今まで敢えて目を向けなかった話なんだが。

「これ、膝枕？」

「……………」

覗き込むようにして俺の顔を見るお前の顔が逆さまに見えるって事は、つまりそーゆー事になるのだが。

女の子からされるのは地味に初体験かもしれないイベントに対して妙な感慨に耽つていると、プロメステインは突っぱねるようにそっぽを向いてこう言った。

「ふん…………つまらない体に頭を乗せても面白くないと、内心小馬鹿にしてるんでしょ」「そうじゃねえって…………何でそこで照れるんだよ…………」

「照れてません」

ああもう、ほんとかわいいなコイツ…………猫とかに通じるものがあるわ…………。

しかしいつまでもそんな風に呑気しとる暇はない。色々と確認しなきゃいけない事がまだあるからな、ゆっくりするのはその後だ。

「まあ、それはともかくとしてよ。俺の怪我はどうにかなりそうか？」

「回復の術も交えて色々と処置はしてみました、塞がりかけた傷を再度えぐるような真似をせず暫くすれば元通りになるとは思います」

「…………それ、全部お前がやったの？」

「ええ、派手な外傷を診るのは思いの外良い勉強になりました。ついだに少し観察させてもらったのですが、やはり生き物の体は構造が興味深いですね」

うーん。ツツコミたい所は無限にあるが、今更こいつのやばい一面に震えるのも馬鹿らしいから一旦無視させてもらうとして。

「ああ。また助けられちゃったな、ありがとう。……そんなじゃそろそろ、話をつけてくるとするか」

プロメステインに肩を貸してもらってどうにか起き上がり、言い合いが長引きすぎて若干止め時を見失っちゃってる感じの二人を手招きして呼び寄せた。

おずおすと近寄ってきたククリと、未だに雰囲気固い気がするエルフ。最初に声を掛けてくれたのはククリだった。

「お兄さん……大丈夫？ 痛くない？」

「ああ、もう何ともねーよ」

嘘。ほんとはクツツ痛いし熱も出てる感じがする。ま、んな事言つてもしよーがねえからな……。

にわかには表情を明るくしたククリに若干無理して笑顔を向けつつ、俺は今度はエルフに向かつて問いを放った。

「それで。どうやら俺は……君のお眼鏡に適った、ってことでもいいのか？」

「……余所者を認めたりはしないわ」

憮然として言い放つが、今度は続きがあるようだった。

「ただ……ククリの事を思っているのは確かみたいね。不思議だけど、あれだけ追い詰められたあなたに言葉に嘘は感じなかった」

「……ありがとう。信じてくれて」

「ふん」

俺の感謝にも鼻を鳴らして受け流すだけだが、どうやら会話ができるぐらいには認められてきたようだ。

「それじゃあ、まずは話を聞かせてくれないか。この森に住む人間の集落のこと、君達の暮らしについて……」

「くふ、うふふふふ」

森の外にて。

一本の樹木に背をもたれ掛けて耳をそば立てていた女——オオカミ娘は、上擦った笑い声を隠せずにいた。

「血の匂いと一緒に聞き覚えのある声が出たと思つたら……あんな真面目な声が出せたのねえ」

子供に夢を見せてやるためだか何だか知らないが、命を懸けて許しを乞うなんて本末転倒も良いところだ。……それでもあの真に迫る声色は、時間が経つた今もなおオオオオミ娘の大きな耳にジンジンと響いていた。

「最初はただの甘ちゃんかと思つたけど……なんだ、案外イイ男じゃない」

ああいう手合いのキリつとした顔を快樂でぐちゃぐちゃに歪めてやるのが何よりも嬉しい。それを考えるだけで愉快で愉快で仕方がない。大半の魔物がそんなものであるとはいえ、彼女は間違いなく悪女の類であつた。

普通にしていれば美しく整っているはずの顔をだらしなくニヤけさせていると——何を思つたのか突然ピシツと背を伸ばし、そして一転して不機嫌そうな表情になつた。

「いつもあたしの後ろに隠れてるあなたより男を見る目はあるわよ。さて、このまま追いかけてもいいんだけど……」

側はたから見れば、それは誰もいない虚空に向かつて話しかけるといふ異常な行動だつた。しかし彼女自信は特に気にした風でもなく、それもまるで自然な事のように思つてゐる様子だつた。

気を取り直し、耳と鼻の優れた自分『たち』なら待ち伏せするのもありか——と考え

た所で。

ガサガサつ！ と、近くの草むらから音が立った。

「んん？」

「きみ、この森の魔物じゃないよねえ」

ふと声のした方に向き直ると——いつの間にか、うごめく植物のツタに辺りが覆われていることに気が付いた。

触手のようにも見えるそれを辿っていった先には、花冠のような飾りを頭に付けた緑肌の植物型妖魔、アルラウネが嫌らしい笑みを浮かべて見下ろしていた。

「私より弱そうな狼さん……食べちゃおうかな」

確かにこのアルラウネは他より大きく育っている分だけ強そうだが、と彼女は思った。もしかしたらここら一带のボスでも気取っているのかもしれない。

そしてこのオオカミ娘、どこかの天使の下馬評通り、そう大して強い力を持っているという訳ではなかった。所詮はどこにでもいる下級の魔物であり、目の前に張り巡らされたツタなどに襲い掛かれてしまえば一溜まりもないだろう。

「ふう、やれやれね」

にも関わらずこの狼、態度がデカかった。

「これだから僻地は困るわ。荒れ山の大将オオカミを倒した私のことを知らないなんて」

「……？」

「あーあ、めんどくさい。他所じやもう私に絡んでくる魔物なんていなくなっちゃったっていうのにねえ」

ニヤニヤと、まるで哀れなものを見るときに浮かべる嘲笑のように。

「知ってるかしら？ ふたご月の下に生まれた狼は……影に潜んで獲物を狩るのよ」

一節を唄い上げるような調子で放たれた台詞と同時に——ぎりつ、と。

「あつ……、？ がつ、!？」

真つ黒に染まった二本の腕が、アルラウネの首を背後から締め上げた。

「な、なに……!？」

長くて毛むくじやらの、それはまさしく獣の腕だ。ちようど目の前にいるオオカミ娘のような——しかし、どうして後ろから——。

本来なら、植物型の魔物であるアルラウネは首を絞められても効果は薄い。ただあま

りにも突然の事で、一度はツタで取り囲んだ獲物からさえ僅かに意識が外れてしまう。その一瞬を見計らったように、だった。

「じゃあねっ☆」

黒狼の鋭い爪が、真正面から獲物を引き裂いた。

「ええー？ うんうん、殺しはしないわ。ひとまずね」

嗜虐的な笑みに顔を歪めつつ、オオカミ娘はまたも虚空に向かって話し始める。

「生きて逃して、あたしの顔がここらでも知れ渡るのなら楽でいいじゃない？ ラツキーなことにあなたの姿も見られなかった事だしね。……れろ」

その時、ついいつもの癖で爪に付いた体液をペロリと舐めてしまった。

「うひゃっ」

血とは違う思わぬ苦味にゲツと舌を突き出す羽目になったが、すぐさま何でもなかったかのように気を取り直して独り言を続けた。

「んー、ゴオミちゃんは心配性だなー。ただ、こうもあたしの事を知らないヤツばかりだと森の中には入れないわねー。さつきみたいなのに囲まれちゃったらヤバいし？」

いつの間にか首に回されていた二本の腕をよしよしと撫でながら、背中にもたれ掛かる体重を支え、悠々と森の外へと歩き出していく。

「んふふー。オオミお姉ちゃんに任せなさい☆」

第8話

「精霊信仰？」

プロメステインに肩を借りながら歩く道すがら話を聞いていると、何やら聞き慣れない単語が耳に入ってきた。

この世界での宗教といったら俺の知る限りではイリアス教ぐらいだったと思うが。

「そうよ。自然の力そのものが意思を持った存在、とでも言えばいいかしら。この森に住む人間は四精霊の一人、風を司るシルフを抛り所に暮らしているの」

「シルフちゃんは凄いいんだよ！　いつも風に乗せて遊ばせてくれるんだ。僕達みんなと友達なの！」

「……という扱いをしているのは子供たちだけで、実際は人にも魔物にも敬われているわ。まったく、本人はそれを望んでるからいいようなものの……」

諦めるように額を抑えるエルフの様子からは日頃の苦勞が窺える。まあ、そういう頭痛の種を進んでしよい込んでそうな顔してるもんな……。

なんだかクラスの学級委員みたいなキャラだなと考えつつ、いや学級委員は無抵抗の人間に弓矢を二発も撃ち込んだりしねえよと思ひ直し。そういえばと思ひ出した当初

の疑問を投げかける。

「それで、どういう事なんだ？ 君らが外の世界を遠ざけたがる理由が、その精霊信仰にあつたつていうのは」

今にして思えばあの敵対心は異様だった。エルフという種族がプロメステインから聞いた通りの気性であれば、あそこまで問答無用の応対になるのは確かに変だと俺も思つてはいたのだが。

「……はるか昔、この森にはある古い師が住んでいたのよ。それが人だったのか魔物だったのかはもう誰にも分からないけど、こんな予言が残されたと言い伝えられているわ」

森の外から来たる神 遍く人魔を引き裂き

我らが精霊より 遍く人心を奪い去らん

読み上げるような口調で誦じたエルフは、憂いを帯びた表情を隠さずにこう続けた。

「これが何を意味するのかわからないけど、この不吉な予言からシルフを守ろうと常に排他的で在り続けたの。でも、それがククリのような子供たちの枷になつていたら、私達はこうするのが正解だったのかしらね……」

「お姉ちゃん……」

うーん、そうか。外から来たる神か。

で、その神が？　そういう事してくるって？

うん……………。

(おい、プロメステイン。これ多分お前んとこの神様だろどうかしろよ)

(無理です)

俺の耳元でキツパリと言い放つ下級天使の真顔に思わず頭を抱えなくなった。

イリアス教に疎い俺でも基本的な概要くらいは分かる。魔物を疎み、唯一絶対の女神である自分以外に信仰を捧げるのは許さない、といったスタンスで一貫している宗教だ。古事記(イリアス五戒)にもそう書かれてある。

目の前でエルフが人間と仲良くしてるのを見てると忘れそうになるが、大抵の魔物が人間にとって有害なものも始末が悪いぞ。共通の敵が定められた上で味方をしてやると言われりや人は脆い。どこのどいつだか知らんが、イリアス様とやらは人間をよく理解しておられるようで。

ま、これからのくらしい後の話かは分からないが……その兼ね合いで精霊信仰は淘汰

されていくのだろう。もしかなくても決して穏やかではない方法で。

……俺たちにはどうする事もできない問題でもある。これはきつと、更に後の世代の人々が直面する出来事であるはずだからだ。

これから長い時間を生きるプロメステインはそもそのイリアス様の部下なわけだし……何が起ころのかを分かかっていて何もしてやれない状況に歯痒さは感じるが、それでも確かに、俺が言つてやれる事があるとすれば。

「少なくとも、俺はそんな事のために来たんじゃない。それだけは夢に誓つたつていい」
……真剣な声で注意を引いた後、ふつと顔を緩めて少し戯けたようにこう続ける。

「それに——こう見えても、外の世界じゃ俺は結構な地位にいるんだぜ。俺が死んだ後までは流石に分かんが、この森に手出しするなと言えば連中は聞くだろうよ」

「お兄さん、そんなに偉い人だったの？」

「おう。俺が知る限り、全人類の中で俺より偉い人間はまだ存在しねえな」

純真無垢なククリは羨望の眼差しを向けてきたが、エルフは『どこまで本当なんだか』と冷めた目で俺を眺めるだけだった。うーん、いちおう100%本当の事を言ってるんだがな。

「ふう……」

しかし——ここに来たのが俺たちで、本当に良かった。

こうして彼らを守ってやる事ができるのは俺を置いて他にいないだろうし、外の世界の事を聞かせてやるのに俺以上の適役もない。なにせ人類の文化の大半は俺から生まれたと言つても過言ではないからな。借りパクの知識だけど。

「ま、積もる話もあるんだが……今はとにかく休みたいな。すまん、体力が底をついてきて……」

「ああもう、あと少し我慢しなさい。そろそろ集落が見えてくるわ」

恨みがましく言つたつもりでもなかつたが、悪い事をしたとでも少しは思つてくれるのかもしれない。

いよいよぼやけてきた意識をどうにか保ちつつ、言い捨てるように口を開きながら先導するエルフに付いていくのだった。

窓から差し込む柔らかな木漏れ日を感じながら、俺は布団の中から這い出していた。

「ふわ〜あ」

精霊の森の集落に訪れて数日。すっかり手足の傷も塞がり、体調も回復したと言つていいだろう。

「お兄さんおはよう！ 今日も行こ！」

「ククリ、あなたはまた……」

朝一番に原始人少年の大声で目が覚めるのも日課と化しつつある。隣で目を擦っているエルフに至ってはもはや言葉も出ていなかった。だって何度言っても聞かねえんだもんこの子。

隣で。そう、件のエルフ娘は——エリーという名前を聞き出すまでに二日を要したのだが——ククリと同棲していた。

つつても変な意味じゃない。何でも幼くして親を亡くしたククリの世話をしていられるらしい。どうして魔物が人間の子にお姉ちゃんとかまで慕われているのか不思議だったが、然もありなんといい訳だ。彼らの家に招かれた俺は、もっぱら三人で川の字となつて寝ることになつていた。

「わツたよ……行くから……」

「やった！ さ、みんな待つてるよ！」

顔を洗う暇も朝食を取る暇も無く追い出された俺を待ち受けていたのは、総勢十数名にも及ぶ村の子供達だ。フェアリーやアルラウネなんかの魔物の子供もちらほら混ざっているが、皆一様に瞳を輝かせながら俺の言葉を待っている。

……ぐああ、大変すぎるぞ、先生ごっこは。精神年齢が“お兄さん”どころの話では

ないからか、近頃は子供のパワーについて行けなくなりつつある。

転生してから幾度となく人に物を教えてきた経験が無ければ危なかった。実用に耐えるまで徹底的に復習していなければ、にわか仕込みの前世知識ではとても歯が立たなかつただろう。

「えー今日は前回で習った粘土による陶芸に欠かせない高温の火を作るための方法の一つであるダコタ式かまどの仕組みについて……」

俺は何をやつてんだろう……と思つてはいけない。知りたいつてんだから教えてるだけだ。真面目くさつた顔で子供相手にダコタ式かまどの話をしてる現状を客観的に振り返るな。現実に戻るな。

苦手な火を使うと知つたアルラウネの子からブーイングを飛ばされ、人間の子はキヤーキヤー喜び、フエアリーの子は話を何も分かつていないのにも関わらずとりあえず喜び、俺の胃はキリキリ痛む。

(はやく帰つてきてくれ……プロメステイン……)

傷は治つた。後は“仕事”の関係でここを離れたプロメステインと合流すれば森の探索に踏み切れる。

ただそれまでが長い……俺の疲労と睡眠時間が限界値に達するまで、間に合つてくれればいいのだが。

「参つてゐるみたいね」

「エリー……」

家の中から出てきたエリーに遠目から声をかけられ、俺は眠い目を擦りつつ振り返つた。

「あいつら火い使うから監督してて欲しいんだけど頼める？　俺は寝てきます」

「駄目よ。責任をもつて面倒見なさい」

バツサリいかれた。ケチな奴め。

「それにあなた、言うほどんざりしてるようには見えないけど」

「……まあ、そうかもな」

俺が教えた通りに動く子供達を見やる。誰も彼も楽しそうな顔しやがって、俺の苦勞など気付いちやいない。

ただまあ、子供つてのはそういうもんさ。穴掘りに夢中になつて泥だらけになつてゐるが丁度良い。

こんな俺でも、人に夢を見せてやる事が出来るんだな。

そう思うと途端に嬉しくなってくる。我ながら単純な奴だと苦笑いしていると、いつの間にか隣に座つてきたエリーが声の調子を一つ落としてこう言った。弓の手入れをしているらしく、弦を引き絞つているのが見える。

「何にしても、長居はし過ぎない方がいいと思うけどね。あなたがここに居る事を良く思っている人ばかりじゃないわ」

「……ああ」

視線を少し奥にやると、こちらを静かに睨み付けるような視線が二つほど感じられる。エリーとは別のエルフの娘と、やたらガタイの良い熊みみたいな風貌をした男の二人組だった。

例の予言の事もあり、基本的に余所者の俺らが歓迎される事は無い。ククリの家に世話になってるのだから、他に俺を置いてくれる場所が無かったというのが大きいぐら이다。

そんな得体の知れない男が大事な子供達を集めて毎日毎日楽しそうに何事かを教え込んでるってんだから、そりゃあ良い顔はされないうらう。ククリとエリーがいなかったら今に叩き出されたっておかしくない。

「そろそろ、俺の用事も済ませなきゃあな……」

「……言っておくけど、まだ私はあなた達を本当に信用している訳じゃないから。私にとつてあの子達が大切だから引き合わせてあげただけで、必要以上に森を傷付けるような真似をするなら許さないわよ」

特にあの赤髪の女は信用できない、と息を巻いている彼女も俺にとつては悩みの種

だ。どうしたもんかね。

「お兄さん、この森の木が欲しいの？」

と——俺の苦悩が伝わったのか、ククリが穴掘り作業を中断してまで近寄ってきた。そうなんだが、どれが良い枝なのか分からないのが問題なんだよ。

「つつてもプロメステインの奴は『片っ端から切り倒して試してみればいい』とかほざいてるし、んな事したら俺はその姉ちゃんに今度こそトドメを刺されちまうし……」

うーむ、どうにかして良い枝を探す方法は無いものか……こんな事を子供に話しても仕方ないかとは思いつつ悩んでいると。

「えっ？ そんなの簡単だよ。シルフちゃんに聞けばいいんだよ！」

何をそんな事で悩んでいるのか。

さも当たり前のことだとも言うように出てきた一つの案に、俺たちは呆気に取られるのだった。

第9話

「案内つて言うけど、シルフちゃんはそんなに遠くに住んでるわけじゃないんだ」

プロメステインが天界から帰つてきた翌日、俺たちはエリーとククリの案内でシルフの住処すみかを目指していた。

四精霊の一角、風を司るシルフ。その四精霊というのがまず何か良く分かっていない俺にとってはどういう存在なのか想像も付かないが、俺たちの目的の為にシルフの力が役に立つとククリは信じているらしい。

「二人で入つても迷うほどの森は入り組んでないし、奥に向かつてまっすぐ進めばすぐに会えると思うんだけど」

「あなたたち余所者に会わせるのにシルフを一人にする訳にはいかないわ。何をするか分かったものじゃない」

主に「俺じゃない方」の余所者をジロリと睨みながら洩らされたエリーのセリフに、不良天使は模範的な不良的返答でもつて対応した。

「……」こちらを見て言わないでくれますか？ 過ぎた事をぐちぐちと。貴女、意外と子供っぽいんですね」

売り言葉を言い値で買ってんじゃねえよ。

いきなりバチバチに視線を衝突させ始めた女子二人に俺はさっそく頭痛を覚えた。こいつら、当然と言えば当然だが仲が悪い。

初対面がアレだけにプロメステインが10割悪いと言う他無いのだが、それにしても身内である手前肩身の狭さが尋常ではない。逆になんでこいつは未だに喧嘩を売ってるんだよ。我が強すぎんだろ。

思い返せば、シルフと会うのに同行させろとエリーに言われた時のあの不機嫌顔は何だったんだろうか。

あわよくば生体実験の協力でもさせて貰おうとでも思っていたのか？ 流石に解剖してみたいとかそこまでの事を考えてた訳ではないと思いたいが……いや、どうなんだろう……。

しかし、このまま二人がみ合っているのも本意ではない。

「やめろよ、子供かお前らは」

ククリに至ってはどうすれば良いのか分からずおろおろしているし、ここは俺がキチツとしなければ。

「なあエリー。確かにこいつは胡散臭いし空気も読めないかもしれないけどさ……」

「えっ?」

意外そうな顔をするなよ、この野郎。

「……それでも、俺はプロメステインの事を信頼してる。命を預けたっていいぐらいにだ。お前はこの数日間で、俺のことをほんの少しぐらいなら信用できると思ってくれたからシルフに会うのを許してくれたんだろ？」

「……………」

「だったら後は簡単だよ。俺が信じるこいつを、ちよつとの間でも信じてやってくれないか？」

できるだけ真摯に向き合って言葉を重ねてみたつもりだが……良かった、表情を見る限り一応の納得はしてくれたようだ。

「なんだか上手く言いくるめられてるみたいで業腹だけど、そこまで言うなら仕方がないわね……………」

「まさに言いくるめられたんですよ。もしや気付いてないんですか？」

この後、とうとう俺まで敵に回しやがったプロメステインが子供クックリを盾に説得を試みるという一幕があったのだが……

言わずもがな、誰も知りたくない展開であろう事は想像に難くない。

「そろそろ会えると思うんだけど……」

不安そうに辺りを見回すククリに釣られて俺も若干怖くなってきたところで、それを払拭するようにエリーが口を開いた。

「心配ないわ。あの子は少し気紛れだから、こうして中々見つけれない日もよくあるのよ」

「つつてもなあ、そのシルフってのがどういう奴なのか知らないのは俺だけっぽいし、不安もひとしおっつーか……」

「シルフちゃん！ 出ておいでー！」

実物を見るのは初めてだろうが、プロメステインもシルフとやらの事は以前から知っているようだった。今更身構えても仕方がないとはいえ軽く緊張しつつ、周囲の気配に耳を澄ませていると……

さあつと。

風がさざめいた。

「……!!」

そう形容するしかない感覚。なるほど、これが“それ”かと即座に理解させられた。

大自然の息吹が体を吹き抜けるかのような存在感に気が付いたのは俺だけではないだろう。ククリは確かに表情を明るくし、エリーはやつと出てきたかと若干の呆れ顔、プロメステインは……特に何か気付いた様子はなさそうだ。

こういう事象に対する感性に酷く欠けていると言わざるを得ない約一名は放置しておくとして、俺たちの前にひらりと舞い降りたのは――

シルフが現れた！

「やつほー、エリーー！ ククリくん！ また遊びに来てくれたの？」

「……………」

ち、小さいな……。

この、のんきに笑顔をにばにば振りまくチマツこいのが風の化身、自然の写し身とさ
れている四精霊のシルフなのか？ まさか片手にスッポリ収まるほどの大きさだとは
思わなかったぞ。

目を丸くしているプロメステインが「解剖するにしても難儀しそうなサイズですね」とか何とか言い出さない内に彼女の口をパツと塞ぎつつも、俺は先程感じた存在感にどうも結び付かないシルフの姿に釘付けになっていた。

(て、手乗り精霊……)

「むう、なんだかシツレイなことを考えられてる気がするよー!」

しかし流石と言うべきか、勘は鋭い……のか? もしかしたら俺の知らない方法での考えを察する術でも持っているのかもしれないが、まあ今は関係ないだろう。

「キミたち、よく見たら初めて見る顔だね? エリーと一緒にいるってことは、やつぱり村から来たのかな? あたしはシルフ! よろしくねっ!」

「ああ、シルフ。俺らは森の外から旅をしてやって来たんだ。実は頼みたい事があつてだな……!」

「!」

まずい。ここ数日で嫌というほど見てきた“好奇の目”へとたちまち変化していくシルフを前に咄嗟にそう思ったが、全ては余りにも遅かった。

「ええーっ! 外から来た人間さんなの?! いいなあ珍しいなあ、ねえねえ外のお話聞かせてよ! お願いお願い!」

「うぐうーッ……!」

思わず額を押さえてよろけてしまう。津波のように押し寄せてくる村の子供達の姿が重なってグロッキーを再発しつつあった。

予想外の所から精神的なダメージを被りつつ、俺はどうか子供っぽい風の精霊との対話を試みるのだった。

「ふむふむ……つまり、この森の魔力をたっぷり吸いこんで扱いやすくなった木の枝が欲しくてここに来たんだね?」

「……ああ、そうなんだ。シルフならそれを探す事ができるだろうってククリから聞いてきたんだが」

何とかシルフを落ち着かせ、俺は俺たちの要望を飲み込ませることに成功した。代わりにこれが終わったら外の話をめいっぱいしてやる約束を取り付けられたんだが、そこは未来の俺にどうにか頑張ってもらえないだろう。

魔法の杖を作るために必要な木材の確保だが、上等な枝を探すまでの伐採を最小限で

済ませられるのならそれに越した事はない。しかし、問題は果たしてシルフにそれが可能なのかという所なのだが。

「うん、うん……ちよつと待っててね。風に聞いてみるよ」

意味ありげな台詞と共に何かに耳を傾けるような仕草をするシルフ。風に聞くとは、これは果たして単なる比喻なのかそうでないのか。プロメステインも不思議そうに首を傾げているだけだし、もしかしたら筋道立った論理どうこうの話では語れない感覚なのかもしれないな。

しばし目を閉じるシルフを全員で黙って眺めていると、やがて一本の大木に向かってふわふわと近付いていった彼女は柔らかな笑顔と共にこう言った。

「あのね、この子がね、ボクの枝をどうぞーって」

えっもう？

驚くほどあっさり言い渡されたので思わず固まってしまったが、本当にこの木でいいんだろうか。

「あー、プロメステイン？」

「わ、わかりました」

錬金術で生み出した鉈を手にいそいそと例の大樹を調べ始めた赤髪天使をよそに、俺は改めてその木を観察した。

つつても木の種類なんかに造詣が深い訳ではないし、そもそも魔力なんて不可思議なもんを吸い込んで育った植物が他と同じように育っている保証なぞどこにもないので前世の知識と照らし合わせることもできず、よって何となくの所感にはなるのだが……まあ、立派な木のように見える。

根は力強くガツシリと張っているし、若草色の大きな葉っぱも心なしか瑞々しくたつぷりついていて、何とというか、生命力に満ち溢れているような感じがする。他より明るい色をした幹や枝も頑丈そうだ。

「といつても、“アタリ”を先に知らされたからこそ余計にそう思えるだけなのかもしれないが……都合杖一本分程度の枝を切り出して調べていたプロメステインは、ほうと感心したように声を上げた。

「これは、驚きました。当初私が理想としていた数値よりも魔力の親和性が高いです。いかに『精霊の森』といつてもここまでの物が手に入るとは……」

「えへへ。この子がね、外の世界を見てみたいーつて。張り切つて良い枝がとれるようにうんと力を込めたんだつて」

「そんな非科学的な事があるわけじゃないでしょう」

「えっ……」

「てめえ、油断するとすぐこれか!!」

意図せずしてエリーと声が被ってしまった。俺はともかくこいつはキャラが崩れてる気がしないでもないが、そんな事はどうでもいい。

あまりの即答に聞き逃しそうになったが確かに聞いたぞ。この場所を決して動けない樹木の健気な思いに目頭を熱くしたり決意を新たにしたりする時間すらくれねえんだもんこいつ。科学者気質故のものかも知れんが、マジで感性が終わってるだろ。

「ずくん……」

「見ろ！ シルフがなんかこう、ずくんってなってるだろうが！ めちやくちや落ち込んでるじゃねーか！」

「やはりあなたをシルフに近付けるべきじゃなかった……覚悟しなさい!!」

「えっちよつ、何か変なこと言いましたか私？」

この後、再び俺を敵に回しやがったプロメステインが子供クッリを盾に説得を試みるという一幕があつたのだが……

さつき見たんだよこの展開は。

あれから結局一週間程が経ち。

長居しすぎてしまった感はあるにしろ、ようやく俺はこの森を離れる時がやって来た。

「うええ、お兄さん……いがないでえ……!」

「こらククリ! いい加減にしなさい! 皆も!」

俺の見送りには村中の子供たちが来てくれた。何だかんだで俺を困らせる事もあった連中だが……それでも楽しかった。こいつらに物を教えてる時は。

「大した人気ですね、まったく」

群がるように子供達が纏わりつく様子を若干離れた場所から見ているプロメステインはというと、俺よりはひっ付く子供が少ないようだ。つまり、人気が無い。

「なんだ、やきもち焼いてんのか?」

「そうではありません。そもそも私は仕事の兼ね合いでここにいる時間が貴方よりも短かったですし、そこから安直に私の人柄に問題があるという話に結び付けられるのは本意ではなく——」

ああだこうだ言ってるが、要するにこいつは負け惜しみを言っただけだ。お前の人柄に問題が無かったら世の精神科医は日々の糧にありつけねえだろうよ。

そう思つて悔しがる顔を鼻で笑つてしていると、ある一人の女の子がプロメステインの下におもむろに近付いてこう言つた。

「お姉ちゃん！ 色んなことを教えてくれてありがとう！ これっ！」

とびつきの笑顔でもつて差し出されたのは……あれは花か？ 一輪の野花をプロメステインに向かつてぐつと突き出していた。

「えっ……あ、どつ、どうも……」

予想外の事態に何が起きたかちよつと飲み込めてないらしい。子供相手にどもりながらどうにか礼を言つたプロメステインは……おい、何だよその顔は。その優越感に満ちた顔は。こつち見んな。

黙つてれば俺も心暖かな気持ちでいられた物を……こういう所なんだよな、こいつのウザい所は。

まあそこらで気を取り直し。俺はしがみ付いてくる子供達を一人ずつ引き剥がしながら、いよいよ別れを切り出した。

「じゃあエリー、子供達を任せられるか？」

「分かつてるわよ。ちゃんと送り届けるわ」

「シルフも……ありがどうな。本当に助かったよ」

「いいよー全然っ！ あたしも外の話が聞けて楽しかったしね！」

ばやばやと明るい空気を振り撒きながら俺の周りを飛び回っているシルフは、プロメステインの心無い一言で落ち込んでいたのもすっかり忘れてしまったようだった。

もしかするとおつむが少し弱い可能性があるが、都合の悪い事をすぐに忘れられるのはいつそ長所に転じているのかもしれない。

思わずまた失礼な考えを巡らせていると——俺の耳元で、シルフは他の誰かには聞こえないような声で囁いた。

「あの赤髪の子……人間じゃないよね？」

「えっ?」

質問するというよりは確認するような口調で放たれた言葉。余りにも唐突で、ついっ大変な声が漏れてしまった。

どうしてそれを……と俺が呟くよりも早く、風の精霊はいたずらっぽく笑ってこう言った。

「耳を澄ませば分かるんだけどね……あの子からは風の声があまり聞こえなかったの。あの子を捉えられるのは風に近い何かだとは思うけど、それは私の操る風じゃない、っていうのかな……?」

「要するに、よく分かつてはいないんだな……」

それはあいつが天使だからなんだろうか。風に関してあいつの感性がやたら悪かったのも、もしかするとこの辺りに関係があるのかもしれないが。

「でもね。キミから吹く風はとつても賑やかで、真つ直ぐで……楽しかった。そんなキミがあの子をとつても信頼してるのが伝わってきたの」

「それが、俺らを信じてくれた理由なのか？」

「うん。それと、キミはこの森に来てからたくさん遠回りをしてここまで来たのかもしれないね。それでもククリくんや村の子供たちのため、エリーに立ち向かったあの時のおかげで、キミは私の所にまでたどり着けたんだよ」

何を言いたいのかっていうと、つまりね——そうシルフは前置きしつつ、とびっきりの笑顔と共に断言してくれた。

「そういう生き方を曲げない限り……キミの夢は絶対に叶うよっ！ 頑張つてね！」
「……ああ、ありがとう！」

こうして俺らはいつまでも手を振る子供達に見送られながら、精霊の森を後にした。ここで起きた数々の出来事を、俺は生涯忘れることは無いだろう。

第10話

橙色の夕焼けに染まった平原にて。

「はあああ……ッ!!」

野営の準備を終えた俺は、身の丈ほどの木の枝を抱えながら気合いを込めて唸っていた。

「炎よ出ろ！ 出ろ！ ファイアー！」

「……何をやってんですか？」

「いや、魔法……出るかなって……」

熱心に小さな血溜まりを覗き込んでいたプロメステインが視線を移し、ジト目でこちらを見つめてくる。その辺をうろついていたトカゲか何かを引っ捕えてバラしていたのか、急な大声で中断させられてお冠らしい。

「わ、分かっているよ。でもさあ、まだ無理だとは言われても試したくなるのが人情つてものだろ」

俺が世紀の大天才魔道士の才能を持って産まれてきていた場合、何かの間違いでという事もあったら儲けもんだと思っていたのだ。

しかし生憎、そういった事は今のところ特に無いらしい。うんともすんとも言いやしないゴツゴツした木の棒に手汗が染み込んだりしない内に、俺は素直に手を離して諦めた。

「あのですね……ああもう、どこから指摘すればいいのやら。まずもって、それはまだ魔法の杖にはなりません。ただの杖です」

「えっ、これじゃダメなの？」

はい。と頷いたプロメステインはさつきまでの作業の手を止めつつ問題点を解説してくれた。

「不純物が多かったり形状が歪いびつだと魔力が散ってしまつて上手くいかないんです。そのため皮を剥いでよく乾燥させる必要がありますし、適した形に削つて整えなくてはなりませんね」

つまり、杖としての体裁は流石にきちんと整えてやらなきゃならない訳か。確かにその辺からちぎ取つた枝を振り回して魔法を唱える魔道士は想像できない。それはもう半分蛮族だ。

「何より、今の貴方ではきちんとした魔道具を持つていても魔法を発動させるのは不可能です。ゴルド火山に行くまで我慢してください」

「……ああ、それもあつたなあ」

人間が魔法の行使において唯一汎用的に転用可能な大気中におけるマナ濃度の抜本的な低さによる弊害——プロメステインに言わせれば長つたらしい説明になってしまふが、これは要するに燃料が足りないという話だ。

魔法を出すには魔力が必要で、その魔力がどこから来るのかというと、それは空気という答えになる。ただし含まれる魔力は極めて希薄……残念ながら、とても使えた物ではないのだ。

ただそれは人間に限った話なのである。

人間と違って生命力を体内で手っ取り早く魔力に変換できる天使や魔物に関しては、空気中の僅かな魔力なんぞをわざわざ使う必要は無いらしい。

うーんこの人間と魔物の格差。理不尽だ。

「体の構造が違うんだから仕方がないでしょう。諦めて……いや、いつその事その変換を担う臓器だか器官だかを発見して貴方の体内に移植してしまえばあるいは……」

「いや結構!!」

「あ、そうですか」

お前、お前この、すーぐそういう発想に至る。怖。マジで何なん? 怖いんですけど。

これで善意で物を言ってるっぽいのもタチが悪い。流星に被験者第一号としてトンデモ改造人間にされるのだけは御免だ——

「そういえば、いつも私に隠れて貴方がしている自慰の事なんですけど……」

あまりにも突然の事だった。

何の脈絡も無く飛び出した二文字の単語に、まず俺は幻聴を疑った。

「……………は？」

なに？

おまえは何を言っとるんだ？

「おまえは何を言っとるんだ？」

「いえ、話の流れで思い出したんですが……その精液をどうしてるのかふと気になりまして」

「わかったオーケー。今すぐ口を閉じようか」

話の流れでって何？

今あの時、というか今日この日の会話からどこをどう取ったらそういう流れが汲み取れるのか全く理解できない。

……いやちよつと待ってくれ。もしかしたら俺が地雷を知らずに踏み抜いてしまった可能性が無いとも言いきれない。少しだけ、改めて考えさせてくれ。

.....

何をどう考えても俺に非があるとは思えん。が……もしかするとだ、こいつの中では今の会話の流れが猥談の方向に向かっているという事なのか？

「あの、そろそろ喋ってもいいですか？」

いや、まあ？ 俺も前世含めて長く生きてる訳だし、今更そういう話でキャツと恥ずかしがるほどウブって訳ではない。ないが、どうしてそうなった？

自慰……自慰つて言われても。若い男の肉体を羽織っている以上、そりや持て余すものはあるけどさあ。

ましてやアレだよ、こうして若い女の子と二人旅なんかしてる手前、正直ちよつとした事でムラムラする場面はどうしても出てくる。恋愛的に見てないとはいえ顔は普通にかわいいし、こいつ……。

あああもう、わっけがわからん。このまま考えても仕方がない。

「あのさあ、今どういうつもりで猥談が始まったん？ 何、話の流れって」

「……ああー！ なるほど、そういう事でしたか。確かに言葉が少し足りなかったかもしれません」

足りないのは果たして言葉だけなのか。もつと色々なもんが欠落してないか。甚だ疑問ではあるが、奴はようやく得心いったとでも言うように頷いた。

「魔物や天使は生命力を魔力に転換できる、という話をしていた筈ですよ。私たち」
「うん」

「魔物はその生命力を人間から直接奪っているんです。男性の精が彼女らに狙われるのはそのためなんです」

「はあ」

「そういう話からも分かる通り、精液は混じり気無し of 生命力そのものが液体の形を

とつていると言ってもいい物質なんです。これは魔導において非常に有用な資源になりうる……と、私はそう思っている訳です」

「資源」

それはマジで言ってるのだろうか。いや冗談にしては目が本気だ。朗々と語り続ける目の前の少女に至極短かな相槌を打つことしかできない。

俺は以前から魔物の生態なんかにはそこはかとなくどころの話ではないエロゲチックな世界観を見出していたのだが、こうも科学者キャラにまでR—18はこの世の真理で済みたい念押しをされると流石に頭を抱えたくなってしまう。

そろそろ改めて自覚せんといかんかもしれん。——俺の生まれた世界、普通じゃねえ。

「それで結局、どうなんです?」

「どうとは」

「せっかくの精液をその辺りにコキ捨てているのでしたら、どうせなら今後の実験の為にサンプルとして採取させて頂けないかと思ひまして」

「黙っとけな?」

「それか……いつも私がそばにいるせいで不自由をさせてしまっているのであれば、出すのお手伝いしましょうか？」

「変態!!! エッチ!!!」

「わわ、うぶっ」!!!

まづいませいませい。ここに来てこいつの感覚がマジで分からない。つーより人外の貞操観念が分からなさすぎる。

「枕を投げないでくださいよ、枕を……。落としたら汚れちゃうじゃないですか」

「夕飯の準備してくるわ!!! 火い絶やさないとねそこちやんと!!!」

やばい、頭がフットーしそうだ。顔が真っ赤になってるのが自分でも分かる。とにかく一刻も早くこの場を離れなければ。

しかし……この時の俺は、どこに向かって歩いているのかすら意識に回す余裕が無いほど追い詰められていたらしい。

「だっはあああああ!!!」

どんがらがっしやん! と。

——いつそ清々しいほど派手に足をもつれさせ、その場で盛大にすっ転んでしまった。

「いつ、いつでえ——ッ!!!」

「ちよつ、ちよつと！ 大丈夫ですか？」

……大丈夫かつて、そりゃ今のお前には言われたくねえ……。俺は俺で色々平静じゃないかもしれないけど……。

「まったくもう、どうしたんですか。見せてください」

「あつ……」

ふと、その時、プロメステインと目が合った。

地面に這いつくばって悶絶している俺と目線を合わせるようにしやがみ込み、気遣うようにぺたぺたと顔を触ってくる。傷が付いていないか診てるらしい。

あと、その、近い。

「うぐ……」

や、ちよ、直視できない。

思わず顔を逸らしてしまう。さっきのも今のもこいつに他意は無い……。んだよな？
くつそ、なのに俺だけ一方的にこんな……。

(……お互い、少しは分かり合えてきたと思ってたんだが……！)

こういう価値観は何も、プロメステインの奴に限った話じゃないだろう。今までなんとなく魔物とは対照的なイメージで線引きしてたが、天使は天使で似たようなもんだったのかもしれない。この世界の……人外っていう括りの中では。

ようやく分かった。

照れたり恥ずかしがったりするこいつを知ってるからって、意思も心も通じ合ってるからって、底の底まで勝手に見通せてる気になっていた。どこか人間と同じようにこいつを見ていた。

それは俺の落ち度なんだろう。天使にとつてはこのくらい——別に、大したことのない話だったんだから。

「良かった、大した怪我はしてないようで……はい？」

「……………」

片手を前に遮るようにして起き上がる。

悪いけど、ちよつと考える時間が欲しい。

「……………」

「あ、あの？ やっぱり頭でも打ちましたか？」

「いや……………」

正直、人によればトラウマものの距離の詰め方をされたとは思う。例え相手にその気が無いとしても。この世界では別に普通の事だったとしても。

この場合は美少女が野郎に向かって言ったから良いようなものの、これが逆なら完全に事案。犯罪。セクハラだ。俺がそういう事をした側の立場だとしたら、された側に相

当距離を置かれても仕方が無いだろうなどは確かに思う。

でも、なんつーかな……。

これは結局、俺が図太いってだけの話だけ。

「ただ……お前のこと、もつと良く知りたいって思った」

……いや、それはちよつと能天気が過ぎるか!?

自分で言っても流石にどうかと思うが……うーん……

面白い、つて気持ち勝ち勝ったかもしれない。

まったく予測できない未知の思考回路。前世ではまずありえないような人間関係。すでにプロメステインという少女を心底好きになつてきていたからこそ、むしろまだ理解できていない部分をどうにか丸ごと理解してやりたくなつてきた。

そうやって仲を深めていけばどうなる?

——いつか俺とこいつは、

きつと最高の友人になれるに違いない。

この確信は俺にとって、どうしようもなく魅力的な発想に思えてならなかつたのだ。

俺は今日、また一つ相手のことを知ることが出来た。どんな話であれ、この事実は喜

ばしいことに違いない。

まあ何だかんだで、俺はそっくり前向きに捉えることにしたのだった。

「よく分かりませんが、それは精液の提供に同意してくれたという意味で間違いありませんか？」

「間違いありません」

それは、ちよつとうん。

考えさせてね……。

第11話

『あ、えっ?』

気の抜けた音が喉奥から漏れ出す。

動悸が収まらない。頭が真っ白になって……

『はっ……離せよ。なん、なんだよ。これ』

嫌だ。認めたくない、こんなこと。

声が震える。目の前で起きている事を今すぐ否定してやりたいのに、ほんの数歩、あいつの下に駆け寄る事さえ出来ないでいる。

何だよ、何をやってんだよ、俺は。

俺は——こんなに弱かったのか。

『うっ……うあああああああああ
!!!!!!』

叫ぶ、叫ぶ。

追い続けるように、逃げ出すように。そのどちらも叶わない今は——正に地獄だった。

「……であるから、くくつまり、……では、呼ばれていて……マグエルのくく第三法則が、……あの、聞いてますか？」

「うおっ」

や、やべえ。ついていくのが精一杯だ。理解できないとは言わないが、くたくたに疲れて頭に入つてこなくなってきたぞ。すげえ眠いし。

辺りに夜の帳とほりが下りる中、俺は焚火と月明かりを頼りにプロメステインの授業を受けていた。今夜は満月、目を凝らさずとも良く見えるのが幸いか。

「た、たんま。今日はこのぐらいで……」

「む、そうですね。明日に差し障るといけません」

この旅ではこうして野営の時に座学をやるのが習慣となっていた。魔法使いを志す手前、論理の習得は欠かせない……らしい。それにしても今日の範囲は難しかった。

「うあー、こんなんで本当に魔法が使えるのかね……」

「魔法の力はイメージ力ですよ。行使の際に行う処理はすべて頭の中で為されるもの、論理は必要不可欠です」

小難しい論理なんかより分かりやすい呪文とかを教えてほしいと当初は思ったものの、プロメステインによると詠唱というものは単にその“イメージ力”を固める手段に過ぎないらしい。

複雑な術であるほど決まった口上を唱えるのが望ましいが、簡単なものなら適当にそれっぽい事を口にするか、極論何も唱えなくても問題は無いそうだ。つまり何が言いたいかというと……座学に対するウェイトつてのはそれぐらい大きい。

「なんだかねえ……」

ふと夕方のことを思い出す。俺が試してみたのは相当簡単な部類に入る、ファイアという下級の魔法だ。文字通り何の捻りもなく火の塊を生み出すだけの魔法。

あの時は手応えの一つもさっぱり無かった。いくらその原因と解決の手立てがはっ

きりしていたって、こう、流石にモヤモヤくるっていうか。それこそ前世で似たような棒きれを持って似たような事をしてもしりや似たような結果になるだろうなど、そういう妙な納得が生じてしまうような結果であった。

やり切れないつつーか何つつーか……微妙な顔で夜空を見上げていると、横に座つてたプロメステインが探るように口を挟んできた。

「前に進んでいる実感が無い、ですか」

「それ」

結局のところ、それなんだよな。

これだけ苦労したんだからちよつとぐらい良い目を見たい、というのは贅沢が過ぎる考えかも知だが……

「——この空に浮かぶ月や星を手に入れようと、ただ真つ直ぐに腕を伸ばしたとして」

「あん？」

ちよつとアンニユイな気分浸っていると突然、プロメステインが何やら詩的な台詞をおもむろに繰り出してきた。

「その努力が滑稽に映るといふのは自他共に認める所でしょうが、実際滑稽なことです。それは何故かというと、前に進んでいないからです」

「そりやそうだ」

「そこで、月や星に手を伸ばす努力と貴方の努力とでは一体何が違うのでしょうか？」
急にこつちに振ってくるなよ……えー、つまりどういうこと？

回らなくなってきた頭でとつくり首を傾げていると、呆れたような楽しむような、そんな雰囲気になったプロメステインが笑いかけてきた。

「貴方がちゃんと前に進んでいるという事を、私が知っている所です」

「ん……」

「心配しなくて大丈夫ですよ。夕方のあれ、もし貴方が天使だったならもう十分できる筈です。今は少しずつ、できる事からやっていきましよう」

もし天使だったらかいいう仮定を提示されたところで想像しにくいが……ま、そういうもんか。

「ありがとな。ちよつと元気出た」

「ん、それはどうも」

今のが俺を元氣付けようとしての言葉なのだろうというのは流石に分かる。良くも悪くも裏表が無い、その気質は俺にとって好ましかった。

天使なんて種族の見た目と年齢が一致するとは思えないし面と向かって歳幾つだとか訊いたこともないが、プロメステインはその中でも見た目通り特に若い方なのだろう、というのも何となくが見て取れる。やはり所々の言動が若々しい。

精霊の森での件もあるし、思っている事をそのまま口に出すあの癖は俺が血まみれにされるリスクを増加させるため、多少の狡猾さも身に付けて欲しくないと言えば嘘になるが……

そういう所も含めて、と思えばな。

「……………」

そこでぶつりと会話が途切れる。しかし居心地の悪い沈黙ではなかった。

二人で何とはなしに夜空を見上げる。別に美しいとまで思っただけで見る訳ではないけれど、この、どこまでもゆっくり流れるだけの時間がただ好きだった。

どれくらいの間そうしていたのか。

星空の下、どちらからともなく目を合わせると——俺はゆっくりと地面に手を伸ばし、手ごろな大きさの石ころを拾い上げ。

「そおい!!」

プロメステインと一つ頷きあい、それを遠くの茂みに向かって放り投げた。

おいおいおい待て！ 何故ここで突然の投石!? ……つと思われるだろうが、そこをちよつと見てほしい。

「ぎゃわんっ!？」

俺が石礫をぶん投げてやったあの辺りから、何やら潰れた悲鳴のような声が聞こえはしなかっただろうか。

「出てくるとすりゃあそろそろだと思ってたが……おい、お前なんだろ！ 出てこい！」
そうして草むらからゆっくりと出てきたのは、いつか俺たちを襲ったあの時のオオカミ娘だった。

そこに身を隠しているといち早く察した俺が牽制の意味を込めての先手を打ったのだ。以前のように昼間ならまだしも、満月とはいえこの真夜中に隠れる自分をいとも容易く見破られたのに驚いているらしい。オオカミ娘は狼狽した様子でこう言った。

「ど、どうして私がいるのに気付いたのよ……!？」

「お前の悪名は聞いたぞ、ここら一帯で随分幅を効かせてるんだってな。またいつ出会すかも分からんお前みたいな奴に対策の一つもしてないと思うな」

オオカミ娘が俺たちを狙うかもしれないと分かっていたら十分だった。こんな事もあるうかと、近くにいる獣系の魔物を自動で察知する魔法をプロメスティンに掛けてもらっていたのだ。

……偉そうに言ってるが、要するに他力本願じゃないかって？ うん、まあ……その通りなのだが。

仕方がないだろう。探知の魔法は俺にはまだ難しかったんだ。術式の仕組みを一応見せてもらったとはいえ……今の俺では何が何だか。書いてることの半分くらいしか理解できなかった。

ただまあ、事のあらましを一から敵に教えてやる必要も無い。まず今から考えなくてはならないのはこの状況をいかにして切り抜けるかだ。

「ぐるる……」

「どうします？　また逃げられるとも思えませんが」

プロメステインの言う通り、前と同じ手は使えない。これは相手が騙されてくれるかどうかで問題ではなく、単に俺たちが今すぐ動ける状態にないからだ。

前回は昼休憩の撤収を丁度終えた所に襲われたが、こんな今から寝るぞという時に逃げるとなれば少なくとも荷物は持っていけなくなる。奴もそれが狙いで、あわよくば寝首でも掻こうと夜にやって来たんだろう。

……くそ。プロメステインを無闇に戦わせたくなかったが、こうなってしまった以上は仕方がない。

「夜目は向こうの方が効くと思うが……いけるか？　どうにか追い払うだけでもいい」

「あのですね、私はこれでも天使なんですよ？　こんな有象無象に遅れを取るなど万に一つもありえませんか」

そう言つて氣後れした様子も無く俺の前に進み出ると、外套を靡なびかせた少女はニヤリと笑つて一つ確認をしてきた。

「それに……そろそろ魔物の解剖を試みたいと思つていたんです。まさか貴方でもアレに遠慮しろとは言いませんよね？」

「うええ……う？」

これはまた、何と言えばいいのか返答に困ることを。そりやあ俺らを問答無用で襲つてくる魔物を相手に情けをかけるとは言えないが……それつて……

改めて目の前のオオカミ娘を見る。ケモノっぽい印象のする部分が所々にあれど、基本的には人間の娘とあまり変わらない見た目をしている。何より言葉が通じる知性体だ。

あれをぶつ殺してバラすつていう所まで想像すると、それはもう人間を相手にやつているのほとんど変わらないんじゃないか？

この世界に来てから家畜を絞めたり血を見たりする機会はかなり増えたが……いくら何でも、それは。

だが、爛々と目を輝かせているプロメステインにそんな事を言えるか？ これも種族の問題からか、そういった問題を彼女は全く意に介していないように見える。

要は普段やつている事と同じなのだ。トカゲや小魚でも、魔物が相手でも、その知識

欲を満たしたいという思いからやっている事に何の違いがある。

行いに善悪は無いだろう。その上で——識るための旅に付き合ってもらっている俺が『駄目だ』と一方的に叩き付けるのは、それはあまりにもエゴイステイックで、残酷な話ではないだろうか。

「……わかんねえ」

「え？」

「いや、俺には……」

従るように呻く俺に何を思ったのか、プロメステインは驚いたように振り返った。

「……どうすればいい？ お前は どうするのが正解だと思う？」

「驚きました。貴方なら一も二もなく私を止めると思いましたが」

「お前にもそう見えてたんだ、やっぱ……」

元々の俺なら確かに止めていた。だが科学者として理を求めるプロメステインと旅を共にする内に、果たして倫理に盲従するだけが本当に正しいことなのか良く分からなくなってきた。

前世で生きていた頃と比べれば俺の価値観は加速度的に変わりつつある。もはや別人に近いと言ってもいい。

そんな今の俺からしても。

この選択は何か、「決定的」というか……何らかの「訣別」を覚悟しなくてはならぬ事のように思えた。

「ま、安心してください。貴方が何か考える必要はありません」

「え？」

しかし、プロメステインは極めて冷静に言い放った。

「何と言おうが、貴方は私を止めることが出来ないのですから」

いともあつけなく。

敢えて人を突き放すような意志を、その言葉に感じた。

「任せて下さいよ。私が全部何とかしますから」

ふっと笑いかけて敵の前に歩み寄るその背中を——俺はただ見ていただけしか出来なかつた。

守られている。

彼女の意図する事はそれだと分からないほど俺は馬鹿じゃない。ある種猟奇的なまである自身の欲求を無碍に出来ないあまり苦しむ俺に向かつて、全ては自分が勝手にやる事だと。

どうせ俺が彼女を止める事は無理なのだからと、今はまだ考えなくても良いのだと、遠回しにだが間違いないくそう言っている。

「あ……」

待ってくれ、と手を伸ばしかけた。

だがそれが何になる？ ただ守られているだけしか出来ないのに。

「俺は……」

俺は、無力だ。

改めてその事実を確認し、肩を落としながら俯いた。

「……へえ、やつぱり戦えるのはアンタだけなのね」

「適材適所ですよ。人には向き不向きがあるもので」

満月が照らす夜闇の下、二人の人外が再び対峙した。

フードを目深に被った赤毛の少女——プロメステインは、背後に守る連れ合いを意識に置きつつ思う。

（貴方にはまだ早い。その正しさはこれから先、道を求めるのにあたって邪魔にしか

らない)

彼女のよくな生まれついでの“向こう側”に立つ才能が無ければ、科学者という人種は必ず何処かで自分倫理や常識そのものを乗り越え続けなければならない。

当然彼も自らが見込んだ男、いずれは自分と同じ場所に立つて欲しいとも思っているが……

(でも、少なくともそれは今じゃない)

今やらなくてはならないのは目下の敵の排除、それだけだ。それ以外の事は後で考えればいい。

戦いに意識を切り替え改めて状況を俯瞰する。このオオカミ娘は自分にとって脅威にならない、それは確かだ。だが以前『森』近辺の村で話に聞いた『狼の魔物』が彼女だった場合、それは見た目以上の何かを隠し持っているという事になる。

もしその懸念が事実だった場合、こちらから手を出すのは得策ではない可能性もある。そう思い様子を見てみると……

「どうして私に気付けたのかは知らないけど」

ニイツ、と。

含ませるような笑みを貼り付け、弱者であるはずの魔物が言った。

「誰かが近くに入ってきた……それぐらいのことしか分かってないみたいね、その様子

だと」

「……………」

それが覺られてしまったからこうして追い詰められているのではないのか。にも関わらず「それぐらいのことしか」などと容易く言つてのけた彼女にプロメステインは目を細めるが――

その時だった。

「わッ、ぐ……………!!」

「なっ……………」

くぐもつたような悲鳴、そして激しい衣擦れの音が背後から聞こえた。思わず音の立つた方向に振り返ると――

「知らなかった？ 影に潜んで獲物を狩る、ふたご月の下に生まれた狼を」

そこに見たのは、二本の黒く染まつた狼の腕で羽交い締めになされた連れ合いの姿だった。口を塞がれ、必死の形相でこちらを見ているようだった。

「んんん……………!!」

声にならない声で何事かを伝えようとする青年を前に、考えるより先に体が動いていた。

オオカミ娘に向けるはずだった攻撃の手を、謎の黒腕に向け直した瞬間。

「あは」

ズボツ、と。

同時に目を見開いた二人の視線が交錯する。驚きに包まれた少女と、それを信じられない物を見るような目で愕然とする青年。

体を通り抜けた“違和感”に、その少女は緩慢な動きで視線を下に向ける。そうして、見た。

自らの胸を貫く、獣の腕を。

第12話

「ぎやははははははははははは!!」

なん……

何が、起こった？

危機を伝える暇も無かった。

毛むくじやらの腕に捕まったと思ったら、俺にプロメステインが気を取られ——ころ、された？

アタマの中が真っ白になる。ただ何も考えられないのに、心臓だけがドクドクとうるさいぐらいに鳴り響いて止まらない。

この場に立つ音はただ一つ、オオカミ娘の哄笑こうしょうだけだった。

「よっ、よくも……」

「はーはははっ……あん？」

「よくも、プロメステインを……」

なんなんだ。

俺は今、一体どういう顔をしているんだ。

旅を続けられなくなった事への絶望？ 俺なんかにつき合つたせいで死んだ仲間への負い目？ 一気につき込まれた感情の波がぐちゃぐちゃに押し寄せて、自分ですら何を感じているかがはつきりしない。

ただ、ただ一つだけ……はつきりしている事がある。

俺は今、生まれて初めて――

本気で人を殺したいと思っている。

「いいわねえ、その憎らしくって仕方がないって目」

「黙れ……」

「うふつ。あんたの小ざつぱりした真面目な顔は快樂で歪めてやろうって思ってたんだけど……これはこれで興奮するわあ」

怒りと憎しみが緬ない交ぜになつて渦巻いている。こつちだつて相手を殺そうとしていたとか、魔物だつて生きるためにやっている事なんだ、とか。以前までなら心の奥底で引つかかっていた“敵を弁護するための理屈”が跡形もなく吹き飛んでいくのを感じる。

こいつが、憎い。

殺、さなきや……

「があああ……!!」

「あははっ。目の端に涙まで浮かべちゃってえ、かーわいそー。コオミちやーん？ 久しぶりの上物よ、しつかり捕まえててねーん？」

嘲るように笑いながら近づいてくるオオカミ娘を前に俺は何もできない。俺の後ろにいる誰かが一層強く絞めてきて、身動き一つ取れないからだ。

「ふふ……そうだ、この女の死体の前であんたを犯すつてのはどう？ こんなに唆るシチュウって中々ないと思わなあい？」

「くそ、くそっ……!!」

俺に……俺に、力があれば。

力が、あれば……

「そろそろ動きますよ」

彼女の体を貫くオオカミの腕を。

その時、誰かが掴んだ。

「はっ」

「え——」

ズアオツツ!!! と。

夜闇に慣れた目が眩むほどの聖なる光が、月の魔物を吹き飛ばした。

事態は混沌の様相を呈していた。

胸を貫かれたはずのプロメステインは何事もなかったかのようにそこに立ち、憎しみに身を焼かれていた青年はあまりの出来事に大口を開けつつ、背中に張り付くもう一人の敵の体が強張るのを感じていた。

「あ、がぐっ……」

「まったく、やってくれたものですね」

白煙を上げつつ仰向けに倒れる狼の魔物は何が起こったかも分からないまま、苦しげに呻くことしかできなかった。

そうして誰の思考をも置き去りに盤面をひっくり返した外套の少女は、場の中心でため息と共に呟いた。

『むしろ後ろにいた俺の方が危なくなってたかもしれない……でしたっけ。まさにそ

の通りになるとは、つくづく自分の駆け引きの下手さが嫌になります」

「なん、で……？」

「ただまあ、死んだふりをしながら観察した甲斐はありました。——まさか敵が二人だったとは」

同時、自分に巻き付く両腕が咄嗟に離れようとする気配を青年が感じた時——間一髪だった。

プロメステインがサツと片手を薙いだ瞬間、青年の右頬を掠めるような軌道で光の槍が駆け抜けた。

「……………ッ!!」

そのまま呆けていれば重傷を負っていたであろう二人目の敵は焦燥しながらも俊敏な動きで離脱した。これはその場凌ぎとしては正しい行動だったが——後に続くときでは限らない。

「よくよく考えれば……貴女達は彼を陵辱することそのものが目的なのであって、その場で殺すことはないんですね。魔物との戦いというのも人質を意識しなくていいだけ意外と楽かもしれせん」

この時、身を守る為に最適だった男の身柄を何の考えもなく手放してしまったのは明らかかな失策だった。

そして。長らくこの地の魔物を惑わせてきたオオカミ娘のある秘密——影の獣の秘された姿が、満月に照らされ徐々に明るみとなつていく。四足を地に着け毛を逆立たせ、威嚇するように唸りを上げた。

「姉妹……いえ、双子ですか？」

「うぐるる……」

そこに居たのは——二人が目にしてきたオオカミ娘と瓜二つ、僅かに気弱そうな目元と羽根付きの首飾りだけが容姿で異なる——もう一匹のオオカミ娘だった。

「！」

その姿を見られた事に彼女は動揺したが、次の瞬間。ぬるりと、まるで泥沼に沈むようにその体が地面に沈んでいく。

「種族の特質ではない。つまり『魔法』……！」

警戒を顕に、しかし隠しきれない好奇心をも爛々と目に浮かべ、プロメステインは青年と入れ替わるように対峙する。

そんな中。

未知の現象を発露する敵に魅せられ、吸い寄せられるように歩みを寄せる少女の背中

に、ふと理性の色が宿るのを青年は感じた。

「依然問題は無し、ですが……心配を掛けたようですね。ごめんなさい」

未だ心神の喪失から立ち直れずにいる彼へ、背を向けながらも謝意と安堵を伝えるように。

二度と叶わないと思っていた、しかし何よりも望んでいた言葉を投げかけた。

「これが終わったら——また話しましょう」

月明かりに満ちた舞台に向かい合う二人——その内の一人、もはや狩る側としての立場を確かにしつつあるプロメステインが呟いた。

「ふたご月の狼、ですか」

地上の狼族にそのような寓話……あるいは伝承が伝わっていると、彼女は天界の書物で読んだことがあった。

古き血を尊ぶ魔物の一族には、往々にして“事実”を基にした御伽噺が語り継がれる事がある。聖魔大戦などにおいて強力な妖魔が振るった力の一端を言い伝え敬う——狼の一族にもそういった文化があったのだろう。

魔物が魔法を作り出す際の手段の一つとして——そういった一族に伝わる過去の寓話などを基に形を作る、という方法がある。

過去自らの一族が振るった力であれば手に入れられない道理は無い、という観点から、術式の作成法としては理に適った手段とされている。

「それにしても目を見張るべきは、使い方……息の合う双子だからこそ、でしょうか？ 種が割れば何という事もない術を巧みに操り格上を狩れてきた。興味深いですね」

かくいう私でさえ、この体が無くしては負けていたのですから。

そこまで語ったプロメステインは——目元に暗い陰を落とし、粘度の高い笑みを浮かべる。

「しかし幸運、と言うべきでしょうか」

どこまで行っても彼女は「科学者」。

その概念を知らぬ野生と言えど——魔物は、本質を悪寒で理解した。

「思いも掛けず、開けるカラダが二つに増えて……♪」

「……………ツツ!!」

ずぞつ、と咄嗟に影へ潜り込もうとした狼だったが——パチン、と。

少女が指を一つ鳴らす音と同時に、地に沈みつつあつた体は瞬時に浮き上がった。

「その一、潜む影が消えれば効果を失う」

慌てて周囲を見回せば、先程まで確かに点いていた焚き火の灯りが消えていた。

何かしたのか——と思う間もなく、プロメステインの暴くような視線と指摘が止まら

ない。

「二、夜闇に潜り込むことは不可能。三、入り口となる影にはある程度大きさが必要……

？」

それは、戦闘の場にしてはあまりにも楽しげな声色だった。

まるで敵を害する事そのものではなく、完璧なスコアを求めて謎を解き明かす事を目的としているような——言ってしまうえば、謎解きの妙を楽しんでいるかのようだった。

「種の割れない仕掛けを解くには、縛りを一つずつ場に挙げるのが定石ですが」

刺しても死なない。容易くこちらを害し得る。そんな存在が自分の奥の手を実に楽しそうに解体していく様を見て、その魔物は今にも恐怖に息を詰まらせつつあつた。

「そういうの、得意ですから。私」

言うが早いか、プロメステインは片手を掲げ聖なる光を放出する。魔物を焼く聖エネルギーを込めた天使の技だが……

「…………？」

両者が視界を失う一瞬の隙に、オオカミ娘の姿は掻き消えていた。

（光で引き伸ばされた影に飛び込んだ……？ 火の消えた焚き火跡程度の物陰にでも相乗りしたと）

冷静に分析しつつ“後ろ”に振り返る——すると、自分の影から這い出てくる敵と目が合った。

（やはり）

繋がりを持たない影から影へ瞬時に飛び移る能力——しかし、それを知らないはずのプロメステインが一発で移動先を当ててみせた事にオオカミ娘はぎよつと目を見開いた。

驚異的な処理速度で術の概形と敵の思考を把握しつつある彼女にとって、最早それを読み切るぐらいの事は造作も無くなっていたのだ。

（四、夜闇は無理でも月明かりから浮き出た影には潜める。五、一連の現象は何らかの魔道具に依存して発動している）

暴く、暴く。

ともすれば使用者本人さえ意識していないような仕様さえ読み解いていく。表面上の効果を並べるだけでもキリが無い。

泡を食ったように逃げ出す敵の背中に光の槍を撃ち込みながらも思考は止まらない。鎖骨を砕き貫いたらしく——耳を塞ぎたくなるような悲鳴と鮮血が撒き散らされるが、余計な情報は意にも介されない。

(六、離れた影までの距離が長すぎると飛び移れない。……つと、いけませんね。どこに向かっているのかと思えば、私の後ろには彼がいるんでした)

過ぎた思考の速さは分析にこそ役立つものの、注意力が散漫になっていては戦いに向いているとは言い難い。

こうして周りが見えなくなるのは悪い癖だ。いくら相手が魔物とはいえ、命の危機とみれば男を人質に取るぐらいの事はやりかねない。ただ……

「お、ねえ、ちゃん……」

地べたに倒れ込み、這いずってもう一匹の魔物に手を伸ばすだけしかできないこの様子では一先ず彼へと危害が及ぶ可能性は無いと見ていいだろう。

無力化した敵を早々に意識から外しつつ、それより彼女には気になる事があった。

「この首飾り、なるほど……」

何かの骨と真つ黒な羽根をあしらった美しい首飾り。先程の攻撃で紐が千切れたのか、オオカミ娘が付けていたそれがはらりと足元に散らばっていた。

「濡れ羽鴉からすの尾羽根。ふむ……生まれつきの能力ではない。これが貴女にとっての“杖

“ですか”

このような品をどうやって手に入れたかは興味があるが、今重要なのはそこではない。つまりこの魔道具を失ったことで、唯一警戒に値する影の魔法を敵が行使することは不可能になった。

「あつけないものですね、終わってみれば」

「終わっ、た……?」

茫然。膝を突き、外から戦いを見ていた彼はその実、その内容は殆ど頭に入ってきてなどいかなかった。あるのは言葉にできない複雑な思いだけ。

複雑、そして窒息しそうなほど重たい情念。

だからだろうか。

背後に立つ存在に、彼が遅れて気が付いたのは。

「……………ッ!?!」

両手をだらりとぶら下げ、意識が明瞭であるかどうかも怪しい顔は白目を剥いている。だがそれでも、立っていた。

小刻みに震えながらも歯を食いしばり、立っていた。鬼気迫る意志の波を肌を感じる。同時——ぎよろり、視線がこちらを向いた。

「ぐがあああアアアアっ！！！！」

じわっ、という熱い衝撃。灼熱の痛みが背骨を伝う。

人間のそれとはわけが違う噛みつきを、しかし咄嗟に左腕で受けられたのは幸いだった。——そう思わざるを得ないほどに傷は深く、口の中は溢れんばかりの生温い血液で満たされていった。

「なっ……」

ただえええ真夜中の出来事、視界の悪さにプロメステインの反応も一瞬遅れる。

（——射程距離外！ 間に合いますか……！？）

聖光波は論外として、光の槍もこの距離では揉み合う二人のどちらに当たるか分からない。即座に走り出すが、追い詰められた獣が無力な人間を噛み殺せるだけの時間はあ

る。

「ぐるあッ！！」

牙が食い込む。太い血管が千切れ、びしゃびしゃと辺りの草地に赤い体液が撒き散ら

される。

出血の喪失感。肉を引き裂く激痛。

だが。

それでも。

「ぐっ……があ……う！」

押し返す力があつた。

鋭い爪を備えた両腕で肩を掴まれ、今にも押し潰されそうな体であっても——傷付いた左腕を、むしろ口内に押し込むように。

体は動いた。動いてしまった。以前までなら抵抗する気さえ起きなかつただろうが、今や痛みには慣れつつあつた。

体を引き裂く刺突の痛みには、既に。

「……………お、おお」

むしろ苦痛は目の覚めるような危機感を煽り、つんと鼻の奥にひり付くような警鐘を脳内で消魂けたましくも鳴らし、鬱屈、停滞しつつあつた思考を綺麗さっぱり洗い流してみせた。

ならば“今”の、彼は一体何を思うのだろうか？

何に染め上げられているというのだろうか？

「おお……………」

敵をそのまま引き倒し、一方で暗中をまさぐる利き腕はただ一つの目的のためだけに動かされていた。

抵抗は弱い。どうやらプロメステインは仕損じた訳ではないようだ。白煙を上げる体は見た目以上にダメージを受けており、もはや気力のみで動いていたようなものだった。今なら、力で、抑え込める。

ただ、青年が何をしようとしているか——察した狼も無抵抗でいるはずがない。

激しく暴れ、腕から我が牙を抜き、自らに覆い被さる男により多くの傷を与え、より多くの血液を奪い去り、弱らせようと必死にもがく。胸元を裂いた。肩に丸ごと食らいつき、噛み砕いた。ゴリゴリと硬質な音が口いっぱいに広がった。

それでも決して、止まらなかった。

彼が今動き続ける訳、とは。

大切な仲間が殺されたという、既に払拭された事実である理由、過程さえ飛び越して——切迫した意識に残されていたのはただ一つ。

たった今、染め上げられたのではない。

最初から染め上げられていた、その感情おもひに従っているだけだった。

果たして利き腕は探り当てる。

鋭く鋭く尖ったナイフ。

それは既に、彼の中で最もシンプルな殺意の象徴と成り果てていた。手に取った理由はたったそれだけだった。

それ以外には、何もない。

「お、おッおッ、ご、あああああがあああああああああああああああああああああ
!!!」

!!!

しかる後——
青年は、“訣別”を喉に押し込んだ。

第13話

これは夢だ、と不思議に直感する。

夢の中でそれと自覚する夢。全てが淡い輪郭とあの夜の月明かりにぼやけた、水泡に溶け込むような景色。

そこで、俺は自分の姿と向き合っていた。

ただ立ち惚けている俺の前には、一人の女と揉みくちやになっっているうつつ伏せの俺がいた。二人とも血塗れで、お互いの血が混じり合っどちらの物かすら分からなくなっている。

あの爪と牙は薄紙を裂くように体を切り裂き、俺は肩を噛み砕かれた代わりに——敵の喉へ刃物を押し込んだ。

その瞬間の俺たちが、目の前の光景だった。

わかってる

そう、分かっている。

俺は何も、あの場でオオカミ娘を殺すことはなかった。力で抑え込めていたのだから、余計な事をしなければ無傷でプロメステインが来るまで時間を稼ぐことが出来ていた。

だけど、俺はやった。

今でも感触が残っている。喉の肉をナイフがみちみちと押し分け、骨を抉る硬質な音。生暖かい血液が噴き、まさに腕の中で“命”が流れ出る感覚が。

後悔してない……と言うと嘘になる。

一度知れば元の自分には戻れない、ある種の訣別。でも、どうしても……やりたかった。

魔物を殺すっていうのが、どういふことなのかを知りたかった。

俺は多分、憎しみを利用したかったんだと思う。

もちろんあの状況ではつきりとそう考えて実行に移したんじゃないけれど、頭のどこかでは思っていた。

結局のところ、それはエゴでしかない。徹頭徹尾自分の為だけに、だからこそやる価値のある殺人。

手を染めてしまった。もう元の俺には戻れない。

なの……

この時、俺はタチの悪いことに——『救い』を求めてしまった。

幻影をぐるりと回り込み、しゃがみ込んで、喉にナイフを突き立てる俺自身の顔をまじまじと見る。

なんて顔だよ

俺は、オオカミ娘の顔を必死に凝視していた。

どうしても……どうしても、死に目の顔を見なかった。こんな時に物語でありがちな「自分が奪った命」「責任を持って見送りたい」とか……そんな気持ちはさらさら無い。

俺はただ、後悔から逃げ出したかっただけだ。

どうにか醜い顔を晒して、惨たらしく浅ましく死んでくれ——という願望で頭が一杯だった。

俺が殺した奴はどの道死んだ方が良いような奴だったと、そんな身勝手な思い込みで自分を慰めたかった。

命乞いをしてくれる事さえを望んだ。「自分がやってきた事を忘れて生き足掻くな」

……と、そう思わせて欲しかったのだ。

その思いこそ偽らざる俺自身の醜さだ。

しかし——この魔物は。

この魔物は、死に目に俺へと怒り狂うことさえしなかった。喉を潰された手前声は出ていなかったが、その時彼女が何を言っているのか、俺にははつきりと理解することができた。

俺にとっては都合の悪いことに、だ。

『逃げ、な　さい』

殺しちゃいけない男を殺そうとしてまで食らい付いてきた理由。魔物は、最期に片割れを案じていた。

生まれついでての悪性と矛盾しない、生まれついでての気高さ。

人間である俺の苦悩、くびき軛とは無縁。

その野に生きる“獣”の本質は——

俺の目指した所、だったのか……

思えば奴は完全に、俺を精神的に上回ってみせた。

苦し紛れの暴走に乗っかって人を殺そうとした俺とは根本から違う。最初から最後まで自分を曲げず、曲げる必要すら無いまま逝った。

こんな俺が、想ってもいい事じゃないけれど。

自分を殺した男に、お前が思ってほしいとも思わないけど。

.....

光を失った臉を淑しとやかに手で覆い、閉じさせた。

???????

次の瞬間、俺は現実に目が覚めた。

「.....」

時分は明朝。日が昇る直前の青白い空が目の奥にじんわりと焼き付いた。

あの夜が明けてすぐの朝なのか、それとも眠ったまま一日二日と経っていたのかはわ

からないが——今重要なのは、そこじゃない。

「ぐっ……痛」

漠然とした違和感を体にかけて、そこを見る。

当たり前と言えそうだが、酷い有り様だ。前に森で負ったものより数段深い傷があちこちで痛む。体の半分くらいが包帯でぐるぐる巻きにされていて——つて、これは。

「手当て……プロメステインか」

所々折れたりしたと思うんだが、今のところ動かせないというほどの部位は無い。碎かれた肩の方の腕も吊られてはいるが、骨は早くも繋がっているようだ。

また魔法も絡めて色々と治してくれたんだろう。受けた怪我を思えば具合はだいぶ良くなっている。

ゆつくりと立ち上がってみると、やや貧血気味なのかぐらりと頭の中が揺れ動くが、そのまま倒れ込むというような事もない。

「……？」

しばし忘我の間、辺りを見回していると——何やら見慣れない荷車がそこにあった。

縦に長い木製の二輪車。その中には随分と大きな布袋が積み込まれている。中身は詰まっているようだが、これは……？

何とは無しに切れ目から捲つて中を覗くと——

「ん」

はらりと、黒い糸束いとたばが流れ出た。

直感的に、それが何を意味するのを察したが、それでも、俺はその元を辿るのを止められなかった。

褐色の皮膚。滑らかな首筋をなぞるように視線を上に向けると、赤黒い窪み。明らかに致命に至ると判る——俺が付けた傷。

生々しい重みを感じさせ、そこに力無く横たわる頭部。

改めて見直せばはつきりと見える……袋には、死体が詰まっていた。

「おはようございませす」

声が聞こえた。

荷車の陰に隠れてる上に体育座りしていて見えなかったが、覗き込めばそこにプロメステインがいた。

「遺体は保存魔法を掛けた布で覆つてあるので腐乱する心配はありません。まさかここで解体する訳にもいかなかったので……錬金術で荷車を作るのに我々の荷物をいくらか使つたのですが、復路の補給は充分間に合うでしょう」

淡々と現状を説明するプロメステインは何というか、様子がおかしかった。どうもこつちと目を合わせようとしてない気がする。

視線を寄越さないままぶつぶつと喋る彼女を怪訝に思いつつ、俺は気になった事を口にした。

「もう一匹はどうした？」

「え？」

「いや、中に二匹とも入ってるようには見えないんだが。もう一匹は？」

少しの間、沈黙が流れた。

何か言った方がいいのかと口を開きかけた時、プロメステインは思い出したかのように言い足した。

「その、逃げられました。あの時は一刻を争う状況でしたし、貴方がああいう事になった以上は私がカバーに入らないといけなかったと言いますか……」

「そうか……」

やっぱり、逃げられてたか。

俺が余計に傷を負わなきゃそうはならなかったろう、そう考えると申し訳なくなる。

解剖に予備なんて多いに越したことは無いと思うんだが、一人分でもどうにか事足りると願いたい。

「あの……」

「ん？」

「何というか、少し、変わりましたか？」

変わった……。

変わったか。どうなんだろう。確かにさつき、自分で殺した魔物の遺体を見た時、自分でももう少し動揺するかと思ったが。

さつきからプロメスティンも俺に気を使うような態度でいたのはそういう事だったのかもしれない。ただ今は、なぜだか不思議と落ち着いた気分だ。

「なあ……」

「はい？」

「もう俺、碌な死に方はできねえよな……」

がつくりと、岩場に座り込んで頭を抱える。

このままこういう事に慣れていったらいつか取り返しのつかない物まですり減らしてしまうかもしれない。それは、怖い。

落ち着いてはいるが、あまり良い気分でもない。そうやって項垂れる俺を見て、プロメスティンは少しだけ雰囲気を緩めてこう言った。

「そういう思考が先に来る辺りは、思ったより変わってないかもしれないね」

「……流石に、いきなりお前みたいにはなれねーよ」

「いいんじゃないですか？ 別に、貴方に私と全く同じになって欲しいとは思いません

よ」

「え……っ？」

あつさりと、言つてのけられた前提の崩壊。

思わず目を丸くしてそちらを見る。少女はすつくと立ち上がつて、こちらへゆつくり歩いてくる。

「私の道は私だけの物です。貴方がどういう道を進むのかには興味はありますし、手助けもします。ですが、ただ私の後を追わせるつもりは毛頭ありません。だから……」

目の前まで来たプロメステインは、腕を広げ——俺の頭を優しく抱きしめた。

「私には無い、貴方の『優しさ』の部分信じていますよ」

その時、俺はどうしてか思った。

こいつは、自分がいつか道を踏み外すことを確信してる、のかもしれない。

それはきつと今ではない。遠い遠い先の話になる筈だ。けど……その時になれば、きつとこいつは、ほの暗い破滅へと飛び込まずにはいられないだろう。

歯止めの効かない自分の性格をよく理解してるから。俺を通して別の景色を見たい、という思いもあるんだろうけど。

ただ、俺に同じ運命を辿って欲しくない……そういう気遣いも、確かに感じる。
「う……」

それは、だからこそ、その言葉は。

暖かく、そして、どうしようもなく悲しかった。

「ぐっ、うう……」

「……………」

この日、俺はこの旅に出てから初めて泣いた。

静かに嗚咽を鳴らす俺を、彼女はいつまでも抱きしめ続けた。

第14話

「落ち着きましたか？」

「……ああ」

ひとしきり泣いてスッキリした……って言うほど単純なつもりは無いが、いくらか楽にはなった。

「悪いな、かつこ悪いとこ見せちまって……」

「いいんですよ。あんな事があつた後なんですから」

ぐつ、こういう事で後から弄つてくるような奴じゃないとは思うが……できる限り弱みを見せたくない類の相手つていうのは確かだ。どうしてこんな事になつたんだか。

「……ん？」

改めてあの夜の事を思い返すと、そういえば腑に落ちていない事がまだ一つあつた。

最初に二匹目の魔物が出てきたあの時、俺は本当にプロメステインが殺されたかと思つた。もろに胴体が貫かれているのを間近で見ただから当然なんだが、あれは一体どうやったんだらう。

「ああ、その事なんですけど……」

疑問に思つて問い詰めると——プロメステインは気まずそうに目を逸らしたかと思えば、背後にある荷車の持ち手の先を掌で覆つた。

「はあつ……!?!」

その直後、俺は我が目を疑つた。

ずぶ、ずぶりと、その持ち手が手の甲に沈み込んで——貫いてしまったのだ。

「実を言うと、天使の肉体は地上の物体をすり抜けるんです。こちらから触ろうとすれば話は別なんですけどね……」

「はあ……?!」

なん、なんツだその、そりゃあ……。

いやしかし、なら道理で……今まで誰かと戦つたこともない癖して妙に自信たつぷりで魔物に立ち向かつてつたのにも説明がつくが……だつてそりゃ、いや、ええ……?」

「む、無法が過ぎるだろ。何なんだよその天使とかいう生き物……いやちよつと待て。そんな重要な事をなんでお前黙つてたんだ?」

「うっ」

そうだよ、考えてみりゃ不自然だろうが。それが分かつてれば俺だつてあんなに気を揉むような事は無かつたつてのに。

幾ら考えても秘密にしとく理由は無いはずだ。どういうつもりだつたんだ?

「いえ、その……貴方があまり私を心配してくれてるので……」

「あ……？」

「なかなか……はい、『私は無敵なので大丈夫ですよ』とかはつきり言い出せなくてですね……ちよつ、痛い痛い!？」

「お前なあ……！ 俺がどんだけ、この、心配したと、思ってたんだよ！」

「こんのコミュ障が……!! てめえ、もう一生心配なんかしてやんねーぞ、これからの戦闘はぜんぶ矢面に立たせてやるからな……!!？」

クソくだんねー理由で恥をかかせやがった罰を脳天にぐりぐり与えていると、急に抵抗するりと消え去った。

「……つと、こんな風にすり抜けられる訳なんです」

「げっ、き……気持ち悪っ!？」

うおお、俺の腕が……頭に丸ごと入り込んで、これは……視覚の暴力だな……。

……。

「ちよ、ちよつと？ そのままだと流石に落ち着かないんですが……」

「……いや、中で握ったり開いたりしてるんだが、マジで感触とか無いのな。どうなって

んだこれ？」

「あの、やっぱり行動が私っぽくなくなってませんか？」

言われてハッと気がつく。

人の頭ん中に手を突っ込んでまずやる事って……普通は引っ込めるとか……あ……？

「ち、ち、ちげえよ！ 確かにちよつと『興味深い』とか……思ったりしたけど……！」
「わかりますわかります。実を言うと天使の肉体って自分の事ながら宝の山みたいなものだと思うんですよね。いつかは徹底的に調べて上げてみたいものです……！」

それからしばらく休み、日が中天にかかった頃。

傷も癒えかかっている事も、物資に余裕のない俺らは早々に場を発っていた。痛まなくはないし具合もあまり良くないが、あの一件があったその場でじつとしているのも落ち着かない。きつとこれで良かったんだろう。

「……………」

「……………あの、やっぱり交代した方が……………」

随分と軽くなった鞆を肩に掛けるプロメステインがそう言うが、これについては譲る気は無かった。

俺は今、あの遺体を積んだ荷車を引いている。

「いや、いいんだ……」

ほぼ人間の娘一人分、おおよそ40〜50kgといった所だろうか。何にせよ、そのまま背負ったりするならともかく車に乗せて運ぶ分には重さだけなら大した事はない。だけど……この重さには、同じだけの積荷のそれよりも大きな意味がある。

いや、俺だけは。

他でもない俺の中でだけは、その意味が大きくなきゃいけない。

「俺は、この重さをまだ背負っていたい。せめて、それすら消え去っちゃう時まで……」

「そう、ですか」

こうして触れ合うことで、より実感できる事がある。

荷車越しに伝わる、肉と板がゴトゴトとぶつかり合うような感触。直接触れずとも生温かささえ感じられるような質感。

当然、気分の良いものではない。あるはずが無い。だけど……。

「なあ」

「はい？」

「こいつの解剖、俺も立ち合わせてくれないか」

「……無理はしないでしょね？　今までとは比べものにならないほど大掛かりな作

業になるのは勿論ですし、それに……」

「大丈夫。何より……今のお前よりは生き物の中身ってやつに詳しい自信もある。役に
は立ってみせるさ」

蘭書に出会う前の杉田玄白ほどの知識も無いであろうプロメステインだけならいき
なりの人体は相当梃子摺る、ともすれば手に余るはず。

魔物の中身が人間とほぼ同じだとすると、前世知識でどんな内臓がどこに収まっている
かぐらいは知っている俺が最初からいるとしないじゃかなり違ってくるだろう。少な
くともそれは確かだ。

「それにお前、まさか今まで通りナイフ一本でまるとバラすつもりじゃないだろうな。
こういう時は先人の知恵を借りてだな、思いつく限りでもメス、トレー、鉗子にピンセツ
ト……感染症が怖いな、マスクに手袋もどうにか作らないと……」

「あの、毎度のことながらそういう知識はどこから来るんです？　そろそろ教えてくれ

てもよくないですか？」

……あ、まずい。不用意に口走りすぎた。

基本的に『旅人』関連の種明かしを誰かにするつもりは無い。今のところ墓場まで持つてく予定の秘密ということにしている。明らかに嘘と分かる下手な言い訳とはいえ、ここまで“知らないはずの知識”について仄めかしただけでも最大限の譲歩なぐらいいだ。

こればかりは信頼どうこうの話でもない。なんとというか、その事実そのものが異様すぎて我ながら気持ち悪いって思ってるぐらいだ。明かすってこと自体がなんか生理的に受け付けない。

この世界で生きていく上でのルール、基本原則、そんなものだ。大なり小なり誰にだつてそういう物はあると思うし、俺も後ろめたいとまでは思わない。プロメステインには申し訳ないが諦めてもらうしかないだろう。

「ああいや、小さい頃になんか色々知ってる旅人に教えてもらつてさあ……」

「いや、いいですよそれはもう……ぜったい嘘でしょう……」

「うん、まあ、嘘なんだけど……」

いつまで押し通せるかな、この話……。

???????

その後。

精霊の森に入る直前に立ち寄ったあの村にて。長老に「狼の魔物の件は解決した」とだけ伝え、離れの小屋を借り受けた。

そして数ヶ月後——俺たちはようやく、彼女の解剖を終えた。

天才のプロメステインはともかく、俺みたいな素人が魔物の体を切り開いて見た所で何かしらの知見を得られたかっていうと……正直微妙だが、にしても余りに神経を使う仕事が続いた。もう暫くは何も考えたくない。

「あ、あ………」

ひとまず一人で小屋を出て、マスクを口から下げつつ思うさま外の空気を吸う。

あちこち血で汚れた手袋と纏いつく死臭は拭いようもないが、やはり青空の下は安心する。ひどく疲れ切っていたこともあり、だらだら流れる汗はそのままにへたりと座り込んでしまった。

「……………」

大きな仕事を終えて奇妙な達成感に包まれると同時に、やはりチラつくのは数々の感覚。

この手で改めて肉を切り開く感触というのもそうだし、それを細かくバラしていく過程、濃密な血腥さちなまぐさ、ぶよぶよとした内臓……

ついさつき見たアレは、もう殆ど原型を保つちやいなかった。ずいぶん細かく小さくなっちまって……後処理を引き受けてくれたプロメステインに甘えて少し休んでいる所だが、その様子はなるべく想像したくないな。ああ、それにしても……

「ヤニが吸いてえ……」

猛烈にタバコが吸いたい気分だ。口寂しすぎる。前世でもそこまで好きとかだった訳じゃないんだが、なんかもう、こういう時は無性に恋しくなってくる。

まあ、無い物ねだりをしてても仕方がないしな。いちいち拘泥せずぼうつと空を眺めていると、少しして後ろの戸が開いた。

「終わりました。アレは裏庭にまとめて埋めておきましたよ」

「お疲れ」

なんでもかんでもすり抜けられるらしいプロメステインは俺と違って綺麗なもんだ。はたしてマスクや手袋なんてする必要あったのか……その辺も今後明らかになっっていくかもしれないな。こいつにかかれば。

「ふあくあ、何にしても、疲れた。眠い……」

「お疲れ様です。ほら、ここで寝る前に体を洗わないといけませんよ。それにお

昼もまだでしようし」

言われてしぶしぶ起き上がる。始めたばかりの頃は飯なんて食えるかバカ野郎って感じだったが、流石に今はそれほどではない。

「んーぐっ……はあ。……それで？　終わってみてどうだった？　有意義な時間だったら良いんだが」

大きくひと伸び。この数ヶ月一緒に作業してきたぐらいだ、それは自明というやつだったが、話のタネに改めて聞いてみた。

「それはもう……これで中型生物の内臓配列に明確なイメージが持てただけでなく、魔物特有の魔力回路、本格的な切開技術の習得、その他様々な自説の裏付けも取れたこの解剖実験……有意義と言わずして何としましうか！」

横を歩きながら熱心に語るプロメステインは、続いて少し俯いてこう呟いた。

「ですが、やはり貴方がいてくれた事が大きいです。事前に出してくれた案や知識を前提にしていなければ、恐らく今回の半分も物事を理解できていなかったでしょう」

「そりゃあ……よかった。立ち会った甲斐があったよ」

「ええ、本当にありがとうございました」

ぺこりと頭を下げてくる白衣の少女を俺は微妙な気分で眺める。俺が出した知識と言うが、要は他人の禪で相撲を取ってるようなもんだ。そこん所は相手も何となく理解

しているだろうとはいえ、こうまで言われるとな。

……いや、今更そんな事を気にするのは止めよう。それでこうして役に立てるなら関係ない。

そうして、いずれは俺自身の力でこいつを少しずつ助けてやれるようになればいいんだ。それが本当に出来るかどうかはこれからの俺に掛かっている。……まあ、ゆつくりやっていこう。

「さて、次はどう動くかだけど……ここからゴールド火山に向かう途中で一旦ヨロギに立ち寄るんだよな？」

「ええ、それといい加減に杖の問題もどうにかしませんとね」

思わぬ足止めを食らって忘れかけていたが、精霊の森で手に入れた魔法の杖は未だにそのままになっている。例の保存魔法で新鮮な状態を保っているとはいえ、当然あれを杖に加工する必要がある。

「木工はそこまで得意じゃないんだが……どうにかかなりそうつてアテはある。万が一にも失敗できない事だし、あいつらにでも頼んでみるかあ」

少しずつ、少しずつ風向きが変わっている。

それが善かれ悪しかれ、俺たちは確実に前へ進んでいる。

こうして色々な事があつたが、旅はついに折り返し——故郷に帰る時がやって来た。

第15話

「か、帰つ……てきたあゝツツ」

「凄い嬉しそうじゃないですか」

そりやそうだろ、これでも一応ホームタウンだ。後手にドアを占め、かなり久々な気がするヨロギの我が家にて俺は一息をついていた。

いざ帰ってきてみればここも変わらないもんだな。あの日プロメステインと出て行った山奥の小屋そのままだ。当たり前前つちやあ当たり前だが……。

「ふう、適当に座ってくれよ。椅子ひとつしかねーけど」

「そういえば一人暮らしでしたもんね。じゃあお言葉に甘えて」

小屋小屋っていうけど、実際狭い。

1DKに倉庫と作業場を雑にくつつけた程度のもんでしかない。そりや一人暮らしするのに最低限必要なスペースなわけで、これにプロメステインが入ってくるとなると少々手狭になると言うしかない。

だから取り敢えず肩の荷を降ろした俺は、部屋の片隅に一つだけ置いてあるベッドの上に腰掛けた。そうだよな、これとかも一つじゃ都合悪いし……ああもう、考える事が

多すぎるんだよな。

「えー、差し当たって……俺たちがまずやらなきゃならん事は」

「はい」

「掃除だ」

「えー……」

「おい！ 前から思ってたけど生活水準に対するその意識の低さはどうにかしろ!!」

埃が積もってんだよなあもう！ 解剖の時とかもそうだったけどホント寝ねーし食わねーし休みもしねーし、天使の頑丈さにかこつけてゴリ押ししすぎなんだよ！

何らかの超常現象でこっそり人間の体とすり替わったりしたらそのまま流れるように過労死ぐらいするだろうな……そう確信しつつ、俺は過去どこに置いたかも忘れてしまった掃除用具の場所を思い出そうと頭を捻るのだった。

「ふー、こんなもんか」

雑巾が含んだ水をバケツに絞りつつ、額の汗を拭いながら部屋を見渡す。まあまあマシになったんじゃないか？

「別にここまでしなくても……どうせ何日もしないうちに発つのに……」

「文句言うなよ、人ん家だと思いやがって」

ほうきを両手で抱きながらぶつくさのたまうプロメステインは、普段とは少々異なる装いとなっている。

白い頭巾とエプロンを羽織って要領悪くウロウロしてる姿は正直ちよつと笑えるが……なんかこう、ん……？

「いいな……」

「はい……？」

なんか、まあ俺が着せたんだけど……女の子が掃除する格好、しかも俺のだから割とブカブカのやつ……して自分の家にいるっていうこの状況がなんつーかなんだろ、こう、いいな……。

こいつがかわいいって事を久しぶりに意識したつーか……。

「彼エプロン……？」

「貴方が時折発する謎の単語については今更の事と一時置くとして、さては疲れてますね？」

かもなあ。

って、そんな事はどーでもいい。ひと段落付いたら行くところがあるんだ。やる事が一

杯で大変ったら……。

「あー、私も付いていった方が？」

「いや別に。お前は太つぴらに顔を晒してもいい身分じゃないだろうしな、あんまり目立たないようにしつ……ん？」

窓の外から足音が聞こえる。やたら急ぐような慌てたようなのがバタバタと、二人分ほど。……まさかあいつらか？

しばらく入り口の扉を眺めていると、程なくして騒々しく戸を叩く音がした。

「けっ、賢者さま！ お帰りになられたってホントですか!？」

やっばりか。聞き慣れた男の子の声で予想が当たったなど密かに思いつつ戸を開けると、そこには俺より頭一つほど小さい黒髪の少年少女が立っていた。

「よ、ロン。フウも。お前らもなんか久しぶりだなあ」

「わーッ本物だああ!!」

「う、っ、ちよ、フウ。くるじい……」

「ははは。相変わらず愉快な奴らめ」

抱きつかれる余り少女に首を絞められちゃってる少年を前にいつもの事と流しつつ、

俺は背後で固まってるプロメステインに二人を紹介する。

「あーっと、メカクレの方がロン。三つ編みの方がフウ。こいつらはまあ大丈夫だ。ちっちゃい頃から色々世話してやってる、言ったら職人みたいなのをやってる二人だな」

「つんとにクソ大変だったんですよお……そりやアタシたちも賢者さまが旅に出たがってるってのはずっと前から知ってたんですけど、それでもこの数ヶ月は割とマジに心配で心配でもう……」

「そ、そうですよ。どうして僕たちを連れていってくれなかったんですか!」

「バーカ、自分の事だけでも精一杯だったのにお前らチビなんて連れてけっかよ」

床に正座しながらキャンキャン騒ぐ二人を、俺はベッドに腰掛けて足を組みながらくつくつと笑う。いやあ、久々に会えて嬉しいよ。

旧交を暖めながら故郷に帰ってきたことを改めて実感していると、プロメステインが物言いたげにこちらを見ているのに気が付いた。

「ん、どした?　なんか言いたそうだけど」

「いえ……そういえば賢者様でしたね、貴方」

「そういえばって何だよ、ああ?」

「ったく、こいつはこいつで相変わらずだな。」

しかし、そういやロンとフウはまだ会ったことも無いんだったな。兄貴分の家について異様なぐらいふてぶてしく居座ってるエプロン姿の謎の人物を二人がさつきからめちやくちや気にしてるのは何となく察してた。

「あ、あの賢者さま。この方は……」

「こいつはプロ、……あー、ジエーン。ジエーンさんね」

あつぶね。そういや偽名で呼ぶ方がいいんだったな。

「なんつーかこう、成り行きで俺と一緒に旅してる人だな。まあ口と態度は最悪だが、俺と同じくらいは信用してやってもいいぞ」

「どうぞよろしく。あとこいつは潰す」

「てめえ!!」

「ああつ、やめてください! 拳を握り締めないで!」

「へえ〜お二人とも仲良いんですね」

ちつ、弟分が見てる手前見逃してやる。

実際に殴り合いなんかしたら俺のパンチだけ全部すり抜けて1000割負けるのが

目に見えてるんだが、それはそれだ。あとこれ見てケラケラ笑ってるフウは相変わらず性格わりーな。それでいて結構的を射たこと言ってるのもこいつらしいが。

「んんっ……ま、そういう訳だ。それでよ、丁度その事でお前ら二人んとこにこつちから行く予定だったんだが……手間が省けたみたいだな」

「へっ？ アタシたちにはですか？」

「ああ。フウには家の備品をいくらか見繕つて貰いたいんだ。しばらくこのジエーンさんと二人暮らしになるからさ、色々入り用になってくる物もあるし……そうなると手狭にもなるだろうな、間取りを変えた方がいい場所があったらそこも見てってほしい。増築の工事も任せるよ」

正直ちよつと無茶な事を押し付けてる気もするが……よしよし、ニカツと笑つて承諾の意を示してきた。こいつは頼りになる奴だつて分かつてたよ。

「大仕事つすね、まっかせてくださいよー！」

「あ、あのっ……僕は何をすれば？」

不安そうに俺を見上げてくるロン。こいつもなあ、自信さえ付けば誰よりも腕が良いんだが。

「ふふん、そんなお前にピッタリの仕事があるぞ。ちよつと待つてろ……」

そう言つて俺は立ち上がり一度外に出て、二人とも裏の倉庫まで付いてくるように促

す。

「見てみ」

「これは……?」

取り出したるは一抱えほどもある布の包み……に入ってる、がっしりとした木の枝だ。

勿論これは精霊の森で取ってきた例の枝。俺はこいつをロンに任せてみようと思う。

「これをな、杖に加工して欲しいんだ」

「はあ……?」

いまいち飲み込めていないという風に曖昧に頷くロンだが、無理もあるまい。相方に任された大仕事に対して“杖を一本作ってくれ”というのは確かによく分からない頼み事だろう。

「こつちの指示は取り入れてもらうが細部の擦り合わせは任せる。そういうのは俺たち素人より本職が調整してく方が無難だろうからな」

「わ、わかりました。でもこれって……?」

「これか? これは言っちゃまえば——」

ここで本当のことを言わずに誤魔化してしまうのは簡単かもしれない。こいつの性格上、そうする方が角が立たないだろうってのは容易に想像がつくことだ。

だけど。

意味がないよな、それじゃあ。

「今回の旅の、あー、結実ってやつだな？」

さらつと言ってはみたが、徐々にその意味を理解し始めたらしい。少しの間ピタッと動きを止めたロンは……おお、面白いぐらいに分かりやすく顔を青くしてこつちを見てきたな。

「そ、そんな。無理です。僕なんか……」

「俺はそう思わない」

「でも、それなら僕よりフウのほうが。フウならもっと上手くやってくれます……」

「お前だから頼みたい」

概ね予想通りの反応だが、だからこそやらせる価値がある。

俺たちの旅に魔法の杖が必要になるってことをプロメステインに知らされたその時から俺は、それをこいつに手掛けてもらいたいと思っていた。

「つて言われてるが、フウ。そっちはどう思う？」

「えっ……」

ロンの隣で俯いていた黒髪少女に矢先を向ける。

ふるふると肩を震わせて黙っていたかと思えば、一転して飛びつきりの笑顔で相方の首に抱きついた。

「すつつごいじゃない！ まさかまさかアンタがそんな大事な仕事をもらえるなんて！
よーし、そうと決まれば早速！」

「ぐえっ！ ……え、え？」

「特訓よ!!」

やにわに相方の首根っこを引つ掴んでいったフウは、そのまま嵐のように小屋を飛び出していった。

二人が出ていった後、部屋に戻って。

「……大丈夫なんです？ 彼ら」

「たぶん大丈夫」

俺の真意を測りかねているのか怪訝そうに聞いてくるプロメステインだが、ここはも

う任せると決めている。

奴らとの付き合いは長い。知らないお前が信用しかねるのは仕方ないとしても、それを他ならぬ兄貴分が疑うのは野暮ってもんだ。

それに、何つつても。

「あいつらには才能がある。俺と違つてな。……だから今回もうまくやるさ、なんだかんだ言つてもそうなるように出来てんだ」

「はあ。でも不安ですけどね、私は」

「お前なあ、そういうの本人の前で言うなよな……」

釘刺しとかなないと絶対はつきり言うからな、こいつも。色々と察しの良いフウもそうだが、とにかくメンタルが弱いロンのそばには出来るだけ置かないようにしといた方がいいかもしれない。

そんな、ある意味ではその人柄に信頼を置いてるとも取れるような事を考えていると。

「でも意外でした。てつきり杖の製作なんて結局は自分の手でやるものと思つてましたから」

……あー。

まあ、俺も心得が無いわけじゃない。ついこの前経験した人体の解剖に比べりゃそこ

まで大掛かりな作業になるはずも無いし。なんならプロメステインを抱え込んでる以上、外部と深く関わり合う事のリスクを考えると自分で仕上げるって手も全然あった。でも、それでも。

今の俺じゃあ……。

「自分がそんなに信じられませんか」

ぼつり、と。

真つ直ぐ俺の目を見て突き立てられた言葉に、動きが一瞬止まる。

「今の貴方にとって他人を信じることは簡単でしょう。しかし自分はどうですか？ 自覚があるかどうかは分かりませんが客観的に見ると結構拗らせてますよ。それ」

「……つたく、敵わないな。お前には」

本当に良く見てる。その心配りを少しは他の人間にも分けてやればいいのかとは思うが、それは言うだけ無駄だろう。

「俺、お前に助けられてばかりだよな。……それだけじゃない。今まで数えきれないほど多くの、色々なものを貰ってここまで来た。きっとこれからもそうだろう」

「……………」

「ああそうだよ、俺は自分が信じられない。逆にどうやって信じろって？」

別に、今すぐどうこうなるってぐらい病んでる訳でもないが。だけど頭の片隅には常

にそれがある。

それほど……あの満月の夜は、強く心に焼き付いた。

「これから旅を続けていくにも、お前を守る必要がないってのは確かに分かった。俺を守ってくれるだけの力があるって事も。だからその点に関しちや問題ないよ。ただ……」

そう、そこはいい。

だから問題はそうじゃなくて。

「ただ、お前だっていつでも地上にいられるって訳じゃないだろ。そんな時にロンやフウ……そうでなくても、そうだ。ククリ。俺に力が無いばかりにあいつらを目の前で守れなかったらどうする?」

……目の前で。

そしたらきつと、俺は自分の無力を何よりも許せなくなる。

「ゴルド火山に向かうまでの旅路だつてそういう奴らと、守りたい人達と出会わない保証なんてどこにもない」

だから、俺なんかがそんな事を考えるのは烏滸がましいのかもしれないが。

「前後関係が逆なんだよ。魔法を使えるようになるための旅をしてるのに、“力のない俺”が旅なんかしていてもいいのか、って」

それが、嘘偽りのない俺の本音。

致命的でこそないが、じりじりと身を焼くような焦りが齒痒くて仕方がない。

「なるほど」

俯きながら片手で頭を抱える俺を、プロメステインはただ見ていた。

重い沈黙を覚悟していたその時の俺にとっては予想外な事に——直後、その口が開く。

「じゃ、今すぐ魔法が使えるようになればいいって事ですね」

「ん?」

言われた言葉の意味が分からず顔を上げる。

するとそこには、もぞもぞと服をたくし上げて脱ごうとするプロメステインの姿があった。

(……………??)

あまりにも。そう、あまりにも意味のわからない目前の光景に、俺はただただ固まっていた。

今すぐ魔法が使えるってどういう事だよとかかなんで急に服を脱いでんだよとか、ツツコみたい所は無限にある。あるのだが……身をもつて思い知った。

人は、処理能力を超えると、固まる。

持ち前の手際の悪さか心なし脱衣すらグダついてる気がするプロメステインもいよいよ生つ白い肌色の面積が視覚への主張を訴えかけてきたあたりで、俺はようやく、なんとか、一言だけ口にすることができた。

「何やってんの?」

「はい? 男の人はこうする方が興奮すると聞き及んだのですが……」

あ、ちゃんとそういう方向なのね。

なんかこう、突飛に見えて実は何でもない理由の脱衣であって、勝手に一人で懊惱してた俺が馬鹿だったと追って後悔するような日常系アニメあたりでよく見る展開とかではないのね。

………。

「つじやねえんだよ!!!」 今の会話の流れから何がどうなつて俺を興奮させようつて話になるつつてんだよ!!!」

「んっ……急に大きな声を出さないで下さいよ。びっくりするじゃないですか」

「くそっ、この前も自慰がどうかでこんな事あつただろ！ オメーは自分が理解してる事を他人も理解してると思い込んで話を進める癖をそろそろ直せ!!」

いや、マジで何なんだ？ ここまで来ると逆に知りたい。プロメステインよ、お前は何故よりもよつて今、俺を性的に興奮させんがために服を脱ぎ出したのか。

すると流石に言葉の足らなさを自覚したのか、ようやくそれらしい理由を語り始めた。下着姿のまま。

「貴方が魔法を使えないのはつまり、その大元となる魔力が体内にないからだという事を以前に説明しましたよね？ それは魔物や天使と違い、生命力を魔力にそのまま変換する機能が人間に備わっていないのが原因だとも」

「……だから何だよ」

「それで私の魔力を貴方に分け与えるなどの事ができれば手っ取り早いのですが、しかし別々の生命を元にした魔力の譲渡となると……不甲斐ない事に現状の技術では難しいです。何より、力を振るえるようになった所でそれが私からそっくり与えられた物では今までの焼き増し、意味がない。でしょう？」

……聞いた限りでは筋が通っている。今のところ。

むしろここまで俺のことをちゃんと考えていてくれたのかと、少なからず驚きを覚えてしまうような内容だった。しかしそれが何故今のような事態に転がり込んでしまったというのだろうか。

「つまり結論から言いますと」

「うん」

「貴方の精液を私の体に取り入れます。天使である私の体内で魔力に変換します。これをそちらに再び還元することによって、晴れて貴方は魔法を使えるようになるという訳です」

「ボツで」

「えっ?!?!」

「まさか断られるとは思わなかった」みたいな顔して驚いてんじやねえ!! ダメに決まつとろうがそんなもん!!!

「お前のもつと自分の体を大事にしろよ! 女だろ!」

「大丈夫、多分うまくやれると思います! こういう事は初めてですけど」

「そーゆー事を聞いてるんじやねえ! つか余計にダメだわ!!」

「いえ、でも……分かるんです。本で見た知識とは別に——どうすれば男の人を悦ばせ

られるのか、という事が。……こういうのを本能と言うのでしょうか？」

「……薄々気付いてたけどこの世界、魔物だけじゃなく天使までエロゲー仕様なのか？
もしそうならいいよ今世を見限りたくなってるんだが」

「？」

こてつと小首を傾げてくるプロメステインを改めて見る。おっとりした垂れ目とポニテにまとめた暗めの赤髪。これで顔立ちは整っている。メガネっ娘属性も個人的にはマイナスではない。

ちよつと見た目が幼い気もするが、人間の俺に人外が年齢を気にされる謂れはないだろう。気心も知れた仲だし、俺としては別に……。

って、何だ何だ。ちよつと思考が変な方向に行ってるぞ。やばい、顔がまた熱くなつて……ああもう！

「と、とにかく。急にそんな事、俺は断る。駄目ったら駄目、だ……？」

そつぽを向いてきつぱりと否定の意を表した直後。

俺はプロメステインに腕を掴まれ、腰掛けていたベッドにそのまま押し倒されていた。

「あ、あの……プロメステイン、さん……？」

「これは流石に看過できません」

ぎろりと、睨み付けているまである鋭い眼光で俺を見下ろしたプロメステインは——
こと此処に至りあくまでも固く真面目な態度で言葉を続けた。

「以前に同じような話を断られた時、あれはこちらの私欲に過ぎませんでした。だからあの場は大人しく事を収めました……」

押さえ付けられた腕を振り解けない。ただ単に天使としてプロメステインの方が力が強いのか、俺が本気で抵抗しようとしてもしていないのか、もうそれすら……分らなかった。

「貴方が追い詰められているのに、黙って見ている事はできません」

鼻先が当たるほど近く。

突き付けられた真摯な瞳から、目を離すことが出来なかった。

第16話

「……………」

チユンチユンと、小鳥が囀る音で目が覚めた。

ぼんやりした頭でただ天井を見つめる。久しぶりに帰ってきた自宅でこうして起きるのが何だか懐かしくて、どうも夢見心地のまま意識がはつきりしな——

「あ」

ふと横を向くと、すやすや気持ち良さそうに眠りこける赤毛の少女の寝顔があった。

素っ裸の。

「……………」

ついでに言うとな裸なのは俺もだった。

現状を認識するにつれ何があったのかを嫌でも思い出してしまふ。

とりあえず腕の拘束はいつの間にか解かれているから——俺はあの後どこかのタイミンで気を失ってしまったのだろう、と当たりを付ける。

「やっちゃまった……」

気付けば両手で顔を覆っていた。いくら問答無用で襲われたようなもんとはいえなんつー事を。……いや、これ俺が悪いか？ 世が世なら普通に犯罪じゃん……。

いやでも先に心配かけてたのはこつちだし、つつーか人殺しまでやつてる俺が司法の秤で物事を語るなつて言われたら何も言えねえし……あれ、意外と自分を擁護できる要素が無い??

「んあ……おはよございます……」

「ひっ」

やばい！ 助けてくれー！ そう咄嗟に叫ばなかったただ俺はまだ自制心が強固な部類であると思いたい。慣れない事をしたせいかな珍しく眠そうに目を擦っているプロメステインに、努めて冷静に切り出した。

「……お前、まず俺に何か言う事は？」

「？」

こいつ……本気で『何のこと？』みたいな顔してやがる。マジかよ……。

以前にも増して異種族の貞操観念が理解できず小さく呻き声を漏らす俺を横目に、そ

「な……何があつたし……」

「昨日……貴方と交わっていた時に。何か物音がした気がして、ふと窓の外を見たんです。そしたら……ふわあ。逃げるように歩いていくロンくんの後ろ姿が見えて。なぜかフウちゃんを背中に担いでました……」

「そんな今後の人間関係に関わる重大事項をどうしてお前は何でもないかのように欠伸混じりで淡々と報告してんの？ てかそれに気付いたのに無視してずつと俺を犯してたの？ その時点で何かりアクションしたり俺になんか言つたりできなかつたの？」

「だって、私は見られても別にいいかなって……続きをしたほうが楽しいし……ぐう……」

「寝るなああああツツ!! お前、お前この！ 今まで睡眠欲とは無縁みてーなキャラだった癖して急に二度寝とかやりだしてんじやねええ!!!」

ゴチン、と。

「ぎゃあーッ?!」

物の見事にベッドからずり落ち、顔を強打した俺の悲鳴が響き渡る。

何が起こったか一瞬分からなかったが、それはこの寝ぼすけの肩を掴んで起こしてやろうと飛びかかった直後の事だったと思ひ出した。

「くっそ、こんな時にまで遠慮なくすり抜けてきやがって！ きたねーぞー!」

「裸で床に転がったまま言われましても……」

な、なんて言い草だ。ちくしょう。

いつか鼻を明かしてやりたいとは思うものの、しかしこいつには何をやっても無駄な気がしてならない。俺はため息をつきつつ諦めてベッドの縁に腰掛けた。

「はあ……」

隣でうつらうつらとしながら寝転がっている科学者気取りについては一旦置いといて、改めて思う。どうしてこうなったと。

色々ありすぎて飛んでいたが、元はと言えば俺が彼女に心配させるような精神状態だったのが発端だった。そして……この危険な旅を一人で乗り切れるだけの力を持つに至ればそれも解決する」と踏んだプロメステインがこの今回の暴挙に走った、という話だ。たしか。たぶん。

「あん……?」

その話だと——俺はこれで魔法を使えるようになる、はずだ。しかしそのような感じは特にしない。これは一体どういう訳か。

正直言つて昨日あった事が衝撃すぎてあんまりそういう話する気分でもないんだが、それはそれとして「あれだけやられて何もありませんでした」ってのは納得できん。

「なあ、そーいやあの話つて——」

「んんっ……」

「あ？」

ふと後ろを振り返った瞬間。

ぐつと背を伸ばしたプロメステインの唇が、俺のそれと重なった。

「んっ、ぐ……!?!」

昨日、半ば無理矢理にされた奪うようなキスとは違う、柔らかく食むような感触だった。

咄嗟に仰け反ろうとするが、いつの間にか頭に戻されていた腕が邪魔をしてそれも叶わない。仕方なく力を抜いてされるがままにしていると——何やら暖かい力がじわじわ流れ込んでくるような感じが伝わってきた。

「……………」

欠け落ちていた物があるべき所にすとんと収まったような、そんな不思議な感覚。

前世を含めても全く未知の体験を目の当たりにしてしばらく呆けていると、口づけの感触がゆっくり離れていくのに少し遅れて気が付いた。

「ぐう」

「……………ああ、そういう事ね」

魔力の受け渡し。

その性質は齧った程度だが前々から習って知っている。わざわざ経口でやる必要あんのかつて一瞬思ったが、粘膜同士の接触ってルートは簡単かつ無駄がない。この場でするなら理に適った手段だろう。

……もしかして、俺つてこいつの突飛な行動に順応し始めてる？ 「おいおいおい、何だ今のは。またこのパターンかよ。寝てねえでちゃんと説明しろ！」 ……ぐらいは咄嗟に言えないと駄目だろ。

自分が分かっている事を周りも把握してるつもりになって動くのをやめろとは散々言い聞かせてきたが、俺がこいつに近付いてきてるって事は……これって負の循環つてやツなんじゃないか？

い、嫌だ。プロメステインだけならまだしも二人揃って言動が周りから浮いてるのに気付かずお互い盛り上がってるようにまでなったらいよいよ俺たちやお終いだ。

こつちが今後どれだけまともでいられるかどうかは別として、やつぱどちらか片方は軸足だけでもリアルに置いておくべきだ。こいつに期待できない以上は必然的に俺が目を見開いているよう努力せねばならず——襲い来るであろう気苦勞を予想すると、深々ため息を吐くしかないのであった。

???????

それからまあ、何やかんやあった。

後日魔杖の件で詳細を聞きそびれていたらしいロンと顔を合わせて細部を詰めた時はめちやくちや気まずかつたし、フウは何かもう……こつちがビックリするぐらい真っ赤になつて震えてた。マジで。

あのフウが。普段の様子からは考えつかなかった。間取りと家具の調整の話をする段階になつてやつと仕事モードに入れたつぽいが、それでもまだちよつとどこか上の空な感があった。

で、この時は俺も油断しかけてたんだが……何を思ったのか、こいつはいきなり「ベツドは二人用の大きいやつに変えた方がいいですか」とか言い出してきやがった。

「私は別に拘りませんけど」

「口を、閉じてろ。オマエは。」

横から会話に割り込んできた赤髪ボケ野郎は当然の如く黙らせる。

何をさも当然のように俺とプロメステインが毎晩一緒に寝ることを前提として話を進めようとしているのか。これを真顔で問い詰めてみたところ、ハツと意識を浮上させたらしいフウは一気に先程の調子に戻り、涙目になつてブンブンと平謝りをするだけの機械となつてしまった。

「え、でも……」

騒ぎを聞きつけたらしいロンが事情を聞いて何か腑に落ちないような顔をしてきたので、弁明の機会だけはくれてやる事にする。

「お二人って、ご夫婦とかではなかったんですか……?」

「それはない」

だからそーいう関係じゃねえって言ってるだろ。つーか前にもこんな問答があったような気がするぞ。

ああもう、だからこういうのは嫌だつてんだよ……!」

「くっそ……見たかよお前、ここまで話が拗れてんだぞ」

「いやはや、ここまでとは予想していませんでした」

「てめえ!!」

二人が帰路についた後、こうも呑気に他人事みたく言つてのけたプロメステインを俺は全力で叱っていた。

あいつらにはこの事を周りに言いふらしたりしないようにきつく言いつけておいたものの、風聞なんてのはどうやって広まるか分からん物だ。

めらめらと気炎を上げて押し迫る俺を前にして流石にまずいとも思ったのか、プロメステインは冷や汗をかきながら話題をすり替えてきた。姑息なヤツだ。

「そ、そういうえば……貴方に受け渡した魔力の調子はいかがですか？ 何か感じるものがあれば良いのですが」

「む……」

それはまあ、確かに詳しく把握しておくべき事柄かもしれない。実を言えば今のところそこまで劇的に何かが変わったとも思えないが、何となく朝から体の中にうねりのような物を感じる気は地味にしていた。

その事をそっくりプロメステインに伝えると「大変結構です」と鷹揚に頷かれた。

「それなら次は……そのうねりを術として放出する練習を始めましょう。人間が魔法を実際に行使する際に生じる問題の第一項目、『人間の体が抱える魔力適性の脆弱性』は把握していますね？」

「そのために必要な中継機が……ああ、そっか。第二項目が解決しても杖が完成してないからには何も始められないんだったな」

「いえ、そうとも限りません」

「？」

俺たちはその問題を杖によって片付けるために『精霊の森』まで行ったんだと思うが、違うのだろうか？

そう怪訝に思っていると——プロメステインは、何やら自慢げに羽根飾りのようなも

のを取り出した。

「これです。これは『濡れ羽鴉からすの尾羽根』と言いまして……いわばとある希少な魔法動物の身体の一部、ですな」

「はあ……?」

こんなよく分からない飾りを提出されても。腕に巻くようなサイズ感のそれを見せられて思わず呆けたような声を漏らすと、ちゅちゅと指を振ってプロメステインは続きを説明しました。

「前に言いませんでしたか? 中継機となる魔道具の素材は、例としては鉱石や……」

「魔物の肉体!!」

ようやく合点がいった。ようはその羽根飾りが杖の代わりに使えるってわけだ。

「その通り。木製の杖に比べれば汎用性は低くピーキーな術式しか扱えないでしょうが……それで一応は過不足なく魔法行使の練習になるはずですよ」

「は……で、そんな貴重そうな物をどこで手に入れたんだ?」

「え? あのオオカミ娘の妹がつけてたアレを失敬しまして」

「曰いわく付きじゃねーか!!」

ちよつ、いくら何でも複雑だぞそれ!! あいつの姉さん殺したの俺だし!! なんかヤバイ怨念とかひっそり込められたりしてないだろうな?!?!

「ちぎれて取れたものを繕い直したもので少し短くなっていますが、まあ好きな所に身につけて頂いて。それからコツを教えますので、さつそく練習の方に入りましょうか。順当に行けばあの影に潜り込む魔法が使えるはずですが……」

「おおおい、お前にそういうのを気にする、こう……アレは無いのか!?! ……無いんだろ
うなあ!!」

もちろん無かった。そんな物は。

第17話

ほんの束の間、この世の中は平穩だった。

ある男と天使が進んだ旅路。それは必ずしも万人にとって正しい結果を招いたとは言えなかつたから。

誇りを持つて守る『森』を部外者に知られ、踏み入られた事を嘆いた民がいる。たった一人の家族を殺され、その死までもを侵された魔物がいる。

二人の目的が自己の『進化』である以上、そこに破壊や冒瀆がどこまでも付き纏うのは必然だった。

けれど束の間、男と天使は足を止めた。

そこに彼らなりの理由は多々あれど、その停滞で取り戻した平穩を世界は確かに享受していた。

そうして、およそ一年と少しの月日が経過し——静寂は破られる。

我々が『賢者』と呼ぶ、あの男は。

「ぐふ、ぐふふ」

真夜中、寒風吹き荒ぶ冬の森。

深々と降り積もった雪で木々も白く染まる闇の中、場とは不釣り合いな女性の笑い声がしつとりと響く。

「よもや二晩も続けてここに迷い込む者がおろうとは。あ奴は良い声で鳴きおつたが……ふん、ふん。今からヌシを喰らおうというのに、他の男の話をするのも無粋かの」
「木こりのムーランさんを殺したのはお前か？」

闇の深くで。

山の麓からこの吹雪の中を歩いて来たと思われる青年は、いやに落ち着いた声でそれだけ言った。淡々と、ただ確認するだけのよう。

ぼうと火の点いた松明を片手に掲げてそこに立ち止まる彼はフードを目深に被っており、表情は窺い知れないが、それも魔物にとつてはどうでもいい事だった。

「んなのは知らん。私はここに迷い込んだ男をただ喰らうだけぞ」

「……そうか。翹つた後にも解放してくれれば見逃してやれたが、こうなった以上は仕方がない」

青年は、改めて目の前の敵を見る。淡く発光する体に青白い髪。加えて先日から狩場を変えないこの習性からすると——木霊の類と見て間違いない。

雪を踏みしめながらため息を吐き、燃え上がる松明をその場に放り捨て——右肩に掛けていた『長杖』を構えるのだった。

トレント娘が現れた！

「くぐぐぐぐぐ——」

ズオツ、と巻き込むような音と共に飛び出したのは、彼女の背後に座す樹木の根だった。

分厚い雪を押し退けて獲物を絡め取ろうとする威容にほんの少しだけ目を見開いたが、慌てた様子は決して見せずに危なげなく後ろに下がる。構わず這わせ続けるトレント娘だが——男は触手にも似た根を思い切り片足で踏みつけると、固定したそれに躊躇なく杖先を押し付けた。

「意思なき形姿は朽ちるがいい——ディケイ！」

ばらばらっ、という異音と共に。瞬間、トレント娘は伸ばした根に伝わる感覚が次々と消失していく事態に驚愕した。

「なッ……魔法、じゃと!?!」

「鬼が出るか蛇が出るか——ともあれ対策はしてきた。結局は予想の範疇を出なかったらしいが」

「人間ごときが……ッ」

言いつつ、ボロボロと色褪せて朽ちていく樹木の触手を事も無げに一瞥する青年に対する脅威度を跳ね上げる。

（あれが分霊わたくしに効果があるかはともかく……樹木ほんたいに受けると不味い、のう）

「風よ、我が杖に威服せよ——エアロ！」

「ぐっ!?!」

一陣の風が刃となって木霊を切り裂く。トレント娘は強烈な遠距離攻撃に怯み、このままでは不利だと慌てて身の丈ほどの根を目の前に展開する。

これで風から少しの間だけでも身を守り——魔物としての自分は納得できないが——あわよくばそのまま敵を押し潰す事もできる、攻防一体の手。苦し紛れにしては上出

来だと、この目で見ることは叶わないにしろ絶望する男の顔を思い浮かべて彼女は内心ほくそ笑む。

ドスン！ と、避ける暇も与えずに根が振り下ろされる。決まった——そうトレント娘が確信した次の瞬間、妙な手応えの軽さに硬直する。

何が起こったのか慌てて確認すると、そこには「ひらり」一枚の外套が根の下に挟まっているだけだった。

「知ってたか？」

「なッ、」

声^{こゑ}が聞^きこえてきたのは背^せ後^ごからだった。

今宵何度目かの驚愕からどうにか抜け出した時には、もう何もかもが遅かった。

まるで先ほど打ち捨てられた“松明”の明かりに浮き出た影から滲み出るように。視界が途切れたほんの一瞬、そうして詰められた距離は致命的だった。

「ふたご月に生まれた狼は——影に潜んで獲物を狩るんだと」

樹木^{ほんたい}に軽く小突かれた感触——同時、トレント娘の意識は急速に闇へと沈んでいった。

朽ち果てた大木の残骸が辺り一面に広がる中で、落ちた外套をばさりと肩にかける男の後ろ姿をただぼんやり眺めていた。

(寒い……)

死に沈みつつある彼女の命はもう長くない。はらはらと青い光の粒子が体からこぼれ落ちる様はさながら流れ出る血の量に等しかった。そんな中で最期に目に入った光景——浅黒い肌、二の腕に黒い羽根と骨の飾りを巻き付けた黒髪黒目の男は静かに言う。

「ムーランさんに地獄で詫びろ。てめえが殺した人間の名前だ」

体の輪郭がいよいよ消え去り、空に昇っていく青い光に——しかし“賢者”と呼ばれた青年はポツリと呟いた。

「……また会えたらよ」

その言葉が相手に届いていたのかどうかは分からない。

ただそれは、それだけに、彼が自分の言葉を心底から疑わずにいるという事の証明に他ならないのだった。

「俺が地獄そっちに行つた時は、殺し合これいで終わらずに済んだらいいな」

雪中の山深く。少し開けたその場所には賢者の居処があるという。実態は何でもない山小屋——小屋と言ひ切るには少し手広にはなつたかもしれない——なのだが、そう考えているのはたつたの二人しかいなかった。

麓の村を一躍騒がせた失踪事件を解決した帰り。青年は遠目に見て自分の家はどうやら明かりが灯っているのを怪訝に思つた。見たところ煙突から煙も上がっている。

さて、出てきた時には誰もいなかった筈なのだが……となると思い当たる節は一つしかない。自宅ゆえ気兼ねなく扉を開けると、中には予想通りの人物が暖炉の前で本を読んでいた。

「帰つてたのか、プロメステイン」

「向こうの仕事が早く片付きました。お帰りなさい、とはこの場合どちらが言うべきなんでしょうかね？」

人の家にも関わらず肘掛け椅子に腰を下ろして見事に寛いでいる赤毛の少女に、変わらないな、と軽く笑う。

「それにしても随分と遅いお帰りじゃないですか。ここ数日で何かあったんですか？」
「ああ、ちよつと人死にが起きちまつてな……」

「なんと」

台所で軽めの夜食を作りながら事の経緯を説明する。プロメステインの偏食には慣れたものだったが、彼自身は健全な若い男としても食事の度に嗜好を毎回合わせてもられない。

とはいえ何やら物欲しそうな視線を感じるのも確か。最近では癖になってきた気がする溜め息を一つ吐きながら、干し肉を挟んだ雑なサンドイッチもどきとは別に余り物の粉とかを使ってパンケーキでも焼いてやることにした。

こういう料理に卵も牛乳も使つてはいけないというのは彼にとつても少々どころではなく面倒くさいのだが、付き合ひの長さからいってもういい加減に慣れつつある。

というより原始人類史における生産経済以前の食生活というのは元から八割以上が植物性であり、ヨロギ村での暮らしもその例に漏れないものだった。価値観の基準たる前世の生活水準を無理に取り戻したがる「賢者」の方こそがむしろ時代錯誤となり、文化内でも後発的に発生する筈の完全な菜食というイズムがまだ現在の世風に近くなるといった一種の錯誤が起きていたりするのだが……

閑話休題。基準がやや謎なことになつぱり掛けられたハチミツはOKらしいプロメ

ステインは「いただきます」の挨拶もそこそこに話を進める。

「なるほど……もぐもぐ、それでその魔物を、一人で討伐したと。ごくくん」

「喋りながら物を食うな。……ほんとは手土産に死体の一つでも持ち帰りたかったんだがな、つい倒し方を焦つちまった。俺もまだまだだつて事だ」

「何事も無事であるのが一番です。お気になさらず……ふむ。しかし、そうですか」
「？」

思わせぶりに考える素振りを見せつつ指で拭つたハチミツをべろりと舐め取る。何かに集中している間は素が出ていのか行儀が少し悪くなるのは癖らしい。

「これで分かつたのではありませんか？ 貴方は私がいけない間にも、たった一人で村の危機を救うことができるだけの力を既に持っているのだと」

「ん……」

「自分一人で魔力を練ることが出来ないのも不自由に感じてきた頃でしょう。そろそろ——旅を再開しませんか？」

この話が彼らの中で特に重たい話題だった事は互いに何となく感じていたはずだ。それを押しても口を開いたという事は、プロメステインは彼に間違いなくそれだけの力があると、今をこの上ない契機だと確信しているという事に他ならない。

「……そうだな」

足を止めてから、一年半。

この間にも色々な事があつた。何とも騒がしく、これまでとは違いプロメステインが側にいる日常。そんな中でも自分なりにやれるだけの事を必死でやってきた。

時が来た、という事なのだろう。

「目指すは『ゴールド火山』。……行くとするか、そろそろ」

「！」

顔を跳ね上げるようにしてこちらを見るプロメステインに苦笑しながらも男は言う。

「待たせちまつて悪いな。この旅を一番心待ちにしていたのはお前だつてのに、俺があの事になつたから……」

「い、いえ……気にする必要はありません。私が勝手にやっている事ですから。ですが

……ふふ、良かった」

「……………」

この魔女は。ふとした所で急に素直な態度になるから始末が悪い。

心底安堵したように笑顔を向けてくる「仲間」にそっぽを向いて首を傾げられながら、気を取り直すように青年は言う。

「んんっ！ まあ、何はともあれだ。そうと決まれば計画は練っておかないとな。どうせさっきの今で眠る気にもなれねえし、今夜はとことん付き合つてやる……か？」

ふと室内が薄暗くなってきた気が。暖炉に目を向けると……火が消えかかっているようだった。

いつプロメステインが帰ってきていたのか知らないが、つつい話に熱中し過ぎて薪木を絶やしてしまつたらしい。話の腰を折られて面倒に思いつつ、新しく火をつけようと何も考えず脇に置いていた杖を暖炉に向けると――

「……………あつ」

「どうしました？」

中途半端に杖を構えながら変なポーズで硬直したまま動かない相棒を胡乱な目で見つめるプロメステインだが、かろうじて、といった様子で捻り出された返答によると。

「き、切れた……MPが……」

「ああ……」

言わんとする事は理解できたが何とも締まらない展開になってきた、とプロメステインは思う。

「はあ、仕方がないので計画は明日から考えましょう。ほら横になつて」

「えつちよつ今日は良くない!? お互い帰ってきたばつかで疲れてるだろ主に俺とかこの吹雪の中どんだけ苦勞して戦ってきたと思つて……」

「もう、いい加減に慣れてくださいよ！ ほらさつさと脱ぐー！」

「や、やめ……」

いかにも女々しく逃げ出そうとする青年の悲鳴が、雪の帷に悲しく吸い込まれていくのだった。

第18話

「……という訳で、村を出てきた私達ですが」

紫色に染まる空が随分と近いように感じる山膚やまはだの上、焚き火の音がパチパチと簡素に散らばる。

春を待つてから新たな旅の一步目を踏み出した初日、俺たちは野營の支度を済ませようとしているのだった。

「良かったんですか？ あんな風にひっそりと出発する必要も無いでしょうに」
「……ま、そういうもんだろ」

あんな風に、なんてプロメステインが言うのも分かる。ヨロギのみんなには「近い内にまた旅に出るから」と事前に言付けておいただけで、直接的に見送りを受ける事は結局のところ無かったからだ。

まあ仕方ない。俺だけならともかく、プロメステインを連れ立ってあんまり目立つのは避けた方がいいって判断は間違いないはずだ。何よりこれぐらいの方が俺もやりやすいさ。

「あ、でもロンとフウは来てくれたよな。あいつら結構な頻度で遊びに来るから偶然だ

ろうけど」

「そうですね。それにしてもあんな山奥に好き好んで通うとは物好きな方々ですが」

「お前もしかして本当に悪気とか無いのか……？」

「？」

あまりにもサラッと毒を吐いたなこの野郎、悪意は無いんだろうが言葉選びが下手くそ過ぎるだろ。自然すぎて気付くのが遅れたわ。

「つーかそれお前が言うのかよ。＼あんな山奥＼に通うために遥か天界からほぼ週5で降臨してる天使サマは他にいねーっての、いい加減自覚しろ！」

「なっ……それと私はまた別でしょう!? 私ほもつと、ここう……ほらー！」

何が＼ほら＼なのか1ミリも理解できないが、恐らくこいつの中では「本拠地はあくまで現世こっちであつて、むしろ天界向こうの方が面倒にも定期的に通わなければならない辺境の地だ」とかいう認識になつてるのかもしれない。

……もしそうなら不忠者つてレベルの話じゃねーんだよな。さして好きな訳でもなく何処の誰とも知れないとはいえ、件の女神イリアス様とやらがいい加減不憫に思えてきたんだが。

まあ、何にしても。と俺は焚き火に薪をくべながら思う。

「こっちの居心地が良い、楽しいって思ってくれてんなら、俺としてはそれに越した事あ

無いけどな」

「……そう、ですか？」

「そうだよ」

ここだけは自信を持って即答できる。この世界にただ一人、孤独だった俺を助けてくれたプロメステインの倦うんでいた時間を動かす一助になれた。それがどんな形であれ俺にとつては本望だ。

……何か、久し振りに面と向かつて思ったことをそのまま口に出して言った気がするな。こいつの苦手なタイプの物言いだったかと少し不安になってきたが、当の本人は小さく身じろぎした後、ふっと笑いを漏らし始めた。嬉しいのか、またはバツを悪くしているだけなのかどうかはよく分からない、曖昧な笑みだ。

「ふふっ」

「どうした？」

「いえ、この旅を始めた最初の頃を思い出してしまいました。……貴方はあの時からそういう事を言つては私を困らせていましたね。臆面もなく、真っ直ぐと」

「あ……んな事もあったな。あん時やこつ酷く叱られたりもしたっけか」

鍋を火に掛けて湯を沸かすプロメステインを見ると、俺らが出会った頃の事、それから今までの出来事が次々と頭に浮んでくる。

「つーかお前こそ取り繕って物を言うって事をしないだろ。ノーガードなんだよ全く」
「やはり似た物同士なんでしょうね、お互いに」

「……そうかあ？」

「そうですよ」

くつ、意趣返しかよ。意地の悪い事をしやがる。

つつてもお前から「自分に似てる」と言われて首を傾げずにいられる人間はこの世に
どれだけ居るのかね。どうしても複雑な気分になるだろうが。

「あ、お前のはそっちじゃなくてコレな」

と、鞆から取り出した即席スープ入りの袋を開けようとしていたプロメステインを慌
てて咎める。そりゃコンソメ味だ。鶏肉を煮出しているから食べられまい。

「ありがとうございます。しかしこれは？」

「キノコや香味野菜の出汁……言うなればフォン・ド・レギューム風の即席スープ。春
の新作だな」

「……私が来てから此方、貴方^{こっち}どんどん料理が上手くなつてませんか……？」

しょーがねーだろ適度に縛りがあると嫌でも上達が早まっちゃうんだよ。なんで野
菜の旨味を引き出す技術にかけてここまで熟練した腕前を獲得するに至らにやならん
のかは俺が聞きたいぐらいだ。

「まず……お、美味しい。これほんと凄く美味しいです」

「それは良かったけどよ、食いながらでもいいから話は聞いてくれよな」

「あ、はい。何でしょう」

こいつの言う所によると。魔物というのはいわゆる“魔王”のお膝元——大陸の北に向かうほどに強くなる傾向にあるらしい。

ゴルド火山はセントラ大陸最北端のゴルド地方に位置するだけあり、ここからの旅路はより一層厳しくなっていくものと見て間違いない。つまりは毎日のブリーフィングが今まで以上に重要になってくるという訳だ。俺は事前に用意しておいた地図を鞆から取り出し、整理した情報を共有するべく声を出した。

「まず俺たちはここ。目的地に向かって山越えをしてる訳だが、今まではひとまず問題は無かった」

「そうですね……精霊の森付近のあの集落のように、ヨロギとの交流がある居住地は経路上にどれぐらい存在するんですしたっけ？」

「前回の旅ほどには残念ながら無い。……とはいえ完全にゼロじゃないし、到着さえできれば俺を歓迎してくれると思う。持つべきものは地位と権力ってわけだな」

「ですね」

「今のは即行で同意するとこじゃねーぞ……」

「? ……ともかく、それなら留意すべき点は周辺の魔物の情報ぐらいですかね」

相変わらず倫理観ゼロの天使は顎に指を当て、思案し始めた。

「時に貴方、魔物側の所謂——“文明”についてはどれだけご存知でしょうか?」

「魔物の……? まばらに野良のそれを見かけるって事はあるが、やっぱりあるのか。そういうのが」

「ええ。名門アルティスト家などの魔王城周辺に集まる勢力を除けば、例を挙げるとするとやはり八尾の妖狐が束ねる狐族などでしょうか。先の大戦で頭目の玉藻を失ったとはいえ、あれらに数で勝る勢力はそうそう無い筈ですし」

「出たよまた知らん単語が大量に」

「まあ聞いてください。極東のヤマタイ村を庇護下に置いている彼女らを外で見かける事は滅多に無いのですが、問題はそうした“人間を擁する魔族”が一定以上は存在するという事なんです」

「ふうん……?」

妖狐だの極東のヤマタイ村だのと何がモチーフになっているのか面白いぐらい明らかな用語が出てきたが、今考えるべき事はそれじゃない。

人間を擁する魔族……つまり、人外の文明に恩恵を受けている人間がこの世界には結構いるわけだ。

「イリアス教圏の外、って事か」

「その通りです。私たち天界側が“人類”と見做して管理するのは実際、人間という種族の大きな括りの中でもイリアス様を信仰している単なる多数派に過ぎません。その中で最初に“文明”と呼べる物を内側から興したのは紛れもなく貴方ですが、それより遙か以前にも……例えば人類最古のコミュニティの一つである、先程も名前が挙がったヤマタイ村ですね。そこでは大昔に魔族と接触・迎合した人間の集団が今日に至るまで独自の文化を享受していたりもします」

「周りに住む魔物の種類の関係で文明はほとんど発達していなかったが、広義で言えば『精霊の森』もその中に入りそうだな……オーケー、理解した。で、それが今回の旅に何の関係が？」

「ドワーフ族、と言ってもピンと来ないかもしれませんが」

「うっ！」

「はい？」

「あ、ああいや別に。何でもない。続けてくれ」

ピンと来る来ないどころの話ではない単語を耳にして変な声が出てしまった。

ドワーフ。ファンタジー物ではエルフやらフェアリーやらと並んで欠かせない有名な種族だ。総じて人間よりも背丈が低いほか、酒好きであり鍛冶の技術にも長けていとされる。

これは面白そうな事になってきた。ちよつと能天気な思考かもしれんが、久しぶりにテンションが上がってきたぞ。

「ドワーフの特徴はその技術力です。伝承によれば魔王城の建造にも関わっているとされ、魔物の中でも特に高い生活水準を維持しているらしいのですが」

「うんうん」

「問題は彼女らがその、“人間を擁する魔族”の内の一つであるという事なんです」

「……なるほど、読めてきた」

話の流れからするに、そのドワーフの村——あるいは『町』とすら言える規模かもしれない——それがゴルド火山の周辺に根差しているのだとしたら。ここからの旅は同じ人間の暮らす領域とは言っても、ヨロギを中心とするコミュニティとは全く縁の無い土地を主に歩かなくてはならないという事だ。

「イリアス教と“賢者”の名前で繋がっていない場所、か。それも精霊の森の時とは規模からして訳が違う。確かに注意を払つとくべきだな」

「まあ、無条件に支援を受けられた今までの方が例外だったと考える方が良いでしょうよ。」

見知らぬ土地でどう立ち振る舞うか……それも旅の醍醐味と言えるんじゃないでしょうか」

「……ふーん、お前にしては粋な事を言うじゃんか」

「別に、貴方ならどの道そう考えるところだと思います」

ま、プロメステインが言った事も間違つてない。ここ数年で俺が育て上げた人類の文明以上に発展を遂げていると思われるドワーフの町……それを一から見て回れるっていうのは面白そうだな。

あるいは俺が本来やりたかった冒険つてのは、案外こういう事だったのかもしれないな。

山岳に特有の心地良い風が頬を擦る。漠然と思考を巡らせながら、薄っすらと空に浮かび始めた星々を見上げるのだった。

???????

セントラ大陸北部、某所。

硝子張りの窓から街道を見下ろす男がいた。

だぼつとしたズボンと肩から先を露出したタイトな衣服を身につけ、全体的なシル

エツトには夏場の鳶職とびしよくを彷彿とさせるような格好をした長髪の男は、声を震わせて呟いた。

「……本当なのか、それは」

「伊達や酔狂でこんな話はせんよ」

部屋の奥から響くのは、若く瑞々しくもどこことなく老獪な雰囲気纏う女の声だった。

執務机にどっかりと足を乗せる姿勢は妙齡の女性であれば様になっていたかもしれないが、尊大に伸ばしているその肢体は短く、かろうじて引掛けているという程度であり少々無理をしているという印象が拭えない。

とは言え——それを気にしたような気配も見せない堂に入った態度が、むしろ体軀の小さを補つて余りあるほどの威厳すらを醸し出しているようだった。

身に纏う滑らかな質感の黒い子供用ドレスは、大胆なオフショルダーのデザインも相まってどこか矛盾した艶やかさを演出していた。切れ長の瞳を眼鏡越しに細める銀髪褐色の女が、椅子に寄り掛かりながら静かに言う。

「そう遠くない未来、この町とウチらは共に必ず滅びる」

女が部屋を後にして、暫く。

突然に叩き付けられた現実には、男は覇氣の感じられない緩慢な動きで眼下の喧騒を見渡した。

人も魔族も分け隔てなく肩を組んで笑い合う活気ある町。この光景がある日何の前触れも無く、突然にして消え去る。血みどろの地獄と化すだろうという。

色白の肌が際立つような黒髪を腰まで伸ばし先端で一纏めにした長身瘦躯の男は、拳を握りしめつつ虚空に問う。

「オレらは、どうすればいい。お前は どうする。また力を貸してくれるのか？ 教えてくれよ……」

その言葉に応えるように。

男の心臓に、ぞわりと“炎”が脈を打った。

「……なあ、サラマンダー」

第二節 十九話

「お二人つて今頃……何してんのかしらね……」

「さあ……」

いつもと代わり映えのしない、ある昼下がり。

ぐでーつと長机に突つ伏す少女フウは、このところ大きな仕事が来ないのを良いことにヨロギ村の大衆食堂にて相方とくだを巻いていた。

元々が成長期の最中なだけあってこの一年で身長も伸び、いつも一緒にいたロン共々すらりとした身体に育ってきた。彼らの慕う男がどう思うかはさておき、村の中ではもう既に立派な大人として扱われている二人なのだった。

「もう、信じらんない。いつもと同じ感じで様子見に行つたら当たり前みたいなのがオシて旅支度とかしてんだもん。アタシたちが来てなかったら見送りも無しだったのよ？」
「そ、そうだね……まあ確かに急でビックリしたけど、それはそれであの人らしいんじゃないかな？」

フウの愚痴にも律儀に同意はしつつ木彫りの小物をカリカリと削る手は緩めない。四六時中何かしら作業をしていないとどうも落ち着かない質らしい。

掃除のおばさんに見つかればまた小言を言われると机の下でこっそりノミを動かすロンから呆れたように視線を逸らすと、再び氣力を失ったように項垂れるフウは何の氣なしに世間話を再開した。

「にしてもルシフィナさん、まあよく食べるわね……ちよつと偏食のきらいがあるけどさ」

「これ、おかわり頂けますか!!」

「あいよー!」

「……ここらの料理ってほんとに美味しいらしいからね。他所よそから来たなら仕方ないと思うよ」

そうは言いつつ、紅シヨウガたつぷりマヨネーズ油マシマシ汁だく卵かけ特盛牛丼“といった風体の世にも悍ましい物体をさもうまそうに貪る女性を見て思わず二人は顔をしかめる。いつそ冒瀆的な光景ですらあった。

「自称流れ者って話だけどホントかしら。こちらで見たことある?」

「いや……? 食べてる物はともかく、あんな綺麗な人だったらすぐ目に留まると思うんだけどなあ」

「……………」

「い、痛つ。急に何さ……」

「べっつにー?」

相変わらず好意に鈍い幼馴染の頬をひとしきり抓つかって満足はしたが、それで元々の憂鬱な気持ち晴れたわけでは別に無い。

フウは大きいため息を吐きながら、結局は最初の話題に立ち戻ってくるのだった。

「ほんつと、いま何やってんのかな。賢者さまあ……」

??????

石炭を轟々と燃やす音がそこかしこに広がる。

蒸気機関で稼働していると思われる大量の建造物に、いかにも健康に悪そうな真っ黒い煙をじゃんじゃか吐き出す煙突がいくつも連なっているのが遠目からでもよく分かる。

「どう思います? これ」

「どうもこうもねえ」

隣で同じ光景を共有しているプロメステインがぼそつと呟く。

どう思いますかって、そりゃ……

「最高だあ!!」

「ですよねえ!!」

フウウーツ!! むせつ返るほどの文明臭さが前世以来に染み渡るぜえええ!!

いやもう空気は不味いわ目視できるレベルの有害物質が不安を煽るわで普通に考えたら最悪なんだが、望郷の情がその全てを忘れさせてくれる! どう低く見積もつても明治時代レベルはあるであろうこの文明開花度、ウエルカム・バーブーツク!!

「いい——っ……ええーい!!」

だっはっは! 思わずハイタッチも出ちやうわこりゃ! パチインと小気味良い音を思いつ切り響かせつつ顔を見合わせ……っっか俺はともかくプロメステインも相当テンション上がってんな!? 今更だけど!!

「そりゃあそうですよ、ここから工学的な知見がどれだけ得られるか想像も……っふあ、いけない。思わずよだれが……!」

垂涎つて言葉をそのまま体现するプロメステインだが、今度はかりは気持ちも分かる。イリアス様の意向とやらで北京原人一步手前ぐらいから遅々として発展の気配を見せない下界の様子をウンザリするほど見せつけられてきたコイツにとって、高度に発展した文明つてのは文字通りに蜜の味だろう。

しかし同時に……俺らはドワーフの技術を探るためにここまで来た訳ではないという事をきちんと理解しておかねばなるまい。目的はあくまでゴルド火山、それを忘れていては何の意味も無いのだ。

「つつてもまあ、まずは情報収集から！　だよな！」

「全くもって……その通り！」

だからこれは違うんだ。こう、我を忘れていたかでは決してない。このまま何ヶ月か探索のために入り浸ろうとしていたって、最後に果たすべき事をちゃんと済ませればそれで良いのだから！

浮き足立っているのは自覚しているが、それはそれとして動きは止めない。胸中を多分に占める期待と共に、俺達は目前の町へと一步を踏み出すのであった。

町の名前だろうか？「ドウエルガ」と銘打たれた看板を張ってある建物を横切つてしばらく歩くと、早くも人々の喧騒が耳に入ってきた。

「その兄ちゃん、魔鋤灯は要らねえか！　ちよいと型落ちだが長持ちするよ！」

「酒だあ酒持つてこい！」

「ドージお前、また工場の備品を流してんのかい！ 今度という今度は許さないよ！」
 「げえっ、あねご……?! 今月厳しいんだ、後生だよ！」

「オーライ、そこもつと後ろに倒せー！」

少し開けた場所に出ると、そこは露店や屋台のような物が集まっている区画らしかった。

人間の男女とドワーフの娘がそれぞれ均等ぐらいだろうか？ 精霊の森ほど多様性に溢れてはいないとはいえ、人妖入り混じったその光景はイリアス教圏では絶対にありえない様相を呈していた。

「ちよつ待て、あれ煙草じゃねえか!? オイオイオイ……!!」

生まれ変わりとかいうある意味究極のデトックス体験によつて一度は綺麗さっぱり体からニコチンが除去された俺だが、こう見えて前世ではそこそこの喫煙家だった。

あの時はどつちかつつと義務で吸つてた感が強かったが、こうして改めて目の前にすると妙な懐かしさが相まりひとつ試してみたくもなってくる。うおお、また俺はここで同じ轍を踏むべきなのか。それとも踏まざるべきなのか……!!

ふと隣を見ればプロメステインも俺と大体似たような状態だった。……しかし、目を爛々と輝かせて辺りの品物やら何やらに釘付けとなつている男女二人組は、周りからすればかなり悪目立ちしていたかもしれない。

「ああ……？ 何だテメエら、また移住者か？」

それがいけなかったのだろうか。

チンピラ、という単語がこれ以上当てはまる輩もそうは居ないであろうという風体をした、スキンヘッドの大男が俺たちの前に立ち塞がった。

（何こいつ？ 誰？）

（私が知るわけではないでしょう）

「ヨソの猿どもにしちや身なりが良い気もするが……まあいい。たまに居るんだよなア、〃 外の暮らしは貧しくて食っていけないんです〃 〃 なんつってこの町にすり寄ってきやがる、お前みてえなイリアス狂いの土人がよオ」

へー、この辺りじゃそういう事になってんのか。

……普通に勉強になるなと思いつながら話を聞いてしまったが、どうもこれで話が終わりとは行かないらしい。その男はニタリと顔を歪めてこう言った。

「だがテメエら、運が良かったなア？ 俺はそんな右も左も分からねえって猿どもを〃 案内〃 してやるのが大好きだよ……もちろん、付き合ってくれるよな？」

「……はあ、結局そういう事かい」

もちろん言葉通りには受け取るべきじゃないだろう。ここは良くても押し売りの借りを貸した貸さないで後から難癖でも付けてくるか、悪けりや路地裏にでも連れ込まれて身ぐるみ剥がされるか。

いずれにせよ愉快な相手に絡まれたとは言えなさそうだが、さてどうするか。

「おつと変な気は起こさない方がいいぜ。痛い目に遭いたくなかつたらな。——なあ、オメエら？」

考えていると、男は背後の人ばかりに向かつて呼びかけるように声を上げた。

するとその中から二、三人、ニヤニヤと薄ら笑いを浮かべた連中が示し合わせたようにこちらへと寄つてきた。どうやら一丁前に仲間がいたらしい。

「ぐへへ……」

「おつ、よく見りやフードの方は女じゃねえか」

「どうしてくれましようかね、兄ィ？」

しかし——ふむ。

落ちていて周りの様子を見てみると、そう不味い状況でもなさそうだ。

何となくだが、こいつらの言い分がこの場にいる全員の総意つて訳ではない……：ような空気だ。どちらかと言うと「またか、あいつら」って風にただ呆れて見てるだけのように感じる。

つつても誰か助けに入ってくれるような気配がある訳でも無く、要はポツと出の余所者にわざわざ時間を割くまでの事はしない、という姿勢で静観を決め込んでいるのだから。

つまり……ここで何が起きても、余程の事じゃなければ咎められる事は無さそうだ。

「へへ、女連れたあ良い身分だな？　ちよいと”貸して”くれりやあ見逃してやつても

……あ？」

下卑た視線を向けてプロメステインの方へと伸びたスキンヘッドの男の手を、俺は横合いから掴んで止めた。

「テメエ、ぶちのめされてえか!!　この……」

ぐわんツ!!　と。

俺よりも二回りほど大柄な男が、体ごと空中で回転しながら足元に勢いよく叩き付けられた。

「はっ……っ？」

誰の物だろうか、息を呑む音だけが微かに聞こえる。

一瞬で静寂が支配したその場において、俺は肩に掛けたままの杖を握りながら薄く息

を吐き、棒切れでも振り回すかのようにならなうに男を地面へと叩き付けていた。

……いやあ、土属性の身体強化様々さまざまって感じだな。元のフィジカルが雑魚な上に過剰な腕力を取り回す技術も無いから多用は無理だが、一瞬だけならこれぐらいの事はできる。

そして、忘れず杖から手を離して効果を解除した直後。

「ぐぼ、あつ!?!」

ぶつ倒れた男の顔面に向けて、爪先を垂直に立てた蹴りを思い切り入れ込んだ。

ぐちゃつ、という肉を打つ不快な感触が足を伝う。どこから溢れたのかも良く分からん血液がびちゃびちゃと飛び散るが、んなもん知った事ではない。ここで重要なのは、俺のことを「同じ人間を全くの躊躇なく傷付けられる人間」と認識してもらおう事だ。

そうであるか、あるいはそうでないかを示す示さないとは意外と人に与える印象が違うらしい。今まで誰で試したって訳でもないが、現にそれを踏み越えてみて自然と理解できた事の一つでもある。

「ひ、ひいっ」

案の定連中は俺に立ち向かってくるほどの勇気がある訳でもないようで腰は引けているが、さりとて目の前に血だるまとなつて倒れている仲間を放つて逃げ出すか否かは判断に迷っている所らしかつた。

ああもう面倒くさいな。どうせ来ないんだからさっさと消えろよ。若干の苛立ちが募ってきた――

「消え失せろ!!」

辺りで、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

そんなら最初から絡んで来るなよな、全く。

「大丈夫なんですか？ あれでもこの市民らしいですよ」

「周りを見ろよ、これぐらいなら割と問題なさそうだ。……噂にはなつちまうかもしれないけどさ」

「貴方が言うならそうなんでしょうね。いえ、私が少し彼らと付き合つて事が丸く収まるなら別に構いはいしませんでしたが……」

「……お前さあ、そういうところマジで直した方がいいぞ。お前らは本当に問題ないのかもしれんけど」

……たまたま俺がこいつと体の関係が出来たからって彼氏面なんてするつもりは毛頭無いが、それにしてもその発言はあんまりだぞ。

まあ、そんなこんなで異種族の貞操観念をどうにかするのは果たして可能なのかどうか考える傍ら、俺はさっさと場を後にしようと思いを進め始めた。

と、いう所で。

「いやあ、良い暴れっぷりだったじゃないか！」

一瞬、どこから声が聴こえたか分からなかった。というのもそれは俺の腰あたりの高さから発せられたかららしく、視線を下に向けてみて納得した。

声の主はドワーフ族らしき少女だった。種族特有の褐色に加えてざんばらにした赤髪が目に入る、ぶ厚いゴーグルを首元に掛けた作業服の彼女は人好きのする笑顔を俺たちに向けてこう言った。

「そっちの嬢さんもまるで動じてないって顔だ。肝が据わってるねえ。……あたしの名前はマクニア！ さっきのアイツらじゃないけどさ、ちよつと飲みにも付き合ってくれないかい？」

第20話

マクニアと名乗るドワーフの誘い。それに俺たちは結局乗ることにした。

いずれにせよこの町の事を知るためには人と関わっていくしかないし……それに、一度は余所者の俺らを見捨てようとしていた癖に特段悪びれもせず話しかけてくる、その凶々しさに少し興味を惹かれたというのもあるかもしれない。

ともかく、案内された先は騒ぎのあつた場所のすぐ近く。同じ広場の中にあり、道に面して数多く横に連なる煉瓦造りの建物の中の一角だった。

少し妙だったのは、酒場と思われるその建物の出入り口の扉が最初から大きく開け放たれていた事だった。どうも元から開放しているような雰囲気でもなく、何があつただと気になって訊いてみればマクニアはしれつとこう言つてのけた。

「ああそれ？ あたしがさつき出てきたからだよ」

マジかこいつ。偶然あの場に居合わせたんじゃないやなく、元からここで飲んでいた所に外の騒ぎを聞きつけてわざわざ飛び出してきたらしい。

大した野次馬根性だと呆れる俺たち二人をよそに、未だに何がしたいのかいまいち不

明なドワーフ娘は勝手知ったるという様子でずかずかと店内に上がり込んでいった。

「やあやあ、席はまだ取つといてくれてるかい？」

「えっ？ もう全部片かたしちゃいましたよ。急に飛び出していつちやうんですもん」

「な、な……あたしのお酒は……」

「もう遅いです。頼み直しなさいな」

いや当然だろ。店の人と思われる俺より少し年上ぐらいの女性の言い分へと全面的に同意する傍ら、がつくしと項垂れるマクニアにさっそくプロメステインが説明を求めた。

「それで？ 私達を連れてきた理由とは一体何ですか？」

「……り、理由か。確かにそうだけど、まあとりあえず座つとくれ！ ここはあたしの奢りだよ」

変なところではケチなくせに意外と気前がいいな。ありがたい話ではあるので素直に感謝しておこう。

「飲め飲め！ あたしは人が飲んでる所が見たいんだ！」

「アンタはもう既に酔つ払つてるだけだろ……ま、醸造酒があれば頼もうか。あー、ジェーンはどうする？」

「遠慮しておきます。私、お酒がダメなので」

「ちえ、つれないの」

つまらなさそうに口を尖らせるマクニアだが、やや幼さの抜けきらないプロメステインの外見年齢も相まってかそれ以上何かを言ってくるという事はなかった。

背丈がほとんど一樣なドワーフという種族柄からだろうか、見た目で歳を判断するには人間以上に慣れているのかもしれない。そんな益体もない事をつらつら考えながら酒を待っていた時だった。

「しかし、まあ大した腕つぶしだったじゃないか？ ジェイルんとこの坊主どもの泡食った顔は傑作だったよ」

「知り合いだったのか？」

呵呵大笑といった様子で言うマクニア。正確には俺の腕力なんざ有って無いようなものだったが、そこは別にいい。

「いんや、連中のツラの方が知れているのさ……要は悪目立ちしてるってだけの話だがね。かわいそうに、あんな顔にされちゃしばらく物も食えないよ」

「あれに後ろ楯がいるって訳でもないだろ。後腐れさえしないならもう俺の知った事じゃない」

「へえ……にしても随分と喧嘩慣れはしてるみたいだ。命のやり取りをしてきたのも一度や二度じゃないだろ」

「想像に任せるよ」

席に出された発泡酒らしき飲みものに口をつける。ジョッキになみなみと注がれたビールにも似ているそれは俺が知っているものより苦かったが、喉を通る時の具合は悪くなかった。いついかなる時だろうと酒はうまいって事らしい。

グツと一つ景気良く呷る俺にマクニアはヒュウと口笛を吹き、頬杖について横目でこちらを見ながら話を続ける。声色に反して探るような目付きだ。ここからが本題、という事だろうか。

「……にしても、あの小悪党だつて獲物を見分ける目はそれなりにある。おのぼりさんつてのは本当なんだろう？ 長いこと滞在するつもりなら尚更、この町じゃあ仕事がないと食つてはいけないねえ」

ふむ……ただの善意で近付こうとした訳ではなかったか、流石に。荒事に慣れた、最悪いなくなつても特に問題はない余所者を囲い込みたがるだけの事情がコイツにはあると。

「なるほど、そういう筋書きか」

「飲み込みが早くて助かるよ。それで、頼まれてくれるかい？」

「内容による」

「(イ)もつとも」

さながら露店の品物を披露する店主のような顔をして、くつくつと笑うマクニアは「仕事」の概要を説明してきた。

「言つてしまえば……そう、治安維持の一環つてやつかな。悪どい商売で幅を利かせてる連中をちよいと小突いて黙らせたくてね」

本当の事を言つてるかどうかは分からんが、思ったよりは真つ当な内容だと少し驚きながらジョッキをぐいっと傾ける。

「ん……俺達をけしかけ嚇けようつていう奴らは一体何をした？」

「ま、そこはしつかり訊いてくるさね」

当然。あえて口には出さないが、ここで良いように利用される形で変な相手にぶつけられちゃあ目も当てられない。

「奇しくも、つて言えばいいのかね。今の君らと同じような立場の弱い移住者を囲つて不当に働かせるつて事件が横行してるんだ。最近是他所から移つてくる人間も増えてきたからねえ……時流つてやつに乗つたやり方なのかもしれないけど」

そう言つて憂いを帯びたような溜め息を吐くマクニアだが……まだ分からない事がいくつもある。それがはつきりしない事には首を縦には振れないな。

「だけど相手が不当だつて言うなら、それこそ順当に町のトップにでも掛け合つてみた方が良いじゃないか。わざわざ俺達みたいな、信用できるかも分からない流れ者を捕ま

えてまで独自に動く事はないんじゃないのか？」

「ああ……まあ確かに、それはそうだ」

「大体な、この件に関してアンタはどういう立ち位置だ？ 善意で動いてる……つてのは違うとして、あるいは単純に向こうの存在が不利益になる、つてところか？ まあとにかく、そつちの思惑が掴めない内は協力できないぞ」

面と向かつて、自分にとつて有利となるように立ち回る。何年か前まではヨロギの中で成り上がるまでに嫌というほど経験させられてきた事だが……くそ、ここ最近は全く必要ない技術だっただけに緊張するな。

右も左も分らない土地、掘り所を作るのは大事だが、それ以上に慎重に動かなくてはいつ足を掬われるか分からない。

「たはは、参ったね。結構なやり手じゃないか……思惑、つて言われるとな。ちよつと言いにくい所もあるんだが」

「聞かせてくれ」

「私情、つて事じゃダメかい？」

「……………」

「あー、そう怖い顔をしないでくれよ。こつちには上の連中より先に動きたい事情があつて、君らはそれを手伝つてくれる。これで勘弁してくれないか？ 報酬はきちんと

払うから」

さつきまでの陽気な印象は何処へやら、浮かない顔で俯くマクニアを俺はじつと見つめる。

……まあ正直、彼女が嘘を吐いているようにも見えないんだが。意図的に情報を隠している気配はあれど、自分の利益のために他人を陥れようとまでしている訳ではなさそうだ。

俺の勘はけっこう当たる。だからそう易々と信用する……とまではいかないが、今の所はそれで納得する事にした。

「……言いたい事はあるが、それなら二つだけ約束してくれ。まず現場には俺とジェーン、それとマクニア。お前も同行してもらおうぞ」

「はなっからそうする気だったよ。あたしも直接関わるように動くとなれば裏切ろうにも裏切れないからね。だからそこは安心しとくれ」

「よし。それと……これは俺たちの本来の目的だったんだが」
「ほう」

「どうにかして、”ゴールド火山”に入りたい。このまま西に真っ直ぐ歩いてそのまま行けるなら問題ないが、もしもこの町で何かしらの手引きが必要になってくるんだったら協力してほしい」

これはまだ気の早い提案かもしれないが、一度どこかで提示しておく分には恐らく問題ないはずだ。ここで円滑に話が進みさえすればぐつと楽になると考えながら返事を待つも、返ってきたのは想定していたものより幾らか気楽な承諾だった。

「ふうん……? 何だつてあそこに行きたがつてるのかは知らないけど、ま、それぐらいならお安い御用さ」

「助かるよ。それで場所と時間は」

「あたしが直接案内するから場所はいいとして、そうだな……明日の晩中には事を済ませたい。急で悪いけどね、奴らの居所は上にも割れてんだ。まだあと一日二日で動くて事は無いだろうけども」

「明日の晩? おいおい、本当に急じゃないか。まさかとは思うが……行き当たりばつたりの計画じゃないだろうな」

「そ、そんな事ないつて! 誤解だよ!」
「どうだか。怪しいもんだと思うぞ俺は。」

「ふう……」

……しかしまあ、何はともあれ今後の活動の目処は立った。気を張り詰めてこんなに話したのは久々だな、喉が渴いてきた。

早くも底が見えつつあるジョッキの酒を喉に流し込み、そういえば、ふと気が付く。

二人でこうやって話し込んでいたが、さつきからプロメステインがやけに静かだ。アイツも普段から他人と話すのに慣れてないんで黙ってるのに違和感が無かったが、何も頼んでいなかったのもあるし暇な思いをさせてしまったかもしれない。

退屈そうに足をぶらつかせる連れ合いの姿が容易に思い浮かぶ。なんて、そこまで考えた所で――

ガタン、と。

何かが転げ落ちるような音が、そこから聞こえた。

「えっ?」

気の抜けたような驚きの声が思わず漏れ出る。ジョッキから口を離しながら、床板に鈍くぶつかるようなその音の方向に目を向けると。

「なっ……」

いつにも増して顔を青くしたプロメステインが、そこに力無く横たわっていた。

「お……おい、どうした! 何が……!」

「ううっ……」

苦しそうに呻き声を上げる様子を見るに意識はあるらしいが……何だ、どうしちまつたんだ!? 今までお前が調子を崩した事なんて唯の一度も……!

「どいてー!」

マクニアは混乱の最中にいる俺を突き飛ばし、乱れたプロメステインの赤髪をかき上げてその額に手を当てる。

顔色を窺うように覗き込んだかと思えば一つ頷き、突然の事態に当惑するスタッフの女性に向かって声を大きく張り上げた。

「アンネ! 確か二階は空き部屋だったね? 借りるよ!」

「い、いいですけど……」

「ほら、ぼさつとしてないでツレさん担いできな!」

「あつ、ああ!」

くそ、何が起きてるのか分からないが……ここで俺がいつまでも呆けてる訳には行かないはずだ。

力無く俺の肩にもたれ掛かるプロメステインを運びながら、俺はマクニアの案内に従って階段を上り始めた。

「なるほど……これなら大体予想はつくよ」

空き部屋のベッドに横たわるプロメステインを観察しながら、マクニアはポツリと呟いた。

「……どういう事だ？ 流行り病の類じゃないだろうな」

「いんや、そんな大層なものじゃない。何人も見てきたから分かるんだけど、余所者の中にはこの町に来て少ししてから調子を崩す奴がたまにいる。その時の症状に似ているね……もつとも、ここまで酷いのは見たことないが」

顎に手を当てながらぶつぶつと考え込む。邪魔するようで申し訳ないが、俺としては口を挟まずにはいられない。

「そいつは何が原因なんだ……？ 前例があるなら対処の仕様もあるだろ」

「……外を見てみな」

言われるまま窓の外に視線を向ける。下は特別言う事もなく市場が賑わっているだけだが、遠くの方には工場と思われる建物から伸びる煙突が黒い煙を濛々と吐き出している。

「空気が悪いんだろうね。普段から慣れてるあたしらにとつちや問題無いんだが、遠く

の綺麗な土地から移り住んできた連中にとつては具合が悪くする程の事らしい」

……そうか、プロメステインの故郷は天界だ。天使の住む異界がどんな場所になつて
るのは想像もできないが、少なくとも地上よりは余程清浄な空気に満ちているだろ
う。その中でも体が弱い方だというプロメステインが煙にアテられたとしても不思議
じゃない。

「しかしどうする？ 君の口振りじゃあ彼女も戦力の内に数えてるつて風だったじゃないか」

不安そうにぼやくマクニアだが、本当にどうしたものか。命に関わる程の事ではない
かもしれないが、彼女が動けないようではどうにも……

「あ……そういう事でしたか……」

と、プロメステインが眩きながら目を開けた。

「だ、大丈夫か？ 無理して喋らなくてもいいぞ」

「いえ、大丈夫です……フィルターのアジャストは……済ませましたから……」

「はっ？」

唐突に耳に入ってきた横文字に理解が遅れる。マクニアも「何？」つて顔をしていた。

しかしよくよく見てみると、何と表現すればいいのだろうか……プロメステインの存在感が今までより少し希薄になっているような気がする。

ついでに言えば顔色もどことなくマシになっている。……んん？ フィルターを調整って……

（え、何？ 空気の中で体に悪い成分だけすり抜けてんの？ 魚のエラ呼吸みたいに？）
相変わらず気分は悪そうだ。だがさつきまでよりは随分と楽そうにしていやがる。こんだけ急に具合が良くなってきてるって事はそれぐらいしか理由が思い当たらない。

目をぱちくりさせているマクニアには申し訳ないが、どうやらこれ以上心配する必要は特に無い……のか？

「あー、まあ何だかんだで……大丈夫らしい。本人がそう言ってるし」

「そ、そうかい？ 急に倒れるもんだから驚いたよ……」

何かおかしいとは流石に感じていそうだが、当人らが言うなら、という形で一応納得する事にしたらしい。

「どうだい？ 明日の仕事には嬢ちゃんも付いて来れそうかな？」

「一晩も寝れば……治るか……」

「本当に？ ……いやまあ、それなら別に良いんだけどさあ」

「ま、まあ！ 俺らが居たってお前もゆっくり休めないだろ？ 今んとこ大丈夫そうだ

し、一旦下に戻るわ！ 何かあったら呼べよな！」

やはり腑に落ちなさそうに首を傾げているが、これ以上怪しまれてはいよいよプロメステインの正体がバレかねない。ここはそれとなくマクニアの方を引き離しておくのが吉だろう。

いまいち釈然としないらしいドワーフっ娘の小さな背中を後ろから推す形で部屋を出ようとした、その時だった。

「ああ……マクニアさんはいいですけど、貴方は残ってください……」

「え？」

「そろそろ精を吸わないと……魔力が……」

「あッ、いや!? 今のはちよっ、ちがっ!?」

は、はあ!! ふざっけんなテメエこの……!!

せめて二人きりの時とかに言えつつつてんだろそういうのは!!

「……へえー、そういうこと」

っーかソレやめろ何かを察するように頷くな！ 生暖かい視線が痛いんだよ!! あ

あもう、どう收拾付けりやいいんだこれ!?

「なるほどね、最初っから何か妙だと思えば……」

「うっ!?!」

「だーいじよーぶ。確かにこの町ではドワーフ以外の魔物は目立つけどさ、嬢ちゃんの事は黙つといてあげるよ」

「……?」

な、何だか変な勘違いをされている気がするが、向こうに伝わった文脈からするとそう捉えられるのが妥当なんだろうか。

よくよく考えてみれば都合の悪い誤解ではないし……いや俺としてはそれ以前に根本的な問題があると思うんだが……ええい、どうにでもなれッ!

「は、はは。いやホントに……魔物と旅してるとだな、こういうのが普段大変で……」

「ま、そりやそうだろうね。……ああ、アンネにも話は付けとくから心配しなさんな。よく酔ったドワーフが男引っかけて泊まってくモンだからね、こういう事は向こうさんだつて慣れてるのさ。……その代わり! こっちも明日は期待してるからね?」

んじゃ、ごゆっくり。

そうしてボタンと閉められた扉を見つめたまま硬直していると、ぐったり頭を枕に預けたままのプロメステインが「聞かれる前に言いますけど」みたいな声色で弁解なんて

してきやがった。

「出立は明晩、という話でしたので……クリティカル・エクスタスを考慮すると、そろそろ始めないとまずいです。時間が惜しかったんですよ……許してください……」

「ぐうっ……!」

確かにそうだ。あの意味わからん倦怠感を少しでも抱えたまま敵と戦える自信があるかと言われると……そりゃあ無理だが。

「……いやまあ、百歩譲ってそれは良いとしてだな、お前の方は平気なのかよ。まだ結構調子が悪そうだぞ、無理してるんだったら……」

「お気遣いは感謝しますが、いざという時に……貴方の命が危ぶまれる方が、耐えられませんか」

「……………」

そこまで言われると。

もう、選択肢とか無くないか……。

「わ、分かったよ。すりゃあ良いんだろ……」

「うー、お願いします……」

何だか釈然としない物を感じつつ。俺たちは異国の地にて、久々となる情交を互いに結ばんとするのであった。

第21話

起きた時には日が傾きかけていた。

すっかり寝入ってしまったおかげで窓から見渡す外の景色も若干の赤みを帯びていた。あれから一晩を跨いだ上でという前提を思わず忘れそうになるが、自分でも驚くほどの長い間体を休めていただけあり体の調子はさして問題無さそうだった。

昨日はちよつとした事故で想定以上に精気を吸われてしまったがこれなら今夜の仕事に差し障りは無いだろう。と、見慣れない酒場の一室の天井をぼんやり眺めつつそこまで考えに至った所で――

「……何やってんの?」

頭だけ出して毛布に包まり、部屋の隅に向かつて体育座りを決め込んでいる赤髪天使の小さな背中が目に入った。

ベッドの端で思いきり肩を落としながら縮こまっている。寝起きの俺にすら分かるぐらいのどんよりオーラが立ち込めていて、というか見るからに凹んでしまっているようだった。それはもうベッコベッコに。

「私は……私は、なんという事を……」

「ああ、うん……」

それというのも、昨日の行為中に不慮の事故によってプロメステインが酒でベロベロに酔っ払ってしまった事に端を発するのだが。

信じられないほどの酒癖の悪さから性格まで豹変させたこいつは後先とか一切考えず俺をぶつ壊すぐらいの勢いで襲い掛かってきたのだった。無論、性的な意味で。

もうちよつと気絶するのが遅かったら更に酷い目に遭っていたかもしれない。そう考えると中々にぞつとしないぞ。

思い返すだに身震いしそうになる想像をして微妙な気分で黙っていると、病み上がり
の不良天使は何やら言い訳がましい声色で弁明するようにこう言ってきた。

「いえ、貴方にした事に対して負い目を感じている訳では別に無いのですが……現に
至って平気そうですし……」

「あ?」

「ただその……あんな私を、貴方に見られてしまったのが……」

「……………」

……前半は聞かなかつた事にしといてやるとして、だ。

徹底的に自分本位なものもコイツらしいと言えづらいが、今更そんな事でこうまで氣落ちするなんて少し意外かもしれないな。

「なんだお前、素の口調がそんなに恥ずかしかったのかよ。あのクール系っぽい気取ったやつ」

「いえ、そつちも割とどうでもいいのですが……」

「ええ……」

じゃ何なんだよ。逆にお前、あれが恥ずかしくないうってそれはそれで無頓着が過ぎる気はするけどな。

相変わらず不明な感性に困惑する俺をよそに、しかしプロメステインは自虐的に笑った。

「あの時、私は本当に何も考えていませんでした。それが分かっているながら良しとさえしていたあの時の自分の意識そのものが、私にとって何よりも恥ずべき事だからです」

……考えていなかった、ね。

「ふうん……」

今までの話を聞くに、プロメステインは科学に無理解な天界の住人から散々後ろ指を差されてきたらしい。それこそ自分の故郷を見限ってまで地上で暮らす人間達に興味を移す程度には。

こいつにとつて「考えないこと」は何にも勝る悪なんだろう。事もあろうに、他でもない自分がそんな風になってしまつては、と。

「まあ、言いたいことは分かったけどさ」

けど。

そう、けど、だ。

「……お前、真面目すぎ」

「はっ」

「いやなんつーか、性根はひん曲がつてるくせに堅物つーか。言つちまえば極端なんだよな……」

両手を頭の後ろに組んでぼすんと寝転がりながら、至極当然の事を俺は言う。

「第一なあ。毎回毎回後先なんてのを正しく考えてから動かなきゃいけないようなら、今ここにお前はいないだろうが」

「うっ」

言われるまでもなく、身をもってよく分かつてる事だろうが、考えないで動くつてのは楽しいもんだぞ。お前が嫌ってる奴らがそうやってお前を傷付けてきたからって、そんな連中のために自分を縛るなんて事こそらしくないってなモンじゃあないのか。

「お前はさ、俺なんかよりもずっと先だつて長いんだ」

「……それは」

「だから、何だつてゆつくりやつていきやあいい。どうせ俺らみたいな無法者なんざ思

うさま脇道に逸れていきやあいんだよ」

ここに来るまでの勇み足を考えりや……。むしろ、それぐらいの遊びも入れないなんて方が嘘つてもんだろ。

もちろんプロメステインの信念——科学者として「決して思考を止めてはならない」、それを否定しようつてつもりは無い。ただ俺は俺がこう考えているつて事を嘘偽り無く言っただけ。それでお前の気が少しでも楽になればいいと、そう思っただけだ。

「……物は言いよう、ですね」

疲れたように肩を落としたプロメステインは、毛布を被ったそのまま俺の隣にごろんと寝転がってきた。

「ああ、脇道に逸れるといえは」

「あん？」

「今回の旅が終わった後……私の見立てが正しければとうとう貴方は自分一人で魔法を使えるようになるはずなのですが、すると今までのようにこうして情を交わす必要は無くなってしまうですね……」

「……………」

「何ですかその長い沈黙は」

「ああいや俺は別にそのあれにえー俺がこーいう事に乗り気だったわけじゃないってのはお前も分かっているだろうけどだから別に必要ねーっていうならそれは普通に良いことだって俺的には当然そう思っているしだからなんつーかえーっと」

「? 知ってますけど……」

う、うん。まあそりゃひとまずどうでも良いんだ。それで何だった?

「はい、私としてはその分の時間を”研究などの他にやるべき事に使う余地が増える”と素直に喜ぶべき所だったはずなのですが」

「……………ですが?」

「貴方にとつては傍迷惑な話でしょうけど……この時間は棄てるに惜しい、となぜか思っている自分がいるんです」

……つらつらと、そう語るプロメステインの言っている事が本人にとつてどれだけの意味を持つ事か、それぐらひは俺も理解しているつもりだが。

「こんな事ではいけないと分かっているんです。何も生まない、作り出さない。そんな事のために費やす時間も、思考の空白も無駄でしかない。……でも、私自身が嫌ってやまないこんな私の一側面を貴方が受け入れてくれるというのなら……せめて貴方の前でのだけは探求者としてではない、ただのプロメステインにいる時があつてもいいのかなと……思えてきました」

「そっか……」

ふっと、会話の流れがそこで途切れる。

互いに言いたいことはあるんだろうが言うに言えない微妙な空気が重く漂っているのをひしひしと感じる。いや、それでも。

「あのさ」

「はい」

「前に言ってたあれ、保留にしてた話があったろ」

「ありましたね」

もう随分昔の事みたいに感じるがあれつてのはあれだ。出した精液をどうせ捨てるなら研究だか何だかのために採取させてくれないか……とかいうプロメステインの申し出だ。あの時は普通に断ったんだが……今となつては、っていうか……

……くつそ。建前が無えと素直になれないって、そりゃ俺の事じゃねえかよ。

「うん、まあ……考えさせてくれて言ってたけど、あれな。まあこういう事にも慣れてきたし……貞操観念うんぬんつてやつも今更だしさ、俺は別に……」

「……いいんですか？」

「あー、それにだな、お前だつてこういう理由を付けといた方が何かとやりやすいだろ。まあそういう事だ」

……正直なところ、自分が何を思つてこんな事を口走つていいのか正確には分からない。いや全然分からん。本当に。

ただ少なくとも確実なのは“もう少しだけこの関係が続くんであろう”という、その一点のみ、だ。

「ゆうべはお楽しみ——だったみたいじゃないか？ 随分と」

「うるせえ」

誰の依頼のせいで急にあんな事させられる羽目になったと思つてんだと胸中で愚痴りながら、早くも薄暗くなつてきた街中で俺たちはドワーフのマクニアと落ち合った。

これから荒事に向かうだけあり、昨日とは違つて何やら物騒な得物を背負っている。

その小さな背丈と同等ほどもある戦鎚を事も無げに担いでいるようだった。ともすれば不意に潰されてしまいそうなアンバランスさではあるが、やはり魔物というだけあり腕力は相当のものらしい。

「うんうん、嬢ちゃんもすつかり良くなつたらしいね」

「ええ、おかげさまで」

「よし。それじゃあ二人とも、ついてきな」

例の悪党とやらの根城に案内されつつ体の具合を確かめる。これから戦闘があるという話だが、案外調子は悪くない。やはり一晩ぐっすり眠れたのが良かったんだろう。クリティカル・エクスタスの倦怠感には既にほとんど消えていた。

「で、俺らは結局どこ向かってるんだ？」

なんとなく手を握ったり開いたりして握力を確認しつつ、勝手知ったるといった様子で路地裏に足を踏み入れていくマクニアへと目的地について質問した。

「見ればすぐに分かるさ。とにかく悪趣味な建物で、日が沈んでもその中は昼間みたい
に明るいらしい。——ほら、あそこだよ」

そりゃあ何とも分かりやすく結構な事だ。指し示された方向を見れば、そこからは確かに夜の暗がりを暴くような明るさが……

「燃えてません？」

燃えてた。

いや、普通に建物が燃えていた。

「……………」

プロメステインの率直な指摘を最後に一行は沈黙に包まれる。現在進行形、すんごい勢いで業火に巻かれている館をマクニアは指で差したまま動かないし、啞然としているという意味では俺も似たようなもんだった。

「凄いですね、周りに飛び火する気配が全然ありません。風向きとかを計算して放火したなら相当考えられてますよ」

なんか一人だけ全く動じてない奴がいるが、こいつは自分の事以外基本的にどうでもいいと思ってるだけだ。参考にもならん。

「…………いやこれ、どうすんの？俺ら帰っていい？」

「ま、待つておくれよ。これって…………や、まさかそんな…………」

この依頼に果たして収拾がつくのか否かがもう不安になってきた俺に対して、マクニアは何やら悪い予感でもするようにブツブツと独り言を呟いている。

何をそんなに顔を青くしてるのかは知らんが、ともかく襲撃対象がこのザマではどの道目的は達成したって事で良くないか。それより俺としてはこれ以上ここをうろついで面倒ごとに巻き込まれる方が嫌なんだが……

「……あれ？」

「どうした、何かあったか？」

「見てくださいよ、中から誰か……」

と、プロメステインが言い終わるか終わらないかの瞬間。バキバキッ！ という異音と共に館の中から誰かが吹き飛ばされてきた。

酷い火傷と切り傷を負っているのが遠目からでも分かる。極端に小柄な体躯から恐らくドワーフであると思われる女はその身長に見合わない華美な格好を汚れと血で台無しにしなが、息も絶え絶えといった様子で走り去っていった。

「あいつ、確か例の組合の一人だよ。大枚はたいて雇った用心棒にいつも囲まれて、それなりに悪名高い奴だったんだけど……」

「んな事言ってる場合じゃねーぞ。今んとこは火の手も回ってこなさそうだけどよ、さっきので建物が崩れ始めてる。そしたら流石に危な……っ？」

大穴が空いた中から、ゆらりと人影が揺らめいた。

炎に包まれているにしてはやけに緩慢な動きで一瞬見間違えかと思つたが、それは確かに人だつた。

「くそつ、見えちまつたら流石に寢覚めが悪いよな……」

あの中に入れた連中がどんな奴かは知らんが、この惨状は流石にやり過ぎだ。せめて目に入つた範囲ではどうにかしてやろう……と、肩に掛けた長杖を掴んだ所で。

ガラガラッ！ と、一際大きな瓦礫が人影の上に落ちていった。

「あつ、ぶ——！」

俺の魔法じゃ遅過ぎる、というか遠い。まず距離が足りない。それでも一応修行中の身なわけで、そんな咄嗟に何でもできるほどの引き出しは持つていない。

誰かが死ぬのはいい加減に慣れてるがな、流石に焼死体だか圧死体だかもよく分からん亡骸が出来上がる瞬間なんてのはあまり見たくはないぞ。かといって目を背けたりする事もできず、そんな何もできない時間が無駄にスローに流れていくような感覚に陥りつつあつた——

その、直後。

ズパアッ!! と。

「はっ……っ！」

真紅の炎が、落下する瓦礫を真つ二つに両断した。

炎が、物体を切断する。見習い魔法使いが一体何を言うのかという話だが、その余りに荒唐無稽な光景を目撃した事で俺は言葉を失った。

「嘘、まだ……早すぎる。司祭長クラスがこんなに早く動いていいはずがないだろ……」
マクニアが何かを呆然と呟いた瞬間、人影の視線がこちらを向く。

燃え盛る火の中を平然と歩いてくるのに不思議と熱を感じている様子すらない。まるで炎すら体の一部の如く『従えている』ような錯覚を覚えてしまった。

紫と金の刺繍があらわれたフード付きのケープのような衣装を頭から被っていて全体的なシルエツトも分かり辛いが、骨格と背の高さから恐らく男のように見える。服装はマクニアの言う通り司祭を思わせなくもないが、右肩に担ぐ物々しい大刀がそのイメージを綺麗さっぱり掻き消していた。

俺よりも幾らか歳上のように見えるその男は、怖気の走るような鋭い眼光をフードの奥から覗かせて口を開いた。

「……何だ、マクニアか？ オレの仕事の邪魔をしようっていうなら残念だったろうが、既に終わった。見ての通りにな」

「エリック……これも姉さんの差し金かい。四大精霊の司祭長サマを随分こき使ってるみたいだね、あの愚姉は」

やばい。

全っ然話について行けてない。

「……面倒くせえ……」

やっぱり無理にでも事情を聞いた方が良かった。そんな確信と後悔を抱きながら、想像を遥かに上回る「複雑な事情」に巻き込まれる覚悟を嫌々ながらも決めるのだった。

第22話

エリック、と呼ばれていたか。

全焼しつつある館からゆっくりと歩み出てくる男は、俺たちの目の前で鬱陶しげにフードを脱いだ。

はらりと、想像以上の黒束が溢れ出る。うなじから掻き出すようにそれらを横へ払う動作によって、男のそれとは思えないほどに艶のあるサラサラとした髪は腰に届くほどの長さを伴って夜闇に広がりその背中へと纏い付いた。

それだけの長髪を外に出せて幾分か気が済んだのか。大刀を担いだ紫金の司祭は俺たち二人に胡乱げな視線を向けつつ、恐らく旧知の間柄であろうマクニアに向かつてこう言った。

「オレが動けないだろうと高を括って連中が油断していると踏んだか、余所者を使つて奴らを抑ええようとでもしていたな。狙いは確かに良かったが、そう思わされる事も含めてローレンスの筋書き通りだろうよ」

「……私が嗅ぎ回つてたのも、あの人には筒抜けだったつてわけか」

「そう聞かされてはいた。協力者については今知ったがな……ここ二、三日の内に囲い

込まれたって所だろう。違うか」

堅い口調で淡々と話す長身の男はどうやら俺に向かつて訊いているらしかった。ただの雇われ、何も聞かされていないんで事情なんてさっぱりだと素直に白状しても良かったが……こつちも言わなきやならん事がある。

「その前に、あれに降りてきてもらおうか。覗き見されながらじゃあ決まりが悪い」
「え？」

「……………」

後ろ手に指差した方向をプロメステインが見やるが、目で見たところで暗くて碌に見えやしないだろう。だが視線は感じる。どこかの建物の窓からこちらを見下ろす気配は隠しようもない。

「——やれやれ、やつぱり横着はできんね」

すたつ、と。

人間なら簡単に足を挫いてしまうような高さから気軽な調子で飛び降りたそれは、こちらへと近づいてくるにつれ徐々に姿が鮮明になっていく。

いまだ燃え上がる炎の明かりに照らされたるは浅黒い肌、そして目の覚めるような銀

色の髪か。辺りの闇色に溶け込んでしまいそうな黒のドレスを身に纏った眼鏡の女は、その背丈の小ささからしてやはりドワーフのようだった。

「まずは非礼を詫げるよ。そして改めて……この町の顔役、ローレンスとして歓迎しようじゃないか。鉄と焰のよすがたる『ドウエルガ』にようこそ、流れ者さん」

「顔役？　つまり貴女は女王ということですか？」

プロメステインが口を挟む。女王という単語は前に聞かされた事があるぞ。

その種族の中で最も強力な力を持つ妖魔が当代に一人だけ選出され、一族のすべてはその女王に従わなくてはならないのだと。そういつた習わしが魔物にはあるという。

一族の代表を名乗る魔族に対するもつともな疑問と言えるそれに、しかしローレンスの返答はあくまでも淡白な物だった。

「少し違う。他で言うところのクイーンと目せる存在をウチらは持たないんだ。ま、似たようなものと捉えてもらって構わんが……ああ、もうこんな時間か」

ふと気付いたように何かを見上げる。その視線を辿っていくと、町の中心に聳え立つ時計塔の針がちょうど日の変わり目を差している所だった。

「今日みたいな事があれば察しが付くと思うがね、これでウチらは結構忙しいんだ。その愚妹に引きずり回されて良い迷惑だろうが、長々と説明してやれる時間は無い」

「っー」

「ここらで失礼させてもらおうとするよ。——エリック、行くぞ」

「了解」

「ま、待ってよ！ 姉さん！」

その場を立ち去ろうとする二人に、どうしてかマクニアは必死な顔をして食い下がった。

「待ってよ……なんで、どうして私には何も言ってくれないのさ!? 昔はっ！ この町を二人で大きくしていこうって、そう約束したじゃないか! ……おばさんの後を継いでから、変だよ。アンタもエリックも！」

「マクニア」

「正直に言ってくれよ、最近の殺人が……師匠が殺されたのに何か関係があるんだろう!?! それなら私だって無関係じゃ……」

「マクニア」

「……!」

ぞわりと。

横から聞いているだけの俺さえ思わず身震いしてしまうほどの、ぞつとするような威圧感だった。

もはや司祭という肩書きを思わせる気配すら全く霧散させた男、エリックが酷く冷た

い声で言う。

「お前には関係ない。二度と、オレらに関わるな。これからの仕事にも……」

言いたい事は、それだけだ。

そう吐き捨てると、大刀を担いだ司祭はローレンスと共に背を向けて歩き去っていく。残されたマクニアは茫然とその場に立ち尽くし――

「賢者」

俺の口から漏れ出た言葉に、二人はピタリと足を止めた。

「……何だと?」

「名前ぐらいは聞いた事あるか? 最初はネームバリューなんて期待してもなかったが、〃他所の土地から人が移ってくる〃 つつーなら噂ぐらいにはなってるかもと思ってな」

ああくそ、すまんプロメステイン。また自分から面倒事に首を突っ込もうとしてるのは流石に自覚してる。してるから、俺の後頭部を「またいつもの病気かよ」みたいな目で見るのはやめてくれ。

なるべく澄ました顔を維持しつつ内心で冷や汗をかいていると、こちらへと振り返っ

たローレンスが感情の起伏を感じさせない声で言う。

『東方の賢者』……なるほど。また大した輩を引つ掛けてきたもんだね、マクニア」

「はっ、え？」

「隠し事をしてたのはお互い様つつーことだ。それで……さつきから聞いてりや、またキナくさい台詞を吐いてたじゃねえか。『殺人』、それに『仕事』が何だつて？」

確かに俺のやつてる事は合理的じゃないかもしれない。あまり長居もする気はないこの町で、こんなあからさまな厄介事の為に一々足を止めていられるほど俺たちは暇じゃない。

だがなこの際、んな小さい事は関係ねえんだ。『少し関わっただけだろ』って言われりやそれまでだけどな——

「お前らにとつてのマクニアが何なのかは知らん。取るに足らんようなイチ市民にしか過ぎなくて、その頭ん中にある高尚な考えを伝え聞かせてやるほどの価値も無いと思つてるのかもしれないが」

なあ、マクニア。

仲間にそんな顔をされて、ほっとける訳が無いだろうが。

「——だがよ、俺も一緒に付いてくるってんならどうだ。この町の外にある全てを創り上げた男をついでに抱き込みめりや、そつちにとつても幾らか甘い汁を吸う見込みがあるとは思わねーか」

勿論それは言い過ぎだ。自分で言つてて気が引けそうになるぐらいの大言壮語——が、自分を大きく見せるにはこれぐらいで丁度良い。

背景を知っているなら尚更、俺の正体は確実に無視できないほど大きく映つてくれるはずだ。何にせよこれで一枚こちらの手札を切つちまつた訳だが、さてどうなるか。

「……………ふむ」

足を止めたという事は、少なくとも一考に値する話だとは思わせることが出来たのだろう。顎に指を当てて暫し考え込んだ黒ドレスのドワーフ娘は、その眼鏡の奥の瞳をぴたりと閉じながら返答を寄越してきた。

「逆にだ。仮に君を引き入れるにしろ、その愚妹まで付いてくるというのがウチらにとつてまず論外というのも、そも君が“賢者”の名を騙る詐欺師であるかも分からないというのも一先ず置いとくとしてだね」

「……………」

「ここに来たばかりの君がどうしてここまでする？ 町の顔役に貸しを作ること、最初からウチらに近付くこと。何が目的にしても——それをわざわざ巻き込んでやる義理

は無いだらうに」

「バカ言えよ。俺からすりやお前らよりマクニアの方がよほど信用できる。ここに来ればかりだからこそ手元にある伝手を途切れさせたくないってのは、義理がどうこう以前に理由として十分だろ」

「……うーん。中々どうして弁が立つじゃないか」

そう言つて困つたように頬を掻く。ちらりと傍のエリックに視線を向け——それでも冷徹に言い放つ。

「結論から言おう。ウチは、この町にいるエリック以外の誰も遣わない。なんとかマクニアを関わらせてやろうつていうその恩情は……最初っから突っぱねさせてもらうとするよ、残念ながら」

「……………」

「だが君ら二人は別だ。君らが誰も連れ添わずに来るとしたら、その時は歓迎しようじゃないか」

「……もし断つたら?」

「それもいいさ、ウチは余所者にまで多くは求めんよ。——あの時計台で待つ。明日の夕刻まで来なければ、もう二度と会う事は無いだらう」

駄目だ、これ以上は何も掴ませてくれそうにない。奴の中では完全に話は終わりなん

だろう、そのままこちらを見ることも無く歩き去っていくが……まだ一つ解決してない事がある。

「待てよ、あの炎はどうすんだ。アレもお前らの仕業なんだろうが、今は良くてもこれから火の手が回らないとは限らな、」

「……………」

「っ?」

俺の言葉遮るように。

ゆっくりと大刀を握る腕を真横に伸ばしたのは——黒の長髪をゆらりと散らす司祭、エリックだった。

「刀で斬る相手を選べる……それが一流の剣士には出来ると教わってきたが」

「何を言ってる、」

「オレにとつての『一流』は」

ザクウツ!! と。

振り上げた刃を地面に突き立てる音が響いた次の瞬間、屋敷に燃え広がった炎が一片も残さず消え失せた。

「燃やす相手を選べる」ってことだ。——四大精霊の『火』、サラマンダーの契約者。これぐらいの手品も見せられないと思ってもらっては困るからな」

黒く焼け焦げた廃墟だけを後に残し、そうして彼らは去っていく。取り戻された夜の暗がりもあってか、すぐにその背中は見えなくなっていた。

昇りかけた陽に空が白み始めた頃、俺ら三人は何か機械の整備工房のような建物——マクニアが言うには自宅らしい——に、ひとまず集まった。

大型から小型までの様々な工具がそこら中の棚に詰め込まれていて、素人目にざっと見た感じでは……車の部品か何かを点検するための場所、といったような概観だった。自動車整備士をやった前世の爺ちゃんの仕事場が思い起こされてちよつと懐かしい気分になる。

いやまあ、ここらに車なんてものが走っている所は流石に見ていないし、この推測は全く的外れたものである可能性が高いのだが、今そんな事はどうでもいい。

「そこらへん……適当に座つとくれ……」

ふらふらと足をもつれさせながらソファらしき家具に力無く倒れ込んでいるマクニアは、当然と言えばそうだがかなり疲れているようだった。

部屋の隅に片付けてあったスツールを適当に近くに寄せた俺はそこに腰掛けた。ち

なみにプロメステインは見慣れない工具の数々に早くも目を眩ませてどっか行つた。喜色の浮かぶ上擦り声で何事か眩きながらそこらが無断で漁っているが、俺は元より家主もこの有様では止める余裕も無さそうだった。

「で……お前の姉さんにはああ言われちまった訳だが」

「うん……」

「まず何ツにも聞かされてねー状態であそこまでアドリブ効かせられた俺は普通に褒められてもいいと思うんだが、大将よ。そこん所はどうお考えですかね」

「いや……それは、ほんとそう……」

一にも二にも、何もかも情報が足りてないつてのが本当によろしくない。お前らの事情なんて全く知らされてないんだよこっちは。

一体何から問いただしてやろうかと思考を巡らせていると、その前に、との前置きと一緒にマクニアが言った。

「……そうだよ、君が『東方の賢者』だつて話！ あれは本当なのかい？」

「ああ、あれはホント。俺がそれ」

「な、なあんだ。やつぱり嘘だったん……うええっ!？」

おい、今日び誰もせんような使い古されたりアクションをするなよ。逆に俺が滑つてみたいだろうが。

「……………チツ」

「えっ、な、何？ 今どこでキレたの？ 理不尽な所で沸点が低くない？」

「あ、彼つて自分だけは真人間みたいな顔してますけど意外とそういう所ありますんで」

やかましい。話に入ってこない癖して余計な事にだけ口を挟むんじやねえよ。

……………まあしかし、ここドウエルガで俺はやはり『東方の賢者』とかいう名前で知られているらしい。こつちから見ればそりゃ“東方の”にもなるだろうが、これも新しい発見つてやつかね。しつかし大層な肩書きなこつた……………どうでもいいけど。

「——話を戻すが、何やらのつびきならない事態に巻き込まれちまったようだな。俺らも、お前も」

「……………私は別さ。あの二人にしてみりや、私には巻き込まれてやる資格すらないんだよ」
「だから、そこだよ。俺にはそこん所がよう分からのだが」

「うっ……………」
俺だつてそれがマクニアにとって詮索して欲しくない過去だつてのは薄々察しが付いているさ。

だがもうこれ以上知らない振りをしてやる事はできない。そういう段階はとつくに越えていやがるんだからな。

「話してもらおうぞ。まずはお前と、そして奴らとの関係は何なんだ」

薄明るい朝焼けの光が窓から差し込むのを感じながら、俺は躊躇いがちに口を開く彼女の話に耳を傾けた。

第23話

「最初に言っておくけど、あの人と私は本当の姉妹じゃあないんだ。先代の長だった姉さんの親の、そのまた妹の娘が私。平たく言えば……」

「従姉妹同士か。道理で姉妹ってほど似てないわけだ」

目の前の赤髪活弁娘と銀髪眼鏡のローレンスを脳内で比較しながら、俺はマクニアの語る事情を聞いていた。

「察しが付いてるとは思うけど、二人とも昔はあんなじやなかったんだよ。私たちは幼馴染で、本当の兄弟姉妹みたいなもんだった。でもいつからか……そう、あれは姉さんが町の長を引き継いでからの事だった」

どこか遠いものを見るような目をした彼女の話は続く。

「少しずつ、最初は私たちにもそうとは気付けなかった程に少しずつ、姉さんの様子が変わっていった。どこかよそよそしくて、何があったのかをエリックと一緒に問い詰めても碌に答えは返ってこなかったよ。そうやって訝っている内に……これは最近の事なんだけど」

「殺されたのか、お前の師匠ってのが」

数瞬、息を詰まらせる気配がした。

ピタリと動きを止めた彼女はやがて、ゆっくりと肯首をする。

「機関車……と言つて君らに伝わるかは分からないけど、師匠はこの町にそれを作り出した人だった」

「！」

「おいおい、伝わる伝わらないどころの話じゃねーぞ。そりゃあつてもおかしくはないとは思うが……」

「気の遠くなるぐらいの貨物を載せて走る鉄の塊だよ。これで世界中の物と人を繋ぐんだ、つて楽しそうに言うあの人に私は憧れてさ……そんなあの人が、殺された。突然だったよ、何せ死に目にすら会うことはできなかった」

悔しそうに唇を噛み締める様は、その師匠とやらが彼女にとって本当に大切な人物だったという事実を納得させるのに十分だった。

「これとほとんど同時期だったよ、エリックまでおかしくなったのは。それまで人を寄せ付けなかった姉さんと急に一緒に行動し始めて……情けないけど、何が何だか全く分からなかった。それなのにどんどん置いてかれてるみたいでさ……馬鹿だよ、怖くなつたんだよ。私は」

なるほど、読めてきた。それで俺らを巻き込んだってわけか。

「つまりお前は、二人に認めてもらう為に力を示そうとした。その手段として奴らより早くあの事件を解決しようとしたと。要するにこういう事だな」

「……そうだね。うん、私が知っているのはこれぐらいかな」

「うーん……」

こいつも何も知らされていなかったとはいえ、やはりこれだけでは情報が足りないな。今後の方針を決めるだけの材料は自分の足で稼ぐしかなさそうだな。

「何にせよ日没まで時間はある。できる事はまだ、……っ?」

そう言つて立ち上がろうと腰を上げかけた、その時。

『うっ、うわあああああつ
!!!??』

この家のすぐ外から、恐怖の色に染まった悲鳴が聞こえてきたのは。

往來で遺体が発見された。

どうやら日が昇り、人が出てきた事で大きな騒ぎになったようだった。何があつたの

かとすぐに駆け付けたは良いが……そこで見たものは、俺の想像を超えていた。「なんだよ、これは」

首元を刺し貫くような傷からは未だに血が流れ出ていて、そこが致命傷になっているのは明らかだ。が、そこはまだ良い。

問題は。その男の切り落とされた両腕が地べたに転がっていて、片足に括られた縄で体を逆さに吊られているってとこだ。

「酷えな……」

わらわらと集まってきた人だかりの奥から見ているだけにしろ、その凄惨さは誰の目にも明らかだった。幸か不幸か死体なら見慣れてる俺にとつても胸焼けのするような光景に唖っている、付いてきていたマクニアが呆然とした顔で呟いた。

「そんな、アツシズ。あんたまで……」

「あの髭面とは知り合いか？」

「ああ、人間の中じや私の知る限り一番の鍛冶屋だ。飲み込みが早くてね、ドワーフにも引けを取らない職人だったんだけど……」

「こんな事が続いているってのか、畜生」

遺体の状況を遠目に見る。やはり死因は首元の傷で間違いなさそうだが、だとするとあの両腕は何だ？ 腕を落としてから殺さないといけないなんて状況も考え難いし、逆

さに吊られているのも不可解だ。

まるで見せしめのような殺され方に眉を顰めていると……紫色のローブを羽織った男達が数人、人の山を掻き分けるように進み出てきた。

「あいつらは？」

「……ここらで崇められてるサラマンダーは武人とやらを重んじる性格でね、一口に司祭といつても腕っぷしが必要になってくる事もあるらしいんだが」

なるほど、確かに腕利き揃いみたいだな。ヨロギ村を守っている本職の戦士も前世を生きてた俺からすりや十分凄いが、たぶん奴らはそれ以上だろう。あれのトップがあのエリツクつてのは納得だ。

「この司祭は聖職者であると同時に警邏隊も兼ねている。治安維持に一役買っているってわけさ」

「ん……なるほどな、まあ大体分かった」

余所者の俺がこの場にいたって良い事は無いだろうし、変に目立つのもいい加減に避けたいところだ。場を素早く仕切り始めた司祭団を視界の片隅にして、俺は後ろ髪を引かれながらも場を後にした。

(これが噂の殺人つてやつか……)

明らかに常軌を逸した凶行。ただの辻斬りならともかく、死体をわざわざ晒し上げるような殺しなんてのは生半可な事ではない。何らかの目的が無くては説明が付かない事だ。

歩きながら改めて周りをよく見れば、昨日は気が付かなかった町全体の暗い雰囲気は何処となく漂っているのはつきりと感じられる。表向きは活気に満ちた動きのある光景だが、そこまで広くない共同体でこんな事が続けば不安が募るのは当然だろう。

「なあ、マクニア」

「……何だい？」

「あれこれと考えてはみたけどさ。結局、こっちには時間が無いってのがよく分かった」
そう、時間が無い。

こうして人が死んでいくのを指を咥えて見てるつてもありえないが、そもそもローレンスに与えられたのは今日の夕方、日没まで。考える時間が足りていない以上、それまでに他の手段を探す見込みはゼロに近いだろう。

アイツの言う通りに動くつてのは不安だが……それでも奴らは何かを知ってる筈だ、絶対に。

「お前は連れていけない。でも俺らは行くよ」

「……そうかい」

「ああ。……確かに、もう戻ってこないかもしれない。お前から離れていった二人に倣えば、本当の事を知った俺らが同じように行つちまわらないなんて保証はどこにもない。だけど、これだけは言える」

いくら、言葉を尽くしても。

伝わらない時つていうのはある。それが芯の無い台詞なら尚更だ。だから、何の根拠も無い俺の言うことに長つたらしい御宅なんてのは必要ない。

「任せろ」

ああ、こう見えて結構怒ってるんだぜ、俺も。こんな現場を見せられて何も思わないほど冷徹じゃないし、尻尾を巻いて竦み上がるほど場慣れしてない訳でもない。

殺された人達は、今日これから死ぬと分かつてて殺されたんじゃない筈だ。俺が殺してきた魔物の中には負けた事に納得しないまま死んだ奴は一人もいなかったし、そんな奴らに俺は常に殺される覚悟をしながら戦ってきた。たった一度の例外も無くだ。

自分の戦いを正当化する気は無い。だがそれでも……これは俺のやっている事とは

違う。戦う理由は、それで十分だ。

この町の闇を暴く決意。新たな目的を胸に刻んでいると——ふと、ある事に気が付いた。

(あれ……プロメステインは……?)

「……? 連れさんなら私の家にまだいると思うよ」

「……………」

「いや、出る時一緒に来ないのか聞いたんだけど……外の騒ぎより家の物を漁るのに興味があつたみたいだから……」

まあ、何から手を付けるにしろ……あの馬鹿の回収が先決か。

夕刻。

斜陽が目の奥でざわつく時分、どうにかプロメステインを引っ張り出してきた俺は時計台を前にして立っていた。

「行くぞ」

「はい」

アーチ状に積み上がった石の入り口を潜れば、室内は簡素な受付所のようになっているようだった。

隅に観葉植物の鉢植えが二、三立ててある以外は特段色のない空間。カウンターの奥に階段が見えるが、そこを通るのには断りを入れる必要があるがそうだ。木製のデスクを前に忙しそうにしている数名の男女に声をかける。

「ローレンスは居るか。会う約束をしていた者だ」

「え？ あー……少しお待ち下さい」

手紙のような物に何かを書き込んでいた男が受け応えてくれた。せわしなく書類を捲る手を止めずに日程の確認でもしているのであろう彼に、俺は何となく声を掛けた。

「立て込んでそうだな」

「はあ……まあ、最近色々物騒ですからね。連日こんな感じですよ。つとと、こつちか？」

「ローレンスの奴があだと下も大変だろう。あの秘密主義には参ってるんじゃないか？」

それとなく探りを入れてみるが——意外な事に、男は即座に首を横に振った。「確かにそういう気はありますが、僕達はあの人を信じてますよ」

「ふん?」

「長は、この町の誰よりも賢い方です。きっと多くの問題を抱え込んでおられるのでしようけど、それを僕達にも話すべきではないと決められたのなら。この誰にだって文句は言えません」

もちろん、助けになれないのは少し——悲しいですが。

そう言いながら彼は、控えめな笑顔を浮かべたまま階段に続く仕切りを開けてくれた。

「はい、確認できました。どうぞお気を付けて」

「……ああ、ありがとう」

デスクの横を通り抜け、石造りの階段をコツコツと上がる。黙って足を動かしていると、難しい顔をしているのが分かったのだろう。プロメステインが話しかけてきた。

「慕われてましたね、彼女」

「ああ」

この町にいる全員がそうだとは思わない。朝に感じた暗い雰囲気からすれば上への不信心はどうしても拭い切れていないはず。現に妹分だったマクニアにさえ腹を探られる始末だが……しかし。

「どうも奴の考えに手が届かねえ。単なる秘密主義なのか、それとも」

気味の悪い感覚が喉のどこまで突つ掛かっているみたいだ。今の俺らに出来る事と
いったら、奴が何を隠していると知っても驚かないでいるように腹を括るぐらいしか無
いだらう。

何にせよ……考えてる時間すらもう残されてはいない。人目を気にして羽根も出せ
ないつてんで空を飛ばずに螺旋階段でへばっているプロメステインを一応気にな
がら歩き続けていると、とうとう出口が見えてきた。

「入るぞ」

「どうぞ」

へなちよこ天使には何とか息を整えてもらいつつ、俺は中から聞こえてきた声に従つ
て扉を開けた。

そうして見えたのは——下の階とそう変わりない、静閑な一室だった。中央の机には
肘を突いて物憂げな顔をしたローレンスが座っている。何やら人の顔が貼り付けられ
た紙を透かすようにして見ているようだが、ひとまずは気にする事でもない。それより
も……

「エリックはどうした？ てつきりあいつも居るもんだと思ってたが」

「そこに転がってるやつだよ」

「あ？ ……うおッ！」

ぞんざいに指された方向を見ると、そこには頭から布をかぶった大男がソファの上に寝そべっていた。

ぐったりと脱力していて昨夜の面影も見えないが、ローレンスの言うところによると“それ”がエリックのようだった。紫金のケープも羽織っていないようだし、これがオフの格好なんだろうか。

休憩中の鳶とび職しやくみたいな服装もあるし、でろでろと流れたままになっている黒髪が見えなければそうとは気付けなかったぐらいだぞ。何があつたのか問うまでもなく、こちらに視線を向けた黒小人はこう言った。

「随分とお疲れのようだ、そのまま寝かせてやっておくれよ。頭に何か乗つけてないと眠れないのは昔からなんだ」

「そ、そうかよ……」

「これが話に聞くサラマンダーの契約者。寝ている隙に色々と実験させて欲しくはありませんが……」

「お前は黙ってる」

まったく、つくづくここには変人しかいねえのか。話が一向に進まないじゃねーかよ。

前途の多難を予期してため息を吐く俺を憐れとでも思ってくれたのか、この町の首領

は場を取りなすように切り出した。

「……じゃ、単刀直入にいこうか。まずは君らがこの町に来た理由を聞かせてくれ。話はそれからだね」

ここで無闇に要求を突っぱねるような事はしない。痛くもない腹を探られた所でつてもあるにはあるが……仮にも一処のトップとして、余所者に対してするには当然の質問だと俺も思うからだ。隣のプロメステインと領き合い、これに関しては正直に答える事にした。

「ちよつとした研究の一環でな、ゴールド火山に用事があるんだ。うまくいけば人間が魔法を自在に扱えるようになる方法が確立できる」

「ー……それは、また大きな話が出てきたもんだ。流石は『東方の賢者』ってことか」「いや、理論を考えたのはコイツだ。今は実証を兼ねた実験に出てきてるってことだな」

黙れと言われたからか律儀に口を閉じたままにしているプロメステインの頭をぐりぐりと撫でながら間違いを訂正する。公になつてゐる功績は事実全てが俺に由来するが、それ以外の全てはこいつに頼り切りだと言つていい。少なくとも今はまだ、な。

「……ふむ、なるほど」

「ま、俺たちの素性に関してはそのんな所だ。ゴールド火山でゆつくりと実験をさせてくれりゃそれでいい。——で？」

「分かってるよ、今度はこっちの番だ。さて、何から話せば良いもんかね……」
「いよいよだ。今から聞く事が虚であれ実であれ、それによつて俺らが前に一歩踏み出すのは確かなはずだ。神妙な顔つきで俺たちに向かい合い、その重い口を漸く開く――」

「マクニアを嫁に貰つてくれんか」
「は？」

「は？」

第24話

「何が言いたいんかつつうとだね」

衝撃。

まずあつたのはそれだった。真面目くさつた顔から飛び出てきた意味のわからない台詞に二人して目が点になつてゐるのにも一切構わず、こう続く。

「この町が〃何か〃に攻撃されてゐるのは知れてゐるんだよ。だけどそれが結局のところ何なのか……ウチらにもさつぱり分からん！ のだということ」

「はあ」

「で、君にはマクニアと結婚してほしい」

「なんで?？」

マジで何を言つてるんだこいつ。話の流れが滅茶苦茶すぎ……いや、なんかこれ既視感あるな。

「どうしてこつちを見るんですか」

自分が知つてる事は人も理解してると思い込んで話が三段飛ばしくらいになるやつ、こんな身近にも居たわ。まさかの似た者同士かよ。

だとすると目の前のこいつも相当に面倒くさい奴つてことになるが……

「なんで……その、マクニアと一緒になんかならないといけねえんだよ」

「……イヤか？」

「そういう問題じゃねえだろ!? てめえらが火種の出所も把握できてないような情けねー連中だつてのがこの話と何の関係があるつつつてんだ!!」

「これは酷い。重症ですな……」

ぶん殴つてやろうかなこんちきしよう。一度ズレだすと延々話が繋がらなくなるのがこいつらの悪い所だ。あとプロメステイン、死んでもそれをお前が言うな。

……そんなこんなで。

流星に言葉が足りないのを自覚したのか、ローレンスは改めて説明を再開した。できらんだったら最初ツからそうしろよな。

「なに、話は簡単さ。どんな形であれウチの家と繋がりを持つてほしくてね」

「……繋がり、だど？」

「そう。ウチらの“敵”がどちら側にいるにしろ、向こうの動きは必ずそれで変わる筈なんよ。この町の外から内側にかけてまで影響力のある君が私と手を組んだと知られりゃ……悪くても殺しの手が緩まるぐらいはしてくれるだろうさね」

「……………」

「どうすれば君を上手く動かせるか。それを今まで考えてみたけど、これが一番だろうと思う。——どうだい、この町に救いの手を差し伸べてみるか？」

救い、という単語を口にする割には動きの無い表情。そこから俺が抱いた印象は……言うほどにも興味が無さそうだ、ということ。

昨晚の言葉を思い出す。彼女は余所者にまで多くは求めないと。この町にいるエリック以外の誰も遣う気は無いのだと。

それを考えるなら——ローレンスは俺が受けようが断ろうがどちらでも構わないと心底では思っているのだろう。ということとは、つまり。

「嘘だな」

「？」

「いや、敵が何かも分からないってのは嘘だ。少なくともそこだけは確実にだろうよ」

確信をもってその事を指摘しようと、やはり動きのない表情で鼻を鳴らすのみだった。

「どうしてそう思う」

「簡単だ、本当に何も分かかってない奴はもつと形振り構ってなんかいられない。求められるものは何だって求める……お前は、相手が何かを知った上でこの件を片付ける算段まで立てているんだろ」

「ふむ」

「だからそりや、どのみち事が収まるのを予見しておきながら『ついでに適えばいい』程度の腹積もりでしかない」

その算段に俺が巻き込まれるのは構わない。たとえ腹の中が見えずとも、“部下に信頼を寄せられる長” ってお前の側面になら賭けてやつても良かったんだ。

だけど。

「……どういうつもりにしろ、何も知らさずにいた妹分をその程度の考えの為に体よく利用しようって？ んなやり方に協力できると思ってたんのか」

「……………」

「お前と手を組む価値は無い。時間の無駄だ……おい、帰るぞ」

「あ、はい？」

まだローレンスが何かを隠しているのは確かだ。

だがそれを探る気も失せた。こんな提案しかできないような奴と一緒に何かを成し遂げられるはずが無い。

「敵の名は」

胸にむかつくものを抱えながら下階に降りる階段へと向かい始めた——その時。

「女神イリアス」

まるで、昨晚の意趣返しかのよう。

出口に差し掛かっていた俺の足は、物の見事にピタリと止められてしまった。

「な、に？」

「分かってもらえたかい。これを皆から秘密にしている訳……女神の御膝元からやつて来た『東方の賢者』に、この話をしているってことの意味をさ」

それは。ともすれば、この世界に来てから最も多く耳にした名前かもしれなかった。

慈悲深き創世の女神——そう各地で言い伝えられているイリアスを俺は、その真意さえ定かではない不気味な存在というような形で認識している。その影響力は計り知れず、故郷のヨロギ村でさえ俺の名前を凌ぐほどの存在だった。

「事の始まりは、もう100年と少しばかり前になるのかね」

厳しい顔で目を細めているプロメステイン——を横目に掛けつつ、滔々と語り続けるローレンスの声に思わず聞き入ってしまう。

「黒小人^{ドワーフ}。当時から竜族に勝るほどの鍛冶の腕前と技術を持って生まれたこの種族は、見ての通りの矮小な肉体にある種の行き詰まりを感じていたようだ」

そつと、自分の胸を片手で抑えながら。

「男を惑わす色香も、組み伏せられるような腕力も——他の魔物に比べればだけでも——劣ると言つて差し支えあるまい。このままでは絶滅、とまでは行かずとも……種としての先細りは避けられまいと、ウチらの先祖はそう考えたようだね」

傲慢、だったのだろうか。

そう前置きをした上での語りは、じつとりと重みを感じさせる憂いを纏っていた。

「当時の頭領は栄華を求めた。とある人間の一族にウチらを習合することを選び、それを擁したのさ……その結果がこのザマだ」

手元の書類をひらひらと見せてくる。何名かの見慣れない顔が載っているようだがその中には——今朝方に死体となって吊るされていた、あの髭面の男の顔もあった。

「我らが『ドウエルガ』は繁栄を極め——神の所有物たる人間を取り込み穢した一族は、その怒りに触れた。気が付いているかどうかは知らないが、相次ぐ変死沙汰の被害者は軒並み“有数の技術者”ばかりだね。罪の象徴たるドワーフの叡智を、奴らは丸ごと消し去ろうとしているってわけさ」

「……………」

「この事実は、この町の長を引き継ぐ者にのみ伝えられてきた秘密。いずれ来る崩壊は決して知られること無く、こうして今代に芽を吹いた」

……それで。

それで、どうしろってんだ。ここまで事が大きいとなると、俺なんか出来る事は限られてくるぞ。

「もし君がイリアスの走狗に収まる器じゃないというなら、本意を隠すこともない、頼みがある。——この町から、ただマクニアを連れ出してやってほしいんだ」

「……は」

「天界との戦いになるだろう。小競り合い程度で済めばいいものだけど……あれの師匠が一番に殺されたのは、知っているだろう。マクニアも近いうちにきつと狙われる。魔王様の助力を仰ぐほどの事態になるとすれば、ここもタダでは済まないだろうから」

掠れるような吐息を俺が漏らしたのは。

その『姉らしい思い遣り』の台詞に驚いたから、というのもある。

ここまで話を聞けば最初の結婚うんぬんからして何となく話は見えかけていたが、そう来たか、という気持ちで受け止めていた部分は確かにある。

だが、これは。

(何だ……その、顔は)

表情が変わらぬままなのだ。

この話を初めてから今に至るまで、全く変化の無い無表情。敢えて思考を悟らせまいとするような確固たる意志まで感じさせるようなそれは――

(まだ、嘘を吐いている?)

何を、何処を、何のために。話にはほんの些細な違和感も感じなかつた。交えたとしても、だから大きな嘘ではないだろうと直感したが。ぐるぐると脳が空回りを始める、気味の悪い感覚に絡め取られるような――

(……あ?)

衣服を、くいつと引つ張られる感じがした。

視線を向けると――人差し指を唇の前に立てたプロメステインが、口の動きだけでこう言った。

(ま、た、あ、と、で)

ハツとした。

そうだ、こいつは——天使だ。

天界の事情について直接的に通じているという唯一無二。奴の話に矛盾か何かを見出せるとすれば、これより心強い当ては無い。

(信じて、いいんだな)

示し合わせたように視線を交わし、無言で頷く。

なら俺がやるべきは……今この場での“落とし所”を決めてやる事だ。

「……分かった。どう理由を付けてやりやいいかは後で考えるところとして、お前の妹分はきつと安全な所まで連れ出してやる。本人が望むならな。ただ、こっちの用事を済ませてからだ」

「当然、用立てる物があつたら保障はしよう。確かゴールド火山に向かうんだつたか、そうだね……」

ちらりと、ソファに寝転がる長髪の男をローレンスは見やる。

「こうしよう。こっちは適当な火山までの足を手配して——ウチのエリックを君らの護衛に付ける」

「！」

「あれは役に立つ男だよ。この大陸の北を歩いていくつてんなら特に、手元に置いて絶対に損はせんだろうね」

かたりと席を立ったローレンスは眠っているエリックの側に屈むと、布を被ったままの頭を労わるようにそつと撫で始めた。

「……良いのか？ お前らが組んでたのは、」

「ああ、殺人を食い止めるために裏で色々動いてはみた。けれど、芳しい結果は終ぞ得られなかったよ。今は闇雲に駒を触るよりか、ここいらで一度手元から離してみるのが正解だろう。そんな気がする」

「……………」

「その代わり。きつと無事に戻ってきたら、マクニアの事は頼んだよ。なに、ウチらも負けるつもりは無い。戦いになれば被害は出るだろうが、魔王様の御力を頼ればどうにか退ける事ぐらいはできるだろう」

そう言つてエリックの頭にやっていた手を止めると、ローレンスはこちらに向かつて掌を差し出してきた。

「契約成立だね。ま、事の大きさに反してささやかな取引に少々拍子抜けする思いもあるだろうけども……表立つて魔物に与し、天界を敵に回せとまでは言えないからね。そんな物だよ、憂懼めされるな」

「……分かった。お互いうまくやっついていけるといいがな」

まだ、表情は動かない。

拭いきれない一抹の疑念を抱きながらも、俺はその手を握り返すのだった。

第25話

「……」

「……」

ドウエルガという町の抱える闇。その真相をこの土地の長ローレンスから聞かされた俺達は、ぼつぼつ夜も更けてきた通りを当てもなく歩いていった。

奴らの本拠でもある時計台には空いている部屋も幾つかある、今日はそこに泊まっていくと良いと言われた俺はそれに同意したもの、何かと適当な理由を付けて一時プロメステインと外に出ていた。無論、ただ外の空気を吸いたいがためにこの物騒な街中を夜半に繰り出しているという訳ではない。

『敵の名は——女神イリアス』

そう語ったローレンスの言をどう捉えるか。何せ文字通り雲の上の話で、本来なら判断材料なんて物すら地上のどこにも存在しないような話だ。

しかし、俺達だけは場合が違う。

「天界は、遙か以前からこの町を滅ぼすと決めていました。それは確かです」

この地上で唯一と言っていいだろう、天界の事情を知ることのできる窓口。プロメス

ティンが付いているのだから。

「初耳だ。ここに来るまで俺にも黙ってたのか？」

「貴方の人の善さを知っていれば黙っておこうという気にもなりませんよ。この町がどう滅びようと、私にとっては知った事じゃないんですから」

「……………」

「ただ、この光景が世界から消えて失くなるその前に——この目で見る事が出来たのは、それは紛れもない幸運だったと思っと思っていますけどね」

静かな夜の町並みを目を細めて眺めるプロメステインの心情は俺にも完全に推し量る事はできなかつたが……その寂しそうな顔だけは、隠そうにも隠しきれてはいなかつた。

「話を続けます」

「ああ……………」

「私がいまだ違和感を感じたのは、『一連の殺人は天使による物だ』と彼女が断定していた所です」

「……………？ 違うのか？」

「確かに訓練された天使には容易い事でしょう。しかし我々はこのドウェルガへの攻撃をまだ始めてもいません。もし侵攻が為されるとすれば技術者の殺傷などと回りくど

い事はせず、跡形もなく焦土と化するでしょうし、加えて言えば……近い内にそんな事が起こると知りながら私が貴方をこの地に連れてくるはずがない」

「ああ……？」

「逸った天使の一派が独断で“処刑”を行なっているという線も無くはないのですが、何故このような殺人が発生しているのかは私からしても不明なんです。なのにどうして彼女は『断定』できたのか？　言い伝えからの推測で物を言っているにしてはあまりにも……」

プロメステインの知る限り、天界は今回の件に関わっていないらしい。少なくとも今はまだ……とすると、やはりそれがローレンスの『嘘』なのか？　何が殺人の本当の原因か知っていないながら、それが不都合な事実だから俺達には黙っている？

「それともう一つ気になったのが」

「……ん」

「覚えてますか？　ローレンスさんの言っていた『魔王』というフレーズを」

特徴的な単語だからよく覚えてる。この世界には全ての魔物を統べる王ともいえる存在があつて、それを魔王と呼ぶらしい。子供でも知ってる常識なのだが、言わずもがな俺にとつてはどうにも現実味が薄く思えてしまうというか。それがどうかしたのか。「いよいよとなれば助力を乞うつもり、と彼女は言いました。しかしそんな事はありません

ないんです」

「はあ?」

何言ってるんだ。助けを求めるのがありえない? それじゃあ黙って滅ぼされちゃうだけじゃねえのか。

「まさか魔王つてのはドワーフが天界なんかに攻撃されても知らん顔するつてのか?」

そんな訳は——」

「そのまさかです」

「……んん?」

「まずこれは大前提なのですが、私たち天界としては魔王——延ひいては魔族全体と一斉に事を構える姿勢は取りません。その理由はさて置くとして、つまり……魔王の庇護下にある相手には基本的に直接は手を出さない訳です」

気になる事は色々あるが、とりあえず今はいい。

続けてくれ、と目線で促す。

「ヨハネス歴550年、後に“ドウエルガの恭従”と呼ばれる出来事……ローレンスさんの言う当代頭領の独断に対して、時の魔王アリスフィーズは賢明ながらも冷徹だったのです。我々天界との過度な軋轢を避けるべく、このような密約を条件にその人間の一族との併合を許しました。曰く『魔王軍は今後、ドワーフ族との関係を一切断つ』……」

と」

「……………」

酷な仕打ちだ、と感じた。

その技術力で魔族全体にとつても大きく貢献しただろうドワーフへの仕打ちとしては些かに薄情に思えた。ただ……その結果として、設立後まもなく殲滅されていたとしても不思議ではないドウエルガが今に至るまで健在であるという事実が、その判断は間違いだつたと軽々に断ずる事を許さない。

確かに時間の問題ではあるが、それを考える余地すらも残らない事態まで有り得ただと考えると……

「なるほどな」

納得はしてないが、理解はした。

しかし、この世界にもそういう裏の遣り取りみたいなものがあったりするんだな。魔物みたいなはっちゃけた生態の生物が幅を利かせている時点であまり複雑な事を考える必要も無いだろうという変なバイアスが掛かっていたのかもしれないが、どうにも鬱々とした気分になってしまう。

「……………はあ」

「私が知る範囲ではこれくらいですかね。一つ、事件の犯人が天使であるとは限らない。二つ、この町は魔王軍に救われる事なく滅ぼされる。これらの事実を彼女が把握した上で伏せているのはほぼ確実だと思われませんが、これによって我々を欺こうとしているのか、またどう動かさそうとしているのかという点については不明です。頭に入れていた方が良いかと」

「やだ……」

「や、やだ?」

もつとこう……なんだろう、そういうのを求めてるんじゃないんだよな。神とか魔王とかの確執に巻き込まれてる場合じゃなくて、もつとやりたい事をやってっというか、なんか……楽しく旅をしたい……

「……わかりますけど! まあ凄いわかるんですけど、そうも言っつていられないでしょう! こういいう問題でヘタを掴まされて一番困るのは多分私なんですから……ッ!!」

「どうしよう俺、お前がそういう事言わなきゃいけないなくなるぐらい追い詰められてるのが凄く可哀相になってきた」

頭を抱えてうずくまるプロメステインの背中を屈んで撫でつつ、そんな感想を思わず漏らしてしまう。

いや……存在そのものが神に対する冒瀆みたいな奴に同情するのが倫理的に正しい事なのかどうかは知らんが、あのプロメステインが興味の一切抱けないであろう物事に對してこうも真剣にならざるを得ない境遇に陥っているという事には、こいつがどういう質なのかを知っている上で哀れみの一つも覚えないうつていうのは嘘だろう。

「ああああ……この様子だとローレンスさんは長居もさせてくれないんでしようし、思っ……たよりも、はい。ここで学べる事が少なくなりそうです……」

「向こうもああいう頼み事をしてきた以上、戦いが始まる前には俺らに出てってもらわないと困るだろうからなあ……」

どうも俺らにとつては美味しくない話になってきた。プロメステイン曰くほぼ滅亡確定みたいな事になってこの町から知り合いを一人連れ出す機会を得た代わりに、ここドウエルガへの滞在時間が大きく制限される結果になるわけだ。

……だけど、そんなになるまで人の頼みを安請け合ひし続けてきたのが誰かつつうと。

「俺なんだよなあ……」

「……何がです?」

「いや……まあ色々あるかもしれないねーが、とりあえず帰るとするか。あまり外に居過ぎで怪しまれたりしても面白くねえし」

「それに関しては同感ですけど」

聞かれちゃまずいような話は粗方終わった。そうして町の中央に立つ時計台へと踵を返しながら——ふと、今朝の事を思い出した。

『任せろ』

あの時、マクニアに言つて見せたあの一言。

良くか悪くかイリアスの教えに生かされている人類の中でも軽くはない立場にいる俺にとつて、この事件の真相が天界との根深い問題にあるのなら、悪いが断じてこれ以上関わるわけにはいかない。

俺はヒーローなんかじゃない。あくまで自分達の目的のために旅をしているだけであつて、だからこの町が滅び去るしかないのだとすれば、それを黙つて見過ごす以外の選択というのはいりえない。

「……………」

だけど。

「なあ、この町で起きてる殺人は……『天使』の仕業じゃないかもしれないんだよな？」
「その可能性は高いですね。でもどうしてそんな事を？」

「その事実を確かめて、本当だったら解決するぐらいの事はしてやりたい。俺もお前も天界が相手ならまずいが、もし関係のない原因でこの町が危機に陥ってるなら……せめて、それぐらいの事はしたい」

「……………はあ」

ああ、本当に悪いと思ってるよ。お前はそういう事に全く関心が無いだろうってのは分かるんだよ。そんなお前からすればこれが俺の悪い癖だったのも。

でも許して欲しいんだ。今回も……俺の我^{わがまま}俣^まを。

「まあいいですよ、今回ばかりは仕方ありません」

「……………いいのか？　自分で言っついてあれかもだけどさ、ほら、相当ゴネられる覚悟してたから」

「私を何だと思ってるんですか……まあ本来なら確かにそうなんですけど、それとは別の問題もあります」

「？」

「そもそも貴方、どういう言い分でマクニアさんをこの町から連れ出すつもりだったんですか？」

確かにそうだ。傍目には何も解決してないのに突然「一緒に来てくれ」とは言えんな。俺にとってバツが悪いって理由よりある意味重要なそれに思わず唖っていると、何

やらまた悪そうな顔をしたプロメステインが暗い笑顔でこう言い始めた。

「ふふ……その辺りは円滑に事を進めて貰いませんと。長い滞在が見込めない今、もはや彼女から吸い出せるだけのものを吸い出せるようにする為に手間は惜しめませんからね……」

「ああ、そう……」

ドウエルガの技術者の一人であるマクニア、尋常には得難いその知見を目敏く狙っているという事らしい。そこは抜け目ないというか何というか……

こいつはこいつで強かに物を考えてるんだなあとぼんやり考えつつ、俺たちは差し当たつての拠点となる時計台への帰路に就くのだった、

ドウエルガ時計台。

この町の創設になんらかの関わりがあるとされているあの建物は、ここの首長でもある姉さんの住居を兼ねている。

……あの二人は、姉さんの眼鏡に敵った。私と違って。

それをどうこう思うわけじゃないけど、少しの不安が胸に滑り込んできたのは確か。

——彼らも、エリックと同じところに行つてしまふんじゃないかつて。

姉さんに本当の事を聞いたら誰も私のところに戻つてこなくなるんじゃないかつて、そんな馬鹿な不安をどうしても消すことが出来ないんだ。

だから……こんな夜更けに、私はこんな所に来ているのかもしれない。何もできるわけがないのに。

「姉さん、あんたは……」

あの目で見下ろされているかと思うと、ここに真つ直ぐ立っている事もできないかもしれない。だからこうして建物の陰に隠れるようにして見ているしかない。そんな自分が少し情けなくて……空寒い夜風が、ぶるりと背筋を震わせた。

「……帰ろう」

何やつてんだろうね、私は。こんな所まで歩いてくるぐらいなら、あの二人が少しでも上手くいくよう祈つてる方がマシだった。

どうせそれぐらいの事しかできないのなら、その方がいい。

「——やあ、……むよ。——の、三人を」

(……?)

家に帰ろうとしたその時、時計台の下から何やら話し声が聞こえてきた。

その内の一人の何かを言い付けるような声、あれは間違えようもない——

（姉さん……？　こんな時間に、仕事？）

もう一人の方は少しだけ見覚えがある。この辺りじゃ有名な輸送組合の役員で、確か私も仕事で世話になった事がある。

（人を運ぶ依頼？　三人つて言ったつけ）

まあ、何にしても私には関係なさそうだ。いくら微妙な仲になってしまつてるとはいえこれ以上意味もなく盗み聞きするのだから悪い。大人しく帰ろうとするも――

「ああ、明朝ゴールド火山まで。この三人を、確かに」

聞こえてしまったその言葉に、私は背中に冷水を浴びせ掛けられたような気分になつた。

「し、しかしローレンスさん。この時期にゴールド火山は不味いでしょう。いくらあの司祭長が同行するつたつて……」

「あれなら上手くやるよ。今はとにかく――急ぐんだ。手遅れにならないうちに、できるだけ早く事を済ませたい」

「わ……分かりました。ではそのように」

このタイミングでゴールド火山への依頼、それは否応無しにあの二人を想起させた。

『どうかして“ゴールド火山”に入りたい。このまま西に真つ直ぐ歩いてそのまま行けるなら問題ないが、もしもこの町で何かしらの手引きが必要になってくるんだつたら協力してほしい』

それはいい。点と点が線で繋がりはしたが、それはあくまであの二人の事情。何らかの取引がなされたとかで、有耶無耶になった私との約束を補完する事にしたんだろう。私の知りたい事とは関係のない事で、そう……それはいい。

だけど何より。

あの姉の正気を疑った。

(駄目だっ……あの二人は多分知らされてない！ この時期だけは駄目なのに!!)
知らせなくては。

そう思い至った瞬間。私は一体、これがどういう運命の悪戯なのかと思った。

「——ほら、相当……してたから」

「私を、……だと思ってるん——」

あの二人が、何かを話しながらこちらへと向かってくるのを視界の端で捉えられたのだから。

(あ、——)

知らせなくては。

今、よりもよつてこの時期。ゴルド火山だけは駄目なのだ。姉さんは、あんたらが死んでも構わないというつもりでいるのだと——

「懲りないな、お前も」

どすつ、と。

その衝撃に気が付いたのは、自分が地面に倒れ込もうとしているのだと認識した後のことだった。

「寝起きに聞かせる話じゃねえだろうに……つ、ああ、ゴルド火山だあ？ 今度はなんて仕事だよ」

「エ、リツ……」

「いいか、これは再三言ってきたがな。——余計な手出しを、するんじゃねえよ」
脇腹に押し当てられた剣の鞘。その衝撃に眩む意識は、急速に闇に落ちていった。

第26話

明くる日の朝。俺たちは先日までの爆睡の様子を露ほども感じさせないエリックに連れられ、町の中央付近のある通りまで来ていた。

そしてここドウエルガにしては珍しい草地の気配。ひよつとするととは思ったが、ローレンスの言っていた『足を手配する』とはどうやら馬のことを言うらしかった。

「こんな町でもこいつらはまだまだ現役だ。安心しろ、オレが御者をやる」

正直助かる。そもそもヨロギでも利用されてる馬をどうして俺ら二人が使ってたのかったのかっていうとそれは簡単で、揃いも揃って絶望的に馬の扱いが下手糞だったからだ。

プロメステインはまあ分かる。なにせ目の奥をじつと見つめるだけで怯えられて暴れられるような奴だ。馬心つてやつが全く理解できてないのも分かる。ただ俺は……俺もそんなプロメステインに鼻で笑われるぐらい……ああ……

「……何だ？ 何か馬に嫌な思い出でもあるのか？」

「心当たりが無いのが逆に辛いんだよ……」

「……………」

怪訝そうに俺の顔色を覗くエリックはといえば、俺たちが最初に会った時と同じく大刀を背負い、フードの付いた紫金のケープを羽織っているという装いだつた。

ここら一帯で一番の武力を持つ司祭長という肩書きを持つ男はあらゆる公務においてその衣装を強制されるようだ。長髪のエリックにとつては至つて暑苦しそうに見えるが、ローレンスの命令で動いてる以上は仕方のない事らしい。

ただ、そうして愚痴を吐く割にはその慣習に嫌気が差しているという感じはしない。彼は彼なりに……四大精霊の司祭という立場へと、何か『誇り』のようなものを持つて臨んでいるのだろうか。そんな風を感じた。

「やあ三人とも、準備はいいかい？」

と、ここ数日でもう聞き慣れ始めてしまつた声が出た。ローレンスだ。眼鏡を掛けた銀髪のドワーフは、悪びれもなくそんな事を言つていた。

「見送りに来たんよ。ウチも旅の無事を祈るぐらいの事はしたくてね」

「それにしたつて昨日の今日で話が早過ぎやしないか。その日のうちにこんな馬車を用意するか普通」

「バカ言いなさんな、いつ戦いが起きるとも知れないのにのんびりなんてしてらんないよ。こうしてる今だつて天使がこの町の宝に手をかけていないとも限らないんだ」

「……………」

ローレンスは結果を急いでいる。それは昨日の夜にプロメステインと話し合った内容とやはり一致しているようだ。

天使が敵だと強調するような態度も。俺らがそれを半ば嘘だと確信しているのは向こうだって知らないだろうが、それが一体どういう理由なのかまではこつちもまだ分かっていない。

「ま、この貸しはちゃあんと返してもらおうからねえ。だからマクニアの事……頼んだよ」
「……ああ、ありがとう」

とはいえ今は俺たちの目的に付き合っただけというのも事実。

何が本当で何が嘘かを見極めるのは今じゃなくてもいいというのが俺ら二人の総意だ。だから何事も無ければ借りは返す。そこをブレさせる訳にはいかないからな。

「いいさ。それより目的の地までの道についてだけど、ここはちよつとばかり説明をしておいた方が良さそうだね」

「道について？」

「ああ。マクニアと話をしたなら知ってるかもしれないけど、この町には少し前まで『機関車』というけつたいな乗り物が動いてたんさ。線路という敷かれた道の上を走る乗り物だよ」

その単語を聞く度に少し胸がどきりとする。聞き慣れているのに耳慣れている筈の

ない単語、そのギャップに心が動くのだろうか。ともかく、機関車が何だつて？

「あいつの師匠が死んでからは動かすものも居なくなつた。けど一時は確かにこの町を支える技術だったのさ。ウチらが鉾山にまで出向く時なんかは特に多くの人や積荷を乗せて動いた。ま、その兼ね合いでだね……未だに残っている線路のうち一本がゴルド火山までの道しるべになりうる、という話がしたかつたんよ」

ウチらが拓いた道沿いにある線路、あれを辿っていけば少なくとも道に迷う事は無い。と、つまりそういう事らしい。

「エリックがいるならそんな豆知識が必要になる事もないだろうけども、一応は知つていた方がよからうと思つてね。ま、観光気分で頭に入れといておくれよ」

「……なるほどな、分かつた。覚えておくよ」

「結構。それじゃあ——良い旅を」

「乗り心地はまあまあですね」

「うちの村のより快適だ……」

ちよつとした敗北感を覚えるぐらいだった。華美な装飾は無いにしろ立派な造りで、日除けの幌ぼろの中から手綱を握るエリツクの後ろ姿が目に入る。

後ろには幾らかの積荷と俺ら二人しか乗っていないのに馬の頭数は二頭もいるぞ、中々に贅沢な事だ。

「やはり持つべきものは権力と権力を持った協力者だな」

「それ私に嫌味言ってます？」

下級天使のしがらみなんてものは極東の大賢者様に理解できるようなこつちやない。何、俺だって最初はドベから始めたんだ。お前だって長い人生これからさ。

「あんな百年も二百年も動きのない縦社会じゃそう上手くいかないですよ……まあ、そんな世知辛い話は後にしましょう。そうですね……目的地に着くまで時間がありますので、これからゴルド火山にて行う事の復習でもしておきましょうか」

露骨に話題を変えてきた感はあるが、そういう話なら望むところだ。肝心な場面でぐだついても仕方がないからな。

「ええつと、確かこういう話だったか。人間が魔法を行使する際に問題となる二点のうち『人間の体が抱える魔力適性の脆弱性』って奴、それは既に俺らはこいつで解決した」
精霊の森での記憶は未だに新しい。傍らに置く身の丈に近いほどの長さの杖を手の甲でコツコツと叩きながら、俺はすっかり口慣れてしまった魔法的用語のひしめく話を

続けた。

「今からゴールド火山でどうかしようってのは『人間が魔法の行使において唯一汎用的に転用可能な大気中におけるマナ濃度の抜本的な低さによる弊害』……長つたらしいが要するに、辺り一面にある空気の中から魔力をかき集める能力が足りてないって事だな」

「そうですね、ここが内発的に魔力を生み出せる天使や魔物と人間が大きく違う点です。現状はどうか天使である私との交接を通じた魔力変換でこの問題を誤魔化していますが、いち魔法使い、あるいは魔法研究者として余りに不完全な形だと言わざるを得ません」

つまり、と俺の鞆をガサガサ漁りながら、プロメステインはここ数日で何度も見慣れた簡単な図解を取り出しながらこう言った。

「そこで貴方は魔力を充分に扱えるようになるべく、大気から魔力を吸収するという技法を感覚で理解しなくてはなりません。論理的には可能な筈です。しかしまあ……私の知る限り前例が存在しないので確かな事は言えませんけど、そんな仙人修行みたいな事を普通にやってたら多分、成功する頃には貴方はお爺ちゃんになってしまっていると思われませう」

「……………」

老後の心配とは恐らく無縁な身の上ではあるが、言うまでもなくそれは少し困る。

「ですので！ 訓練をするにしろ何にしろ、まず初めに環境が必要だという事です。取っ掛かりを掴んでもらう為にも周囲の魔力濃度が格別に濃い場所に身を置かなければなりません。そこで天界は論外、精霊の森なども悪くはないが今ひとつ足りない、地上でどこか適した場所が無いかなど色々と考えました結果——この『ゴールド火山』が最適との結論が出たわけですね」

星の中心から溶岩と共に魔力が噴き出る、世界最大の火山地帯。今まで理詰めで物事を理解してきただけにこういう素直な修行パートナーみたいな事をやるとはあんまり思っ
てなかったのだが、これもまた一つの経験か。

「先程も言った通り、これは前例のない実験です。早ければ数日で物にできるかもしれませんが、数ヶ月とかかる可能性もあります。けっこう貴方次第なところがあるんですが……」

「ん〜〜つ……ま、何とかする」

今はそうとしか言えない。ただまあ、これぐらいの無茶は今までだつて何度も乗り越えてきたはずだ。今回だつてきつとどうにかする。

「つし、やってやるかあ」

決意を新たに気を引き締める。そんな俺をプロメステインは微笑みながら見つめて

いた。

……こいつがいるから俺はいつまでだって頑張れる。思えば今まで色々なことがあった——そんな目まぐるしい日々を送ることができたのも、いつだって彼女が側にいて支えてくれたからだ。

(……本当に、こいつは)

つと、浸っている場合じゃなかったな。今は。

不思議そうな顔をして首を傾げているプロメステインから目を逸らしつつ、俺は自分がやるべき事に意識を向ける。

その時だった。

「伏せろオ——ッ!!」

体が動いたのは、ほとんど反射に近かったかもしれない。

いやそれ以上に——真に迫った強者の持つ声自体がそうさせたのだろう。咄嗟にプロメステインを体ごと押し倒した俺の背後、つまりは上方から。耳の中を殴り付けるような、そんな物凄い音が鳴りはためいてきた。

「な、んあ……!!」

見上げる。

無かった。

見上げる物が何も無かったのだ。さつきまでは確かにあった幌ほろが破り捨てられたかのように消え去っていて、陽もまだ中天に差し掛からない頃合いの青空ばかりが広がっていた。

いや。青空だけというのは間違いだ。

上空を見渡せば明らかかな異物がそこにあつた。今しがた布切れのように嘯み付いてちぎり取つたのだらう馬車の幌を吐き捨てていったそのシルエットは、空中を旋回しながらこちらの様子を伺っているようだった——

ウィルム娘が現れた!

力強く広がる翼に、例え地を踏み締めたとしても不足は無いであろう鱗に覆われた両脚。胴体と頭は通常のそれより一回り大きく見えるものの人間の女性と変わりないように見える。

悠々と空を飛び回るその姿は、正しく飛竜の上位種と呼ぶに相応しい存在感を放っていた。

「……ウィルム!? あんな魔物がこの街道沿いに出てくるなんて!」

強風に対して髪を押さええつげながら倒れているプロメステインの台詞が言い終わるが早いのか、その翼で空を切るウィルム娘の声が届いてきた。

「男が二匹、女は一匹。……お前らア! 今度の獲物は上々だ! 気合い入れていけよオ!!」

ビリビリと迸るような叫び声——それは先程のエリックにも見た、明らかな強者特有の力強さだった。

「……何だ、何を言ってるやがる!」

「後ろだよく見ろ!」

その覇気に動揺するのも束の間、エリックの怒号に言われるがまま馬車の背後を見る。

ぞつ、とした。

2、3……5、いや10、20!

数えるのもバカらしくなるほどの！ 地を駆ける竜族の魔物の群れが俺たちを追っている!!

「ここからが正念場だぞ、死にたくなければ気合を入れろよ！」

「な、何だよこれは！ 普通じゃないぞ、説明しろ！」

「……ああ分かったよ、肩書きの割に物分かりが悪いようだから一個だけ断言してやる」
そうしてフードを目深く被り直した暁色の司祭は、緊迫した様子で背中の大刀を抜き
払ったのだ。

「——追いつかれたら終わりだ!!」

第27話

「ちよつ……ま、待つてください！ マクニアさん！」

「離せ！ あいつに……あの馬鹿に会わせろお!!」

ドウエルガ時計台。

朝早くから響く怒声に近隣の住民もざわつき始める中、その大元である赤髪のドワーフは激情を頭に建物の奥へと押し入ろうとしていた。

「あ、あの人はお忙しいんです！ いくらあなたでも！」

「いや、通していい」

「……っ!!」

コツコツと、奥の階段から靴音が鳴る。黒ドレスを身に纏いこちらを熱のない視線で見下ろしてくるローレンスに、マクニアは腹の底から煮えたぎるような激情を吐き出した。

「どうして今！ この時期に二人を町から出した！ アンタも知らないわけは無いだろうに、こうしてみすみす死に行かせるような真似を……!!」

「ああ知ってるよ——竜のかがり火年」

地域一帯にその名が知れる、ゴルド火山にまつわる『厄年』だ。

世界最大の火山のあるこの地方、良くも悪くもその生態系は山の状況に大きく左右される。

しかししてそのような微妙の違和に容易く榮衰が左右される環境の中でさえ、強大であるとの評が覆りえない種族というものは幾つか存在する。その一つが竜族である。

“かがり火年”とは単純な話、ただえさえ強力な竜族が最も活発に動き出す環境というだけの事。ただそれだけだが、不定期に訪れるこの年は山の勢力図をたちまち一色に染め上げてしまう程の絶大な意味を持っている。

「だったら何で……っ！」

「確かに死ぬかもしれないが」

意識の隙間にさし込むように。

相手の靴音が己に近付いてきているのに、マクニアは遅れて気がついた。

「不服かい」

二人の間が縮んでいく、狭まってゆく。

それなのに、立ち止まろうという気配が決して見えてこなかった。やがて肌と肌がぶつかり合うような——異様な距離感まで接近する。そうすると、ローレンスは妹の顎をくいと指で掬い上げるように持ち上げて。

「なら出てってもらうか、この町を」

「え……………」

、言っている事が分からなかった。

何の気も無さそうに、まるでたった今思いついた事でもあるかのように。

「分かる？ 聞こえた？ ここにお前の居場所は無いと言った。二度とウチの目につかないどこぞに消えろよ」

「……………」

「ああそうだ、お前はあの二人と懇意にしてたようだね。行く当てがないなら養ってくださいとでも頼んだらどうだい。もつとも……あれが生きて帰ってこれたらの話だが」
どこまでも突き放すような態度だった。何事も無かったかのように背を向け、ローレンスは来た道をそのまま戻っていく。

「以上。何を突っ立ってる？ 用が無いなら出てって欲しいのだけど」

???????

「きひっ！ ひきずり下ろしてやらあ！」

短剣を持った一匹の小柄な竜人が群れに先んじて飛び掛かってきた瞬間、俺は咄嗟に呪文を紡いだ。

「水よ、その流れを止めて敵を止め——アクア・フェンス！」

「んなあつ!？」

杖を斜めに振り上げる動作へと追従するように、平行に並んだ四本の筋が出現する。

水によって形作られた鋭い柵は素早く突っ込んできた敵の体を逆に切りつけ、盛大に倒れ込んだ竜人の体から少量の赤い飛沫が飛び散った。

「それが魔法か。ローレンスに聞いた通りだな、人間が魔法を使えるようにしようとしてるつても与太話って訳じゃ無さそうだ」

「……言ってる場合か。どうする、今のじゃ遠くにいるデカイのは止められねえぞ!!」

「足の速い小型を振り払えるなら上々だ。それなら当分追い付かれる心配はねえ。しかし、そうだな……」

ギュガツ!! と。

まるで大砲のような速度で上空から突っ込んできたウィルム娘に対し、エリックは目にも止まらぬ疾さで大刀を振り抜いた。

両者が衝突した時点でこの馬車はバラバラに砕け散ってしまうだろう。よってその刃は、竜の牙とは決して触れ合わないような距離から既に振るわれていた。

「ガッ……!?!」

「うお、っ!」

吹き荒れる、爆炎の熱風。

いかに火に強いとされる竜族でさえも躲さざるを得ない暴圧が、全てを焼き尽くす盾となつて攻撃を防いだのだ。

慌てて離脱し体勢を立て直すウイルム娘を遠くに見ながら、四大精霊の司祭長。サラマンドーとの契約者は堅調として言う。

「——あいつは別格だ。デカいだけのやつは放置、速いだけのやつは任せるにしろ、あいつはオレが食い止める」

「食い止める……? 倒せずに振り切れるような奴には見えねえ!」

「よく聞け、いずれにせよ馬車の上で戦うのは無理だ。最低でもデカいのを離してから地上で俺があいつを殺^やる! それまで耐えれば逃げ切れる!」

……なるほどな、足場があつての一对一なら勝つ見込みがあるってか。

確かにそりや納得だよ。だがなエリック、お前は一個だけ致命的な思い違いをしてるのに気が付いていねーようだな。

「あの、それじゃ目的地まで誰が馬を動かすんです?」

「……あつ。」

何を言ってるのか分からないというような顔でプロメステインに視線が移る。

「そんなの、お前らのどつちかが代わりにやればいいだろうが。飛んでるやつを抑えられるのはオレだけだ」

「いや……やり方がわからん」

「やり方ならさつき見て覚えましたが、私がやると馬が大暴れしちゃうと思いますよ。御者つてそれでも何とかありますかね？」

「……
「おい、固まるなよ」

「……
「よしお前がやれ」

「あ、はい。わかりました」

駄目そうだった。

一瞬で馬鹿みたいに揺れだした馬車の中でどうにか手綱を奪い取った後、俺はそこらにあつた包帯でプロメステインの視界をぐるぐるに覆う。

気が動転してると思われるかもしれないが必要な措置だ、これぐらいの事をやらないと俺は御者に殺されるなんて間抜けな最期を迎えることになる。

「な、何を……」

「無心になれ!! 逆に馬を見るな!! ……大丈夫、お前ならやれる。どれぐらいの力で鞭を振ったら皮膚が擦り切れるのかなあとか手綱を引いて馬が窒息しないギリギリの力はどれぐらいかなあとか考えたりしなければいけないから!!」

「えっ、どうして私の考えていた事が……」

「黙って前に走らせてろボケ!!」

「あ痛っ!」

「戯じやれてる場合かア! 次が来るぞッ!」

???????

階段に足が掛かり、とうとう視界から外れようとするその時に。

「——信じてる」

言葉に、動きが止まった。

「あたしを守るためにこの件から引き離そうとしてるのは、分かるよ。それを今更になつて気付けないぐらい馬鹿じゃない。だから、ありがとう」

「……………」

その表情は決して見えない。だが確信をもって断言する。

「……でもね、姉さん。あんたのやり方に納得はできない。これがあたしの為にしている事だつて分かつてても……ごめんなさい」

「助けにいくよ、あいつらを」

「良かったんですか？ 行かせちゃって」

「いいさ、根回しはしてある。あいつはこの町で馬の一頭も借りれやしない……追うことはできませんよ」

助けに行く。そう言いながら走り去っていった妹分を窓から眺めながら、ローレンスは部下に対してというよりは、まるで独りごちるような返事をした。

「信じてる、か」

あるいは、自分の選択が彼女に対する裏切りなのかどうか。

それすらも——もう、分かりはしないのだから。

???????

火山への道中、最初の接敵から数時間は経過した。

人型の特徴を強く残した素早い竜族の散発的な襲撃は続き、その度に俺が迎撃すると
いう状況で膠着している。

隣のエリックにも手を貸して欲しくはあったが、奴はあれから上空のウィルム娘と睨
み合ったままピクリとも動いていない。こうして強く牽制していなければ即座に馬を
殺されるなりしているという事ぐらいは分かっているが、俺のほうもそろそろ怪しく
なってきた。

(この感じ、魔力が……)

既に半分近く、二日前の…… “行為” で補給した力を吐かされた。この短時間でそこ
までの不足を感じる事が今までに無かったせいかな、急速な消耗で少し頭がふらついてき
た。まだ続けられるとはいえそろそろ余裕が無くなってきたか。

それだけじゃない。魔力は最悪尽きるまで戦えるが、強く気を張り詰めてきたおかげ
で体力の消耗が特に激しい。距離を詰めてきた敵を見逃す程じゃないにしろ注意力も
散漫になってきたかもしれない。

ま、悪い話ばかりって訳じゃなさそうだが……。

「おいエリック、あの奥の数匹……デカいのはかなり離れたぞ。今ならここから降りて
上の野郎を倒した後にでも撒けそうだが、どうする」

馬の負担も相当だ、タイミングとしてもやるなら今だと思うが。

目隠しは流石に取った……とはいえ前を見たまま別のことを必死に考えながら手綱を握ってるせいで相当気を滅入らせている様子のプロメステインを覗き見ながら言う。側に敷かれた線路から大きく外れないように走ればいいだけなのは御者の役からしても気を回す事が無くて幾らか楽なんだろうが、それでもアイツはアイツであまり長くは持たないだろう。

「イヤ……あと10分は様子を見る」

「何だって?」

「気付いてると思うが、奴はこの数時間でたつたの一回しかオレに向かって来なかった。最初の一回だけだ……何か考えているな、動きが慎重だ」

曰く、この地対空の攻防では飛行しながら炎を避けなければならぬウィルム娘の方が圧倒的に体力を削られるらしい。エリックはそれも見越して持久戦に持ち込んだらいいのだが……実際はこうだ。無駄な攻撃は徹底して避けながら機会を窺っている。

そうして力を温存しているウィルム娘と今戦い、かつ時間稼ぎに入られれば今度は後続に容易く追いつかれる可能性が高い、と。

「或いは……」待ち〴〵を選んだのはオレたちじゃなく、案外向こうの方なのかもな」

「ならどうする、こっちも体力に余裕がある訳じゃあ——」

「グオアア——ッ!!」

ビリビリビリッ!! と。

ウィルム娘の空を裂かんばかりの叫びが響き渡るのと、それはほとんど同時だった。少しの間距離を取って静観していた竜族の群れが唐突に、まるで堰を切ったかのように加速を始めたのだ。

「な、くそ……っ!」

そして俺が後方へと警戒を強めたその瞬間——そう、まるで見計らったかのようなタイミングで。

「ぐるあッ!!」

猛禽のような鋭さと破壊力を備えた、飛竜の咆哮を伴う滑空突撃が馬車を襲う。

「……ッ、サラマンダー!!」

これをエリックの炎が迎え撃つが——その時、俺の目にはウィルム娘の表情に微かな“笑み”が垣間見えたような気がした。

「わかつてたぜエそう来るのはッ！　だがよお……そんな炎をいちいち目眩しに使うな
んぎ、オマエは平気でもお仲間の方は気が気じゃねーんじやあねえのか!？」

「なっ……」

言われて初めて気が付いた。

前提として、俺はエリックの振るうこの力を今ひとつ信頼しきれていなかったのかもしれない。圧倒的な熱量を伴う攻撃への無意識な恐れが俺の注目を“上の戦況”へと引き付けていたからだ。

そのための襲撃、故に反撃は想定内だったのだろう。余裕を持って爆炎を躲ししながら、この空の支配者は高らかに吼えた。

「オマエらを纏めて一気に狩るのは止めだ！　油断できねえ！　つーわけで……まずは一匹！　確実に仕留めてやるぜッ！」

ドゴッ!! と。

横合いからの重たい衝撃に、俺の体がふわりと空中に浮いた。

「なっ……馬鹿野郎！」

エリックの焦燥した声がどこか他人事のように耳に残った。俺が上を見ている間に回り込んでいた一匹の竜族が隙を狙って跳躍し、体ごと搔つ攫うような体当たりで馬車の上から弾き飛ばしたのだ。

「が、ぐッ……!!」

こっちは全身が筋肉と鱗に覆われているような種族と違ってひ弱な人間でしかない。揉みくちやになるように馬車の上から転がり落ちれば決して軽くない衝撃が全身に響くのは必然だ。

「いひっ。男男お……アタシの獲物だア……!!」

逆に敵の方が取った受け身でダメージが抑えられているような状況で。

いつの間にか切っ飛ばした額から流れ出た血で、片目の視界がぼやけていくのを感じていた。

第28話

(畜生、何てこった……!!)

馬車からふっ飛ばされていく護衛対象を目で追いつつエリックは齒噛みした。任務は……失敗だ。

ああなつてはもう助からない。今から引き返すのはあの足の遅い奴らを含めた全員を相手にするという事になり、それは現時点での人間の最高峰と言つてもいい実力を持つエリックにとつてすら確実な死を意味していた。

(前に……前に進むしか……!)

「どうしたんですか！ 今何か凄い音が、」

「……いや、何でもなし。そつちに集中しろ、線路から離れなきや間違ひ無く目的地までは行く！」

相棒に言われた事を忠実に守り、しかし集中を欠かないよう後ろを振り返る事もできずに。赤毛の少女はどうか馬車を動かしていた。

ダラダラと流れる冷や汗が長くは持ちそうにない事を如実に示していたが、それでも彼女は必死に手綱を握りしめていた——預かるためにだ。“二人”の命を。

(ぐっ……！)

「はっはア！ ひでー男だなアオマエ、いま『何でもない』つつったのか!？」

斜め上方を並走しながら嘲けるように笑い出したウイルム娘を睨み付けながらエリックは考える。

完全にやられた。今思えばあの『賢者』に対する仕込みは実に周到だった……待ちに徹し敢えて迎撃をさせずエリックの炎に目を慣らす機会を与えなかったのも、雑魚を使つて体力と注意力を着実に削つていったのも、全ては一人を削るあの一瞬の為だったのだ。

大元は本人の不注意が招いた自業自得とも言える。だがその遠因を作り出したのは他でもない自分であり、それによつて魔物の群れに放り出された男を今度は見捨てて離脱しようとしている。

「わかつてねーなら教えてやるよオ、オマエらがとつくに終わつてるんだつてなア——」

「黙れツ！」

「ひひっ、危ねえ危ねえ！」

間合いは完全に見切られていゝ。炎の壁は牽制としては依然十分な働きをするだろうが、こう簡単に躲されるようではやはりダメージを与える事はできない。

「さあ一人減つたぞオ——困めえ！」

雑魚を散らす人手が減った分だけ均衡を保っていた形勢が一気に傾きかける。気が付けば早くも数匹が付かず離れずの距離で辺りを取り囲もうとしていた。

この状況、ウィルム娘を含めたこの場にいる全員から一斉に襲われた場合。誰がその全てを一瞬で防げるだろうか？

(く、そつ……)

果たして、これが本当に正しい道のリだったのだろうか。

エリックは思った。

ローレンスに付いてここまで来たのに後悔は無い。彼女を置いてそれ以上に信じられる物などある筈がなかった。ただそれは、今までにしてきた自らの行いが一分の隙もなく、完璧に“正しい”のだという肯定をする材料には決してならない。

例え他の全ての道が塞がれていて、これこそが“最良”の結末だったのだとしても。それでもエリックはこの期に及んで思わずにはいられないのだ。

一体、自分は何の為に——……

『諦めるな』

時が止まった。

意識を向けるのは灰色の世界ではなく、己の胸中。

それは随分と懐かしい感覚で。

魂の奥底で震える確かな鼓動。

久しく声を聴かせてくれなかった心の“炎”が、今この時。寄り添うように語る言の葉は。

『貫き通せ。これがお前の選択ならば』

「サ……」

『私は見守っているぞ』

『……最後まで、な』

世界に色が戻る。

そうして動き始めた周りの景色に併せて、御者台から赤毛の少女の背中がふと目に入った。

「何を勘違いしてるのかは分かりませんが」

「……………」

「私は終わってなどいません。例えそこで何が起こつていようと、必ず、この地で目的を果たして帰還します。貴方にはそれが分かつていないだけ」

「……………何？」

「だから私には振り返る必要すら無い」

前を。

前だけを見据えて手綱を握りしめる少女が何故そこまで言い切れるのか分からない。

「約束、しましたから」

だがその声には——疑いという物が全く含まれていなかった。

「さあ、貴方の力が必要です。次の攻撃さえ防ぐ事ができれば当初の作戦通り、あのウィルムを後続から追いつかれる前に仕留める時間ぐらいは稼げるでしょう」

「……………次の奴らは一氣に来る。オレだけで全部を防ぐのは、」

「エリック」

ぎくり、とした。

「大精霊サラマンダーの司祭長」

その声になぜこういつた感覚を抱いたのかは分からない。ただ余りにも澁みの無く透徹とした、纏う“圧”さえ肌先に感じさせるような雰囲気はまるで……

同じ人間、ですらないかのような。

「為すべき事をしなさい。それが出来るのは、生きている間だけですよ」

「……………」

得体の知れない何かに導かれている気さえした。

自然と体を動かしていた。剣を握る手に力が籠る。

「……………そうだよな」

何が正しい事なのかは分からない。

それでも。

背中を押す力に應えること、それを躊躇う理由はどこにもない。背負っていた鞘をおろして手に取り、そこへ徐に大刀を納めたエリックは——誰かへと囁くように呟いた。

「二陽」
ジヨウ

さあ。

驕り高ぶる飛竜へと、ひとつ地獄を見せてやれ。

「……?」

カチリと、瞬くような閃きをウィルム娘は眼下から感じた。

ほんの一瞬だけ感じた光は、しかし僅かな残光を残し既に収まっている。何が起こったのかと馬車の方向を注視すると――

「何だありやア?」

一筋の“白”が尾を引いていた。

炎使いの男、エリックが一瞬にして抜き払った大刀の切っ先から、細く濃く延びるようにして延々と白煙が吐き出されているのだ。

……それだけ。当の本人は何をするでもなく、片腕で剣を振り抜いた姿勢のままピタリと停止して動かない。走る馬車の速度に沿って煙が後方へと流れていくが、地上を走る仲間たちは当然警戒してそれに触れないようにしている。

(何のつもりだ、諦めちまったかア?)

今すぐにも周囲を取り囲む敵を振り払わなくては自分達の一斉攻撃を耐えられないと分かっているだろうに——もつとも、それすら無駄な事ではあるが——その素振りすら全く見せない。煙を吐きながら前に進む様子は一昔前にその線路の上を走っている所をよく見た鉄の車を思い出させたが、どの道脅威にはなり得ないだろう。

(まあいいさ、何でもいい)

既に躲した二回の攻撃で相手の底は見えた。あの火力は確かに脅威だがスピードが足りない……ましてや下の対処と同時に自分を捉える事など、どう足掻いても不可能だ。

「——野郎どもオオ!! 行くぜえツツ!!」

「「「おおおっ!!!」」」

あるいは、それは当然の帰結かもしれないなかった。

獲物を狩る際の魔物としては極めて冷静な思考で一行を追い詰めたウィルム娘の歴戦は、しかしどこまで行っても魔物的だ。

数時間にも及ぶ“待ち”の策略が見事に嵌まった上で、あと一押しに躊躇いを持ってなかつたのはそこなのだ。

眼下の男をどのように陵辱するか。

風の唸り声が肌を叩くほどの急速降下を敢行しながら、大半の思考がそのような形で停止しかけた状態で。

そんな状態でこの違和感を少しでも感じられたのは、そこは流石と言うべきだろうか。

(あ……?)

こちら“だけ”を見ていた。

敵は、エリックは、この自分以外にも群がる何体もの竜族を視界にすら入れようとしていなかった。

上か下か。どちらか片方でも対処をしなければ敗北が決まると知っていよう。だが、それでも、合わせた両眼が焼け付くほどに鋭敏な殺気は他ならぬ自分だけに向けられていた。

それは不退転の覚悟。

もはや助かる道無しと判断し、せめて一番の強者である自分と刺し違えようとしているのか。

(……………)

圧縮された時間の中で眼球だけを動かし、周囲を見る。

「ぐんぐんア!!」

ボキボキツ、という異音が響く。ついに地上から襲い掛かった同族達が馬車を破壊し始める音だ、この様子ではあと数秒で走れなくなる事だろう。

この地で移動手段を失うということは即ち、生きて帰る望みが全く断たれるという事だ。

——動かない。

「う、くっ……!」

同乗者の女からうめき声が漏れるのが聞こえる。真つ先に馬を狙った者がいた。その爪が皮を裂き、その牙が首筋を捉えて抉りはじめた。こうなってしまうては何もかもがもう遅い、彼の心は絶望に染まるしかないはずだ。

——動かない。

興奮しきった竜達の息遣いさえ聞こえる距離まで近付かれた、今この瞬間に至つてさえ。

——動かない。

他は眼中にすら入れていない。あれが見ているのは自分だけ。

“それ”を理解した瞬間——ウイルム娘は、自らの顔がどのように歪んでいるかをハッキリと自覚した。

第29話

(……面白エ)

つまりは“喜色”。

眼を見れば分かる——あの覚悟は己をなげうつ物ではあつても捨て鉢の暴挙では決してない。あの男は他の誰でもない自分こそを、戦士として研ぎ澄まされたその人生で最後の一撃をぶつける相手にと選んだというのだ。

こんなにいいらしい事はない。

こんなに、光榮な事はない。

(やってやる)

僅かな時の中でウィルム娘は決意する。

この攻防で打ち負かされるようなら、たとえ他の仲間たちに彼を取られたとしても自分手を引くでしょう。所詮はそれまでの女、不釣り合いだったというだけの話だ。

だが、この手で彼を仕留めることが出来たなら。

(オマエをつがいにしてやる)

獲物の独占は御法度？ 知った事か。群れを追われる事になろうがその時は彼と一緒に逃げてやる。

そうして、あの強い覚悟も意志も快樂に浸けてぐちゃぐちゃに叩き壊したあと。思う存分にあの男との子を孕むのだ。

あれほどの男が自分だけのモノになると想像するだけで子宮が疼く。目付きがとろんと緩みそうになるのを必死に抑えなければいけなかった。

それは、人間からすればあまりにも歪んだ感情に見えるかもしれない。

だが魔物という存在にとり「戦士として相手に敬意を表する」と「この男こそは徹底的に犯し抜いてやる」の間に区別は存在しないのだ。

だからこそその敵意。だからこそその、親愛。表裏一体のそれらが矛盾なくエリックを襲う。

「る、あああああああッ!!」

この飛行姿勢……ああ、もはや後には退けないが。それが何だと言うのだろう。

恐れるべき窮鼠の一噛みを察知した。さりとして接近さえしなければ、確かに他に對して無防備な獲物は容易く仲間たちに捕らえられよう。その結果には何の不安も有りはしない。本当にそうか？

事は既にそういった段階を踏み越えているのではないか——それが諭え踏み越えさせられたものであつても関係ない。

「炎の盾」は絶対に來ねエ。今使用えば確實に當る技だが、どうしたつて致命打にはならぬ——ようなシケた技を最後の一撃に選ぶ男か？

轟音。はためく翼が哭き叫ぶばかりの恐るべき急加速を伴いながらも、衝動に湧く心をピタリと押し留める戦士としての冷静は限り無く正確に相手の戦力を読み解いていく。

（あの『吹き出す煙』……ここまで近づきや流石に判る。肌を感じるぐれエの魔力を次の一撃に集中してやがるな。何をするつもりかは知らねエが……來いよ、読み切つてやる）

張り詰める。

この場に柵たなび引く白煙を緊張の糸に見立てる者が居たとすれば、それは余りにも的確だと言わざるを得なかつただろう。

糸が、切れる。

ぷつり、と。

劍の切っ先から吐き出されたる白煙が途絶えた次の一瞬、初動をエリックが先んじた。

「 ! 」

ズバオ!! つと。

空を焼き切る絶大な火力を伴った『炎の突き』が、最短最速でウィルム娘へと放たれた。

特大の爆炎ではない。かといって劍筋に沿った愚直な突き、さしたる小手先の技も含まれない。ただ鋭利なる威力という一点では最上位の魔物を相手にしてさえ命にまで届くのではないかと思わしめる程の恐るべき攻撃だった。

「お、おおおオオオおおツツ!!!」

バグウツ!! つと。

巨大な怪物の顎が何かに食らい付く様を想起させるようなそれは、ウィルム娘の両翼が全力を以って空気を叩く音。

ただ一瞬の加速。真横へと飛び退く形となる方向転換は前方への勢いの大半を殺す

事と引き換えに——

「ツツツツ!!」

紙一重、という表現そのままに。

それでいて完璧に、見事に炎の一閃を回避してみせたのだ。

(やつ……やつたツ、やってやつたぞ!!)

しかし。

しかし。

自らの翼に押し飛ばされ、空中に放り出されたウィルム娘は一瞬だけ疑似的な無重力状態へと陥った。それは空の覇者がほんの一瞬だけ見せた『凧』の隙間とでも形容すべき瞬間。

(勝ったアツ!!)

もう一度だけでも空を叩けば直ぐにでも制御を取り戻せるのだろう。確かに、その一瞬の間と同じ攻撃を繰り返す事はエリックといえど不可能だった。

しかし。

隙とも呼べぬその刹那——上下も逆様に転げた視界で、ウィルム娘は信じられない物を目の当たりにしたのだ。

(あ………?)

白煙が。
燃え上がった。

先程ぷつりと途切れたはずの煙。男の後方へと漂っていた一筋の線がその軌道を丸ごと熱と光に置換されていくかのような、そんな光景を垣間見せた。

「オレに、とつての『一流』……つてのは」

いつの間にか滝のような汗を流していたエリックは、ぜえぜえと息を荒げながらも宣言する。

「いいか……『燃やす相手を選べる』ことだ。空を焼き、そうして煙に焰を灯す術……。これぐらいは手品だと、そう強がってやる事もできない芸当だがな……」

二度目の一撃目、躲せるか。

その眩きは、飛竜を呑み込む大火の渦を巻く爆熱に掻き消された。

「はっ、ハアツ……はあ……」

がつくりと膝を突く。炎に包まれて後方に吹き飛んでいった敵の様子に目を向ける事もできずに項垂れる。

戦士として、司祭として、何よりローレンスの手駒である事を選んだ自分を生きた。こんな人生には望むべくも無い僥倖だ、やれる事は最後までやった。悔いは無い……

ただ、一つだけ心残りがあるとすれば。

最後の任務が失敗に終わった事。

いや、あの二人を守れなかった事、か。

???????

『魔法だと？ 人間がか？』

『だそうだ。まったく“賢者”一行か……大したタマだね、同じ時代を生きている気がせんよ』

『……ああ』

『そうだね……本当に』

『……』

『なあ、エリック。いいかい』

『何だ』

『明日あんたは多分死ぬ。"かがり火年"のゴールド火山つてのはそれだけの場所つていう事だ。そういう所に、ウチはきみを送り込む』

『構わない。お前が気軽に使い潰していい駒と言うなら、オレも、お前自身も同じ事だ。お互い様つて訳じゃあないが。なあ、そうだろう』

『結構結構、立場というのを理解しとるよーで安心したよ。変に酔わないのはきみの美德だな……ただね、いいかい。ウチはこうも思うんよ』

『聞いてやる』

『いつかウチらが夢見て、今はとつても手の届かない話だと理解している筈のこと。それを受け継いでくれるとしたら、きっとああいう人達だ』

『……そうかも知れないな』

『きみさえタダでは済まないだろう場所に送り込む。彼らが無事で帰ってくるという期待もウチはあんまりしていない。別に普通に死ぬかもね。だけど——』

『……………』

『それでもウチはあいつらが好きだ。ここで願うよ。みんな、生きて帰ってきて欲しい』

???????

(無理、を……言いやがってなあ)

走馬灯のように浮かび上がる記憶、というのも強ち間違っていない。もう、生きてい
るうちに判然と物を考えられる時間は然程に残っていないだろう。

ウィルム娘を倒す為に地上の童達へと隙を晒した自分に未来は無いが、それも今ひと
つどうでもいい事のように思えた。

今は……ただ、泥のように眠りたいような……

そんな気分だ………

「………？」

妙だ。

しんとした静けさが妙に長い。死出の旅とはそういう物かとも一瞬だけ思ったが、魔物に捕まえられる自分がそのような死に方をするはずが無い。

そして。

そして。

そして何なんだ——この肌寒さは……!?

「はっ……っ?」

思わず目を開けた瞬間、エリックは自分の魂が異界か何かに迷い込んだのかと本気で錯覚した。

氷像。

周囲を見渡す限りの氷、氷、氷。

それでいて己を取り囲んでいた人影がそっくりそのまま、物言わぬ氷像に置き換わっている。

異様な光景。ただ、この凍結した冬の朝焼けを思わせる外気に身震いしそんな感覚だけは夢や幻のそれではない。それだけは確かだった。

「……!?! ……!?!」

よくよく注意すれば……足元の半壊した馬車の残骸は今まで乗っていた物だったし、道の傍に整然と敷かれている線路からしても見慣れた土地に違いない。

ならば一体ここで何が起こった？ 自分以外はどうかになった……？

「言わない事は無いでしょう」

しんとした空間に突如響いた声に振り返る。

そこにはジェーン、赤毛の少女が草くたび臥れたように馬車の残骸へと背中を預けたままへたり込んでいた。

「な……何だコレは。お前がやったのか？」

「恥ずかしながら……周りに気を遣う余裕なんて全くありませんでしたよ、私には。慣れない事に集中なんてする物じゃありませんね」

彼女は全く関与してなどいないという。

ならば誰がこんな事をやった？ 一体誰が？

「馬が齧られた時なんて驚きすぎて転げ落ちるかと思いましたが。いやあ……そんな彼らも見ての通りコチコチに凍ってしまいましたかね。ま、私としては散々手こずらせてくれた厄介者が消えてむしろ肩の荷が降りたと言いますか……」

「待て、アンタじゃないってんなら……」

「だから、言わない事は無いと言ったでしょう」

何という事でもないような調子で。

依然として気だるげに。『賢者』の旅の同行者は、エリックの『背後』に向けてこう

言つた。

「ねえ。貴方の人生は、貴方一人だけの物ではないんですから」

「ああ」

「その道の結末を私に見せてくれるまではどこにも行かない。そうでしょう?」

「今更聞くなよ、当たり前前の事を」

ぬるり、と。

エリックの足元から這い出るように——否、その表現は正確ではない。事実、真正正銘、その男は紛れも無く影の中から姿を現したのだから。

『『ふたつ つきかげ双月影』——影を移つて飛び越えた』

気が付けばそこにいた、という感覚がエリックにとつては正しいだろう。

自分の陰に隠れるような形で姿勢を低く屈めながら長杖を突いていた。東方の賢者“は二の腕に装着した骨と羽根の飾りを軽く撫でたあと、軽く頭を搔いて言つた。

「あまり長い距離はジャンプできねえからな、魔物どもの影を一匹ずつ渡り継いでここまで来たから思いの外時間が掛かったが……どうつて事は無い。これぐらいなら手品の範疇だぜ」

「本当ですよ。やっている事の規模は中々の物ですが、所詮は道具に頼った即物的な代物です。これぐらいの術式なら杖一本で組める程度には自分自身の物にして貰いませんと」

「あのなあ、普通こういう謙遜つつうのは本人でやるモンだろうが。お前が訳知り顔で駄目出しをしてどうするよ」

まるでこれが日常の光景だとしても言うように。

これぐらいの困難を相手に立ち止まってなどいられない、とでも言外に語るかのよう

に。

「お前らは、オレたちとは違うんだな」

考える前に口を吐いて言葉が漏れた。

「そうだ、自分とは違う。何があっても『より良い方向』に進み続ける、それができる強さを持った彼らとは決定的に違う。」

だからこそ、だ。命を拾った彼に対して自分が今してやれる事は――

「ああ？ 何か言ったか」

「……いや、気にするな」

「？」

「まだ目的地に行つて帰つてきた訳じゃない。護衛を続ける。それだけだ」

「んだよ、言いたい事あるならばつきり言え……つと」

「ぐ……、がお……」

ピシピシッ、と罫割れる音が鼓膜を揺らす。

「エリック、お前が倒したウィルム娘とは比べ物にならない雑魚でも俺にとつては難儀な相手だからな……ましてやこれだけの数、ギリギリ動きを止めてるだけだ。だがそれでも相当魔力を使つちまった。さつさとこの場を離れねーと……」

辺りに霜が降りるような冷気を帯びた霧の中を歩き出した、次の瞬間。

「……追い付かれてしまったようですね」

ズシン、ズシン……と重厚な足音が近付いてくる。今まで散らしてきたような小型の竜人らとはモノが違う『本物』のドラゴン。

普段は洞窟の奥などに居を構え佇んでいるような大物、それが獲物を狙って外界を跋扈するという異常性。“かがり火年”を象徴する自然の暴威が牙を剥くとはどういう事か。それは今、こういう状況こそだと言ってもいい。

あれらの大半が“迅さ”を除けばあのウィルム娘と同格か。霧の奥から威圧的に光る幾対もの双眸に射竦められ、冷涼な空気の中で頬を伝うのが汗か霜かも判然としな

い。
「私があればを引き付けます。貴方達は先に行ってください」

「駄目だ」

「……………」

「この状況が分かつてるだろ。お前は力を使うな」

これはエリックのあずかり知らない事だが、確かに赤毛の少女——プロメステインの持つ天使の力、正確に言えばその無敵性を使えば状況を打破できる可能性はある。

だが彼女は万が一にも他者に正体を知られてはならない身。実力差故に何が起こったかも理解できないようなはぐれ狼一匹を取り逃した。あの夜、程度の事ならともかく、敵も味方も含めた目が多過ぎるこの局面で天使の能力を曝け出す事はできない。

「お前の力は、負けないからって勝てるとは限らないだろうが」

「……………」

「それに奴らは倒せもしない女より……………逃げる俺らを追ってくる。お前を無視するアイツら全員相手だぞ、そもそも足止めができる保証だつてどこにも無い」

「とにかく——迎え撃つしかない訳か」

大刀の柄を強く握るエリック。まだ三回しか剣を振るっていない割には消耗が激しいが、ともあれ余力はまだ残っている。

「賢者、どれだけ戦える」

「……………力を使い過ぎた。全開で行くなら持つてあと数分つて所だ」

「……やるしかない、か」

状況は依然絶対絶命。この土地のど真ん中で足を失った絶望は何も変わりはないのだから当然だ。

だがもうここにいる誰も折れはしない。最後まで生き足掻く覚悟は済んでいた。集中する。

この霧の中、既にこの場所は敵に囲まれていても不思議ではない。いつどこから襲われても即座に相手を切り伏せられるように腰を落とす……集中、する……………

(……………?)

神経を研ぎ澄まし、そうして微かに見た違和感。

それはどこか遠くから耳朶を打つ音。

聞き覚えのある重低音。

「……エリック、何か聴こえたか？」

「いいや、まさか……」

がたん

ごとん がたん

がたん ごとん がたん !!

長大なシルエットが霞の奥から微妙に覗く。

その像が徐々に近付いてくるに従い、傍らに敷かれた鉄路のギシリギシリと軋む音までもが強まっていくようだった。

「……はは」

何て話だろうな、この土壇場だよ。

俺の勘違いじゃないとすりや、それじゃあ——

「ちよつとした賭けになるかもしれないねえけどよ。ここから全員助かりたい、だったらそれぐらいの冒険はしろって事だろ」

「……何の話ですか？ それにあれば、あの近付いてくる影は一体……」

恐らくこの場で唯一『実物』の動くところを見た事のないプロメステインが怪訝そうな声を漏らす、もし本当にそうだとしたら時間がない。

「いいか、決めるのは今だ。——俺を信じてくれるか」
これで十分だ。

言葉の足りなさは自覚しているが……俺達の間に関以上は要らない。今更になつてその確信が揺らぐ筈は無い。

「当たり前じゃないですか、いちいち聞かないで下さいよ」

俺の眼を正面から真つ直ぐ見ながら、この場を思わず日常の一風景と勘違いしてしまふぐらいの普段通りな調子で断言された。

「……よし。いいな、エリック」

「やるしか無いだろ。……まあ、良いか悪いかは」

いつの間にか苦虫を嘔み潰したような顔になっていたエリックは、それこそ絞り出すように吐き捨てた。

「動いた後で決める事にしたからな。来るぞ、両方共だ！」

「ああつ！」

その合図と同時に、俺はプロメステインの手を握って走り出した。やつは驚いたように目を丸くしたが、決して離さないように強く握り返してくれた。

その瞬間——俺達が元居た場所に巨大な竜の前脚が振り下ろされる。ズシン！と地面がここまで揺れるほどの衝撃だったが、俺はただ前だけを見て走っていた。駆ける。駆ける。ゴルド火山まで続く線路の道を沿って、プロメステインの手を引きながら全力で走り続ける。

——ただし、これまでの道のりとは根本的に違う。

今まで来た道を遡るように——逆の方向へと進んでいるのだから。

なあ。

そこに、いるんだろ？

「う、おおおオオオオツ!!!」

力の限りを尽くした跳躍。ジャンプ

ふわりと体が宙に浮く一瞬。ほんの一瞬のその感覚が都合頂点に達した瞬間——劇的な変化が訪れる。

ポバツツ!! と。

冷気の霧を真正面から食い破るほどの質量が、俺の眼前に出で現れた。

「間に合ったっ!!」

俺の体の左側をすれすれに通り過ぎる線路の上を奔る質量——この『機関車』から身を乗り出してまで差し出された手を、掴み取った。

第30話

「あんの馬鹿たれが………っ!!!」

ドウエルガ郊外。

眼鏡を掛けた銀髪の黒小人^{ドワーフ}ローレンスは、およそ汗をかくには向かない黒ドレスを身に纏ったまま一点を指指して走っていた。

思い出すのは数分前の報告。何やら息急ぎ切つて執務室に駆け込んだきた部下の相を目にするまでは、良かれ悪かれ自分の描いた絵図の範囲ぐらいは滞りなく進行している筈だと思つていたのに。

『な………何? もう一回言つてくんないか?』

『ですからあ! あんたの妹さんがあ!』

なおも走り続けながら考える——マクニアをこの町に留める算段は立ててあつたが、どこまで行つても見習いに過ぎない彼女が師匠の“遺産”を駆り出してまでこの暴挙に走る事は計算外だった。

それに技術者の畑ではないローレンスとはいえ「あれ」の仕組みぐらいは流石に頭に入れてある。どう無茶をしてみたって一人でも勝手に動かせる代物とは思えないが……現に視界の向こうで白煙を吐き出し始めた鉄塊を見るに、妹分が「まともな手段」で町を出る事はできないと判断したのは確かなようだ。

「はあっ……おい！ マクニア！」

「っ、姉さん」

もう動き始めるのに数秒と掛からないだろう。ゆっくりと回り出した蒸気機関に目を遣つては、ここから出発を止める事はもう不可能だろうと察する他は無いのだった。

「誤解しないで！ そこまでネジが飛んでるって訳じゃない。まずは運送組合にも依頼しに行つたよ……でもね、結局姉さんがどれだけあたしを外に出したくないかかってのを
知ることになるだけだった」

「……なら、」

「確かに、嬉しかった」

「……………」

「これだけ本気なんだっていうのが分かった。これだけあたしを守ろうとしてくれるんだっていうのが、分かった。……でも謝るのは一度つきりだよ。あたしはどうしたって行かなきゃいけないから」

ただ、それでも。

これだけ長い間押さえ付け——いがみ合ってきた間だというのに。その声色には感謝すら含まれつつあったというのだから。

「——行つてきます！」

結局、止める事など出来はしなかった。

「はあ」

狼煙を上げながら猛然と速度を上げていく蒸気機関車を見送るように眺めながら、この町の長はただ独りぼつりと呟いた。

「目を開け」

餞別と言うには細やかに過ぎるが——許されるだけの、言葉を贈らずにはいられなかった。

「望んで舞台上が上がったからにや、そうだ。目を見開いて物を見てこい。そうして自分が何処に行くんかを決めてきな。……それがお前の、責任だ」

???????

「——おい、……き、ろ——マクニア!!」

???????

「んあ……?」

「や、やっと起きたかこの野郎。まったく無茶しやがって」

ゴーグルを首元に掛けた赤髪娘が数秒間の意識の混濁から帰ってきた事で、俺は思わず胸を撫で下ろさずにはいられなかった。

体格に見合わない腕力で俺とプロメステイン二人を引き上げてくれたマクニアだが、しかし勢い余って後ろに倒れ込んだ時に壁へ頭をぶつけてしまったのだ。

「……………あつ」

また少しの間ぼやけた瞳で辺りを見渡していたと思いきや今度は一転、慌てふためきながら掴みかかって来やがった。まだ寝ぼけてんじやないだろうな。

「え、エリックは? たしか一緒に掴まって来なかったんじやないかい!」

「アイツなら心配するだけ無駄だよ、ったく……ありや本当に人間か？」

横窓の一角を親指で指し示す。野郎、俺がマクニアに引つ張り上げられてる間に遅く見ても時速80キロ以上は出てる鉄の塊に軽く飛び乗つて来やがった。

今も機関車の側面に片手で張り付きながら後方の警戒をしている人類最強には畏怖を通り越して呆れの念まで抱いてしまう。あんなもん精霊の力は関係ないだろうに、やはりこの世界の人間ってのは鍛えればこれぐらい滅茶苦茶な動きができちまうんだろ
うか。

「……そつか。間に合つたか」

流石にごく一部の“別枠”を見て判断するのは不適當かと首を横に振りながら、深い息を吐いて安堵するマクニアに改めて感謝の念を送っていると――

「こ、これが『蒸気機関車』Steam Locomotive。仕様書を見た限りでは随所に魔道具からなる技術的補完が為されているようでしたが、とはいえ純粋な機械動力だけでこれだけの大質量と速度を両立させるとは……」

「こんな時でも相変わらずだなお前は」

とまあ、相変わらずなプロメステインに突つ込みを入れながらも興奮しているのは実の所お互い様なんだよな。こんな世界に飛ばされたからには二度とこれだけの技術に頼れないのだと覚悟していたが、まさかこんな形で。

……よくよく思い出してみればこの車両、外から見たデザインも前世のそれとは大分異なっていたような気がするな。

例えば普通『煙突』っていうのは上に向けて付いてる物だと思っただが、こちらの機関車はどうも“両脇に取り付けられた流線形のパイプが後方に向けて煙を吐く”ようになっていているらしい。バイクの排気口、マフラーみたいな感じになっていると言えれば分かりやすいか。

ただ発展途上の技術だからそうなってるのか、それともプロメステインの話聞くに魔法のような異世界特有の法則が絡んでいる上での「完成系」なのか、その辺りは色々興味尽きない所だが……

「でも初めて知ったよ、機関車ってのは出発から一人で動かせるモンなんだなあ」
「い、いや。そんな訳無いだろ」

思わず漏れた感心の眩きに帰ってきたのは。

思いもよらぬ回答だった。

「この車は『機関士』と『機関助手』2人で動かすもんなんだけど、あ、あたしは師匠の見習いで……ボイラーの調整をしたり炉に石炭入れたり、それぐらいしかやった事ない。要は助士の仕事だけだよ」

「……………」

「出発する前に分かる範囲で少し調整してから……えーっと、あとはここまでエンジンを動かしてきただけなんだけど」

「あ、本当だ。見てくださいいよ、加減弁もブレーキ弁も開きっぱなしですし、この圧力計とかぐるぐる回ってて凄い事になってませんか？」

「……………」

「暴走しますね、思いつ切り」

「マクニア、これどうすんの？」

「……………」

「まっまままツマジで？ た、頼りにしていいんだよなあ!？」

「あ、あたしからもお願い！ 助けてーっ!!」

「本当に貴方らは全く……もう……!!」

呆れた連中だと憤慨しながらプロメステインは機関室の前側に立って、なにやらパチパチと手際良く装置の操作を開始した。

「仕組みと操作方法なら頭に入れています！ 昨日貴女の家にあつた本全部読んで覚ええました！」

「え？」

「え？」

「な、なんとかして制御を取り戻してみます。まずは速度を落としますからあまり騒がないでください。気が散るんです」

かち、カチカチ。

ぐるぐる、パチーッ！ ぐりっカチぱちり！

「……………」

宣言通りだった。

見る間に窓から覗く景色の流れていく速度が落ち着きを取り戻し、数十秒と経たない内に全ての計器は正常に戻っていった。

またプロメステインの手の動きに合わせて速度が自在に上下するようであり——気がつけば、もう既に機関車のコントロールを物にしてしまっているようであった。本当に同一人物なのだろうか？ 馬2匹相手にあれだけ四苦八苦と大騒ぎしていた御者モドキと……

「……何ですか、その何か異様な視線は」

「……お前つてさ、時々だけど本っ当に格好良いよな」

「正直ちよつと惚れたあ……」

「やめて下さいよ気持ち悪い！ そういうのが気が散るつて言ってるんです！」

ひとまずは助かったという安堵感。ようやく一息つけるといふその感覚が今度は若干の悪ノリを醸し始めたそのタイミングで——

「随分と賑やかだな、おい」

ぴしやりと、水を差すような一声が窓枠の外から飛んできた。

獣のような身のこなしで遠心力を使い、すんと床の鉄板に着地をする音が背後に聞こえたのだ。エリックが開け放しの入り口から一足遅れて機関室に乗り込んでくる音だった。

「今ここに居るって事はだ、マクニア。どれだけオレらがお前を巻き込まないようにしていたかを分かった上で来たって事だろうな」

「けど、助かっただろう?」

二日前までとは違う毅然とした……というか若干開き直った態度で話すマクニアに暫しの間鼻白む。

「……それとこれとは話が別だ」

「そうかな? 別かどうかだって関係ないと思うけどね。いつそのこと素直になりなよ、助けに来てくれてありがとうございませう〜って」

「必要ない」

「ああ!? アンタねえ昨日あたしの横つ腹ぶん殴って気絶させたの覚えてるんだよ! 幼馴染の女の子にやっていい事と悪い事の区別も付かないの!? バカバ——カ!!」

「え? 昨日そんな事あったの? マジかよお前……」

「最低ですね……」

「おい待てテメーら! やめろ!」

一気に旗色を悪くしたと見える司祭長どのはゴホンと一つ咳払いをしつつ。

そうしてマクニアだけではなく“俺たち二人にも向けて”といった感じで取り直した。

「オレが言いたいののはな、ここまでやってもお前に教えてやる事は何も無いって話だ」
 「おい、この期に及んでそれは無えんじやねえのか」

「勘違いするなよ」賢者、雇っている立場なのはオレ達だ。対価を今こうして払っている以上こういう想定外にどう対応するかはこつちが決める」

こうまでして俺達を窮地から助けてくれたマクニアに対する仕打ちとしちや筋が通っていないだろう。にべもない一方的な断言に思わず不満が顔に出てしまう。しかし――

「……はあ、いいんだ。気にしないでよ」

この状況を把握したくて仕方がないのは彼女だろうに、当の本人からそれを諫められてしまった。

「覚えとけよ」の念を込めてエリックにガンを飛ばす俺にマクニアは「いやホントにいいから」と呆れる素振りを見せていた。

……畜生。俺は、お前が考えてる以上にお前の事を仲間だと思ってるんだぜ。

お前が無理してそんな事言ってるんだってぐらい、分からないわけねえだろうが。

「エリック、そんなの今はどうでもいい。あたしがここにいるのは皆を助けるためだ。

……ねえ、二人とも」

「ああ」

「はい」

「最初にあたし達は約束したよね。こっちは仕事を頼む代わりに『ゴールド火山』に連れて行くって……あの時は”かがり火年”が終わるまでに機関士の仕事を覚えて、それからここまで連れてくる予定だったんだ。でもそんな悠長な事は言つてられなくなつた」

「あの時は結局俺らは何もできなかったけどな。そのエリックが全部片付けちまつた」

「それでもだ。あの時うやむやになつた約束を果たす為にもあたしは今ここに居る。それぐらいで良いだろう？ ついてくる理由なんてのはさ」

きつとそれは本心じゃない。俺とプロメステイン、そして幼馴染のエリックを助けるために自分を殺してでも捻り出した口実に過ぎないという事は、その切なげな表情がありありと物語っていた。それに対してエリックは――

「……つまみ出すつてわけにも行かねえ」

腕を組み、ふいとそっぽを向きながらも。

その小声の呟きはここに居る全員の耳に確かに届いた。

「勝手にしろ……」

それってつまり？

「少なくとも一緒には来ていい、って事だよね」

「そうは言っていない」

一見すると当たり前だろというか、むしろ全くどうという事も無いはずの一言だ。

だが今までは異様なほどに妥協というものを許さずマクニアを遠ざける事だけを徹底してきたであろうエリックからその一言を直接引き出せたのは、これもまた異例の許容という事になるのではないだろうか。

「じゃあどう言ったのさ」

「……………」

「良かったなあマクニア、こいつ口喧嘩になったらめっちゃくちや弱そうだぞ。懐にまで入られると一気に対応できなくなるタイプだ」

「ローレンスさんみたいな人の後ろで黙って腕組んでる時が一番怖いタイプですよね」
「今すぐ全員外に叩き出すぞ」

この冷血漢め、今さら青筋を浮かせた所で多勢に無勢は変わらんぞ。いやプロメステインに限っては割と俺に合わせて煽ってるだけで特にマクニアの味方でも何でもないんだろうが……それでもまさか言葉通りに俺達全員まとめて外に放り出す訳にも行くまい。

ほんの一瞬でもデレて隙を見せたのが命取りだったなと内心せせら笑っていると

ガクしやゴおツツ

「——あ？」

ぐらりと室内が揺れ動く。

重量を感じさせる物体が、とりわけ硬度を持つ物同士というより片方には水気すら感じさせるような衝突。そのような感覚が突如として部屋全体に降り掛かってきた。

思わず機関車の操縦を一手に担うプロメスティンに視線が行く。だが彼女は面食らった顔をして首を横に降っているだけだった。

「……クソツ」

何かに勘付いたようなエリックは即座に出口の柵に手を掛け、そのまま一飛びで屋根の上にまで上つてのぼっていつてしまう。

「お、おいっ………待てよー!」

——時速80キロで走り続ける鉄塊の上で同じような芸当に走る事はできない俺でも、外に体を乗り出して見れば流石に状況を飲み込めちゃうというものだ。

鱗は剥がれ落ち、体は半分も黒く焼け焦げて。

全身を酷い火傷に覆われた飛竜が息も絶え絶えといった様子で。しかし、それでも、車両の後部へと確かに爪を食い込ませていた。

第31話

「は、はあつ……まだ、終わってない、ぜ……」

機関車の後部にしがみ付くのは異様な執着が覗く瞳のウィルム娘。しかし深手を負ったその首元へと、エリックは冷ややかな剣先を突き付けた。

「……諦めろ。そんな体のやつに負けてやれるほどオレは弱くない」
「くくつ……かも、なあ」

いくら俺にだつてあれだけの重症にこの間合い、どちらが圧倒的に有利かは目に見える。ただ何を企んでいるのか、不敵に笑うウィルム娘の真意は一体――

「だ、がよオ……そんならそれで、いつそ一緒に死んでみる、か？ 残った力でも、この鉄板の一枚や二枚……抜く事ぐらい……訳は、ねエんだぜ」

「ッ!？」

その言葉に流石のエリックも身を強ばらせた、次の瞬間だった。

「かあッ!!」

捲り上げるような爪撃があった。

僅かな隙を見逃さず突き付けられた剣先を弾くと同時、風の音が鳴りはためく列車の真上で一匹の竜がエリックに踊り掛かる。

「しッ——」

ギヤリギヤリン!! という剣戟の音響に俺は一拍遅れて気が付いた。

ウィルム娘の接近を目で追えなかつたのだ。それほど奇襲を防いだエリックも凄まじいが、不意を打たれて体勢の崩れたあの状態では仕掛けた側の優位は止まらない。

冷や汗を散らしながら距離を取る司祭、床となる鉄板を蹴り後を追う飛竜。その構図が変わらないまま車両の後部からこちらへと徐々に二人が近付いてくる。

「くっ、待つてろ! 今そっちに行く! お前らはそのまま下にいろ、いいな!」

「は、はい!」

形勢は不利、なら加勢に行かないって手は無い。マクニアもプロメステインも機関室から離れられない今動けるのは俺だけだ……あんな戦闘に割って入れる自信は無いが、残りの魔力を使えば後ろからでもやりようはある筈だ。

……逸るなよ、俺。未だに高速で運行する機関車をエリックほど簡単に登れる訳がない。背筋の凍るようなスピードで流れていく地面から目を逸らしながら、ゆっくり、ゆっくりとだ。

「うっ、お……」

ちくしょう、こんな世界に来てまでどうして映画のワンシーンかってぐらいのアクションを要求されなきゃあならねえんだ。

手を滑らせたなら確実に死ぬ。その想像を必死に堰き止めながら、俺は天井の縁へと手を掛けた。

「ら、あアッ!!」

「ぐっ!」

予想外の一撃が飛んできた。ぐるりと勢いよく体を半回転させたウィルム娘から繰り出されたのは尻尾による足払い。

通常の体術では警戒しきれない動き——しかし流石と言うべきか、一流の戦士の反射神経は紙一重の跳躍にて攻撃を回避。飛び退き、手を着き、そして鮮やかな側転を伴う体捌きで着地した。

「……っ!?!」

しかし猛攻は止まらない。ウィルム娘は既に着地点へと次打を置いていた——
前方宙返り。取られた距離をそのまま詰める跳躍と共に繰り出され、回転の威力を乗

せた渾身の蹴りが稲妻のように突き刺さらんと襲い掛かる。

（ぐっ……足場ごとブチ抜く威力の蹴り！ 受けるしかない!!）

横に動けばどうにか避ける事はできる。だがそうした場合車両へのダメージが未知数だ——最後の移動手段をみすみす潰させる訳にはいかない。

（最初ヤツが言った……『いつでも道連れにしてやれる』、あれも半分は俺の隙を作るためのブラフだ。今こいつの目的はオレに勝つて屈服させること……純粹な戦いでケリをつけに来ている。だがその為に“こういう”手段を取れないかっていうのとは話が別だ……！ 容赦無く勝ちに来てやがる!!）

ガぶんツ!!! と。

余波で周囲に風圧が発生するほどの一撃をエリックは真正面から受け止めた。何の捻りもなく打ち下ろされた愚直な踵かかとが大刀の刃と激突し——硬い鱗と筋肉に覆われた右足は見るも無惨な程に深く抉れ、硬質な感触は剣が骨にまで達した事を明確に示す。

だがそれだけの重撃、食らった方も当然タダでは済まない。

「っ、ぐ……」

返り血か、扱さては頭部からの出血か。

顔の上を幾筋と伝う赤。その両脚は確かに床を踏み締めていたが、一方で虚ろな目をたたえる頭部はわずかに揺れ始めていた。

——今なら、勝てる。

そう判断したウィルム娘の焼け爛れた口角が吊り上がるがしかし、それすらも束の間だけの事だった。

「凍えて砕ける！」

「ッ……な!？」

アレは不味い。この傷付いた体で先ほど見たあの攻撃を受けるのはリスクが高すぎる。

飛びつけば目の前の司祭一人なら簡単に押し倒せるに違いない、しかしなまじの冷静がそれを許さなかった。獲物の肩越しに見えるは長杖を横薙ぎに振るう魔術師の姿――

「フロスト・フロウ!!」

選択肢は無かった。少なくとも量の血液を足首から滴らせながら真上へと飛翔する。最短最速で距離を取るにはこれしか、

怒気が。

この喉の肉を圧し分けて顛あらかわれた。

「……………あア?」

離れて今更ようやく追い付いた理解、それによつて俄にわかに脳が沸騰する心地すら錯覚した。だつておかしい。視界の隅に捉えたばかりでも一度見れば身に焼き付く、同族の多くを覆い尽くした凍てつく爆氷のあの気配が。

眼下に見据える光景の中に、影も形も見取れなかったのだから。

「…………上手くハツタリが効いたらしい。お前がしてやられた分ぐらいは取り返せてりやいいがな。ほら、立てよ」

「…………ぐ、馬鹿。オレごとやれば良かっただろうが」

何だこいつ。膝を突いていたもんで手を貸してやったつてのに何つう言い草だ。

「大馬鹿。憎まれ口を叩いんてじゃねえ」

前回の意趣返しとばかりに外に叩き出してやる真似をしてやろうかと迷ったが、どうやらそんな暇は流石に無さそうだな。

遠く上空から射殺すばかりの視線で俺を睨み付けてくるウィルム娘の圧には正直言つて肩が震えちまう。つくづく思うがこのステージは明らかに……まだ早い。今の俺にはな。

「……俺の腕じゃアイツを術で捉えきれねえ。魔力も残り少ないしな……お前の力は最後まで必要だ、こんな所でくたばらせて堪^{たま}るか」

「……そうかよ」

「ああ。だが行くぜ、あともう一押しだ」

並び立つ。

実力は伴っていないかもしれない。だが俺には俺でやれる事はある筈だ。残り少ない今の魔力で出来る事だけ考えろ。

まず空中に飛び立たれては俺達から仕掛ける事はできない。故に、最も重要なのは相手の出方を窺うこの段階である筈だ。

「……あれは……」

「ああ、加速してやがる」

気のせいじゃなかったか。エリックの指摘もあり、俺はウィルム娘が既に顔を上に傾けなくとも視界に入るぐらいに先行を初めている事を認識した。

「一瞬に勝負を賭けて来たな」

「一瞬に？」

「相手は竜の魔物だ、反射神経なら圧倒的に奴の方が上。オレらが乗っている機関車の速度に正面から自分のスピードをぶつける気だとすれば……」

手のひらに握り拳をバシンとぶつけながら、

「始まるのは一瞬で決着がつく、超高速の戦闘になる」

「……………」

「……不意打ちでも技を当てられない、そんなお前が出る幕じゃないって事は分かるだろ。やっぱりお前は下がるべきだ」

「あー!? 何だとオ!?!」

諭すようなエリックの言葉は続く。

「あいつの異様な執着を誘導したのはオレだ」

「……………」

「限界まで近付かせる為にそうなるよう仕向けた。だからアレはお前の邪魔立てに苛つ

いてはいるが、恐らく今でも狙いは一人だけだ。……負けるつもりはさらさら無い。ただ、オレを連れ去る事ができればもう奴は追ってはこないだろう」

俺が馬車から落ちた後のことは知らない。だからそれが本当か嘘かも分からないが、ただ一つだけ言い切れる事がある。

「そうはいかねーんだよ、ここでホントにカツコよく死んじまわれたら困る!」

「はあ?」

ビシッ! と指を突き付けながら睨め上げてくる俺に結構本気で困惑してる様子のエリックさんに、鼻を鳴らしながらとある事実を突き付けた。

「どうせお前らはこれ以上首を突っ込むなど言ってくるんだろがな、俺はドウエルガの例の件だって放っておいたまま帰るつもりは無いんだぜ」

「つ……何を言ってる。イリアス教團から来た奴らが天使を相手に何ができるんだ」

「嘘をつくなよ。本当の犯人は——天使なんかじゃないんだろ」

「……!?!」

凶星かよ。まったく、わざわざ話を面倒にしやがって……。

「近いうちに天界が攻めてくるってのは本当かもな。ただ例の殺し屋とは恐らく別件だ、違うか」

「……どうしてそんな事が分かる」

「んな事あ今はいいだろよ……だけどな、重要なのは。もしそのゲス野郎が俺の手に負えるような相手じゃなかったらだ、お前がいなくなつたあの町で誰がそいつをぶつ飛ばすのかつー事だよ」

俺つて奴は結局こうだ、肝心なところで人任せになつちまう。

ただ、まあ。一人の人間をこういう風に引き止める助けになるんだつたら、その弱さにだつて納得ができる。

「お前は時々ほんつと憎たらしい事を言う奴だけだよ、俺が今まで見てきた中で間違ひなく一番すごい男だ。死なせたくはないし、あの町にとつても生きててくれなきや困るだろ。その為だつたら、今この時だけだろうと少しぐらいは黙つて協力されてろよ」

「……何だそれは、無茶苦茶な事を言いやがつて」

あまりにも強引な論調に呆れ果てて物も言えないといった顔になるエリックだったが。

(……?)

沈黙のふとした拍子に見せた、その表情。

一体何が目に止まったのか自分でもよく分からないが……

（何だアレは、気のせいか……？）

言葉にするのがどうも難しい。一瞬だけ奥からチラリと覗いたような、そういう何か妙な感じが……

「おい」

「っ、ああ」

「いずれにせよ時間がもう無いらしい。今にあの飛竜が十分な距離をつけて戻ってくるぞ。そんなに自分の命が惜しくないなら勝手にすればいいが、足は引つ張つてくれるなよ」

何事も無かったかのように取り直したエリックの譲歩は願ってもない事ではあったが、今のは確かに何か……いや、考えすぎか？

「何をぼさつとしてている、ついて来い。迎え撃つのにこの位置は不味いからな、できるだけ前側で防ぎに行くぞ」

いや、まずは目の前の事に集中するべきか。

僅かに過ぎった不明な感覚を頭から追い出しながら、俺は最後の迎撃に向けて余計な思考を切り替えた。

第32話

「おいマクニア！ 聞こえるか！」

「あー!? なになにに!?」

窓を手の甲で叩きながらの呼びかけにひよっこり赤毛の頭を出し、いかにも迷惑そうな顔（少し嬉しそうだ）を作って応える彼女にエリックは言った。

「オレの技を使う。この場で出すのに問題が無さそうかは……お前の意見を聞いておきたい。一応だがな」

その台詞を耳にした瞬間——マクニアの目が妙に細まった。

なんだよ、また何の話だつてんだ。

「……………数価は？」

『『^{イチ}』だ』

「……………ま、いいでしょ。言っとくけど『三^{サン}』あたりは絶対駄目だかんね」

そのような事をブツブツ言つて顔を引つ込めるマクニアに俺は胡乱な目を向けていると——バシン、と頭を後ろから引つ叩かれた。やめろよ、しっかり体が出来てるやつ

に小突かれると普通に痛えんだよ。

「良いか、奴もじき旋回に充分な距離を取って戻ってくる。腹を括つたんならオレの指し通りに動け。目の鍛えられていないお前を使うのは賭けにはなるが、そうすれば全員無傷でここを切り抜けられるはずだ」

「……はいはい、分かったよ!」

「今のは何です? その……数値、とか何とか言っていたようですが」

機関室内。この非常時にあつても好奇心の勝つたプロメステインにより、既に慣れ始めつつある列車の操縦も片手間に司祭長の幼馴染たるマクニアへと問いが向けられた。

「……あのウィルムを一度撃退したつてんなら、もしかするとアンタたちも一度は見たんじゃないか? 数を冠するエリックの技をさ」

「数を……ああ、確かに」

あの時は馬に振り回されてそれどころでは無かつたり影の中をさまよっていたりしていた彼らはまともに見てはいなかつたりするのだが、そんなプロメステインにも覚えがないわけでは無かつた。

「二陽」

空を焼き、煙に焰を灯す術。練り上げられた精霊の力のコントロールは当然として、何よりも炎に対する深い造詣と鍛錬なくしてはとても身に付かない芸当だとプロメステインも感じた。

「あいつは生まれ持ったの才能だ。火っていう元素そのものに愛されてる……つうのかね」

「何を……？」

「あれにとつちやあね、〃 剣を振る〃 という行いがそも熱を効率よく注ぎ込むための手段に過ぎないって話だよ」

「思えばあたしも見るのは久しぶりだ。そんなエリックをして『サラマンダーを超えた』らしい——ヤツが最も得意とする『突き』を軸にした幾つかの技。今から上で使われるのは、その〃一ツ〃さ」

遙か前方、一際大きな羽撃はばたきと同時に空中でピタリと静止する。

あれだけの速度で飛んでいた自分の体の勢いを軽々と殺す制動力はやはり凄まじい。巧みに体勢を組み替え、操り捌き——ほど無くしてこちらに向き直ってきたヤツの激情に燃える瞳は、やはりオレだけを捉えていた。

「来る」

全くの躊躇いもなくそれは——最後の対決の火蓋は切られた。見えない空気の壁を蹴るような錯覚さえ覚える、まさに圧倒的な加速。

「巡り 蓄え 畝うねり 逆巻さかまき ……」

「まだだ、もっと引き付けろ……」

目を閉じ跪きながら一心に呪文を唱える『賢者』を傍らに置きつつ——

『その為だったら、今この時だけだろうと少しぐらいは黙って協力されてるよ』

『お前がいなくなつたあの町で誰がそいつをぶつ飛ばすのかっつー事だ』

『本当の犯人は——天使なんかじゃないんだろ』

どこまで知っている。一体どこへ向かう気である。

ローレンスも予想できなかった、突然に現れたこの謎多き魔術師は。東方の賢者と呼ばれているらしいこの男には予測を覆されていけばかりだったが、あれらの発言を聞いた上でただ一つだけ確信をもつて言えることがある。

(こんな所で、オレに格好良く死なれたら困るって……？ ハッ、それはそうだろうな) 内心で独り言ちつつ、それを決して明かす事はなく目の前の敵だけを見据える。何故ならそれが——この人生に唯一求められた物だったからだ。

馬鹿馬鹿しくなるような速度で飛来してくるウィルム娘へと意識を向け直した。

今は何も考えなくていい。今だけは。

(この一日……オレもお前も、良くやった。互いに良く戦った……もういいんだ)

地力、仲間の戦力、戦術、地の利。

全てが拮抗していた。久方ぶりに味わった苦闘の感触に戦士として少しも高揚していないと言えば嘘になる。近頃の仕事の事を思えば尚更だ……

……だから。だからこそ。

もう終わりにしなきゃいけないんだよ。

(久方振りに外に出て分かった。やっぱり、オレは、外の世界の方がきつと上手くやっていける。こんなギリギリの戦い、出会い……冒険。そんなものに心を踊らせていたいと思ってしまうって)

自由に生きてかった。

こんな時代にそんな事を思ってしまうのは間違っているのかもしれない。それでもオレは、この有り余る才能を外の世界に向けて使いたかった。丁度この『賢者』と同じような生き方が出来ればどんなに素晴らしかっただろうか、とさえ。

……駄目なんだ。

そんな事は許されない。オレが許さない。

力を持つて生まれた事の責任は果たす。ドウエルガはオレの故郷だ。過去を消し去つて生きていくなつて選択は決して取れない。

死んでいった連中に、顔向けができないから。

「今だ、やれ!!」

「エアロ・ゲイザー……!!」

「うグッ……!?!」

エリックの指示した絶好のタイミングで発動したのは突発性の瞬間的な上昇気流。飛び込む速度が高ければ高いほど側面から受ける力の影響は膨れ上がり——結果、下か

ら突き上げるような大風圧に、ウィルム娘の体軀が跳ね上がる。

「捉えた」

その刹那の瞬間を戦士は見逃さない。ほんの一瞬だけ前に進む速度を削がれた僅かな瞬間は、それでも決着を付けるのには十分過ぎる。

「がッ、るッ、グアアアあアアアアッ!!!」

「弑突」
ヒトツキ

来たる刃を受け止めるべく突き出そうとした爪が相手へ届くまでの時間さえ永遠に感じられるほどの爆熱的な神速が——
ぬるり

と。

気付けば、既に、その胸のど真ん中へと深く深く突き刺さっていた。

「いふ、ッ!!」

ビシャバシャと尋常ではない量の血液が口から噴き出す。人間とは比べ物にならない

い強度の肉体を一切の抵抗すら許さず貫いた刃は、強烈な橙色の光を内に秘めるかのよう放っていた。

「があっ、ああ、——……、っ!?!」

そうして襲い掛かったのは——ただ体を突き刺されたにしては説明が付かない、想像を絶する程の過剰な苦痛だった。

(なんだ!?! 声が、出ねエ……!?!)

それだけではない、全身の至る所がピクリとも動かせなくなっている。明らかに身体に異常を来たしている。しかしこれでは剣を引き抜く事さえ……

最後の力を失った翼はだらりと垂れ下がり。

どしやり、と列車の屋根に不時着する直前。

最後にその目に映したものは、背に掛けた鞆に大刀をカチリと納めるあの男の後ろ姿だけだった。

東方の賢者・ドウエルガ勢力 リーダー：エリック

頭目：テオウイン ゴルド山麓“かがり火” 竜族の戦い

後の歴史に決して語り継がれぬこの一幕は——

人間が率いた大規模戦闘に於ける、魔物への史上初となる勝利に終わる。

「あの小娘め……負けおった、か」

同時刻、とある崖上の岩肌にて。

腰に届くほどの白髪を風に靡かせ、軽くはだけた和装を着流す長身の女がこの線路上の対決の決着を見下ろしていた。

「あのサラマンダーが入れ込む男なだけはあるわ。もう一人の魔術師はどうでも良いが……」

緑白の鱗に覆われた鞭よりも鋭くしなやかな尻尾が軽く地を打つ。細身の身体の背面を肩口にかけてまで覆うその竜鱗と縦に割れた瞳孔は、女もまた竜族に類する魔物の一人であることを示していた。

「手厚く。出迎えてやるとしようかのう」

「……、っ……、——」

悪夢のような吐き気が止まらない。口から出る血こそ止まりつつあったが、それこそが逆にどうしようもないほど致命的な段階に至ってしまった証明なのではないか——という直感に結び付けられる、

ガタゴトと揺れる車両の端で死んだように動かなくなったウィルム娘は、薄れ行く意識の中でついに直感する。

(腹ん中が……空っぽだ)

絶技“ヒトツキ式突”は一点集中の爆熱で標的の身体を貫通。その内臓を片っ端から焼き喰い潰す死の炎は、敵の体を内側から消し炭にしてみせた。

血液さえ尽く焼き潰された体内からは流れる物など無い。もはやウィルム娘は指一本さえ動かす事はできない。

逃れ得ぬ“死”が、決定付けられた瞬間だった。

(は、……はは)

奴らはこうして己を殺してみせた。だが、たとしても、魔物の女が自分より強い男などを嫌えよう筈はない。

憎めよう筈が、あるものか。

(……………)

吐き出した血液が夥しく体の下を濡らす中でウィルム娘は気付く。揺れも激しい列車の上、こうして動けないまでも、じきに体がずり落ちてしまいうだろう。

高速で流れる地面に叩きつけられての即死は免れまい。誇り高い竜族の戦士として余りに無残な最期であることも間違いない。

だがそれで良い。

惚れた男に死に様を晒して逝くよりは。

彼が自分を思い出す時の姿が、生きている時ではなく、横たわる死体の姿であるよりは良い。

そうでなくては戦士としてではなく、女として。

とても耐えがたい事なのだろうから。

(これから、死ぬ……私を、見るなよ。……強敵、だったと。私を思い返す時、そう感じて……くれれば。それで……)

だから、せめて戦士としての自分だけを覚えていて欲しい。そうすれば誇りは守られる。何も案ずる事は無く、こうして、逝ける。

そうして、ほんの束の間。

冷やかな向かい風と浮遊感だけが身を包み——

(……………えっ……………)

鈍くなつた感覚でさえこの腕を掴まれているという事はつきりと分かつた。

鉄の町からやつて来た司祭長——エリックが、死に落ち行く自分を繋ぎ止めていたのだつた。

「ぐっ……………」

相当の疲弊を感じさせる表情ながら齒を食い縛り、数段は体格が上のウィルム娘を一気に引つ張り上げたのだ。

勢い余つて腰を強かに打ち付けたエリックの、ちようど脚の間に挟まる形で。死に向かうだけの女は自分を殺した相手の、痛みに呻く顔うめをまじまじと見つめる羽目になつていた。

(なん、で……………)

「……………分からん。ただ、馬鹿にされてるような気がしてな」

喉から言葉を絞り出す事もできないのに。目を見ただけで疑問に応えられてしまう。まるで心を見透かされているかのように。

「お前が惚れた男は、好敵手の体が見向きもされず、この荒野に惨たらしく捨てられる所を黙って見過ごすような奴に見えたのか」

(あ……)

「最後だから、直接伝える。お前は間違いなく強敵で……」

やめてくれ、それ以上は。

—— おかしくなってしまうから。

「……綺麗だった」

その一言は、この胸の刺し傷よりもよほど致命的だ。

だって、こんなの。

(もっと……欲しく、なっちまうじゃんか……)

ぼろぼろと涙がこぼれ落ちる。沸き立つ欲望と望外の幸せ。もう何も残っていないと思っていた胸の奥から、押し寄せてくる物が止めようにも止められない。

その涙の理由を問う事もなく、男は静かに女の頭を抱き寄せた。

「……………」

温度を失い、そしてどうしようもなく血で汚れきつたその顔は。

どこまでも魔物らしくしやりとした笑顔に、どこまでも涙の跡を浮かべていた。

第33話

「終わったか？」

「ああ、済まないな……」

じんわりと目を細めさせる斜陽の中、ガタゴト揺れ動く列車の上で。俺はウィルム娘の焼け焦げた亡骸を血塗れで抱くエリックに声を投げ掛けた。

——見事な、散り際だったと言えるのだろう。あれだけ殺し合いとは無縁の暮らしをしていた俺からしても、今となってはこの世界の住人として、魔物の、戦う者の生き方に心から理解ができる。

心底からの愛欲を向けてくる相手。俺たちはそれら全てを殺してきた上でこの場所に立っている。理解ができずに居ていい場所では、ないからだ。

「(ト)う(ト)時は」

独り言のように呟きながら、俺は二人の隣にぎつと腰を下ろした。

「決まって口が寂しくなるもんだ……どうしてだろうな。後味が悪い、って感じでもないのによ」

不思議な沈黙が場を包んだ。

血と死の気配にまどろみながら、それでも灰色の穏やかな時間は列車の揺れる音を包み込むように遅緩として過ぎる。手を離す余裕も無いのだろうが、下にいる二人が様子を見に来ないのは有り難かった。

どれぐらいそうしていただろう。きっと思ったより時間は経ってない。そんな束の間の後、エリックはおもむろに、手のひらに収まる程度の小さな四角い包み紙を懐から取り出して、それを俺に差し出してきた。

「……喫るか？」

「……………」

何でそんなの持ってたんだ、とか。

せつかく一度は止められたのに、とか。

そういうった諸々の事を考える間もなく、俺は黙って一本の煙草を摘み取っていた。

「ん」

パチン、と。

エリックが指を弾く音と同時、啞えたそれにほんの小さな火が点いた。

同じような動作を並行しつつ喫煙行為に及び出す不良司祭を横に眺めながら、俺は肺の中いっぱい種々の有害物質を吸い込んだ。

「心配するな。外から来たお前らが神サマをどう信じてるかは知らないが、少なくともサラマンダーは気にしない。火い点けて使う道具は大体したり顔で肯定してくる」

「……何つうか、何とも言えない理由だな」

そのエピソードを聞くにサラマンダーとやら、もしや同格の四大精霊シルフと精神性があるまり変わらなかつたりするのか？ ……まだ話した事もないのにソレは流石に失礼が過ぎるわな。

にしてもあれだ、やっぱり落ち着く。今世の体が慣れてないのを差し引いても染み渡るニコチンの偉大な力を改めて思い知るばかりだ。

「どうした」

「え、ああいや……外じゃ見たことない品だからよ。珍しくて」

「にしては随分と吸い方が堂に行ってるようだが」

「ど、ドウエルガで吸ってる奴を見たから使い方は知ってたんだよ……」

そういう事にしておこう。前世で喫煙家の端くれだったから知ってましたとは言えないからな。

というかあまりこういう話はしたくない。別の世界から来ただなんて特大の厄ネタ

は例えプロメステインにだろうと知られたくないからだ。自分で定めた不文律に従い、話題を逸らすために頭の中をゆっくりと整理する――

「……つつーかよ、結局この馬鹿みたいな魔物の群れは何だったんだ。明らかに普通じゃなかっただろ」

「黙ってて悪いが今はそういう時期なんだよ。どうせマクニアが来た時点で知られるからな、先に言っておく」

「……………」

……待てこいつ、今あれ、開き直りやがったか？

や、やっぱり何か隠してんじやねえかッ！ よくもこんなヤバい所に連れて来やがったな!! ……お、落ち着け。こーいう時こそよく考えろ。

「……て事はだ。お前らは結果を急いでるわけだ」

そう、その推測が正しかったことは少なくとも証明されたようなモンだ。何を隠してるのかはまだ分かんが、これで俺達がどこかしら嘘を吐かれているのは殆ど確定だろうがよ。

「そのせいで俺やお前が死ぬ確率が上がるつつつても『この時期』とやらが終わるまでのんびりしてるよりは良いと。それぐらい行動を起こす事に急いでる訳だな？」

「何とでも言え。オレはこれ以上口を割らん」

「て、テメエなあゝ……」

いくら推測で揺さぶろうとしても一度こうして開き直られると意味がない。どうせ俺はゴルド火山で用事を終えるまで黙って同行しなけりやいけないと奴は分かっているからだ。

……今にも耳を塞ぎそうな顔を明後日の方向に向けやがる演技下手の大馬鹿野郎に、これ以上詰めても無駄な事か。

まあいい、要は生き残ればいいって話だろう。

生きて帰ればあの町で改めて見える物もあるはず。余計なあれこれを考えるのはそれまで後回しにしてやってもいい……

「ふう……で、どうするんだ。そいつ」

早くも小指ほどになってしまった巻きタバコに名残惜しきを感じつつ、俺はエリックの脚の間で眠るように横たわっているウィルム娘を指し示す。

「適当な所で埋葬する……貨車の方に布で覆って仕舞う場所があるか、マクニアの奴に聞かないとな」

「敵しい事を言うよーだがよ、これからもそんな調子でやって貰っちゃ困るぞ」

気持ちは分かる。ただそれはそれとして時間をあまり掛け過ぎるなど俺は言いたいのだ。倒す敵倒す敵を今みたいに引っ張り上げていくようなら、いつか必ず足を掬われ

るぞ。

念を押す必要はある。例えこのウィルム娘のような魔物はそう居ないと、分かっている。でもだ。

「……見ろ、そろそろ到着らしいぜ」

遠くに見える始めた小さな木造の駅舎を指で差して言う。永遠に続くように感じたこの線路の道がとうとう終わりを迎える場所だ。

この世界最大の活火山。今もなお頂上から煙を勢いよく吐き出し続けている、今回の旅の目的地までやって来た。

「あれが——ゴルド火山か」

???????

火山地帯について多少は知識で知っていることもある。ただ、実際に訪れてみるのは初めての体験だ。

例えばそう、地下の熱源は地表に伝わって温度の高い領域を作り出すことがあるという。まだまだ夜は肌寒いこの季節にしては、夕方の真赤に照らされた山の景色に似つか

わしいほどの暖かさを確かに保っていた。

“ かがり火年 ” とやらで活発化した竜族の大量発生も、ひよつとするとこういう微妙な地熱の変化によるものかもしれないな。

「おつ、と」

などと考えながら先ほど停車した機関車からひよいと飛び降り、辺りの様子を確認する。

「辺りに何か潜んでる様子も無さそうだな、ひとまず安心して休めそうだな」

「日が暮れる前に野営の仕度をしましょうか」

「待て、ここは敵地だぞ。索敵を済ませるのが先決だ」

……う、意見が割れたな。俺はそういうエリックがこの場にいるのをアテに言っただんでもあったのだが、当の本人はそう樂觀的でもないらしい。考えてみればついさつき死ぬような思いをしたんだし、それも仕方がないか。

だがもう日が暮れるぞ、見回りなんてしてたら今に暗くなっちゃう……どう動いたものかと悩んでいると、エリックがそう言うのを分かっちゃいましたとばかりにマクニアがすかさず提案した。

「じゃあ二手に分かれよう。あたしとエリックは火山の入り口まで見てくる。その間にあんた達がここに泊まる準備をしといてくれ。それでいいかい？」

「まあそうだな、組み分けもそれが妥当か」

互いをよく知っている二人同士というのは勿論あるし、それぞれの行動のリスクから戦力の分散を考える上でもこれぐらいが丁度いい。

正直俺の方はもう魔力がほとんど残っていない。今日一日で使い過ぎたばかりに視界が眩んできていくくらいだ。ただプロメステインは今のところ力を見せていないが、確かマクニアはこいつを魔物が何かだと勘違いしていたはず第20話より。

この組み合わせで俺の方に危険が及ぶ事はないと判断したのもその辺りが関係してるだろう。

「日が落ち切る前には帰ってくる。ここはそれまで頼んだぞ」

油断のない目をしたエリック達が火山の中に繋がるであろう洞窟に一足早く入っていくのを見ながら、俺とプロメステインは野営の仕度を始めるのだった。

「ふう、ふう……」

「私が代わりましょうか？ 無理しなくていいんですよ、素で力も貴方よりはあるつもりですし」

「そ、それを黙って見てるのはっ、男にとっちゃ拷問だぞ……っ！」

へとへとなりながら TENT を張る俺を氣遣わしげに見るプロメステインに精一杯の強がりです。くっそ、体力の無さを実感するぜ。

ここの駅舎がもう少し大きければこんなものを張る必要は無かったのだが、一人や二人はともかく四人全員が寝泊まりするなら厳しい程度には狭いし小さい。それをローレンスに聞いてたからアテにすることもなく備えが出来たわけだが……くっそ、最果て駅だからって何も無さ過ぎだろ。

それというのも、このゴルド火山麓の駅までの路線は物資を運搬させる為ではなく、ある祭事に人を少数運ぶ為だけに敷かれたからという事らしい。

曰く、ドウエルガ司祭長の任命式。

次期司祭長を含めた数名が四大精霊サラマンダーの住処であるゴルド火山に出向き、奴らの神様の眼前で何とかいう儀式を執り行うのだと。だからこの線路が使われたのも五年前にエリックが今の立場になって以来の事になるみたいだ。

ま、そんな大仰な風習にあやかっつて今の俺らは助かったわけだが……そこんところは感謝しないとな。

「そうそう、それでサラマンダーのやつと来たらあの小僧の目を見るなり” ついて行く！” とか何とか言い出しおつてさあ……儂にとっちゃ寝耳に水も大水よ！ 昔っから

の友達が誰とも知れぬガキと駆け落ちしてくのを見ちやっただて感じ？　ねえそれ儂の情緒はどうなるん!？」

「へえ、そりやまた……」

誰？

いや、急に居たんだが。

絶対一回も聞いた事ない謎の声に呆気にとられながら振り返ると、そこには女が焚き火の前でどっかりと胡座あぐらをかき、人の胴体ほどもある巨大な瓢箪から升のようなもの液体をなみなみ注ぎながら管を巻いていた。

「ん、どしたね？」

ただ……で、でかい。

座っているのに頭の高さは目を見開いて立ち尽くしているプロメステインと同じぐらいだ。それに肌蹴はだけた和装のような格好はともかく身に纏う緑白の鱗や大きな尻尾、ちろりと覗く鋭い牙からするに、こいつはまたここら辺りの竜族に違いないだろう。

「な、なんだお前は。どうしてここに」

「あらら？ 儂が、儂の山で酒を飲んどるのがいけんかのう」

「あ、あ、貴女はまさか……まだ生きて……？」

酷く狼狽したような顔をしているプロメスティンも含めて何が何だか分からない。そうこうしてる内にすつくと立ち上がったこの竜族は、俺らが一步も動けないのを良いことにずかずかと列車の方に近付いていった。

貨物列車の扉がたりと開け、その最前に見える、布を被せたウィルム娘の遺体を奴はじいっと見下ろした。

「良かったなあ……あんなにいい男に構ってもらえてなあ……ゆつくり眠れよ……」

そんな事を言いながら、瞠目し、両手を合わせる——合掌！ この世界ではあまり見た事がない所作だ。その格好も着物とよく似ているように見えるが、これは一体どういう事だ……？

「で、だ」

竜族の女は振り返る。その口からどういった言葉が出てくるか予想も出来ない俺はごくりと唾を飲み下し——

「あの小娘の死を大いに悼み……そして大いに呑もうじやくないか！ 乾杯じゃあ!!」

ぐつと目端に涙すら浮かべながら。

なんとも気の抜けるような野良ドラゴンの浪花節が炸裂した。

第34話

「さて、と……」

「……………」

ゴルド火山洞窟内。そこに足を踏み入れるドウエルガ出身組の一行は、順当ではある重たい沈黙に覆われていた。

彼らは麓に残ったあの二人組と分かれて以降一言も口を利きいていない。

当然だろう。いくら幼馴染とはいえ片方が片方を突き放し続けた結果は、二人の間に決して癒えきらない傷痕を残す結果となった。

耐え難いほどの気ままずい雰囲気——ひしひしと感じながらも、この組み合わせを提案したのは他でもないマクニアである。

ここで今どうしても二人きりになりたかつたからだ。こんな機会は、またとない。

「ねえ、アンタは一度ここに来たことあるでしょ」

言葉を選ぶのも慎重に、あくまでも何気ない会話として体裁を整える。

「単なる司祭長が就任ついでに四大精霊と契約して帰ってくるなんて話は前代未聞だっ

たからね、よく覚えてるよ……あれから何か変わってる？」

「特には変わらん。ただ……竜の気配を感じない」

「竜の？」

「“かがり火年”に起こっているのは竜族が大量発生する現象そのものじゃない。あくまで普通は表に出てこないような連中が活発に動くようになるだけだ」

「ここからは推測になるが、と付け加えながら。

「総数は変わらないのに大半が外まで出てくるとすれば……逆にヤツらの本来の棲家、つまりはここがオレ達にとって一番安全な場所になっているのかもな。もつとも、まさに今どれだけ外で殖え続けている最中かは知らないが」

「へえ……」

「……………」

語り聞かせるというよりは自分の考えを整理するためといった様子で一本調子に喋り終わった瞬間押し黙るエリックに対し——少女は単純にこう思った。

（隙が……隙が全然ない……!!）

必要な事を必要なだけ喋る。終わり。同行しなければならなくなった以上最低限の言葉は交わすが「ただそれだけだ」と言外に突き放しているつもり、といったところか。まるでこちらに歩み寄る気のない温度感ゼロの受け答えには流石のマクニアといえ

ど閉口した。「何気ない語りかけからどうにか会話を膨らませて事の真相を突き止めてやろう」という当初の目論見は改めないといけないらしい。

「……あのさあ、もう止めにしない？ 今更全部を隠そうなんて絶対無理だよ。アンタだつて……辛いでしょ」

熱気の籠る暗い洞窟の中を歩き進み、その中で一步分だけ前に出ながら半ば確信をもつて問い掛ける。

自分を守るために突き放そうとしてくれるのは知っている。それでも彼の口から聞かなければいけないのだ。

いつか取り返しのつかない事になってしまふ前に、何としてでも。

「確かに、今のアンタと姉さんがやってることは最低だよ。はるばる遠いところからやってきたあの二人を騙してこんな場所に連れてくるし……それを止めようとしたあたしをぶん殴つて道端に捨ててつたのなんて一生恨んでやるからね」

「……………」

「でもっ……それだけじゃない。たとえ取り返しのつかない事しても、こんなになつた今からでも私とアンタとの間にはまだ何か残っているものがあるはずだつて。まだ少しも疑つてなんかいないから……性懲りもなくこんな所までついて来れたんだよ」

言いたくて、言いたくて、それでも面と向かつて口にするこことさえ敵わなかったこの

想い。

「だから、さあ……」

私を、見てよ。

「っ……」

最後の台詞を声に出す事はついに出来なかつた。薄々勘付いている事ではあつても、それは今のエリックが自分の訴えを歯牙に掛けようともしていないという事実を認める最後の一線を越える事だからだ。

会話が、と停まる。

地面から湧き出す溶岩の気配が奥に進む度に強まるのとはまるで対照的に、二人の間にある“何か”は確実に冷えていく。

「戻るぞ。ここは安全だ」

「……うん」

無駄なく。予定通りに。それは踵きびすを返す少女の臟腑に残酷な含みを伴つて重くのし掛かる。

何も変えられない。何も変わっていない。取るに足りない自分に出来る事など高が知れていると、分かつていた事を改めて突き付けられに來ただけか。

それなら、どうして、私は。

「サラマンダーは、オレに語りかけなくなった」

それが「身の上話」だと認識するまで、マクニアにはたつぷり十秒以上の時間が必要だった。

やおらに立ち止まったエリックの背中にぶつかりそうになりつつ、あまりに突然の告白に目を^{みは}瞠る。

「この……仕事を始めてからだ。今日はたった数秒だけ声が聞こえたような気もしたが、今になってみりや追い詰められたせいで頭に焼き付いた只の幻覚だったんじゃないかと思う」

「えっ……えっ？」

「お前も話したことがあるから知ってるだろ——アイツはいい奴だ。そんなサラマンダーが口も利かなくなるようなら、オレは、きつと間違った場所にいるんだろう」

滔々と、人が変わったように、堰が切れたかのように。語り続けるその顔は、今まで見た事がないほどに——

「だからマクニア、これはお前みたいなヤツが関わっていい話じゃ……」

「……ふぎッ、けんな!!」

見たくはなかった。

彼の、そんなにも悲しそうな顔は。

「火の精霊はずっと力を貸してくれているんでしようが！ あのサラマンダーが認めてもない相手の中にいて離れないなんて事あるわけない！ それならきつとそういうことなんだろうなって、どうしてそこでアンタはそう思えないの!？」

「……………」

「分かるよ、周りの誰かが応えてくれないなら自分のやつている事は間違ってるんじゃないかって、そう不安になる気持ちは！ 私が、一番!!」

唇をわななかせ、目に涙さえ浮かべながら——マクニアはやり場のない思いから男の胸倉に掴み掛かっていた。

「でも違う、違うんだ。裏で何をしようが、何があっても、私は絶対にアンタの味方なんだから……………」

それは根拠など全く伴わない、ある種の感情の発露でしかなかった。事実を知つてなお受け止められる保証なんてどこにもない。

だがそれを自覚しながら——それでも少女は迷いなく断言する事ができる。

そして、その上で。

「駄目なんだよ」

そつと、いとも柔らかい手付きでマクニアの腕を掴み返したエリックは名残惜しむよ

うな色すらを覗かせながら、己を掴む小さな指を一本ずつ丁寧にゆっくりと解ほどいていく。

「ここでお前に全部を話すのは簡単だが」

「……………」

「それは」逃げだ。この道を選んだオレたちの選択から目を逸らして、何もかもから逃げ出そうとするそれだけは、絶対に許しちやいけない事だ」

だから、と続け。

「お願いだ……何も言わせなくてくれ。これはお前を守る為じゃない。今までやってきた事を、他でもないオレが否定したくないからだ」

初めて、彼がマクニアシブを見た。

息が詰まる。胸が、張り裂けそうになる。

「なに。なんなの、それ。ほんっ、とに……………ずるいよ、そんなの」

「分かってる」

「分かって、ないよ……………」

「……………」

「こんなになっても、謝らないんだね……」

「……そうだ、謝らない」

「うん、……うん……」

片方は涙を流し、片方は口を固く結び。

見つめ合う二人は、やがてどちらからともなく洞窟の出口へと向かって再び歩き出す。

「……戻るぞ。ここは安全だ」

「うん……」

???????

「うツぷ……もうやめっ、」

「ダハハハ!! まだいけるじゃろお、飲め飲めエ!!」

所変わって、ゴルド火山洞窟前。

突如現れた白髪の竜人に無理やり酒を押し付けられた“賢者”は凡そその名にそぐわない泥酔ぶりを曝け出していた。

彼の名誉のため補足すると……当初、一応は全力での拒絶を試みてはいた。当然だ、

何が入ってるかも分からない魔物の飲み物を敵地で差し出され、しかもそれを素直に頂戴する間抜けがどこにいるかという話。

それをニコニコ笑顔で簡単に組み伏せてはあれよあれよという間に隣に座らせて宴を始め出したこの魔物が悪いのであって、その臆臆とした頭をがちり脇で固められながら理不尽に苛まれている哀れな“賢者”は特に何も悪くなかったりするのだった。

「んぐ、ぐっ……ぶはあくく。なるほどのう、人の身で魔法を身に付けるための修行、それで儂の山までやってきたとな！ 殊勝、殊勝なことじゃあのう！」

「も、もうらめへくれあえ……助けてくれあ、ふろめすていん……」

何か意識がでろでろにぼやけている間にかかなりの事を口走ってしまっている気がする、と一刻も早く状況を脱すべく助けを求めて辺りを見回した。首を回せる角度は極めて限られていたが、それでも必死にだ。

「うっ……!?!」

そうして見つけたのは——うっ伏せになってぐったりと倒れて動かないプロメステインの姿だった。

「な、なにを……てめえ、しやがった!?! おい、大丈夫かあ!!」

「……ん？ 何ぞあれ……え、どうしたんじや？ 知らん知らん」

「えっ」

わりと本気の困惑顔になった童人はどうやら彼の視線を辿ってようやく人が倒れていることに気がついたらしい。

それじゃ一体どうして……と、抵抗するのも締め付けるのも忘れて二人はごくりと生唾を飲み込みながら暫しプロメステインを黙って眺めた。すると……

「……○×☆だつて」

「は……？」

「なんだつて貴女がこんな所にいるのか、ぜひ説明してもらおうか……」

起き上がると同時、ぼろりと眼鏡が地に落ちる。

赤ら顔に虚ろな目をしたプロメステインは口調も常のそれではなく……というか、それと似たような状態は“賢者”の記憶にも新しかったのだが。

「い、いや……そもそもここ儂の山で、つてそれさっき言うたんじゃけど。なんぞ、めつたに眠りこけて目が覚めないぐらいで人を死んだもの扱いか？」

「よ、酔っぱらつてる。あいつ、まずい……あいつ今なんにもかんがえてないぞ……」

「えっ、なんで!! 儂あんな子どもに吞ませた記憶なんてないんじゃけど!! てか考えでないって何!!」

「極上の素材……手始めに皮膚片か、それとも体液か……ククク……」

「えーっ!!? なんか凄い怖いこと言うてこつち近寄ってきてない!! ねえあれ大丈夫

なのねえ!!？」

「た、たぶん、においで酔ったんだ……あいつもふつーじゃねえけど、この酒もおかしい、んだって……つよ過ぎ、だ……」

がくつ、と首から力が抜け落ちる。辛うじて意識を手放してはいないとはいえ彼もいよいよ限界らしかった。自業自得で意図せず孤軍奮闘を強いられることになった竜人は冷や汗をかきつつも――

「おつ、おうおうおう!」

ばすつ! と思いい切り飛び掛かってくるプロメステインを片手で抱きとめ、仰向けに倒れながらも遂にはすつぽり二人ともを両脇に抱え込んでしまった。

「……ぶはっ、ぶははは!! なんじゃなんじゃ、口にもせんで酒精に酔うたか! なんとも愉快で可愛らしいのう! 聞いておるかあ、おいつ、豆つこ天使ちゃんく!」

「#*♪※……」

「うっぷ……ちくしよ、なんなんだ……もう……」

たちの悪い酔っ払い三人、ここに極まれり。

意味のわからない呻き声がぐうぐうと響く中で、ただ乱入者の竜人だけはからからと笑いながらしばらく夕焼け空を見上げていたのだった。

「いやあ……今日はいい日じゃ。ほんとはぬしらみたいないな絶好の獲物、一族みんなのた

めにも見逃すべきじゃないんじやがのう……」

うぬぬと悩むようなそぶりを見せつつ、腕の中にてうごうご藻掻く二人をがちり固めながらも一つ頷き――

「ようし分かった！ 見事ここまで来られた縁じや。その修行が終わるまでみんなに手出しはさせんでゆっくりしてけい!! この儂が名に懸け、無事に最後まで見送つたるわい!!」

呵々大笑の響きと共に、こうして一行の安全を確約する旨の宣言が力強くなされたのだった。

「おっ……帰ってきたな、小僧っ子」

仰向けのまま。すやすやと眠り始めた二人を優しく撫でていた白の竜人は、驚愕の表情で立ち尽くすエリックをゆるりと起き上がりながら出迎えた。

「お前、は」

「てめゝは殺すよ、文句はあるめえ？」

第35話

「は……？」

急激な展開に全くついて行けていないという顔で、ドウエルガの黒小人^{ドワーフ}整備士たるマクニアは呆然としながら微かな声を漏らしていた。

散々な気分で洞窟周辺の安全を確認してやっと戻ってきたかと思えば、拠点には一匹の竜人がふてぶてしくも居座つては幼馴染のエリックに向け堂々たる殺害予告を宣言してきたのだから。

『てめゝは殺すよ、文句はあるめえ？』

それを一匹の魔物の妄言と切つて捨てるのは簡単だ。しかし彼女の足元に転がる同行者の二人——深く内情を知らないマクニアをして“只者ではない”と思わせる彼らが抵抗の跡すら見せず無力化させられているという異常事態、は元より。その竜人から垣間見える威容とも言うべき「庄」——同じ魔物としての直覚に警鐘を叩き付ける、本質的に上位の存在に対する暴力的なまでの危機意識。

嫻^{たね}やかな口調や態度に反する居丈高な“宣告”に対し本来であれば巫山^{ふざけ}戯るなど突つかかっているべき気丈なマクニアとしての平静は、しかしこの場において正常に機

能しているとは言い難かった。

「てめえは殺すと来たか。まるで他の全員は見逃してやると言っているように聞こえるがな……竜の女王よ」

苦々しい声色ながらも怯まず言葉を返したエリックに片眉を吊り上げながらも、和装の竜人はその言を特に否定することもなく飄々と返す。

「おうとも。儂はそこらの馬鹿な熊や野良犬と違う、友だちを食ろうたりはしないのじゃ」

「……何だと?」

「あー、勘違いしないでほしいんじゃが。べつに儂はぬしらが嫌いだからこういうことを言うんではないぞ? むしろ好きじゃ。だーい好き。いやはや、どうにも若者の頑張りというのが老体の目に眩しゅうてのう……」

悲しそうな困り眉をしながら注いだ升酒をぐびりと喉に通す竜人は恐らくではあるが本心からそう言っているのだろう。そして、それが余計にマクニアの頭を混乱させる。

今ここで一体何が起こっているのか。指一本でも動かせば、取り返しのつかないこととが始まるのではないかという恐怖に抗いながらも、口に出さずにはいられない疑問だった。

「何なんだ、ほんとにつ……どうしてアンタみたいなのに滅茶苦茶にされなきゃいけないんだ、ここまで来て……」

「おつと？」

「勝手なことを言うなつ、エリックがどれくらい覚悟で……どれくらい覚悟でこの山に、その二人の為に来たと思ってるんだ。そりゃあ騙して連れてきたも同然だとして……それでも……」

訴えかけている、とは言い難い。

それが上手くできるほど頭は回っていなかったし、それに足るほどの余裕も知識もない。ただひとつ。彼女があらのまま言葉にすることが出来る思いは、ただひとつぐらしか。

「やり遂げさせて、やりたいんだよ……い！」

ほとんど泣きそうな声で言う、その表情と気配かおに何を思ったか。竜の魔物は何ともばつが悪い様子でこう言った。

「ああ、知らんのじゃな。お前さんは、なんにも」

「つ……」

「……ぬしらドウェルガの民にどんな大義があらうと、それは無意味というものよ。あそこは駄目だ。もう終わる」

終わる？

終わる、とは一体、

「それ以上口を開いたら」

「おう？」

「殺すぞ」

瞬間、隣に立つだけのマクニアすら肌を粟立たせた。

腰を深く落としたエリック、その悪魔じみた凄まじい闘気が剣呑に場を包み込み始めたのだ。

「残念ながら死ぬのはお前、というのは差し置いてじゃな」

「……………」

異様だった。

これほどの殺気を向けられてピクリとも動じない彼かの竜人は、ともすればそれだけで場の空気を呑みかねない程に。

「どうやら酷く歪な状況らしいのう。娘っ子の方はなんにも知らないのに……エリック、じゃったか。お前さんはある程度ものごとを分かつておるらしい」

「……………だつたら何だ」

「ならば分かつておるじやろう？　引き摺り墮ろしてかなきやアならんのじや。五年前

にこの山を飛び出していった儂の友だちを、お前さんの中からな」

ピタリと。

空気を叩くほどだった敵意は収まるでもなく、しかし一旦の停止という様相を見せる。

「聴こえておるんじやろう。奴らはな、きみが世の摂理、元素そのものだからとて、いよいよとなれば手心を加えることなど無いじやろう。……そこを期待してたんなら少し甘いんじやあないのか。ドウエルガの奴らが喧嘩を売ったのはな、そういう“ここ”がキレとる連中じやろうて」

この世の歯車が多少“おかしく”なろうが權威に歯向かう相手は潰すと。それぐらの事はやると。頭の横を指でくるくる差しながら呆れたように語る。

「ま……サラマンダーが生半な覚悟で山を出たんではない事あ、小僧っ子、お前さんの目の奥に宿る炎をみりや分かる」

ただ、と。

首をコキコキ鳴らし、腕を捲りながら、億劫そうに宣言する。

「出る気がないなら叩き出す。器を壊しや黙りともいくめエ」

瞬間、“熱風”が吹き荒れる。

炎の魔力で活性化した身体能力を爆発させた最短最速の疾走——袈裟懸けに振り下

ろす剣閃は、最早マクニアのような並みの魔物にとつては目にも止まらぬ速度で未だ構えも取らない竜人へと襲い掛かった。

それを、だ。

「ふんッ!!」

あろう事か、その刃を生身の腕で防^っげ切った。強靱な鱗は斬撃ですら傷つけること敵わず、もう片方の腕に支えられることで完全に勢いが殺されてしまう。

「……待て、まだ話やあ終わって、」

「ッ、らあ!!」

何か言いかけた竜人の台詞を遮るように、撓んだ腕の反動を利用して距離を取るエリックは恐ろしく素早い精密な動作で刀を鞘に納め、閃光と共に抜き払う。

「二陽!!」
ジヨウ

剣の切っ先から白煙が噴き上がり――

そして、即座に燃え上がる。

煙を内から喰らうように生まれ出た一筋の炎塊がエリックの意志そのままに襲い、爆裂する……が。

「技の冴えこそは大したもんじゃが」

がしっ!! と。

煙幕に乗じて背後より接近していたエリックの首を、振り返りもせずには掴み取つたのだ。

「が、あ——」

「こども消耗が激しくはなア……日に何度も使用^っうに堪える技ではないのう」

だらりと吊り上げられるその首から上はなるほど確かに、蒼白な顔つきに嫌な汗が限なく浮かべられている。

だが未知数の腕力を持つ魔物の腕に首を掴まれているというこの状況——背筋の凍るような数秒後の惨劇を思えば、厳しい表情はそれだけの理由ではないのかもしれない。い。

身を振りながらも未だ剣に鋭く宿る炎熱を突き立てようと足掻くが、その尽くをいとも容易くいなされる。肺に回る酸素がいよいよ尽きかけ、意識も遠退き始めたその刹那

「かつ……う？」

は、と無造作に首の手を離される。

あまりに唐突な解放に、目を白黒させながらエリックは強かに腰を打ち付けた。

「まったく、話は最後まで聞かんかい。誰が『今日』お前さんを殺しに来たと言うたんじゃ……一族の同胞を悼み、酒を呑む。それが終わったら勝負を挑む。その為に来ただけじゃ、今日の処はのう」

宣戦布告をまるきり撤回しかねない戦闘の中断をまかり通しておきながら、しかし呆れ声を隠そうともしない竜人はその訳を語る。

「勝負」は尋常に行わなければならぬ。元より日は改めるつもりじゃつたが……まあ、まあ、お前さんにとつても、得物も手にせぬ丸腰の酒呑み、この老いぼれと戦ったところで死後の誉は得られまい？」

「なっ……!?!」

「とと、この儂が武器を遣うのが意外かや？ これでも元は兵法者の端くれ、武芸百般は修めておるつもりじゃ。お前さんと同じくのう」

そこで何かを思い出したように空を見上げ、そしてニヤリと目を細めながら、地に剣を突き立て荒い息を吐くエリックの瞳を覗き込む。

「お前さんほどの男なら、そうじゃな。いつそ精を搾り尽くして逝かせてやるといっても考えないではなかったが……」

確かに、魔物としての本懐といえば紛れも無くそこにあるのだろう。引き締まった下半身、豊満な乳房、整った切れ長の瞳をあえて放蕩に歪めるような表情を浮かべる美麗

な顔立ち。

3 mに届くかという人間離れた体格を差し引いても官能的な魅力を感じずにはいられない艶姿を持ちながら、肩を竦めて溜息を吐く。

「先に手をつけたのは小娘じや。あ奴が命を賭してまで焦がれた男をあとから攫うというのは些か決まりが悪いでう。……でなくとも、男などというのは若い頃に飽き果てるまで抱きまくったものよ。寝て、たまに起きて、しばらくしたら死ぬような婆あはい加減に身の程を弁えろという話だアな」

あのウィルム娘を討ち取ったという事実。それは当の本人が考えているより遥かに重い意味を持つらしかつた。少しの間俯き閉口していたエリックは——しかし、身内を殺された敵方の感傷を一顧だにしない、底冷えをするような声色でこう言った。

「……それより良いやり方がある」

「んん?」

「のこのこと武器も持たずに現れたアンタを、今のうちに斬り伏せてやればいい」

あまりに身も蓋もない——言い方を変えれば、再三に渡り筋を通した譲歩と説明を提示し続けた彼女に対する「裏切り」とさえ表現できる返答。

それを聞いてきよんとした顔になった緑白の竜人は……

「くつ、はっはっはっ！なるほどのう、そういう風に考えた事あ無かつた！」

思わず、といった様子で笑いを吹き出した。

何も不思議な事ではないのだ。戦士として正道に沿ったやり方で勝負を挑んでいると言えば聞こえは良いが、所詮やっている事はこちらの都合で格下に命のやり取りを強要しているだけなのだから。

強者だからこそ。魔物としての高みを登り切ったからこそ。いつしか数え切れないほどの間違いをそうとは気付かず、指摘もされず、ただ諾々と犯し続けていたのかも知れない。彼女はそう思った。

「ふっ、くく。この歳になっても面白い出会いというのはあるものよ。長生きはしてみるものじゃなあ」

「……………」

「ただまあ、今回ばかりは儂の都合ばかりではないのでな。言い聞かせた通り、お前さんを生きてあの町に帰してやるわけには絶対にかん」

言い終わるか終わらないかの間に、だった。

会話の間隙を縫うようにして。獣じみた速度で喉笛に刃を滑り込ませんと飛び掛かるエリックが——目にも止まらぬ“何か”に地面へと叩きつけられる。

「ぐ、は……………ッ!!」

「その無礼、信の強さ、果ては卑劣までも。許してやろうぞ、気に入った」

握るでもない、開くでもない、五指の爪を突き立てるように力を込められた右腕の構えをゆっくりと解く。人間ひとりりを叩き落とす動作が目視できないなどあり得ない——つまりは、洗練された“武”に形作られた技だった。鱗に覆われた腕で顎を撫でながら、倒れ伏すエリックを何とはなしに見下ろしている。

「むっ」

ガツン！ と。

おおよそ生物の頭部が金属の塊に衝突したとはとても思えないような硬質な音が辺りに響く。

攻撃を受けた本人であるはずの竜人がまるで何事も無かったような緩慢な動きで後ろを振り返ると、そこには自分の膝丈ほどの大きさしかない少女が不釣り合いなほど無骨な戦鎧を握って立っていた。

「はっ……離れろ!! エリックから離れろ!!」

……同じ魔物として、二人の間には逆立ちしても敵わないほどの差があることをマクニアは正しく理解している事だろう。

野生に生きる魔物であればこうは行かない。戦いを重んじる竜族でさえ、これほどまでに無謀な戦いは本能から避けるはずだ。

だが、それでも。たとえ膝が震えて恐怖に涙さえ浮かべていようと。このドワーフの少女の体は確かに動いたのだ。

その強さは——まるで、ここに倒れた人間に通じるかのような。

「……」ドウエルガの奴が選んだ道も、強ちバカに出来たものではないのう」
「えっ……?」

「この人間が大事か、娘っ子」

視線を合わせる。

膝を土に汚しても、高さまでを可能な限り合わせようとする。それでいて射竦めるような鋭い視線を向け——真っ向から受け止めたマクニアは言葉ではなく、精一杯に睨み返す形で応じる。

「そうか」

ドスツ、と。

拳の衝撃が小さな体を貫いたのだと理解した直後、その意識は闇に沈んでいった。
「なツ……」

自分以外は逃してやる。その言葉に反するような行いにエリックは目を瞠るが、直後の言葉による更なる驚愕で塗り潰された。

「奴は、人質」じゃ。儂を出し抜いて山から逃げようとしてもするなら即座に殺す。そ

れでも良いなら逃げるがよい。そんな時は儂も追いはせん」

ぐつたりと力の抜けたマクニアの体を軽々と片手で持ち上げ、そして宣言する。

「儂クイーンドラゴンこそは竜の女王、ドウエルガの司祭エリックに決闘を申し込む！ 時は不定さだめぬ、ゆえ思

う存分に戦仕度を整え……儂を殺しに来るがよいッ！」

未だ倒れ伏し動けずにいるエリックに背を向け——そして、思い出したように肩越しに言う。

「……ふむ、そうじやの。ありやあ何百年も前の争いじゃからな、今の若え衆しに恨み言を吐くほど堕ちちやおらんよと」

「ッ……？」

「そこのかわいい天使ちゃんに、そいだけよろしく言つといてくれよな」

つ、と指を差したその先には——

「な、」

意味を問いただすべく視線を戻した時には既に遅く。クイーンドラゴンの姿は、気も失った幼馴染と共に掻き消えていた。

第36話

パチパチと、静かな暗闇に音が鳴る。

「ううん」

耳に残る鮮やかな音は故郷でも幾度となく聞いたことがあるもの。不思議と心を落ち着かせるもの。

鼻先にあたる仄かな熱に微睡みながら、ぼやけて凝り固まった思考を溶かすようにあたしはゆつくりと目を覚ます。

「ううん、は……」

いつからこうして眠っていたのか分からない。なんだっけ、すつごく最近にもちょうど同じことがあつた気がするような。

あの時は、そうだ。あれはエリックのやつにまんまと気絶させられて……

「はっ」

意識が急速に浮上する。

咄嗟に飛び起きようとしたけど後ろ手に縄のようなもので縛られているのかうまく動けない。変な姿勢で体を伸ばしたせいで少し痛い……って、そんなこと考えてる場合

じゃない！

若干涙目になりながらも目を開けると……何だここは、洞窟の中？ それに、鍛冶場？

岩の天井に覆われた真つ暗な空間を薄く照らしているのは石を積み上げて造られた、家の部屋一つ分ほどの大きさもある円型の炉。

初めて見るような型の金床、一見しただけで頑丈さの窺える金槌、積み上げられた鉄の延べ板……そして、それら全てが霞んでしまう程に存在感を放つ大量の完成品^{武具}。

そしてその全てが、劍。

直劍であったり曲刀であったり。視るだけで背筋が震えるほどの重厚感を放つ武骨な大劍、思わず溜息が漏れるような美しい装飾のレイピア、果てはあたしが見たこともないような……よく分からないグネグネと波打つ細身の刃を持つものであったり。

空間をずらりと囲む劍、劍、劍——それも「ついで」とばかりに立て掛けられているあたしの戦鎧が恥ずかしく見えるほど、その一振り一振りがとんでもない業物だというのが素人の目にも明らかに映るほどだった。

一周回って呆れ返るような光景に“開いた口が塞がらない”を体現しているところに——

「おっと！ もう目が覚めたかのう、お早うな」

まあ、そうだよな。あたしはこの人に攫われたんだった。見上げるだけでも首が痛くなるほどの大きさの竜人さんが、膝に手を当てながらこちらをずいと覗き込んでいた。

たしかエリックに「女王」と、そう呼ばれていた彼女はおそらくクイーンドラゴンで間違いないだろう。エリックの中にいるサラマンダーを何かの理由で連れ戻すために殺すと言っていた、そのための人質か何かにされてしまったみたいだ。

……最悪だ。無理に付いてきたからこうして足を引く張っている。案の定、じゃないか。せめて邪魔にはならないと決めてここまで来たはずなのに。

……だけど、本当にそうなのか？　つまり、あのエリックは私なんかを助けにこの竜の女王とわざわざ戦いに来たりするのだろうか。

あまり考えたくない事だけど、もしかしたら……

……その『もしかしたら』は何だ？　私は一体何を恐れている。私を助けるためにエリックが殺されるかもしれないこと？

それなら良い。それなら何の問題もない。今のアイツが足枷にしかならない私なんかを助けるなんて万に一つも無いと思うけど、それを「いけない」と思うことには何の疑問も挟まなくていいから。

けど。だけど……まさか私は。

来てくれないことを恐れているのか？

……違う。そんなのを期待して私はここまで来たんじゃない。間違っただってそんな事を考えちゃいけないんだ。

「ちよびりと具合が悪そじゃな。顔が青いぞ、娘っ子。……おい、聞こえておるかのお？ 儂がいること忘れてないか？」

頭に浮かんだ嫌な感覚を何とか追い出す。そうだ、今はどうにかしてここから逃げ出す方法を考えないと。

目の前でぱたぱたと手を振ってくるクイーンドラゴンを睨み付けながら状況を打開しようと思死に頭を働かせようとしていると――

「いいか、心して聞いてくれ」

そんな決心を無にするような。次の彼女の言葉は、どうしようもなく私から逃げるための思考を奪い去っていった――…

「お前さんには権利がある。これより儂はあのドワーフの町について知る限りすべてのことを教え聞かせることじゃろう。その結果として何が起こり得るか、何を選択すべきであるのか……訪れたる時が我らを導くまでの間、ゆっくりと考えておくがよい」

??????

「むにゃ……」

滅多に聞けない猫みたいなの寝起き声をあげながら目を擦るプロメステインが“丸ま
り状態”から起き出すのを、俺は何とも言えない思いで少し遠くから眺めていた。

「もう陽が高いぞ、いい加減に目え覚ませ」

「ふあ……おはよございます……」

「即決で二度寝に走ろうとするのは結構なんだが、その前に少しでいいからこつちの方
に目だけ向けてくれないか」

「……？」

寝返りがてら俺の声がする方向をぼやけた瞳に映した直後——もうちよい早くやつ
てくれねえかな、その反応。

仰向けに上体を起こした姿勢で寄り掛かる俺の体を立ち膝で支えるエリックが、喉笛
を利き手で掴んできたまま静止しているというこの状況。

流石に只事じゃないと察したのだろう、びくりと背筋を震わせたプロメステインは酔
いも眠気も飛んだ顔で慎重に言葉を紡ごうとしているようだった。

「……どういふ状況です、これは」

「知らん。俺が起きた時からこうだった……一応そこから動かないでくれ。下手すりゃ

この首から上が馬鹿の握力でもぎ取れちまうかスカスカの黒っぽい炭になるか、いずれにせよ愉快な事にはならなさそうだからさ」

だってこいつ何も喋らねえんだもん。俺達に明確に敵意を向けてるのは間違いなさそうだが……まあ、思い当たる節はある。恐らく何らかの理由であの『秘密』が知られたとしか……

「どういう気分だった？」

「っ……」

ここで初めてエリックが口を開く。俺にはなくプロメステインに対してだ。

「あの『ドウエルガ』がどういう土地かを知っていながら正体を黙ってるのは……なあ天使、どういう気分だ？」

「……なるほど、凡そ理解できました。私達を眠らせた間に竜の女王は随分と引つ掻き回していったようですね」

自己嫌悪の顔だな、あれは。やっぱり一度ならず二度までも酔っ払って隙を見せたつてのはプロメステインにとってかなりバツが悪い失態らしい。

……にしてもこいつが天使だとバレた所までは予想できてた事だが、それは今はどこにもいないあの馬鹿にデカい竜人と何か関係があるのだろうか。

「その手を離しなさい、エリック。彼は何も悪くありません。それに、大事なことを黙っ

ているのは私達に限った話ではないでしょう」

「……………」

ん？

ここで黙るのか？ 人質を取れる以上「うるさい質問してるのはこつちださつさと答える」ぐらい言える立場にあるはずだし、「知つてて黙つてたならコイツも同罪だろうが」とかは実際ぐうの音も出ない正論だ。

近い将来故郷が天使に滅ぼされる男に黙つて天使を護衛させる。改めて考えれば、それは明るみに出た時点で憎まれても殺されても仕方がないほどの残酷な所業だ。エリックという男を虚仮にし、嘲笑つていると思われても仕方がない。それを俺は自覚しているが黙つていた。

なのに何も言えない。いや、言わないのか？

そうなる……俺たちの秘密の一つがただバレた、つてほど事はそう単純でもないのかもしれない。

「マクニアが、攫われた」

「えっ？」

「あの女王はお前たち全員を確かに見逃してやると言つていた。だがオレは……分かつているだろう、天使どもにオレたちは殺される。そうなる前に女王はサラマンダーを」

ドウエルガ”から取り戻すつもりだと言っていた。そして全てに決着を付けるために人質を取った……」

……なるほど、道理でマクニアの姿が見えないと思っただけならそんな事があったのか。

「まずは一つ教えろ。お前の言葉をそのまま信じる訳じゃないが……天界は敵に回った四大精霊を、サラマンダーをどう扱う気でいる」

「……今さら神罰を恐れるような身ではないにせよ、あちらの情報を無闇に他所へと流す愚は軽々に冒しかねますがね」

俺の首に掛かる力が強まったのを見て、ため息を吐きながらプロメステインは語る。

「貴方とサラマンダーの存在が”ドウエルガ”を攻めあぐねる要因の一つになっているのは確かです。もちろんその武力を論じているわけではありませんよ？ 四大精霊が消滅することで招くであろう事態を収める手段を我々は未だ確立していない……静観の姿勢はしばらく続く、といったところでしょう。現時点では、ですが」

「……………」

「クイーンドラゴンの懸念は尤も。いつ上が痺れを切らして戦争——という名の虐殺の準備を始めるかも分からない状況でサラマンダーを取り返したくなるというのは当然の帰結でしょうね」

「……………実際に聞いても『馬鹿げてる』としか思えない。それだけ派手に手を出せば魔王軍

との全面戦争になるぞ。天界に勝ちを確信できるだけの力があるのか？」

「残念ながらドウエルガ創立時の『密約』を天界は既に把握しています。決して動く事が無いと分かっている権威など役に立たないでしょう」

「チツ……」

二人の言ってる事の中には初めて聞いた情報も多少あるが、俺も流石にそれほど馬鹿じゃない。現状の理解は大体できた、と思う。

それと同時に思ったのは「エリックがどういうを選択するのか」、という事だ。

今、こいつは数多くの事柄を選び取る立場にある。プロメステインと敵対して俺を殺す道を選ぶのか否か、マクニアを見捨てて逃げ帰るのか否か……

「だからどうした」

——そう、だからどうしたって話だよ。それで俺のやる事が何か変わったりはしない。今から俺の言うべきことは既に分かり切っているんだ。

特にエリックが人質を見捨てるかどうかなんて考える必要もない。急に口を開いた俺に二人の視線が集まるのを感じながら言う。

「さっさと行こうぜ。仲間を助けに行かない理由を考えるなんて無駄な時間を過ごすほど俺は暇な人生を送れそうにないんだ」

「……何を言ってるんだ？ 天使の片棒を担いでる輩の言葉をオレが信用できるとでも

思ってるのか?」

「思えないし、思わない。黙っていた事がいくつかあるのは謝るよ。その上で俺は『俺たちの言葉に嘘はない』って主張するだけしかできない……けどな、どの道こうしてたつて結果は変わらないだろ」

俺の記憶がイカれてなけりやだ、エリック。お前達は大概詰んでいる自分達の状況を把握しながら取引相手の俺たちに何を頼んだ? よりにもよって「マクニアを匿ってくれ」だぞ。おまけに魔王の力で天界を退けるまで、なんて全部知ってる側からすりゃ馬鹿らしいような嘘を吐いてまでだ。

どれだけ幼馴染を危険から遠ざけるために外面を取り繕おうと、余所者に弱みを見せないように振る舞ってしようと。あいつを逃がしたいっていうその気持ち、それだけはお前達二人が嘘で隠し切れない本音の部分である筈なんだ。

「お前は絶対マクニアを助けに行くよ。……でもその後は? 俺達と敵対した後、天界が攻めてくる前にマクニアを守るだけの力と考え持った人間があつた町を訪れる奇跡でも期待するのか? 魔王の意向に背いてまで見ず知らずのドワーフを助けようとする魔族がなけなしの勇氣振り絞って願い出てくるとでも思ってるのか?」

「……だからオレが、故郷を天使に焼かれるこのオレが。今ここで天使とよろしくやつてるイカれ野郎を始末しないで見逃すとも思っているのか?」

「仮に信じられなくても乗る価値のある『賭け』だと言ってるんだ！ ……どうせこれ以上悪くなるような状態はスデに通り越している。なあ、どのみち借金を返せないなら踏み倒す覚悟ぐらいしてしろよ。ここは無難な『降り』に流れる場面じゃない、それぐらいテメエはとつくに理解してるだろうが!!」

静寂が、無人の荒野に果てしなく満ちる。

自分の心臓の音が痛い。毎回思うが、俺はこんな死ぬか生きるかの時に啖呵切ったりなんて性に合わない真似をするのは本当は御免なんだ。

何を言ってもエリックが俺を殺す可能性が無いと確信はできない。こいつらの不明瞭だった“優先順位”も少しずつは分かっては来たものの、本当に隠したがつている何かがあるのかを俺達は未だに掴めていないからだ。

だけど俺のやる事は何も変わったりしない。

変える必要もないことだ。

「お前に必要なのは俺達の弁明でも、ましてや幼馴染を助けるために勝手に勝手に死ぬ覚悟なんかでもない。ここにいる魔術師一人と天使一人、使えるもんを全部使って全員で生きて帰ることだ」

「……何だ、お前は何なんだよ！ こつちの事情なんて関係ないお前にどうしてそこまでの事が言える!?!」

「言つただろ、こんな所でためーにカツコよく死なれちや困るつて」

「っ……………」

「これからやる事は絶対に無駄になんてならない。あの町には『まだ』お前が必要だ。……先に終わりが見えているから何だつてんだ、それは今のドウエルガを諦める理由にはならない。忘れるな、ドウエルガの「殺人」を食い止められるのはお前だけかもしれないんだぞ。だつたら身勝手に死に場所なんか決めてんじやねえ！」

目の前で仲間死なれるのは沢山なんだよ、ちくしよう。二度とあの夜と同じ思いをしたくないから俺は力を付けたんだ。その為だつたらエリック、どんな卑怯な言い方をしたつて俺はお前を思い留まらせてやるぞ。

「……………」

短い沈黙の後、苦しげに呻くような声を吐き捨てた次の瞬間。

エリックは、俺の首に掛けていた手をだらりと下ろした。

俺はそのまま動かずに空を見上げたまま。いったい何分ぐらい経つた頃だろう。ゆっくり後ろを振り返つた先にいたエリックは、近くの岩場に腰を下ろしたまま頭を抱えて深く俯いていた。その表情は窺い知れない。

ほんの一瞬。エリックは俺のことを庇うように自分との間に割り込んできていたプロメステインを視線で見上げた後……ぼつり、ぼつりと語り出す。

「本当は……分かっていた。話に聞いていた天使つてやつは……俺の敵は……そんな風に地上を旅歩いたりはしない。そんな目で人間を庇ったりはしない……」

「本気で彼を人質に取っていた訳ではなかった、と？」

「どうだろうな……こんな事を正直に言うべきじゃないんだろが、お前のことを憎いと思つたあの気持ちは本物だつたと思う。意外に感じるかもしれないが……裏切られた気分だつたさ。オレはお前ら二人を好きになりかけていた。認め、尊敬さえし始めていたんだ……」

「……………」

「……なあ、教えてくれ。オレにお前らをもう一度信じさせてくれるのか？」

「……すまん、プロメステイン。この寄り道はまた俺の我が儘になっちまうが……今ここを避けて通つた後お前に見せてやれるのは、それは俺の“道”じゃなくなっちまう。」

不服そうな気配を隠そうともしないプロメステインの顔をできるだけ見ないようしながら、俺はゆつくりと立ち上がってエリックの目の前に手を差し出した。

「最後までやり切つてやろうぜ、俺達全員で」

第37話

「ヴオエ!! がっぐぶっ……ばっ、ぶはあ!」

「いい調子です、そのまま続けてくださーい」

ゴルド火山☒sブートキャンプ、三日目。

今日のメニユーは「マグマ溜まりに落ちたら即死! 垂直ど根性崖登り」ッ。恐怖と緊張に引きつった喉が勝手に吸い込んだ空気の、肺が焼かれたかと思うほどの熱さに思いつ切りむせながら畳一枚ほどの広さも無い休憩地点に転がり込んだ俺は余りの苦しみに喘いでいた。

珍しく翼を出して俺の後ろでふよふよ浮いてるプロメステインがキャッチしてくれるところ分かっていても怖過ぎるぞ、地獄の責め苦か何かなのかこれは。

「み、みず」

「はいどうぞ」

一日目の「マグマ溜まりに落ちたら即死！ 洞穴6時間鬼耐久マラソン」の絶望感も今の時程じゃなかった、と思いつながらプロメステインが魔法で出してくれる水筒の中身を死ぬ思いで嚙下する。

……そもそもこんな事をする羽目になつてるのは、来たるべき決戦の時に向けての俺の戦力強化の為だ。

聞く所によりや、クイーンドラゴンはエリックに向けて「勝負の日は定めないとハツキリそう言い放つたらしいのだ。だから早い話が、こつちが仕掛けに行く前の間にやれるだけの特訓を片っ端から済ましてしまおうって事だ。

そう言ううちよつとズルく聞こえるかもしれないがな、俺達の目的はあの女王をどうにか出し抜いてマクニアを連れ帰ることだ。当然その後はこの山に居られなくなるわけだから、当初の予定も踏まえればどのみち今のタイミングでしか済ませられないってわけなのだ。これは。

……しつかしよ、プロメステイン。本当の本当にこんツなエゲつない荒行でしか『自然魔力の循環同期』とやらが習得できないってのか？ いくら必要な過程だつっても現実を認めたくなくなるレベルだぞ。

一応復習しておく、俺が今現在必死こいて解決しようとしてる問題は要するに「天使や魔物と違って人間は魔力を練る能力が体質的に絶望的だから、最初から自然に満ち

ているエネルギーを感じて利用できるようになりましうね」ってことだ。要するにNAROTOの仙術チャクラ修行と似たようなもん……そりや大變に決まっとなるがな、ふざけんな。

指一本動かす気のない俺のだらけた腕を取って動脈の辺りをじろじろ観察してるプロメステインに目線で訴えかけると、やつは「仕方のない人ですな」とでも言わんばかりの呆れ顔で多少の補足を付け足してきた。血の滲んだ手を癒しの呪文の光に当ててくれているのは嬉しいが、できれば別の場所の観察の片手間にやって欲しくはなかつたな。

「人間を魔術師に育てる実験の前例なんてものは存在しないのでノウウハウがある訳ではありませんが、理論的には恐らくこれが最適解のはずですよ。何といつても貴方は既に“体内の魔力を感じ操る技術”を——それも予定外に先んじて——身に付けている事ですし、あまり難しい話でもないと思うんですけどねえ」

「……そりや聞いたけど、よ……ここまでキツく……する、必要……」

「強い負荷を与えれば与えるほど肉体は『損なつたもの』を埋め合わせようと周囲の環境から求めます。それは水や塩分といった物質的な欠損であつたり……または^{ちよつと}恰度貴方が激しく吸い込んでいる空気、更にはその中に含む魔力。多ければ多いほど、求めれば求めるほど『感じるもの』は多いでしょう？ 結局はそういうことですよ」

うーむ、反論できない。それは俺が、異議を発するに足る知識を身に付けてすらいないから」という訳ではない。今や理論としてこの天使に学んだ数々の教えが頭の中で過不足なくこの説明を肯定しているからだ。思えば俺もこの異世界の法則にすっかり馴染んでしまったものだ。

それに実際効果は目覚ましい。まるで体を叩いてくるかのような自然の力……熱波という形でじんわりと染み込むこの星の中心の魔力らしきそれを、何となくだが肌で感じる所まで来れたのだ。曲がりなりにも魔法と呼ばれるモノを使っていた今までの一年間で僅かにも気付く事のなかった感覚。一気に目の前の視界が開けたような感じだ。

しかしまだ足りない。感じるだけでは駄目なのだ。それこそ霞や空気と同じに「見えなくても触れない」これを自由に操る所まで行くにはまだ何か……ほんのきっかけみたいなものが……

「……ま、物のついでです。これで貴方も少しは逞ましくなってくれば私も嬉しいんですけどね」

「あー、何か言ったか……?」

「い、いえ。別に何も」

「うむうむ、いと尊き青春の一頁じやのう」

「違いますよ、これはそんな……。……………」

「わ—— ツツ!!?」

びッ、びびびっくりしたア!? いやこうやって急に出てこられるのは二度目、つつてもこんな状況になってまで何事も無かったようにまた来るかフツ—!?

俺が寝転がっていた絶壁の真横、ゴツゴツとした岩の出っ張りに……いやこれどうなってんだ? 長い白髪を重力に逆らわずに垂らす形で“逆さ吊り”になってるクイーンドラゴンが腕を組みながら訳知り顔でうんうんと頷いていた。

頭の高さは俺と同じくらいだ。どうやってこんな壁に張り付いてるのかと彼女にとつての足元を見上げてみれば……おいおい、冗談だろ? 緑白の鱗に覆われた竜人の足——それも当たり前のように片足——から伸びる爪が器用に岩肌を引つ掛けられていて、それだけで3m近い体が何ともなさげに軽く支えられているみたいだった。

いやまあ、どういうバランス感覚してんだとか俺がン時間かけて登った場所なのに超

余裕そうじやんとか、はたまた敵対してる相手の居所にどういう神経してたらぬけぬけと会いに来れるんだとか、そういうた諸々のあれこれは全部端っこに置いて……

「いつから居たんだよ!？」

「カツカツ、やはり良い暮らしを知ると人間ダメになるもんじやのう。明鏡止水のかたツぱしでも掴めてりやこう云う事にはならんのに。だからあの小僧っ子だつてこんな近くに天使ちゃんを隠れておるのにも気付かない……」

あな嘆かわしや、という風に肩をすくめる女王は少なくとも敵意があるわけでは無さそうだ。

つつうかよく考えたらアレだな、まさかわざわざ見逃してやるとハッキリ宣言しておいた奴らが勝手に人質を取り返すために頑張ってるなんて知りもしないだろうから……もしかすると、エリックとの勝負に関係ない俺たちに対してはまだ無警戒でいてくれるんじゃないか？

色々ありすぎてあんまり回っていない頭で若干の希望的に寄つた観測に考えを巡らせているところに……な、なんだ？ 俺を数秒じいつと見つめたクイーンドラゴンが急に俺の足場に手を掛けてきたかと思うと、

「わ、わっ!」

「ちよこつと付き合え! これからいいとこに連れてつてやるぞ! うーむそうじや

の、ついでに天使ちゃんも一緒に来るか？」

「……ッ！」

ひよい、と俺の首根つこを片手で掴んですっぽりと小脇に抱えてしまった。急な展開に頭が真っ白になるのも知らぬ顔でプロメステインへと手を差し伸べるクイーンドラゴンだが、キツと表情を厳しくした彼女は天使の力で光の槍を生み出しながら威嚇するように叫んだ。

「そうはさせません！ 彼を好きには……」

それは一瞬の出来事だった。

「むっ」

伸ばした方の手で女王が何やら“印”のようなものを結んだ直後——プロメステインの持つ光の槍が、粉々に砕け散って粒子となった。

俺達が呆然とその様子を見送っている間に……気楽な様子で“呪符”のような何かを懐から取り出す。それをまるで磁石に砂鉄でも付けて遊ぶみたいにプロメステインの周囲を漂う粒子に向けると、なんと見る間に光の粒同士がくっつき合って『鎖』を形成し始めたのだ。

「あちゃ……経験が足らんの。うん百年前の基本戦術じゃよこれは。農らに当てるために出したものは農らにも干渉できようが？ それに天使といえど己れに同じ聖素は”

すり抜け”られまいて」

この世界の物質全てを透過する高純度の聖素で構成された天使の肉体を、縛る。恐らく生まれて初めてであろう経験に目を白黒させている。プロメステインを労りさえするような調子で、俺を抱えている腕と同じにぎゅつと詰め込むように抱えると――

「さあさ、こつちじゃ、とつときの抜け道を教えてあげよう！ あそつから抜けて外出るぞっ!!」

???????

「……………」

巨岩。

ゴルドの“気”に充溢した、およそ己が背丈の三倍に伍する怪物じみた威容を放つ肌色の石塊^{いしぐれ}。その上に座禪を組むドウエルガの司祭エリックは全身に滝のような汗を浮かべながら、じわり、じわりと目を開き始めていた。

その瞼の下端が瞳の中心に達するまで開きかけた刹那、ふと腰を上げた彼はおもむろに岩を歩き……美しい体運び。地上に音も無く飛び降りた、直後の事だった。

どしやあ……つ、と。

巨岩が音を立て崩れ去る。千々に砕けた内側から覗く漆黒の焼跡、ちろりちろりと舐めるように嘖き出す焰の残滓がこの巨岩の末路を雄弁に物語っている。

焼き焦がしたのだ。丹念に丹念に練り込んだ炎の魔力を背骨から腰にかけ伝わせ、決して破壊を生じないように真下の岩へと満遍なく行き渡るように送り込み続ける。膨大な魔力を極めて正確に操作しなければ到底不可能な芸当だ。

この行をひたすらに続けていた間に限ってはゴールド火山に棲みつく——ほぼ全てが外に出払っている竜族を除いた——魔物も襲っては来ない程だった。

その大抵が欲望の塊でしかない魔物にとつてすら畏れ、圧巻せしめる光景だったという事か。

『……できればさあ、できれば俺もああいふ風な修行が良いんだけど。魔力を操るつて要は感覚的な問題なんだろう？ そこらを走り回るよりこつちのが絶対いいって……』
『貴方にはまだ早いです。いくら楽そうに見えるからつてあんな意味のわからない苦行から入るのはぜつたいお勧めできません』

座したまま静するその修行風景を見た某“賢者”が垂れた文句は的外れもいいところだ。この世界でこんな真似ができるのは人外を含めても上澄みの中の上澄みにしか存在しない……が、それすらもあの女王には全く通用しないのだろう。

一つの時代に生まれ落ちたある種の“天才”、エリックがそれに当たる事は間違いな

い。にも関わらず人間と妖魔の間に隔たる差には底の知れないものがあるのもまた事実だった。

(もつと……もつとだ。火の元素を、サラマンダーの力を本当の意味で理解しないと……奴に抗うことすら……)

事ここに至つてさえ、サラマンダーは何も語らず黙したままだ。

力を貸してくれているという事だけは確かだがその他一切の協力は見込めそうになり。技、知識、力の使い方……今のエリックを形作る多くの物は、かつてのサラマンダーから学んだ事だ。彼女に教えられる事は全て教わり血肉に変えてきた自信はある……だが確証は無い。

それで果たしてあの怪傑に対抗することが出来るのだろうか？　いくら修練を積んでも疑念は尽きない。無理からぬ事とはいえ、とても心を穏やかに保てるような状況ではないのは確かだった。

「……ん？」

と。鬱屈した思考と危機感に逸る心を抑えながら、久方ぶりの地上を確かめるように足を着けつつマクニアを救い出す計画を考えていると――

「おいつやめろまさかそこ落ちうあやめつあがばばばば」

「わっはははは!!　そうれひとつ飛びじゃあーッ!!」

ぎっばーん!!　と。

直近でもものすごく聞いた覚えがあるような声と、どえらい勢いで叩き付けられたであろう事を嫌でも理解させてくる“着水音”のような響きがこの山全体に轟いた。

音のした方向への直線上はまるで図つたかのように山脈の尾根に遮られ、ここからでは何が起こっているのかまるで確認する事ができない。

しばらく停止していた思考が再び動き出した時。深く、大きく息を吸い込んだエリツクの第一声は、全くの理不尽に巻き込まれている当の本人達からしても同意を返さざるを得ない内容となっていた。

「何やってんだあいつらッ?!?!?」

第38話

上下左右の感覚？

そんなもんはとつくに消滅した。

前世の遊園施設で学生のころ経験したジェットコースターってやつより何倍もブツ飛んだアトラクションに危うく意識を手放してしまいそうになりながら俺は唐突に呼吸ができなくなった事への危機感、そしてじゅわつと皮膚の表面を炙る謎の熱さに気を動転させて苦しみがいていた。

「ぼ(っ)ぼ(っ)も(っ)もが」

「ぶはあくつ、おいよいどうじやここは！　いゝい風情じやろうが！」

ざばあー、とまるで猫でも持ち上げるような感じでクイーンドラゴンから両脇の下に手を回され、ようやく俺は水上に首を出すことに成功した。

そう、水上。どうやら俺の意識が洗濯機の中に放り込まれている間にこの誘拐野郎は自分もろとも謎の熱湯に目がけて全力の飛び込みを敢行していたらしい。しかもあんな高所から飛び降り……

「このバカ！　アホッ！　ボケカス——ッ!!」

「怒りが抑えられない気持ちには本当に分かるんですけど落ち着いてください、信じられないほど語彙力が低下してます」

瞬間湯沸かし器の勢いで込み上げてきた感情をプロメステインの声でひとまず飲み込む。

そうだ、連れ去られたのは俺だけじゃない。大いに暴れていた俺を事も無げに抱っこしたままでいる色々と規格外の阿呆を内心で憎々しく思いながら湯気に包まれた辺りを見回すと……いた。女王の手から伸びる例の光の鎖に繋がれてはいるが、俺の斜め前辺りで水面の上に浮遊しながらこちらをジト目で見つめていた。

濡れたくないのか何なのか知らないが宙に浮くだけの力は使えてる以上、どうやらそこまできつい拘束ではないようだ。元がプロメステイン自身の力なんだから当然っちゃ当然かもしれないが、とりあえずは見た目以上の何かがある術じゃないと見ても良さそうだな。

しかしこの野郎、どういう意図があつてか知らんが容赦なく服をずぶ濡れにしてきやがつて。はた迷惑な真似を……元から連日の修行続きで汚れてた俺はともかくとしてだな、少なくともお前が一発で台無しにした着物は前世でもそうはお目にかかれないほど上等そうに見えたぞ。一体どういう神経してやがるんだ。

「あん？ 服を脱がんで湯に浸かれるわけないじゃろ。お前さんは何を言うとするんじゃ

「？」

「えっ……あ。」

思わず口に出していたらしいその愚痴に対して反応したクイーンドラゴンが指を差した方向を見る。その岩の上には馬鹿に丁寧に折り畳まれた馬鹿デカイサイズの着物と……あつ、え!?! 俺?!? 俺の服!?!

は、はだか。いつの間に俺は全裸にひん剥かれてたんだツ!? まま待てよ、つてことは俺を今抱きかかえてる奴あまさか……

「じゃーん! へへへ、儂ほどにもなりやあ衣服なぞ在つて無い様なものなのよお」
 くるりと俺の体の向きを変えて女王は自らの一糸纏わぬ肉体を見せつけ……

……………

「……つにデレデレしてんですかい加減にしてくださいよこんな時に」

「……はっ、鼻血? うっ嘘だそんな非科学的な……ッ!」

お、おかしいだろ。ただ裸を見ただけなんかでこんな、金槌で頭を思い切り殴られたみたいに一瞬意識が飛ぶなんて馬鹿な事がありえるか。

規格外に“美しい”だけじゃない。見るものの劣情を強制的に引き出すような猛々しいまでの色香は今まで見てきたどんな魔物よりも力強く男の感覚に訴えかけてくる。

これは一つの……肉体という括りの中で姿形が帯びる“魔性”性の到達点だ。俺み

たいな常人が直視していい領域じゃない……っ！

「おっと、やつぱり素裸すはだかは刺激が強すぎたかのう。このままじゃ落ち着いて話もできんぞな。ほれほれ、いい子じゃからこっちにおいで〜」

とかなんとか言いながらクイーンドラゴンは再び俺の体を外側に向かせて、……だつわあ!! な、なんだこの頭にずっしりと乗つかる重たい柔らかい感触は!! 反射的に逃げ出そうにも思いの外がつつしり抱き寄せられて……!!?

「……さつきから何です、そんなものを押し当てられたぐらいで随分と“元氣”になつたりして。貴方のことなんか全部分かつてるんですからね、隠し通せると思わないでください」

「ばっ、これは生理現象で……いつてえ、やめる顔を蹴るな顔を！ 痛いー！」

「ううむ、このままでは罅が明かないの。流石に儂も遠慮しておったが……やはり四、五発ばかり軽く手で抜いてあげようか？」

全員落ち着け。特にプロメスティンお前は何か知らんが無言で齒軋りするのはやめろ。こんな所で新しい一面を見せてくるなッ、あーお前そういう顔しちゃうんだ！ 今までどんなピンチも割とそつなく躲してたけどいざ手も足も出ない状況つてなるとそいうう——

「ぶげら!! ……ま、マジでお前待てっ、マジこれ以上はマジで首がっ」

「おおわっ！ も、もう効果が出てきたか。さすが魔の道に通じる者だけあって早いはつやのうー！」

「あ………？」

クイーンドラゴンはそう言うのと急に俺の顔をゴシゴシと湯で洗い始め……ど、どうなってるんだ？ ついさつき出た鼻血が止まつてる。よく見たら崖登りで傷ついた指もだ、こつちの方が目に見えるだけ違和感が顕著に見て取れるかもしれない。

それに今まで気が付かなかったが……まさかここは『温泉』なのか？ 火山地帯というぐらいだから有ってもおかしくないとは思ってたけど、この少し滑らかに肌に纏わりつくお湯の感触は前世でも何度か入った薬湯のそれに似通ったものがある気がするぞ。

「な、なんですかこれ。浸かっただけでこんなに早く傷が治るなんて……逆に大丈夫なんですか？ 天然の成分どころか化学薬品のプールに浸かっただけで違和感ある早さですよ」

「あん？ 違う違う、確かにここのは元から打ち身や切り傷に効くがのう……お前さんじゃよ、お前さん自身が無意識のうちに傷を治してみせたのじゃ」

「お、俺？」

「そう。疲れ切った身体にて漉し取るように自然を取り込み、魔力を己が力とする。儂ら魔物にとっては必要の薄い術じゃが、古い鍛錬法の中には確かにそういったものがあ

る。この湯はその昔、その鍛錬のためにしばしば使われておったものよ」

曰く、疲弊した肉体への親和性が極めて高い魔力に満ちた秘湯である、との事らしい。確かにさつきは無意識だったものの、俺の周りに取り巻く力の流れのようなもの、がよりハツキリと近く感じられるようになった気がする。本当に近い……どれくらいだ？ いや違う、これは近いんじゃない。

「俺の体を……透とおつてる……」

ハッ、と気がつく。今なら“何か”が出来るはずだ。ええと、あいにく杖は駅舎に置いてきたから……そうだ、これだ！

「ばしやばしやと湯を掻き分け、脱がされて折り畳まれた俺の着替えの中から“濡れ羽鴉の腕飾り”を取り出す。狼族が使う影の魔法を操れるようになる魔道具だが、今はそのためを使うのではない。」

右手に腕飾りを握りしめ、その指をゆっくりと水面に近付けてイメージする。何だっ
ていい、とにかく目に見える事ならなんでもいい……

「おお！ やりおった！」

「……驚きました、こうもあっさり殻を破らせてしまうとは」

手はまったく動かしていない。だが確かに不規則な形の『波紋』が指の中心からうねり出したのだ。

こんなにも些細極まりない現象でしかなくても——そう、“異能の力”がそこに働いたと理解をするのには十分過ぎるほどの成果。

俺はようやく本当の意味で……

魔法を使えるようになったのだ！

「いやっ、たあ——ッ!!」

誰の力に依存する事もない、紛れもない俺自身の魔力の操作による異世界的な能力の発露だ。

この世界に生まれてから漠然と想い続けていた夢。人間の一生を捧げても手に入られるかどうか分からなかった僥倖。そんな場所に俺は今立っている。

「教えが良かったんじゃないの。天使ちゃんも人間のお前さんが練を為すに最も適した方法を見事に導き出した。でなければ秘湯は応えてくれなかった筈じゃ。いやはや、二人とも見事なもんじゃよ」

「そ、そうでしたか？ えへへ…… つじやなくて!!」

感動に震える俺をよそに何やら絶叫しているプロメステイン……つと、確かにそうだよな。我を忘れてる場合じゃないぞ、ここに至るまでの状況がどれほど異常かつてのを

思い出さなくちゃ始まらない。

どうして竜の女王が俺達にこれだけの協力をしてくれるのか。上に立つ者としてか、普通の魔物より並外れて強い理性を持っているらしいってのはいい加減に理解した。だがそれでも魔物は魔物、ドワーフなんかと違って竜族つてのはどこまで行っても人を襲う存在であるはずだ。

「……それによ、俺はアンタの仲間を殺す片棒を担いだ男だぜ。恨まれこそすれ助けられる筋合いなんかねーよ」

「めっちゃめっちゃ薄目でこっち見ながら格好いいこと言われてもいまいちパツとしないのう」

「これ以上は無理なんだよ!! 凶器を突き付けてる自覚をしろ!!」

凶器って表現は決して大袈裟じゃない。魔物にとつての性器は押し並べて獲物を狩る行為に特化した器官と言つていい、それこそ獣の爪や牙なんかと変わらないのだ。んな物騒なモンを仮にも友好的な相手に向けんでほしいぞ。

「ふーむ、ちよつとした冗談はさておきのう」

「……………」

「そうじゃな、こいつは老兵の単なる都合に過ぎぬのかもしれないが……疲れちまった、とでも言うべきかの」

「疲れた？ アンタほどの妖魔が一体何にだ」
「争いに」

端的だな。だが同時に深い思惟を感じる台詞でもある。湯に浸かりながら空を見上げる女王は淡々と語り始めた。

「思えば戦いに明け暮れた一生じゃった……何も前線に出るばかりではないぞ。けして望みはせなんだが、才能があつた。儂は敵から奪い取つた聖素を練り込み、天使を斬ることの出来る武器を鍛^うてる数少ない存在であつた。仲間を守るために日々を技術の研鑽に費やすことを強いられたよ……完全なものではないがの。やはり聖素は物質に囚われることなく霧散する。今や地上にそういった武器は一振りも残つておらんじやろうな」

無論、天使が地上から去つた今や殆ど再現できず、またその必要もない技術じゃが。古の記憶に沈む、憂いを帯びたような声色で竜の女王はそう締め括る。だが解せない事はまだいくつかあるぞ。

「そういう生き方に息を詰まらせてたつてわけか。何となくだけど分かる気がするよ……だが、そんなアンタが今度は一人の男を殺す為に人質をさらうなんて真似をした」
聞けばアンタは『エリック以外は見逃してやる』と言つたそうだが、その上で取つてゐるマクニアを傷付けかねない行動はさつきまでの言葉とも矛盾する。加えて土台、非

合理的だ。人質なんて迂遠な真似をせずとも思い通りに場を整えられるだけの力も頭も持ち合わせているだろうに。

だから今なら分かる。エリックもそうだがアンタも同じだ、表向きの行動に移していること以上の“何か”を考えて動いている筈なんだ。でなきゃこんな回りくどいことをする意味がない、そうだろう？

「言わんとすることは分かる。じゃがな、儂が斯様な手段を取つた理由なんてのはまあ単純なこと」

「……………」

「——儂なりの“慈悲”じゃよ」

「はあ……………」

人攫いが慈悲？ 何をどう考えたらそんな結論に至るんだ？ 困惑する俺とプロメステインの疑念を、しかし半ばから遮るようにクイーンドラゴンはふるふると首を横に振った。

「ふむ…………ちと喋り過ぎたかのう。これ以上は儂の口から言えぬなあ」

「つ、何だよそれ！ 適当なこと言つて！」

「さつきから思つてたんじゃが、なぜよそ者のお前さんがあんな町にそうまで入れ込むことがある？ いずれにせよ滅ぶ定め、その中の小僧か小娘のどちらかが少し早く死ぬ

というだけの事じゃないか」

「さあ、それに関しては私の方こそ同感なんですけどね……」

茶々を入れるな。これは俺達で何度も話し合った事だろうが。俺だってこういう事にばっか首突っ込んでるのは自覚してるよ。

「……確かにドウエルガは滅ぶ。でもそれは先の話だ、今のドウエルガを見捨てる理由にはならない。アンタが一刻も早くサラマンダーを取り戻したがる気持ちは分かるよ。だけどあの町の殺人を食い止めるにはエリックの力が……」

「待て、今なんと？ 殺人？ ドウエルガで？」

「……知らなかったのか？」

初めて見るような驚きの表情を浮かべているあたり本当に初耳だったらしい。天界の事情についても色々通じているみたいだったから少し意外だ。

「……三年ばかりは眠っていたから今の世情には疎うてな。ふむ……」

「ヤっ……!？」

三年も寝ていた!?

や、やけに他の竜族と雰囲気が違うと思ったが……こいつ、まさか“かがり火年”の影響を受けてないんじゃないかと、こんな年でもないかと碌に起きてすらいられないって事なのか？

急に常識から外れたような事を聞かされて反射的にプロメステインの方を見るが……何か知っているのか？ 彼女はそれを察するようにただ目を細めていた。

「ふふ、何ということもない。この婆もいよいよ死期が近づいておるといっただけの話じゃ。近頃はどうも頭に霞がかかったようだな……最後にやり残したこの仕事を終えて、いよいよ女王の位ともおさらばかのう」

「……………そう、でしたか」

彼女が自分で語った経歴からして、その存在は恐らく今の若い天使にも知れ渡るほどに“悪名”を轟かせた女王なのだろう。あくまで「敵として」とはいえ、それほどの偉大な魔物の今にプロメステインも何か思う所があるのかもしれない。

ちっぽけな人間にはあずかり知れない天界事情を思わせる様子に少し気を取られてみると、クイーンドラゴンは顎に手を当てながら難しい顔をして呟いた。

「もしや……殺されておるのは要職に就いとつた人間や……あるいはあの町ならば……ふむ、高名な鍛冶師などではあつたりせんか？」

な、なんで分かったんだ？ 要職つてのは知らないが職人が多く殺されてるとかいう話は聞いた事があるぞ。

咄嗟に隠そうとしたが凶星なのはお見通しだったらしく、今度は眉間に寄せた皺をいつそう深めて何かの思案に耽り始めた。

「ふむ、まさか……なるほど、あの餓鬼……いやまさかな……」
「おい……」

「いやア思い過ぎであろう！ すまんすまん！ お前さんの言う通りじゃな、あまり適当なことを抜かすものじゃない！」

ぱつ、といきなり表情を明るく変化させ、面を喰らう俺らを差し置いて気持ちよさそうに伸びをした女王は湯面を大きく波立たせながらざぶんと立ち上がる。

「そろそろ時間じゃのう。お迎えもそこまで来とるようだし、今日のところは御開きとするかあ」

妖術か何かを使っているのか？ 驚くべき事に濡れた箇所をパツパツと手で払うだけの動作で体が完璧に乾いていくようだった。

降りして濡れたままになっていた白の長髪も含めて一瞬でだ。こんなんであの髪が維持されてるのか……つて、んな馬鹿なこと考えてる場合じゃねえだろ！

「待ってくれ、まだ聞きたい事が……！」

早くも着物に袖を通し始めた。このままでと本当に何も聞けないまま終わってしまうぞ。だが焦って追い縋ろうとする俺にクイーンドラゴン是人差し指を唇に当てて微笑み――

「最後に一つ言っておこう。儂ら魔物が敗者を黷ることではか糧を得られぬ生き物であることは理解しておるし、儂はそれを是としておる。お前さんらと仲良うしてみたのも所詮は血気を損ねた年寄りの怠惰でしかない。じゃが……」

「……？」

「お前さんらのそれは違う。いくらでも己を変えてゆける若者、気難しきでは世に並ぶ物のない天使族の少女。かような二人が確かな信頼で結ばれておるといふこと。それは、この老いぼれなどが及びもせぬ程のものを後の世に残すことになる兆しであろうと儂は思う。これが新たな道を示すか？ 或いは禍を為すだけか？ まだまだ見定められたものでもないが……」

——祝福しておるぞ、二人とも。

その一言を言い終わるや否や、女王の姿は一陣の風となつて消え去つた。

いつの間にかプロメステインの拘束は解けていた。ここに彼女のいた痕跡は既にどこにもない。急速にさつきまでの出来事が現実味を失つていくような奇妙な感覚に呆然としていると……

「……ぐつ、逃げたか。お前ら怪我は無いか？」

迎へつてのはこのことか。またどんだけ高くから飛んできたかのかは知らんが、今まで女王が居た場所へ立ち替わるようにエリックが結構な勢いで“着地”をしてきた。

「ここで何があつ、……………」

「待て説明する。この非常時に俺が呑気に温泉を楽しんでいる光景に説明も何も無いと思うかもしれないが、とにかく話はそれからだ」

ああもう面倒くさいな次から次へと。いっそのまま本当に暫くのんびりしてやろうかなとか考えながら、俺は今までの出来事を頭の中で整理し始めるのだった。

第39話

あれから一週間が過ぎた。

つまりこのゴールド火山に俺らが侵入してきたから既に十日ほどが経過したわけだ。

湯から上がるなり枯木から葉っぱ一枚ちぎり取る『力』も生み出せなくなるってことがあの後分かった俺の魔法だが（そうトントン拍子に話が進むわけもなかった——）連日連夜の肉体を追い詰める“修行”、そして例の秘湯を浴びることにより効果を高める瞑想を反復して続けることで、魔力操作の練度に関してはかなりの上を実感できるようなってきた。

自然の力が極めて強い「ゴールド火山」外では今ほど強く力を扱えはしなくなるだろうが、というのがプロメステインの見立てだが——こうして戦闘という用途に耐えるだけの仕上がりを持ってこられたのは素直に僥倖と言うべきか。

「アツパークエイク！ エアロカット！ ……と、とっ!! 旋風躍りて——」

目標の足を岩の塊で突き上げ——たった数歩の動きで後ろに躲され——障害物ごと切り刻もうと風の刃を飛ばし——尽くを返す刀で叩き落とされ——跳躍、瞬時に間合いを詰めた頭上からの振り下ろしを転がるように回避——切り出された落下途中の岩

塊を突風で相手にぶつけようとして――

「そっ、まじっ！」

――なんて余裕は無かったな。審判役のプロメステインの合図と同時に、心臓の真上に突き付けられたエリックの剣先がゆっくりと引き戻されていった。

どつと肩の力が抜けて崩れ落ちる。地面に大の字に倒れて蒼白な顔をしてるんであろう俺に対し、息の一つも乱していないエリックは懐から出した煙草を深く吸いながら淡々とこちらの戦術を批評した。

「流石に戦闘経験は少くないな。間合いを遠ざけようとする工夫は十分だった、魔法に依存して体捌きが疎かになっているという事もない……が、詠唱に時間が掛かり過ぎだ。これは魔術師じゃなく武芸者としての意見だが、その程度の単純な術は無言で出せるようになった方がいい」

「……峰打ちなら思い切りぶつ叩いても治癒呪文で治せるからって怖過ぎるぞ、なんだその意味の分からん距離の詰め方は……俺にも一本くれ」

「ほらよ。まあ、あれぐらいの動きをするだけの魔物ならこの辺りには少なくない。ここ大陸の最北端は魔王城にも最も近い地域だからな」

動き「だけ」なら……：そんなんだよな、エリックは手合わせの時に精霊の力を使うことは一回も無かった。純粹な身体能力だけで俺を圧倒し……：ただの一度も敗けはしな

かった。

俺はともかくエリックにとってこの手合わせが有意義かという正直微妙だろう。だがそれでもやれるだけの事はやる。何しろチャンスは一度きりだ。

「あれだけの戦いになると杖も流石に邪魔そうですね。出力の練度自体は安定してきましたし、そろそろ一段ほど短く直すべきでしょうか」杖についての設定は6話参照

「いや……それはヨロギ村に帰ってからだな。この大事な時に慣れ親しんだ道具の使い勝手は変えたくない」

なんとか自力で立ち上がり、プロメステインと話しながら駅舎前のキャンプに歩を進める。

ここでの修行は着実に成果を出しているが、いつまでも時間を掛けていいという訳でもない。

ここ一週間で俺たちが話し合ったこと——結局の所いつ「仕掛けるか」という問題は、そのまま時間の制限に直結した。

俺たちが今こうしてゆっくりと力を蓄えていられる理由はただ一つ、敵がないからだ。“竜のかがり火年”……その影響で活性化した大半の竜族が山の外に出払っている以上は安全にここに留まることが出来る。だが俺たちはその後の事も考えなくてはならない。

クイーンドラゴンは一リックを除いた俺たちを安全に帰してやると言っていた。つまりは残りの竜族が山に戻ってきたとしても俺らが襲われる心配は無い……と考へたくなるが、ところがそうも言い切れない。

確証は無いが、クイーンドラゴンは「かがり火年」が終われば程なく『休眠』に入る可能性がある。彼女が直近で活動していた三年前という時期は前期の「かがり火年」と重なるらしい。これは一リックに確認を取ったから間違いない。

女王の意向に背く竜族がどれだけいるかは定かではないが……俺らの命の保証にもなっている当の本人が不在という状況は避けたい。そもそもあの女王が寝てる間にマクニアを取り戻せるんじゃないか、という作戦を断念した理由の一つでもある。

「明日。決行は明日だ」

焚き火を囲んだ俺たちの中で一リックが初めに声を上げる。神妙な顔で視線を向ける俺とプロメステインの視線を受けて一つ頷き、補足する。

「これ以上は伸ばせない。オレも「かがり火年」がいつ終わるかとは明確に把握してる訳じゃないが——何しろ自然現象だからな——とはいえ早く見積もればこれくらいが限界だ。どの道あまり悠長にしてはいられない」

「わかった……作戦はあるか？　俺ら全員が正面から行っても勝てる相手じゃないだろ」

「私にいい考えがあります」

ふんすと自信ありげに手を挙げたプロメステインに無言で促す。何だか様子が少し不安だが聞くだけ聞いてみよう。

「まず私たちは分かれて行動するべきです。女王の足止めをする側、こっそり忍び込んで人質を回収する側との二手に分けましょう。本来なら天使である私が時間を稼ぐのに最適のはずなのですが、あの女王相手ではさつさと無力化させられるのが落ちですからね。後者に組分けされるべきでしょう」

「俺とエリックの二人だけで時間稼ぎか……正直かなり厳しいと思うが、それでも何とかするしかねーな」

「いえ違いますよ、貴方も当然こっち側です」

「えっ?」

クイーンドラゴンとの戦力差はエリック本人からも重々聞かされただろ、それなのに潜入側を手厚くしてまで一対一を仕向ける意味があるのか?

言っている意図が読めない俺に対してプロメステインはこう続ける。

「まず女王は私たち二人がマクニアさんを無理やり取り戻そうと裏で企んでいる事までは、恐らく知りません。その数少ない優位はなるべく保つべきだと思います」

「……かもな、それで?」

「エリックさんが一人で真つ直ぐ勝負を挑みに来れば女王は掛かり切りになるでしょう。つまり人質を運び出すまでは円滑に進むはず——その後、私たち二人が背後から女王に奇襲を仕掛けます。ここで生じた混乱に乗じてこの機関車に乗り込むことができれば逃げ切るのも不可能ではないという寸法です。どうですか？　これぞ完璧な作戦……」

「本音は？」

「それはもちろん時間を稼げなくてエリックさんが死んだ場合私たちは女王と戦わなくて済むので安全にドゥエルガの技師マクニアさんを持ち帰れるというメリットが……あつ。」

空気が凍った。

それも一瞬でだ。

「……………」

「……………」

「……………」

本来なら温もりを感じさせる焚き火の暖かな音がパチパチと虚しく鳴る中、俺はあまりの情けなさに心を抉られる思いだった。

流石のプロメステインも不味いことを言ったのは自覚しているのか何処となく居心地が悪そうに目を泳がせている……いや、俺を大事に思ってくれてるからそういう考え

になるってのは分かるよ。有り難いと思いきそすれ、他でもない俺が簡単に否定してやるのは何か違うのかもしれない。

にしても時と場合ってのがあるだろうが……！ 決行の前日っていう時に何て空気にしてくれやがったんだこの野郎……！

「……正しいのかもな、お前の言ってる事は「なっ」」

何言ってるんだエリック、言つとくけどこんな外道の言うことを変に真に受けて持ち上げようとしなくても大丈夫だからな。そうでなくとも調子こきなんだから甘やかしてるとこんな奴すぐつけ上がるぞ。

俺のそんな困惑を感じたのか「心外だ」って風に睨んできた外道を無視しながらどういう意味かと問えば、エリックは静かに一つ頷いてこう言った。

「元々オレはここで死ぬ人間……お前ら二人が負うリスクは少なくともある方が自然だ。それに、これが上手くいく望みの高い作戦である事に変わりはない」

「……女王との戦いは、俺では足手纏いだと？」

「そうだ。確かにお前はよほどの化け物が相手でなければ決して邪魔にはならない——ウィルム娘との戦いでオレを幾度となく助けたようにな。正直言つてその機転と手札の多さ、背後を任せる相手として手放したくない逸材ではある」

だが今回ばかりは相手が悪い、と続けるエリックの言葉には確かに頷ける物がある。今日までの特訓でますます思い知ったのは圧倒的な力の差だけだ。下手に動いてクイーンドラゴンの警戒を強めるよりはプロメステインの言う通り裏方に徹した方がいいのかもしれない。だけど……

「心配するな。ここ数日で強くなつたのは“賢者”、何もお前だけの話じゃない」

切迫した状況下で易きに流れる事への漠然とした拒絶感に悩む俺を説き伏せるようにエリックは言う。

「時間稼ぎ程度ならこなしてみせる。やるべき事をやる……オレにあるのは、それだけだ。だからお前もそうしろ。これ以上オレから言える事は無い」

「……………」

「詳しい段取りは言い出しの天使が詰める。今は体を休める事だけ考えろ……そら、湯が沸いたぞ」

火に掛けていた鍋の熱湯でエリックがいつも淹れてくれるのはここら一帯で採れる葛の茶だ。

とろみのあるこの緑の液体はかなり苦く決して旨いとは言えないが、とても冷めにくく体を芯から暖かくしてくれる。これを夕食の前に皆で飲む時間はこの男と少しの間でも行動を共にできて良かったと思える瞬間の一つだ。

「……私だつて精いっぱいやるつもりなんですからね。忘れてるようなら言っておきま
すけど、私は貴方に魔法を教えた師匠なんですよ。幻惑、呪い、視界封じに果ては空間
操作まで……作戦に使えるような術式は一通り揃えてあります。少しぐらい信用してく
れてもいいでしょう？」

「……わかつたよ、そんな口を尖らせて拗ねるなつて。お前の言葉は誰より信頼して
る
さ」

「ならしいですけど」

湯気の立ち上るコップが全員に行き渡る。これがゴールド火山の雄大な自然の中で三
人が焚き火を囲む最後の夜になる。

エリックの言う通り俺達は今までやれるだけの事をやってきた、ならどんな結果にな
ろうと悔いは無いはずだ。

やがて俺達は誰からともなしに杯を掲げ――

「明日の成功に」

ゆらゆらと舞い散る火の粉に向けて、乾杯した。

決行前日の深夜。

当日に備えて三人の誰も寝静まったと思われる中、小さな駅舎に併設されたキャン
プからもぞもぞと誰かが抜け出そうとする影があつた。言つてしまえば、そう、我らが
“賢者”である。

「……寝てる、寝てるよな？ よし」

限界まで声を落として確認をしたかと思えば抜き足差し足、極めて慎重に駅舎の戸を
静かに開き、また後ろ手に閉めて一息をつく。まるで人目を憚るような様子で彼が一体
何をしようとしているのか。

そう、オナニーである。

健全な男として避けては通れぬ道。十日ほど続いた修行漬け生活の中で不覚にも溜
まつてしまった性欲は都度無理のないように処理してきたつもりだったが、間の悪い事

に決戦の直前というこの時に“そういう日”が来てしまったのだった。

重ねて言うがこれはこの男の薄弱さを意味しているのではない。溜まったものを吐き出せないという事は、とりわけこの世界においてはいざという時に最悪の事態を招く可能性があるということを経験で既に知っているからだ。むしろ適度に自分を慰める術を身に付けているだけ賢明だと言える。

「はあ……さつさと済ませよ……」

ただ、男のサガとはいえ戦いの前夜にこんな事をしている情けなさがあるのもまた事実。快樂への期待にほんの僅か気を緩めながらも鬱々とした気分で着古したズボンに手を掛けると――

「ねえ、普通にバレバレなんですけど」

「どっわあ?!?!」

どんがらがつしやん、とあまりの驚きに倒れ込んでしまったのも無理はない。声が聞こえてきた方向を見れば、天使の特性を遺憾無く発揮し壁をすり抜けている途中のプロメステインが体を半分こちら側に出してきていたからだ。

「まったく嘆かわしい……とは言い切れませんがね。極力接触を控えるとはいえ相手は竜の女王、何があっても不思議ではありませんから」

「……正直知ってたよお前みたいなのから壁一枚で隠せてるわけねえって！ でも今ま

で見ないフリしてくれてたんなら最後までそうしてくれよお!!」

悲痛な叫びと共に床を叩く惨めな姿にもどこ吹く風といった調子のプロメステインはこの件に関して議論する気は無いようだ。

「それにしてもあの堅物司祭の方は私にさえそういう兆候を感じさせませんでしたね。単に気配を隠すのが上手いだけなのか何なのか……あるいは一切そういうことを絶つているのかも」

「……そんな事ありえるか？ 十日だぞ？」

「さあ？ それでもあの“いつでも死ぬ準備は出来てます”みたいな気に食わない態度からすると妙な話でもありませんけどね。ストイック過ぎて不健全であるとは思いますが……それより問題は貴方ですよ、貴方！」

びしっ、と指を差しながらすっかり部屋の中に入ってきたプロメステインはぐいぐい詰め寄りながらこんな事を言い始めた。

「私というものがありませんが貴重な精液を無駄にするなど言語道断！ 許せません！ どうせ手の中に射精して捨てるぐらいなら私の中で出してくださいよ！」

「ばっ……!!? なんでそうなる!？」

「明日使う予定の術式にかなり多くの魔力が必要になってくるんです。私だけで練ることのできる魔力量はそう多くないですよ？ ただえさえキツいんですから少しぐら

い協力してください！ ほら、分かったらさっさと脱ぐ！」
「ちよっ……待て待て！ まだ心の準備が……ああっ……！」

(39. 5話に続く)

第40話

岩壁や地中から滲む溶岩の僅かな明かりがもたらす、薄い暗闇に覆われている。

ゴルド火山洞窟内のどこかにひっそりと収まっていると言われるその広大な一角はなだらかな高低差のある立体的な地形や遍在する無数の岩柱が特徴だが、特筆するべき最たる点はそのではない。

場所は剣の墓場、^{グレイラウンド}と呼ばれている。

かつて聖魔大戦の折に一匹のクイーンドラゴンが鍛えた幾百もの刀剣……その夥しい数の失敗作が辺り一面、壁と言わず、床と言わず、天井と言わず、所狭しに突き刺さっているという無類の光景こそにある。

付け加えれば——“失敗作”という表現は、当の時代における対天使としての役割においてのみ当てはまる物だ。

聖素を留める事ができなかつたというただ一つの欠点だけで時代に不要と切り捨てられ廃棄されるしかなかつた名刀と宝剣による屍山血河である。然してその切れ味と存在感は数百年の時を経てさえ些かの劣化も見せず——ここに導かれた魔族の剣士が一生涯の相棒と巡り会う、などという事もある程だ。

“鑄造場”と呼ばれる竜の女王の棲家すみかに次ぐ、ゴルド火山屈指の特異なる地。その中に足を踏み入れた人間の戦士エリックは油断なく周囲を見回し、洞うらの奥底より滲み出る凄まじい妖気に意識を向けた。

「とうとう来おつたな」

「……………」

この場所はすぐに分かった。まるで居場所を知らしめるかのように垂れ流しになっていた女王の気配に誘いざなわれるまま歩いてきたというだけの事。

時が来たのだ。決着を付ける時が。命を掛けた闘争の時が。

「…………武器を使うんじゃないのか？ その手には何も持っていないように見えるが」

対面する相手の立ち姿に違和感を感じて指摘をすればクイーンドラゴンは軽く両腕を広げて肩を竦め、何という事は無いという風に言い放った。

「はいいやよ」

「……………」

「この場所その物こそが儂の武装よ。ここ劍グレイブラウンドの墓場は儂が世界で二番めに強くあれる空間。竜の女王がこの場に待ち受けていたという事実がそのまま、貴様を本気で叩き潰す覚悟の表れになっておるとでも思ってもらえればええ」

そこで言葉を切るや否や——すうつと、音も立てずに一筋の煌きがクイーンドラゴンの目前を垂直に流れ落ちる。

まるで造り手の存在に呼応するかのよう。天井に突き刺さっていた一振りの剣が、なんと独りでに抜け落ちて来たのだ。極上の切れ味を孕むその柄を何の危うげも無く空中で掴み取った彼女は、どこか嬉しそうに呟いた。

「あてがたな艶刀イロリ。456年製、四重反り工、ニド鋼八対 寿ぎ砂一对 洗昌涙一。極めて硬いが粘り強い、血液を絡め取る性質有り。とんだ暴れ馬でもあるが……肩慣らしには都合がよからうて」

ひゅつ、と剣を振るった次の瞬間、押し流れるような風のうねりがエリックの鼻先に触れた。

エリックは確信する。全てだ。かの敵はこの空間全ての刀剣の“位置”と“特性”を把握している。対してこちらは背負う大刀一本以外に頼れる得物は無い——。

「しかし、ふむ。てつきり例の二人も貴様の戦いを見届けにくると思つたが……」
不利を押しでの覚悟を決めつつ、エリックは耳にした疑問に返答した。

「あいつらには何も言わずに来た。特にあの男は事の顛末を黙って見ていられるような奴じゃない。下手に横槍を入れられては、そちらも困るだろう……」

???????

「んなワケねーだろつての……」

そろそろ向こうで例のセリフが出た頃合かと想像しながら、
「何も言わずに」どころかしつかり口裏を合わせてクイーンドラゴンと出会さな
いようここまで来た俺とプロメステインはゴールド火山の山頂
に向けて歩き進んでいた。

幸いにもプロメステインの組んだ探知魔法で大まかな目的
地は割れている。二年ちよつと前にオオカミ娘の奇襲を防い
だ時と同じような術式だが、なまじ相手の力が強いだけに
今回はこれだけの広範囲から怪しげなポイントを割り出す
事ができた。たっぷり数日かけてだが。

それで女王の寝ぐらと思しき座標を知れたのはいいんだ
が、問題は洞窟の中が複雑に入り組んでいて思ったよりも
目的地に辿り着くのに苦労しそうだってところだな。早く
もプロメステインは疲れて休みたそうな顔を始めてる。

しかし悪いが今は先を急ぐのだ。いつまであのクイーン
ドラゴン相手にエリックが持ち堪えられるかわからな
——っ、と。

「気をつけてください。何か来るようです」

「……ああ」

やはりそう簡単には行かせてくれないってか。久々の実戦に気を引き締めながら、砂塵を巻き上げてこちらに走ってくる魔物の気配に意識を向けるのだった。

アツシユボアが現れた！

大柄かつ豊満なヒト型の肉体は屈強な筋肉に覆われている。逆立つ毛並みは灰色で、よく見ると細い尻尾が揺れているようだ。口の端には二本の牙が生えている。

いかにも頑強そう（しかし露出度はやはり高め）なプレートを纏ったその獣人は……見るからに問答無用という感じでこちらに向かつて突進してきていた。

「猪型の中級モンスターのようなですね。どうしますか？ ああいう単純そうな手合いの対処は面倒なんですけど」

「お前は後に仕事が控えてるだろ。今は休んどけ……さて」

エリックを女王のところから回収するにはプロメステインの呪術が必要なんだ。こんなところで魔力を使ってガス欠になられると非常に困る。

そういうわけで前に出た俺の姿を認めたのか、地面の岩盤を削りながら急停止した

アッシュボアは居丈高にこちらを見下ろしてこう言ってきた。

「ふん、山のヌシが触れ回っていた侵入者とはおまえらか。ひとり足りないようだが、まあいいわ」

「クイーンドラゴンに俺らの話を聞いていたのか？」

「そうだ。彼奴らは友人だからそつとしておいてやってくれ、などと……ふざけた話だ！　ほとんど、みながああのおいぼれを恐れて言う通りにする。だが、そうでなくとも竜族どもにも獲物を奪われるこの年に、黙って男を見逃すものか！」

竜族以外であれば魔物の邪魔が入る可能性も織り込み済みではあった。といつてもクイーンドラゴンがいる限り余程に蛮勇があるか狡猾なやつかの二択になると思っていたが……どうやら目の前のコイツは前者らしい。

言い終わるや否や唸り声をあげながら襲い掛かってくる巨体を、俺はため息を吐きながら迎え撃つのだった。

???????

「ふむ。何ぞ企んでおるような気配がせんでもないが……」

「……………」

「まあよい、とつとと始めるか?」

じり、と焼けつくような緊張感が場を支配する。あくまでも自然体で剣をゆらゆら動かす女王だが視線は油断なく大刀を構えるエリックを見据えている。

一步、先に踏み出したのは彼女の方だった。

ゆつくりと片足を上げ、前に動かし——文字通りの一挙手一投足を見逃すまいと目を細めていたエリックをして、次の光景は驚愕せざるを得なかった。

ずぶり、と足が地面に食い込んだのだ。

「まずは一手。これぐらいは軽く捌いて欲しいがのう?」

まるで泥濘ぬかるみに突っ込むような気楽さで足を沈めた溶岩の染みる岩盤を、高速で前方に蹴り飛ばした!

散弾にも勝る石塊の津波をエリックは大刀で一息に薙ぎ払う。サラマンダーの魔力も使用する事で熱を帯びた礫の防御には成功した……が、そこで気を緩めていれば即座に死んでいただろう。

自分が飛ばした攻撃よりも速く。既にクイーンドラゴンがエリックの背後に回り込んでいたからだ。

「ほおれッ!!」

「——っ!!」

ギヤりんツ！ と剣刃の擦れあう音が炸裂した。竜の女王の余りにも強烈な腕力による斬り上げを受け流しきれずにエリックは身体を回転させて軽く5メートルほど吹き飛ぶも、空中で全身を巧みに動かす事で完璧に姿勢を制御し辛うじて二本の足での着地に成功する。

息をつかせる暇もないか——そう内心で悪態を吐きつつ、剣を構えて炎の魔力を集中させた。

「茶・梅・火！」

「ほう……！」

エリックの周囲に数十もの火球がずらりと浮かび上がる。ひとつひとつが舞い散る火花と見紛うほどに小さいそれらに感嘆の声を上げながらも澱みない動きで滑り込ませるように振るった女王の剣は——

バゴオ!! と。

火花の一片に刃が触れた瞬間、その小規模の“爆風”に弾き飛ばされた。カラカラと音を立てて回りながら自らの手を離れる『艶刀』を一瞥し、すかさず飛び退いて距離を取りながら女王はちいと舌打ちをする。

『目』を見切れなかったか……片っ端から潰して回つてもいいが骨が折れるのお。こ
こあやはり手数で掻い潜つてやろうか……?」

「クツ……!」

やはり知られている。この技もそう長く続かないだろうと冷や汗をかくエリックを
よそに女王は足元から——否、地面に突き刺さる“二振り”の武器を引き抜いた。

それは劍、というよりはまるで翼竜の腕骨格をそのまま抜き取つたような形状の……
鋭利な鍼^{はり}? それとも鎌^{かま}? 素材も製法も不確かだがどこことなく原始的で、かつ野蛮な
恐ろしさを匂わせる奇妙な武器だった。

「双牙^{そうが}ツインザーガ。多腕の種族がそれぞれを両手で振るう事を前提とした重量^{おも}さの得
物じゃが……儂の膂力ならば片手ずつだろうが何の問題もあるまい」

くるくると手の中で弄ぶように回しつつ手首のスナップで軽く垂直に放り投げ、回転
して落下するその二振りを気楽そうにパシッと掴み取りながらクイーンは独りごちる。

骨のような見た目に合わず相当な目方を帯びるらしい二本の武器を羽根のように軽
く流麗に取り回してみせたクイーンドラゴンは——瞬時に腰を落とし、腕慣らしも終
わつたとばかりに疾走する。

一步、二歩三歩四歩、五歩、六歩、だんツ! 一際に力強い踏み込みと共に跳躍、迷
いなく頭蓋を叩き割る軌道で右手の武器を振り下ろし——

「……、ツ!？」

寸前、エリックは刀で防御した。

茶梅火は無数の火花ひとつひとつが触れば爆発する圧倒的な熱量を封じ込めた攻性の防御結界——これを纏った術者を直接斬り付けるには極小の火球全ての隙間を縫うように刃を通さなくてはならない。

そんな離れ業をいとも容易く実行して攻撃を通したのだ。見た目以上の質量による振り下ろしは当然のように甚大な威力——だが、致命的ではない。絶妙な速度と角度の加減に減衰された片腕での斬撃、力を受け流す形でなら十分に対処は可能……!

「ら、っ——」

ドバアツ!! と。

直後に起爆した茶梅火の爆音は前方から。真正面に愚直な膝蹴りを突き入れたクイーンドラゴンの身体がそのまま真っ直ぐ後ろに吹っ飛んでいく——と同時に、エリックの背筋がぞくりと総毛立った。

飛びながら地面を蹴って後方への力の流れを上に変換し、『双牙』の二振りを天井に突き立てることで食い止まる。その全身には一切の傷も火傷も負っていないようだった。

(その程度の熱も衝撃も儂の肉体からだを決して貫かん事あ分かつとる。そして……)

引き絞るように両腕の力を込めた女王は直後——天井を逆さのまま駆け抜ける!

岩壁の窪みに預けた自重を余さず繊細に支える脚の爪、さらに両の手に備えた特殊な形状の武器によつて可能にしたその速攻の反撃は「面」の攻撃によつて数を減らした茶梅火サザンカの補填を許さない連撃へと繋がる!

「疾ッ——」

確実に初撃を防ぐべく残る火花を一点に密集させたエリツク——『双牙』の片割れが爆風に弾き飛ばされるも絶死の二撃目が急所を抉らんと刺し込まれ——

じゆわッ、と。

灼熱の烈火を纏つた蹴りが、深く女王の脇腹に食い込んだ。

「っ、むう……!!」

「ぐっ、らアあああ——ツツ!!」

初撃の爆破で体幹を崩されていたクイーンドラゴンに成す術はない。火の魔力によつて強化され、加えて充分な回転に蓄えられていた脚力は爆発的な威力と途轍もない勢いで女王の体を吹き飛ばした。

——その先で衝突した洞窟の岩柱がガラガラと音を立てて崩壊していく様子は圧巻の一言だった。並の人外も顔負けの破壊力、あの“賢者”がこの光景を見ていたら腰を

抜かしたに違いない。

「は、はッ、はッ——」

刹那に等しい攻防。命懸けの綱渡りを乗り越えたエリックの脳裏に過ぎつていたのはつい先日自分が施した一つの教訓——「術にかまけて体捌きを疎かにするな」、だ。だから茶梅火が破られる事を前提とした動きに全てを賭ける事ができた。クイーンドラゴンの狙いが本命の二撃目だということに全てを賭けて反撃を合わせる事ができたのだ。

しかし“咄嗟の直感”という限りなく細い道筋を引き当てた事に変わりはない。たとえその直感が「司祭長エリックの戦闘経験」ほど信用に足る概念から来ている物だとしても、心理的な負担は計り知れないだろう——

「火神烈脚……」
かしんれつぎやく

と。

崩れた岩柱の奥底から聞こえる平然とした声は、女王が全くの無傷であるという事実を無情にも突き付けた。

しかし手応えの無さは薄々勘付いていたのだろう、それも当然だと言うような厳しい表情でエリックはクイーンドラゴンが今にも這い出ようとしている瓦礫の山に向け大刀を構えた。

「それもサラマンダーの技……じゃな。まつこと素晴らしい仕上がりだのう……その若さで既に彼女自身と遜色ないわい。本当に大したものじゃ……」

「……どうも皮肉に聞こえる。……一週間で鍛え直した急詭えの、大して効いてもいない技をそう褒められてしまうとな……」

エリック自身の作り上げた技である『二陽』は先の衝突において全くと言っていいほど効果が無かった。ウイルム娘との戦闘直後で疲労もあつたが、そこで何より指摘されたのは“燃費の悪さ”に他ならない。比類なく強力である事に相違は無いが、彼の短い人生で編み出した奥義の数々は同時に酷く安定に欠いていた。

「……じゃが、やはり貴様は天才じゃよ。儂の僅かな言の意図を読み、悠久の教えに学ぶ事で我が身に足りない技術をこうまで見事に補つてみせるとは。……まったく、滅すには惜しい。殺すに惜しいぞ……」

「……………」

「それにつけても——ああ、悲しきかな。その戦い方を身につけてしまったが故に、貴様は自らの敗北を決定付けてしまったと云うのじゃからな」

クイーンドラゴンは新たな刀剣——というよりは“刃の付いた重厚な金属塊”——を引き摺りながらゆつくりと瓦礫の中より現れ、そして言い放つ。

「なあ、聞こえておるかなサラマンダー。はるけき彼方の大昔……儂が童女の頃に勝負

を挑んだあの日より共に競い合ってきた技競べの歴史の中で、
あなたが追いついてしまったのじゃったかのう……？」

第41話

「ぬがああああ!!」

「くっ、馬鹿力がっ!」

呆れた奴だ。俺が簡単に捕まらないと見るや攻撃に躊躇が無くなってきたぞ。

両手を組んだ状態での振り下ろしで軽く地面を砕いてくるアツシユボアの怪力から距離を取りつつ、俺はうんざりしながら両手に構える杖に魔力を込めた。

「ええい、いい加減倒れてくれ! エレクトサンダー!」

「うぐぐぐ……なめるなあ!」

なんつータフな魔物だ、この調子で何度か攻撃魔法を当ててるが大して応えた様子もない。

若干黒焦げになりながら再度突進してくる猪の巨体を今度は影の魔法でやり過ぎす。周囲の溶岩と暴れ回るヤツ自身のおかげで潜る影には事欠かないが、正直あまり状況はよろしくないな。

さっと影から飛び上がり身を低くして着地する。さてどうしたものかと考えていると――

顔を岩場につつまんでもがいてる脳筋の姿が目に入ってきた。

「……………」

正攻法で攻略しようとした難敵の楽に倒せる裏技を偶然見つけてしまったような釈然としない感情もあるが……まあいいか。

隙だらけの下半身をボコボコにして決着した。

「むにゃむにゃ……………こっちだ……………」

「貴方の習いたての精神支配で操作できるあたり本当に頑丈さだけが取り柄みたいですね、この人は」

あんまりバカにするなよ。強さだけは今まで戦った中で一番だったぞ、コイツ。

流石に北の魔物は手強いと再認識しつつ、あーだのうーだの言いながら女王の寝ぐらまで案内してくるアッシュボアを俺は微妙な気分で眺めていた。あまり強いシヨックを与えると飛び起きちまうかもしれないが、まあ土地勘のある奴を味方につけたっての

は普通に大きいよな。

そうして俺達は洞窟の奥部、何かツタのような植物に薄く覆われた壁を右手に3メートルほどの横幅の道を登り歩いている所だ。

左側は急な断崖になっていて足を滑らせれば6〜7メートルは転がり落ちてしまいそう。ま、そんな心配をしなければならぬほど狭い道という訳でもない。それより結構な距離を歩いた事だし、いよいよ目的地まで近くなってきた頃合いだと思うのだが……

「どうだ？ 座標は近くなってるか？」

「う〜ん……これはどうなんでしょう？ ある期間から数値の変動が一定に収束したままになっているような……」

プロメステインが目を落とす羊皮紙の上では先程から何やら数桁の数字がズラズラとうごめき続けていた。上下も含めた三次元的な搜索の為に一から定義した自動計算表との事らしい。これくらいは片手間に作ってしまうのがプロメステインという奴だが、桁数がバカに多いのと変動が早過ぎるのとで俺には何が書いてあるのかさっぱりだ。

目標地点を表すピタリと停止した数値の下でジャカジャカ動いているのが現在地……三軸に加えて目標地点までの壁の体積とかも測れる優れものらしいが、その数値がさつ

きからどうも妙なんだと。

「変動が収束？　すると俺達は同じ場所をぐるぐる回ってるって事か？」

「どうもそうらしいですね。このアッシュボアが案内を間違えてるんでしょうか」

「あうあう……」

「しまったな、頭を殴りすぎてバカになったか？」

「それか精神支配のかけ直しですかね……むっ」

何かに気がついたような声を出したプロメステインは植物に薄く覆われた洞窟の壁をペタペタ触りつつ、舌を巻いて「まさか」と唸るように呟いた。

「これは……フラクタル構造？　かなり挑戦的な空間操作の結界ですね……まさか高等魔術が数学の理論を軸に組み込まれているとは……」

「何が何だって？」

「我々が同じ場所を歩き続けているというのは確かなようです。ちよつと待つてください、説明します」

チラリと視線をアッシュボアに向けたプロメステインの意図を汲み、杖を向けてその巨体をそこら辺の地面にごろりと転がす。立ちっぱなしにさせておくにも意外と集中力を使うのだ。

「フラクタル構造というのはですね……自己相似図形とも言え換えられる特殊な構造で

す。要するに『どれだけ拡大して見ても同じ形が永遠に浮かび上がり続ける図形』と表現できます。例えばこちらを見てください」

そう言うプロメステインは手に持つ羊皮紙の数字を一旦消し、指に沿わせる形ですらすらと線を引いて一個の立方体を書き込んだ。

「これを27等分して $3 \times 3 \times 3$ の立方体を新しく作るとします。それでその中の7ブロックを……これらと、ここを抜き取ってみましょう」

六面の真ん中にある一つずつと中心の一つを薄く塗り潰して消した事を表現する。外枠だけが残ってスカスカになったような感じだ。

「これとまったく同じ処理を残った立方体に続けて行い、そしてまた残った立方体に同じ処理、また同じ処理……と永遠に続けていく訳ですね。ここで質問です。一度の処理ごとに図形の『体積』は元の図形からどうなりますか？」

「え？ えーつと七つの四角を抜き取るから…… $20 / 27$ ずつになって減ってくんじやないのか？」

「その通り。では『表面積』はどうなりますか？」

「そりゃ穴が空くわけだから同じように減って……いや待て、なんか違うな」

表面積は立方体から抜き取られた内側の面積も含む。だから話はそう単純じゃなく

て……

「はい。詳しい事は省きますが一度の処理を続けるごとに表面積は元の30%ほど増加します。——では最後の質問。この『処理』を無限回続けた場合の体積と表面積の関係は一体どうなるでしょうか」

「……………体積はゼロに近付いて、表面積は無限に広がっていく？」参考：メンガーのスポンジ

「その通りです！ やはり貴方は飲み込みが早いですね、一見矛盾を孕むような仮定を忌憚なく受け入れられる論理的な思考ができるのは人外を含めても稀ですよ。特に天界で大きな顔をしているインテリ気取りの神学者連中なんてきつと逆立ちしても理解でき……………ごほん、失礼しました。アレと比べられるのは不愉快でしたよね」

「わあ失言の取り消しの方向性が不遜」

「ともかくお分かり頂けましたか？ 魔術や陰陽術のような異界の法則をいっさい介在せずしてゼロと無限を繋げる論理……………これこそが数学の偉大さですよ！」

うーむ、普段から魔法にばかりのめり込んでないでたまには数学もやれと言つてたのはこういう事か。確かにこれは興味深い……………

「……………つて違うわ！ 長々と解説してないで要点を言えよ急いでんだらうが！」

「はっ……………えーと何でしたっけ、何の話？」

「やつぱりちよつと見失つてんじゃねえか！」

うろろうと辺りを見回しだしたオールラウンドの学者先生に若干の呆れを覚えつつ俺は話を本筋に戻そうとする。好奇心が俺よりずっと多方面に向けられている分プロメステインはこうやって時々軌道修正してやらないと会話も儘ならんことがあるのだ。ほんとに大丈夫かコイツは。

「あー、はい、そうです。結論から言いますとですね、そういう論理を利用した空間操作の術式が貼られています。我々はほぼ無限の長さを持つ道を歩かされているというわけです。術者は恐らくクイーンドラゴンでしょう……こうした要塞化系統の術式は往々にして空間の主人が直々に掛けるものです」

「となると……解術はできそうか？　こういうタイプは術者を叩く以外だと術の起点になる依代から解析して崩すのがセオリーだろ、刻印や彫像とかの分かりやすいシンボルは見当たらないが……」

「フラクタル構造は自然界にも存在します。特にシダの葉は同一の関数による成長シグナルから美しい自己相似模様を形成するのですが……ほら、壁に巻きついてるアレですよ。するとこれは魔術的要素を現界の物質から抽出して術式に充てる方式ですね。惚れ惚れするほど巧妙な隠蔽です……一発で見抜けたのは私でも運が良かったとしか言えません、ともかく依代は特定できました。これなら少々時間を掛ければ解術を済ませられるでしょうか……」参考：バーンズリーのシダ

「……お前天使なんだろう？ 結界の一つや二つ程度いつもみたいに軽くすり抜けて素通りってわけにはいかないのか？」

「無茶を言わないでくださいよ、それはここからヨロギ村までの距離空間自体をすり抜けて瞬間移動しろと言ってるような……待ってください？ それはそれで面白い考え方もしれませんね。レポート系呪文の新しいアプローチとして考えてみる価値はあるかもしれ……」

「いやいやいいから早く解術してくれ！ なんか取り返しのつかん方向に話が逸れる前に！」

折角ここまで順調に来たんだ、別の事に気が逸れちゃったとかそんな理由で致命的な遅れを招きたくはないぞ。それにいい加減俺の頭も疲れてきたし。

「……ふう」

しかし、改めて考えると本当にプロメステインには頼りきりだな。

人助けなんてカケラも興味ないだろう事に散々付き合わせておいて、こいつがいないと俺は今回の件で何もできないに等しかったかもしれない。やはり力不足を感じないと言えば嘘になるな。

肩を並べたい、と思い続けて今まで努力をしてきた。確かに自分でも成長を感じる瞬間はあるが……彼女はそれ以上の速さで先を進んでいくように思えてならない。

俺の道と、プロメステインの道。それは本来別々のものである筈で、重なり合うことはあっても一方が一方に隷属するような事はあつてはならない。だから今この時でさえ俺のことが足枷になつてすらいるんじゃないかと、ほんの少しだけ思い詰めてしまふな。

「それはそうと」

そんな益体もない事を思いながら目を細めていると、ナイフやチョークといった錬金術製の小道具を幾つか取り出しつつ解術の作業を進めるプロメステインが唐突にこんな事を言い出した。

「貴方が今考えてる事ぐらひは分かっていますよ。またどうせ自分が私と吊り合っているか、いないかだのと下らない心配でもしているんでしょうけど」

「……………」

「さては貴方、ここに来るまでの私がどれだけ一人ぼっちだったかを相当軽く見えますね？　こうして旅を計画して、気の向くままに寄り道をして、世界に眠っている未知の技術に触れ、それを貴方と語り合えることを私がどれだけ楽しんでいるのか分かつてないんじゃないですか？」

思えば程度の差はあれ、俺も同じような物だった。

ヨロギ村での暮らしも昔ほど酷くはない。俺みたいな奴を慕ってくれる人も増えた。

もはや孤独だとも言い切れない。だけど、それでもこれだけは断言できる。俺を本当に受け入れてくれているのはこの世界でただ一人、お前だけだ……

俺にとってのプロメステインが、プロメステインにとっての俺であるなら。少なくとも彼女がそう思ってくれているのなら。

「……悪くはないな。まあ、悪くない」

「ん、分かればよろしいです」

それだけでも俺達が巡り合った価値はある。一緒にいる事に意味はある。本当にそうなのかどうかは関係なく、二人がお互いをどう思っているのかが重要なんだ。

「ありがとな、また励ましてくれて。……前にもこんな事があつたっけか？ 全く、相変わらず俺に対してだけは本当によく気が回るよな」

「……別に、そんな寂しそうな雰囲気を出してたら誰でも分かりますよそれくらい」「はいはい、今回ばかりはそーいう事にしといてやるよ……」

いぎ真つ向から感謝されたりすると照れ屋になるのも相変わらずだ。いい加減に慣れてほしいとも思うが、変わらないでいてくれる所があるっていうのも安心できるモンかもな。

さつきよりもずっと近くにあるように感じる背中を口の端に笑みを浮かべながら眺めていると――

ずぶり、と。

鈍い水音が響くと同時に、自分の首から飛び出る灰色の針が目に入った。

「あ……？」

程なく、引き抜かれる無機質。

存外に少ないとはいえ決して無視できない量の流血がたらたらと溢れる傷口を反射的に手で押さえながらも、嫌な汗を誘発するような激痛が脳の裏側をジクジクと襲い始めていた。

第42話

「が、ふッ……」

「えっ？」

血の混じった俺の咳に思わずといった様子でプロメステインが振り返る。

首を刺された——その衝撃的な事実を数瞬遅れて理解するも、ふらりと足から力が抜ける。急速に血液を失ったせいで脳味噌がぼやけるのを感じながら俺は背後の下手人に目を向け——いや、見上げるのだった。

スラグ娘が現れた！

うぞうぞと洞窟の隙間から染み出すように這い出てくる灰色の粘体——いや、その表現は十分じゃない。概形はあくまで大小様々の硬質な岩の欠片が寄り合わさっているようなゴツゴツとしたシルエツトで、粘体に見えたのはそれらを繋ぎ合わせる細かい泥

砂の塊だったのだ。

天井にべっとり張り付いたその塊からにゆるりと女性の上半身が逆さまのまま生えてくる。ナメクジ娘のような陸棲種をイメージさせる外見だが、その本質は全く別物のように見えた。

「あはっ、治してる治してる。声も出せないのに魔術で治癒できるなんて偉いねー。痛みも酷いだろうにすごい集中力だー」

「……………」

恐らくは無機物に自我が宿ったドールかゴースト種……………それもただの岩石じゃない。黒曜石にも見えない事はないが……………散らばる破片の形状から推測するに、金属を精錬した後^{ごうさい}に生じる不純な廃棄物……………鉱滓^{こうさい}、スラグと呼ばれる物質か。見覚えがあるぞ……………特に今世に入ってから、だが。

鑄造を生業とする竜族も多く住むゴールド火山には……………特殊な鉱石から廃棄された^{こうさい}鉱滓に、特殊な魔力が宿るといふ事も少なくないのだろう。だとすればこういつた魔物が自然に生まれるのも不思議じゃない……………。

……………ただし、相手が魔物なら狙いもハッキリしているって事だ。自在に動かせる泥砂に形成された極細の針はそこまでの殺傷力を帯びていなかったらしく、治癒の呪文で早くも出血は止まりかけていた。この傷も俺を殺さないよう的確に急所を外してあった

のだろう。

とはいえ今の今まで気配を消しての不意の一撃、俺を殺そうとすればいつでも殺せたってのは間違いない。こいつは相当な強敵だ……正直言つて俺の手には余るかもしれない。

「……ろ、メ、すティン。ここは、二人で行くぞ」

「馬鹿を言わないでください！ 貴方は休んでいてもいいぐらい……あれ？」

そう言いかけたプロメステインを——ぐわつ、と壁に伝う植物が急激な成長と共に襲いかかる。

殺人シダはたちどころに彼女の白い腕にギチギチと巻き付いてしまう。その思わぬ反撃を呆然と眺めていると、目の前のスラグ娘がとびきり可笑しいものを見たという風にケタケタと笑いながらこう言ってきた。

「ふふっ……いー、そこさー、この山でいちばんキケンな女王の棲み家までの通り道だつて知らなかったのー？ 結界いじるとみーんなそうなるから誰も近寄らないんだよ。ま、女は別にいらなから黙つてただけどねー」

「……不味いですね、これは、かなり」

厳しい表情でプロメステインは呟く。

「これは実体に見えて恐ろしく精巧な幻術の類です。解術のために潜り込んだ私に反応

して意識の深くに根を下ろしています……これでは「すり抜け」も無意味。正確な手順で解術を進めている間は進行を停止させておけますが、先程のように手を休めるとまた一気に悪化しそうですね……流石に意図してない仕様なんでしょうけど、これは天使対策が身に染み付き過ぎですよ……ッ」

「なんだか知らないけどさ、あんまし私から目を離さない方がいいと思うよー?」

「ばつ、と目を向けた先のスラグ娘は——俺ではなく、倒れ込むアツシユボアの下に泥砂の体を薄く敷くように広げていた。

「きやははつ、せつかく聞き齧った女王の噂を流してコレをアナタたちに差し向けたんだもん。もーちよつと働いてもらわないとね!」

俺の未熟な術に限らず『精神支配』に属する魔法は強い衝撃を与えられる事で効果を失う場合がある。だが——何をしている? 何だアレは?

「——ゴ、あがああアアああアア!?!」

瞬間、バチリと限界まで目を見開いたアツシユボアは凄まじい咆哮を上げて地面をのたうち暴れ出した。尋常ではない脂汗をかいたまま周囲を見渡し——スラグ娘は既にその体を地下に滑り込ませて消えていた——そして俺の姿を確認した猪の魔物は、今までの動きなど比較にならない速度で襲い掛かってきた!

「かッ——」

「……………」

半ばなかから。

ばつきりと二つに折れていた。

殴られた時か？ 着地の衝撃でか？ 一体いつの間にそうなったかも分からないま

まに呆気なく。

実際には杖の役割からして慣れない形状は出力を不安定にするだろうが、素材が魔力を通す限り魔法の行使は依然として可能だ。だがそれとは関係ない所での動揺があった。

最後の最後に俺を守ってくれた相棒が杖として死んでしまったかのような感覚、喪失感が……

「う、ぐ!?!」

っ、何だ!?! 頭が痛い！ 折れた杖に手を触れた直後だ、耳元で大声を叫ばれたよう

な頭痛が……!!

くそ……意識、が……

???????

???????

「ツ、あ——?」

何だ、今のは？ 今のあの見えたものは？

落下した砂の上で俺は周囲を見回す。数瞬だけ気を失った先で見たあれは一体……いや、今はそんな事を気にしてる場合じゃない。

「おっほー、やるねえ。私もアナタの戦いは見てたし、このくらいやり過ぎると思ってたからやっただけどー」

……呑気な声が崖肌の割れ目から滲み出る。俺達がアツシユボアに見つかった所から今までコイツの手の上だったって事か……

確かに蛮勇があるか狡猾なやつかの二択とは想定してたけどよ、その両極端みたいな連中が同時に来るとは流石に思ってたぞ。それに尋常ではない様子で暴れ出したアツシユボアと一瞬だけ硬直した俺の足、スラグ娘の持ちうる特性から予想する限りあれは……

「鉍物毒、か」

「んふ？ よく知ってるねえー。残りカスみたいな私の持つてる毒なんてそう強くもないし死にもしないけど、獲物をとびきり痛がらせたりマヒさせたりするぐらいは工夫次第で出来るんだよねー」

一度ぜーんぶ溶かされただけに体の成分もけっこー自由自在に操れてね。とクスクス笑うスラグ娘——アツシユボアの動きを完全に支配してる訳ではなかったのは朗報だが、最初の攻撃で俺にも毒を入れられていたって方は非常に良くない。

まだ降りて来ようともしてない辺りまだ苦しみに悶えてるか、あるいは攻撃が当たりもしないプロメステイン相手に暴れて無視を決め込まれるかのどちらかだろうアツシユボアを警戒する必要はひとまず無い。

だが鉍物スラグに含まれるヒ素などの神経毒は呼吸困難を引き起こす。鉛やフツ化物なんかも中毒量はうる覚えだが首に直接刺し込まれるなんて接種方法は聞いたことも無いから安心できん。

魔法つてのは本当に便利な物で解毒の呪文なんてのもあるぐらいだが、俺が使えるのは精々が骨折も治せないぐらいの簡単な治癒の術だ。毒の事は上で解術が終わるまで動けないプロメステインに頼るしかない……

「まーそーゆーわけです……さっさとアナタの搾り殺されるお顔を私に見せてくれないかなー？」

「サデイストが……！ 来いよクソつたれ！」

全身の打撲、毒物、折れた杖、おまけに毒のせいか先程から耳にへばり付く悲鳴のような啜り泣くような声……状態は最悪だが切り抜けるしかない、プロメステインが解術を終えるまでの辛抱だ。

???????

「そらそらそらッ、サラマンダーの技じゃあ儂には勝てんぞ！ 貴様の技を見せてみよ！！」

「——ッ」

ギヤリばちゴリッガキンずららッ!! と。

剣に拳に尻尾に足刀、果てはブレスに精霊術——たった三秒間に十度を優に超える攻

撃の応酬の中でクイーンドラゴンは高らかに叫ぶ。

戦いを始めた時から自然と場所も移り剣の墓場内でも屈指の溶岩溜まり、グレイブスド 坩堝にも見える広大な円形の空間で二人は幾本かの柱を渡り継ぎ飛び回りながら技をぶつけ合っていた。

眼下には真つ赤に灼熱する溶岩が迸る。あれに落ちては火精の契約者たるエリックとはいえ即死は免れないだろう——ただしクイーンドラゴンの方はあの程度の熱など物ともしまい。得意な場所まで戦いの中誘導され、それに抗う事もできなかった現状にエリックは暫し歯噛みする。

「安い挑発だ、いや駆け引きと言った方が良いか？ 俺がへばって勝手に自滅するより楽な決着は無いからな！」

「くくつ、否定はせんよ！ 俺も昔とは違う、これしきの運動でなかなか息が上がってきたわい——それもお互い様じやろうがの！」

クイーンドラゴンの上気した頬に滲む汗は本物だ。聖魔大戦の現役時代ならいざ知らず——それでも驚異的に過ぎる体力だが——老いた今の女王は決して無敵ではない。だがエリックの消耗も当然ながらそれ以上。こちらの勝利条件は必ずしも“勝ち切る”事ではないにせよ持ち堪えられる時間は想像以上に短いと分かった。

もう出し惜しみをして時間を引き延ばしていられる余裕はない。ここで彼は一つの

決断に踏み切った。

「ッ、おおおオ!!」

「!!」

一際の魔力を込めた烈火の如き連撃——残る体力を度外視したエリックの攻勢に女王は目を見開く。

(……で仕掛けるつもりか！ 上等っ!!)

歴戦の腕力をして剣を持つ手が痺れるほどの気迫が籠もった連撃を女王は冷静に合わせて後方へと押し返される事で受け流す。

あちらが力を使うつもりならこちらはより少ない力で流せばいい——それだけで有利は傾く。その気質や実力に見合わない戦闘におけるクレバーさは彼女を最強の竜族たらしめてきた理由の一つでもあった。

しかし連撃によるエリックの狙いはあくまで場所を換えるだけに過ぎない。後方に退がる女王を追うままついに溶岩の坩堝から抜け出した彼は崖端の地面に大刀を突き刺し——

——クイーンドラゴンに向けて俊速の刺突を繰り出す。軽く躲されるも大刀はその背後の岩柱に突き刺さり——

——隙を見たりと武器を振り下ろす女王に剣戟を返す。サラマンダーの魔力による爆風で向かってきた方向に吹き飛ばし、結果として先程と入れ替わるように追う側から立ち位置が交換された。

「はああああああ!!」

「むっ!?!」

「フレイム・シュティネル!!」

剣を構えるエリックの背中から爆炎と共に燃え上がる火焰龍が怯むクイーンドラゴンに襲い掛かる。人間離れた体格の彼女を丸ごと飲み込める巨大な顎あぎとを目前に、竜の女王は激闘の最中に唯一懐へと忍ばせておいた一振りの秘剣を抜き払った——

「薄剣ミスリアル!!」
はっけん

それは、ともすれば刀身の目視すら難しい程の薄刃の剣。かつて太古の昔にハーピーの女王へと贈る武器として鍛造した宝剣が真空すらも切り裂いていく。

ヒユカカガカツ——まるで剣を炎に接触させた結果とは思えない音を発する繊細な乱撃と真紅の龍が喰らい合う。余りの熱量にクイーンドラゴンの技巧をもつても徐々に融解していく刀身……だがそれでも先に息絶えたのは火龍の方だった。

終尾の鱗一枚分の火花をついに弾き飛ばした竜の女王は軽く——本当に“軽く”息を荒げながら言う。

「サラマンダーソの技で儂を斃す事は出来ぬ。言つた筈じゃ……アレは駆け引きでもあるが、同時に避け難き真実でもある」

「それなら見せてやるよ……」

「む？」

「これでようやく整つた。もうアンタはどこにも逃げられない」

「そりゃあもしかして、儂の足元のコレの事を言うところのかの？」

女王の踏みしめる地面はアーモンド型の赤熱に輝いていた——まるで二つの円と円が重なり合つた共通部分のようなそれは、あらかじめ地面と柱に一度ずつ突き刺していったエリックの大刀による“余波”だった。

二つの力が共鳴し合い高まる地点。ここに誘い込む事に成功した時点で彼の攻撃は完了した。

「こいつが貴様の技か……しかし、だから何だと？ 儂は剣を構えた貴様の如何なる動

きよりも速いぞ。何をしようと出端でばなを見てからこの場を離れるくらいの事は——」

「劍の動きは速さじゃない」

「……………」

「それを今からアンタに見せてやる……………行くぞ」

揺らぎ立ち昇る熱の結界に劍の鋒をピタリと触れたまま静止する司祭長。僅かな動きも見逃すまいと自然体に構え相手の全身を視界に捉える竜の女王。

（よく持ち堪えてくれた。俺の体と、そして……………ありがとう。お前の技が無ければここまで来ることは出来なかつた）

先に動いたのは意外にもエリックだった——が、クイーンドラゴンはその動きを意識する事すらもなく見逃した。

それも当然だろう。数ある劍術において突き技を最も得意とするエリックがその劍先を相手に押し込むのではなく……………ゆるり、と。

それは全く敵意から程遠い動作。

押すのではなく、逆に刃を引いたのだから。

「……………、……………」

もしこの技に相對したのが異界の記憶を持つ「賢者」であつたなら、呆然とするクイーンドラゴンに代わりこのようなイメージを抱いただろう。

——即ち、ピンを引き抜く事でのみ起爆する擲弾を。

「誅参地」
ホロサンチ

燃え上がるでもなく、熱を発するのでもなく。
ただただ音と色彩が、この世界から消え失せた。

第43話

「うぐっ……!」

「……あのさー、いーかげんそれナシにしないー? ちよーつとイラついてきちやっただかなー」

ゴルド火山洞窟奥地にて姿を現したスラグ娘。その猛攻を辛うじて躲し続けながらも、いよいよ初撃に受けた毒が回ってか俺の意識は朦朧とし始めていた。

そんな状態でもあの泥砂の触手にどうにか絡め取られずにいられるのは切り札の一つでもある影の魔法——『双月影』ふたつきかげによる所が大きい。

触手で捉えた獲物を体の下に引き込んで甚振ろうとする習性があるらしいスラグ娘には特にこの術が有効だった。捕まえたと思つた相手の姿が溶け込むように消えては別の暗がりから現れるという展開を先程から何度も繰り返しているんだ、奴にとつても面白い状況とは言えないだろう。

だが逃げ回ってばかりいる訳にもいかない。これ以上毒が回って魔力の制御を失いでもすりゃ俺は格好の餌食だ……それよりも早くプロメステインが解術を終えて助けにきてくれる、なんて無根拠な期待に命を賭けたくないならその前に全力で撃退しなけ

ればならない。

「岩よ、灰よ、劫火に吹き込まれし熱気を我が血へ注ぎ、此処に仇なす敵を嘯め！ ……
ブレイズ！」

「だ、か、ら！ そんなへなちよこ魔法じゃあ私の体を焼けないって言ってるでしょー
！」

スラグ娘の半身が急激な発火に包まれるも堪えた様子はまるで無いようだ、やはり折れた杖では十分な威力は伝えられないらしい。俺は近場の岩陰に腰を低くして背を預け、身を隠した。

「……くそ、やつぱり駄目か」

本来の力は発揮できないと覚悟していたが元の半分の威力も出せちゃいない。魔力の扱いを完全にモノにした今の俺なら多少短い杖だろうと理論的には問題なく扱える筈なのだが……

さつきから頭の中にガンガン鳴り響く泣き声も関係あるのか？ 毒のせいもあつてとにかく調子は最悪だ、洞窟の暑さからただけではないだろう嫌な発汗に本格的な危機感を覚え始めた所で――

「は、い、っ、と」

俺が身を隠す岩をいとも容易く貫通した触手の針が、肩口をザクリと傷つけ掠めて

いった。

「まつ、ず——」

「へへー、要はアナタに丸ごとのしかからなきやあいーんだよね？　だつたらひとまずは氣いー失うまで……チクチクしといてやろつかない！」

チクチク、などという生易しい代物ではない。あの触手はその氣になれば俺が影に潜るよりずっと速く動かせる——その一本一本すべてが恐らくは微弱な鉋物毒を帯びているのか。

「ぐっ、うう!!」

逃げれば逃げるほどに傷口が増えていく。地面へと尾を引くように血が流れる。

その度に意識を蝕む毒が　的確に注がれて　いるのを、ハッキリと　感じられるまでに

駄目だ

気が

遠く

??????

俺は遠くから森を眺めていた。

森の中にいた、のではない。

果てしなく続く真つ暗闇が飲み込む広い広い空間にぽつりと浮かぶ巨大な森林を、しかしとても小さく見えてしまうほどの遠く遠くから眺めていた。

ここは……

ついさつき見えたものだと思ひ出す。果てしなく遠くに森だけが浮かび上がるといふ不思議な光景。啜り泣く声をより近くに聞こえる場所。

そう、声の聞こえる場所。

気がつけば俺のすぐ近くに——どうして今まで気がつかなかったのか?——小さな人影がうずくまって泣いている。

それが何なのかは分からない。とにかく直感的に“人影”としか認識できない薄緑に淡く光るそれは、どうやら怪我をしているようだった。

痛いのか？

屈んで寄り添う俺の姿を認めた小さなそれは少しの間だけ黙っていたが、やがて泣くのをやめて俺の方をじつと見た。

……ごめん

自分の口から出た言葉に驚いた。なぜ俺はそんな事を。

ごめん、ごめん……

わからない。だけど止まらない。なぜか止めようとも思えない。あるいはここが俺の夢の中の出来事だからかもしれない。

とめどなく溢れ続ける同じ言葉と理由の見えない感情を延々と吐き出す。吐き出し続けていると、だ。

そつ、と。

俺を抱きしめてくれた人影が、目も眩む輝きを放って消え去った。

ふわり、ふわりと、その空に昇っていく光の星に。俺はただただ手を伸ばし続けていた――

??????

「むふー、やっと眠ってくれたかなー」

ふと耳に入った声で意識の覚醒を自覚する。油断からか緩みきっているスラグ娘の抑揚に欠けた声だ。

でも何故？ 奴の毒で俺は昏倒してしまったはず。そのはずなのに意識は異様なほどにクリアだ。全身に負った傷の焼けるような痛みを感じる事すらできなくなっていた。今までとは違う。まるで体内の毒が綺麗さっぱり解毒でもされてしまったかのような……

(……………ああ)

この倒れ伏した両手に触れる感触は。

片方は慣れ親しんだ木の感触だ。思えば随分と長いこと連れ添ってきた俺の杖。間違えようもない俺の相棒。

だがもう片方は……何だろう。砂、それとも灰？　パサパサと寂しく触れる死骸のようなこの感触は……

(……分かつてる)

もう今の俺には分かつている。だけど俺の為に身体を捧げてくれたコイツはまだ死んじやいない、まだ生きて俺と一緒に旅をしたいと言っている。

啜り泣く声は既に聞こえなくなっていた。なら俺が今ここで何をやるべきかは自然と体が応えてくれる。

「さてさてー、寝ちやつた獲物なんかを食べても面白くないからねー。ここは巢に持ち帰ってからゆつたりと……」

俺の足をズルズルと取り込み始めたスラグ娘に向かって——ぐつと握りしめた一握みの灰を思いきり投げつけた！

「うえ!？」

「スキューア・ペトリファクト!!」

スラグ娘に纏わり付いた灰は瞬時に膨張、全身を覆い見る間に硬度を帯び始め——ぐしやあつ!! と幾本もの極太の杭が内部を食い破り、勢い良く体の逆側から飛び出した。

「か、あがつ……!？」

まるで巨大な何かが背中を押してくれているかのようにだ、今の俺にはとても制御できないような高度な呪文は当然のように効力を発揮し——いとも簡単にスラグ娘の全身を押し潰したのだ。

(ど……どうだ、畜生……)

だがもう俺には毛ほどの力しか残っちゃいない。

そもそもが傷を負い過ぎていたのだ。体が動くようになっても失った血までは戻ってきていない。そこを真正正銘最初で最後の反撃に使える物を全て使い切ってしまった。これで勝てなきや、俺は……

「な、めるな……」

「う……」

「これぐらい、の事で……私に一泡吹かせた、つもりなの……?」

下半身を丸ごと覆いつつある触手に込められた力は微塵も緩んでなどいなかった。破壊された身体を粘体に近い泥砂で徐々に補修しつつあるスラグ娘は大量の杭が飛び出す身体を揺らしながら尚も俺に対して詰め寄ってくる。

「毒が、効かない? なら仕方ない、ね……アナタが悪いんだよ……?」

「なッ、何を」

「また変な魔法で……逃げられないよーにしなきゃ、ね……!」

メ・シャッ、と。

右脚から無慈悲に響く不気味な感触に背筋が凍る。そして襲い来る——今まで感じてきた痛みという概念を覆すような、凄まじいまでの激痛が。

「ごっあ、があああア?!」

「とり、あえず……全部の骨を粉々にしたよ。ふ、ふふ、大丈夫……もう片方も、同じように……ふふ……」

駄目だ。残る左脚まで砕こうと体重を傾けるスラグ娘を押しのける力は残ってない。土の魔力を全力で練り上げててもこの拘束は振り解けないだろう。ましてや咄嗟に潜れる広さの影なんてどこにも無い。

(あ、ぐ……)

終わるのか？ こんな所で俺は終わるのか？ 元いた世界からも故郷からも遠く離れた……こんな場所で……ようやく前に動き出した夢さえも半ばに死ぬのか。そんな事は、そんな……

「今です！ 私の影まで、早く!!」

ずしん……と。

崖下で鳴る鈍重な地響きの原因を眺めるプロメステインのすぐ側で、俺は荒く息を吐いていた。

「ハア……ハア……無茶、しやがる。アツシユボアを突き落としたりがったのか、拘束されていた俺に影を重ねるために」

「自分から飛び込ませたんですよ。混乱した頭に聖刻印で命令を書き加えて……これも

本来は竜の女王に使う予定のとおきだったんですが」

下では既に二体の怪物が血で血を洗う殺し合いを繰り広げ始めていた。どっちが優勢かなんてのは今となつてはどうでもいい……あれが終わる頃には両方ともくたばつてくれてるだろうが、こんな場所からは一秒でも早く離れたい所だな。

「すまん、肩を貸してくれ……右脚がイカれちまつたんだ。処置は後でいい、結界の解術は済んだんだろ？　なら今は進むのが先だ……」

「大丈夫、死なない限り元に戻してみせますから。どうか気を強く持つてください」

「ああ……誰のどんな言葉よりも安心できるな、そりゃ」

下で見たもの、体験したこと、そして失つたもの……色々と話したい事もあるが全部後だ。今は何よりマクニアを助けにいこう。

「なんつ、だここは」

「これがあの女王の棲み家とは、いやはや……」

結界を抜けて開けた空間に出た俺たちは思わず息を呑んでいた。真つ赤に燃え盛る巨大な炉、ずらりと並べ掛けられた数々の武器、鑄造器具……ともあれようやく辿り着いたのか、この旅の最後の目的地に。

明らかに人の手が加わっていると理解できるのに現実味の無い、いつそ幻想的とすら言える光景は、前世でも外国の遺跡や聖堂を生で目の当たりにした瞬間に自然と心に浮かぶあの不思議な感覚を思い起こさせた。西欧を観光した時にナポリやバルセロナを訪れて圧倒されたあの感覚と同じだ……

「……ゆっくり見て回りたい所ですが、とりあえずはマクニアさんの確保が先決です。ここにもドウエルガにも長くいられない分はあの人を連れ帰って埋め合わせないといけませんからね」

「話を拗れさせたくねーなら本人の前で言うなよそれ……」

概ね同意ではあるんだが、なにしろ姉さんとの契約で彼女の身柄を俺が預かる事になってるなんてのは本人すらまだ知らない事なんだ。そんな誘拐みたいに聞こえる言い方をして混乱させたら面倒だぞ。

(……………)

そして、これが今生の別れになる事もマクニアは知らない。故郷からも、ローレンスからも、エリックからも引き離されて生きていくしかないんだ。

もうそれしか選択肢が無いのは分かつてるし、俺も彼女ができる限り幸せに生きていけるよう努力するつもりではある。魔物排斥の色が強いイリアス教圏のヨロギ村でも俺がその気になれば亜人種の一人や二人ぐらい匿っておく事もできるだろう。

(だけど、そんな事実は全てが終わった後にでも教えればいい。あいつ自身に故郷を捨てる決断をさせるのはどう考えても酷だ……)

それでも、知らないままに終わらせるからこそ。知らないままに別れさせるからこそ。

最後に彼女が故郷の土を踏む時は全員が一緒じゃないといけない。何としてでもエリックを連れ帰って、ドウエルガの殺人事件を無事に解決した上で、それでローレンスと一緒に謝らせてやる。俺と一緒に来てくれと頼む時点で心残りなんか一つも残させてやらない。そこまでやらなきゃ、最善を尽くした」とは言わねーんだよ。

「くそ……おーい、どこだマクニア！ 助けに来たぞ！」

プロメステインに肩を預けながら俺はジリジリとした焦燥感に駆られつつあった。ここにマクニアがいるという確証も無いまま来た以上そもそも大きな賭けだったのだ。既にエリックが女王の居場所に向かつてから随分経った、今から別の場所を探す時

間なんてないぞ……。

元日本人の悲しいサガか、いよいよ大して信仰もしてないどこぞの女神様などで必死に祈りを捧げ始めているとだ。

「う、うう……」

「マクニア？ お前なのか!？」

微かなうめき声。それを辿った先には、何やら藁を積み上げて作られた寝床のような場所にマクニアが大切そうに収められていた。

どうやら俺らと違ってクイーンドラゴンは約束を守ったらしい、怪我もなければ衰弱した様子もない。あの手の結界は内側からも抜けられないようになってる筈だが、とはいえ手足の自由すら奪われていないとは思わなかったぞ。

……事の真偽はともかく……クイーンドラゴンはあくまでも“慈悲”のために人質なんて回りくどい手段を取った、らしい。

何よりやろうと思えば本来の目的は今よりずっと簡単に成し遂げられたはずだ。エリックを殺すと宣言して俺たちと敵対はしたが、奴だつて本来は天界との争いからサラマンダーの命を守るために動いてくれているんだ。

そんな女王を裏切つてまでこの場所にいるという事に引け目を感じない訳ではない。奴の考えの全貌まではまるで分からない。この行為が果たして正しいのか、それとも

間違っているのかも本当を言うと定かじやない。

「ただ俺たちはやるべきだと思つた事をやつた、それは確かだ。その結果としてここまで来た。だったら最後までやり遂げてやるさ。」

「俺だ、マクニア。もう大丈夫だぞ、さあ帰ろう……」

まだ夢うつつでいるのだろうか、差し伸べられた俺の手をぼうつとした瞳でしばらく眺めていたマクニアは――

「ッ、来ないでくれ!!」

どんつ、と。

不意に突き飛ばされてしまった俺は、踏ん張りも効かない足のせいもあり碌に抵抗もできないまま尻餅をついた。

「やめろ、来るな来るな!　なんでこんな所にいるんだ、くそつ、嫌だ、嫌だ嫌だ!　ああ早く!　今すぐ帰つてくれ!!」

「な……マクニア……?」

「クイーンドラゴンから全部全部聞いたんだ!!　やめろ、こつちに来るな!　あの女はずっと私達に嘘を吐いてたんだ!!　このままじゃ……このままじゃ、ううつ……!!」

何だ、どうなってる。マクニアの様子は明らかに普通じゃない。全くわけが分からな
いが、口ぶりからするとクイーンドラゴンに何かを吹き込まれたとも言えるのか？ だ
としてもこの十日間で何が？

酷く錯乱した様子で俺から少しでも離れようと体を縮こませるマクニアに対してど
うしていいか分からずただ困惑していると、倒れ込んだ俺の前に歩み出たプロメステイ
ンがつかつかと彼女に近付いていった。マクニアはますます怯えたように身を強張ら
せている。

「我が魔力、掌を象りかの心の波を抑え鎮めん……スリープ」

「あう……」

「……寝かせましたけど。しかしつくづく展開が悪いですね、動けない貴方を二人で支
えて戻る計算のはずが。これはどっちも私が運ばないといけないって事ですか？」

「ぶ、プロメステイン？」

確かに都合が悪いってのは分かるよ。お前一人でどうやって俺らを下まで送るのか
考えなきやいけないってのもある……だけどそれ以前にこう、無いのか？ なんてマク
ニアの様子が変になってたんだらうとか。

「考えても分からない事に時間を割いてられる余裕は無いでしょう。仕方ないですね
……」ここでしばらく休憩します」

「なっ、待てよ！ それじゃエリックが、」

「事ここに至って他人を優先できる状況と言えますかね。……はつきり言いましょう、当初の計画は断念するしかありません」

呆れたように息を吐くプロメステインは両手を腰に当てて俺の顔を覗き込み、少しだけ怒った声色でそう言った。

「その足を抱えた貴方と今のマクニアさんを予定通りに動かすには時間も魔力も足りません。浮遊術とかで無理して貴方がたを下に運んで、それでへとへとになった私一人がああ女王との戦いに乱入して何かできるとは正直思えませんね」

「……………だけど」

「それにまた道中のような魔物が襲ってきたら？ ……そうなれば私だけで二人を守れる自信はありません。分かってください、我々はそれだけの損害を負ってしまっているんです。だったら例の殺人結界の噂に守られているこの場所で貴方の治療をしている方がずっといい」

戦いに勝ってここに辿り着くのがエリックならそれでいい。戻ってくるのがクイーンドラゴンでもこの死屍累々のザマを見れば流石に許してくれるだろう、と。

確かにそうするしか無いってのは分かる。だけどそれじゃあ……それじゃあ最初からエリックが一人で戦ってるのと何も変わらないじゃないか。俺達がやってきたのは

全部……無駄だったってのかよ……

「功を逸る事が貴方の目的だったんですか？」

「っ……」

「彼も我々が無意味な危険に身を投じる事など望んではいませんよ。さあ、早くその足を見せてください。手遅れになって後遺症が残るなんて笑えませんから」

……悔しいが、確かにプロメステインの言う通りだ。今の俺は少し冷静じゃなかったか。

今は体を休めてエリックが無事にいるのを祈るしかない。色々と考えることが山積みになってきたのを憂鬱に思いながらも、俺は観念してボロボロの右脚をプロメステインに診てもらったのだった。

第44話

「かつ、は、はっ、は、はっ——」

蒼白な顔で浅い息を吐き続けるエリックはまさに瀕死直前。自分で放った技に司祭長の外套も吹き飛ばされ、アーモンド型に区切られた結界の前で喘ぎながら膝を突いていた。

最後の奥義『誅参地』ホロサンチによって形成されたあらゆる生物を殺戮する空間に立つて生存できる者は、断言しよう。存在しない。

(ごく限定された範囲内全ての生物を問答無用で即死させる。相手の強さなど関係なしに。それ以上でも以下でもなく、これはそういう技——)

これが実戦で決まってしまった以上は、そうだ。勝ったのだ。クイーンドラゴンは死んだ。彼女の強さが己を超えた遙かな高みにあるという事実を軽んじているでもなく、ただ当然に受け止めるべき確信なのだ。

誅参地の真髄は属性の抽出。火の化身たるサラマンダーの力を借りてエリックが行ったのは分かりやすい爆炎を吐き出す事でも、ましてや高温で敵を焼く事でもない。

——即ち、火そのものが「水」の「逆」である、という性質。

この世界においては、だ。

有りあらと凡ゆる魔術的な“性質”の全ては、根源の単位たる元素の属性に決定されるといル法則がある。

風に晒せば土が崩れる、水精と火精が反発しあう——それらは全て互いの属性が反発する逆位置にあるからだ。

この誅参地ホロサシチは炎を吐かない。熱も出さない。ただ範圍内に存在する水の消滅、その一点だけを究極的に突き詰めた結果が過不足なく効果を發揮する。

ここに踏み込めば魔王だろうが邪神だろうが問答無用で死に至る——個人の使用する技というよりは、そういう環境をほんの一瞬だけ現世に構築する儀式と言った方が正確かもしれない。威力や実力という枠組みにそもそも無い、動かしようのない法則をただ呼び込むだけの術。

この場所に踏み込んだ者が生き残る事など絶対に無い。生前がどれほど偉大な存在であろうと、それが水を含んで生きる生命体である限り砂漠の砂よりも乾いたゴミ屑のような残骸になるまで徹底的に朽ち果てて残酷に死ぬ。

だから、そう。ありえない。

「……………」

あのクイーンドラゴンが健在のまま立っているなど。そんな事は絶対にありえない筈なのに。

「……………」

「な、あ…………？」

「…………がッ、ふ」

ごぼつ、と。

べつとりと赤黒い血の塊を吐き出して崩れ落ちるクイーンドラゴンだが、それが生きて動いているという事実こそが既にエリックにとっての絶望的な状況を表していた。

誅参地ホロサンチを完成させた時点で気力と体力は全て使い果たされた。これ以上の抵抗は無駄でしかない——この一撃でどれだけ女王の体力が損なわれていようと、だ。

「く、つぶふ。肺をやられたな、あれだけ念入りに“外した”というに……文字通りに気炎を吐き出す、我らが竜の臓腑がか？　くく……いとも呆気なく、ひと吸いで潰れおつ

た……」

「どう、やって」

どのようにして“耐えた”のか、という疑問ではない。エリックにとつてもクイーンドラゴンにとつてもそうだ。問題は即死の圏内からどのようにして“逃れた”か。生存の理由を問うならそこしかない、両者共が正確に認識していたからだ。

「逃げ水……遙か南西の地では蜃気楼しんきろうと、そう呼ばれておるらしいのう」

「な……？」

「くく、“何だそれは”と？ わざわざ解説してやる義理はない……じゃがな、こればかりは貴様の落ち度でもない。無駄に長く生きてものを知り、広い世界を歩いてきただけに……最後の最後、ほんの僅かに……この儂が、炎の扱いにて先を行ったと云うだけの事」

そんな簡単な事を、と思う者もいるかもしれない。

だが忘れてはならない。この原始にも近い世界において誰もが“賢者”と同じ視点で物を見る事ができる訳ではないのだ。

彼からすれば未だ“古代”と形容できる今を生きる中でさえ極まった武芸を始めとし、竜族の中でも随一の鍛冶、容易く天使を捉える呪術、結界の技、数学——果ては光学に至るまで一角の知識を備えているという異様さは本来、有り余るばかりの才覚と数

千年にも渡る膨大な経験を積み重ねた結果としてようやく手に入れる事ができる物なのだから。

つまり女王は最初から結界に踏み込んでなどいない。エリックの“仕込み”を寸前に見抜いた瞬間から自分の実像だけを前面に移し、僅か後方へと逃れていた。ほんの微かな予感にも近しい読み、それを通しきった結果が両者の命運を分けた――。

「は、はあつ、危なかつた。死ぬかと思つたぞ……よもやここまでやるとは思わなかつた……だがしかし、それでも、やはり貴様はここで死ぬ」

「……………」

ついに立ち上がったクイーンドラゴンが、しかし確かな足取りで歩を進める。

「死に損ないの貴様を殺すに最早、刀剣を持ち出す必要すら無いわ……我が爪で、喉笛を一息に引き裂いてくれようぞ……」

さながら処刑を待つ罪人のように頭を垂れるエリックの目前で。並大抵の武器など比較にもならぬ絶死の鋭利を誇る手刀が徐々に力を蓄え、引き絞られていき――

「……………さくらばッー！」

ガイン!! と。

耳を劈く轟音と共に、大刀が一撃を受け止めた。

灰色の世界に焰が踊る。

時の止まった背景は既に意識になく。

心の中に揺らめく紅蓮の色彩だけを瞳に映したまま、内なる“声”へとエリックは耳を傾ける。

『もう楽になりたいか?』

それは冷酷に見放す声でもなく、かといって慮るような優しい物でもなく。

只々寄り添い、支えるだけの、力を持った言葉。

「いいや……」

ふ、と笑い。

否定の意をだけ返すエリックに対し——サラマンダーは無言のまま、昏きに誘^{いざな}うかのよう^なに手を差し伸べた。

全盛期には程遠いとはいえ。

瀕死の人間など容易く轢き潰せるはずの爪撃を受け止められたクイーンドラゴンは

「サラマンダーツ!!」

ビリビリと、直前まで肺を潰して血を吐いていたとは思えないほどの咆哮にて大気を揺るがした。

「……………」

「もう後戻りはできんぞ、これが最後の機会じゃ。その人間を死なせたくなければ体から離れてこちらに来い!!」

数秒の間を置いて——やがて悟ったように女王は手を退け、そしてくるりと背を向ける。

戦いを止めるためではない。むしろそれは、更なる“深み”へと迷いなく足を進める行為。

「巨剣“アレス”」

いつの間にか。

それをどこからか引き抜いた動作すら見えないほどの刹那、その直後にはクイーンドラゴンの利き腕に備えられていた。

「こいつだけは他の武器とは違う。明確に儂のものとするら言い切れぬ……儂ではない誰か、今ではない時代。それをただ待つ、ひたぶるに待つ、いまだに眠れる運命の牙」

武骨の二字をそのまま表すかのような極太の刃を持つ大剣。それでも並外れた長身を誇るクイーンドラゴンからすれば不釣り合いに見えてしまうような風体はしかし、最強の竜族たる彼女に全く引けを取らない程の濃厚な存在感を発していた。

「だが今日、この最強の剣で貴様を完全に屠り去ってくれよう。その意志と魂を微塵に打ち砕く。此処より一歩たりとも貴様を先に進ませはせん」

突き付けられる、宣告に対し。

「ありがとう」

舐めるような炎の残滓に罅割れた体を炭化させつつある戦士は、薄く笑いを浮かべてすらいいた。

「オレは後ろに振り返ることができない。前に進んで倒れることしか許されない、そういう、どうしようもない人間だ。……だから、ありがとう。そんなオレの全力を、アンタになら安心してぶつけられるから」

「……それ以上の力を出せば、分かっておるな？」

「いいや……案外無事に済む、ってこともあるかもしれないぜ。アンタに勝って、ドウエルガに帰る。どこまでもオレはそこに向かって進み続ける。ただそれだけだ……」

今にも崩れ去りそうな肉体を揺らし。

大刀を構えるエリツクは、ただ一言を呟いた。

「あかつきよつき
赫尽夜月」

波濤を成して滑らかに噴出する赤色。それは純粋な火焰の煌めきというよりは、一面に飛び散る血肉の色を思わせるまでにグロテスクな極彩色の領域。

重く、深く、黒い。それでもなお炎として燃え上がる魔力は徐々に刀剣へと収束し――

白紙の世界に、滑らかなる極光が飛び散った。

???????

「あつ、ぐ……!?」

「だ、大丈夫ですか? どこか痛みますか?」

砕けた右足の治療中。いきなり頭を抑えて呻き声を出した俺に動揺するプロメステインだが……お前こそ何も聞こえなかったのか?

「今の叫び声つつーか……耳元で騒ぐ感じじゃない、どこか遠くで響いてるような……でも何だ? 知らない声のはずなのに……」

「……声、ですか。その杖が折れた時に貴方が耳にしたそれと何か関係が?」

俺はついさつき起こった事をプロメステインに伝え終わっていた。なにしろ必死だったし全部はしっかり覚えてないかもしれないが、それでも把握してる分は包み隠さずに言ったつもりだ。

杖が折れてしまったこと、その声を聴いたこと、俺を助けてくれたこと……あれは杖そのものの意思だったんじゃないかと俺は考えている。ところがプロメステインの方はその考えにあまり肯定的ではないようだ。

「そういう処理をしてる訳でもないのに魔道具が思考を持つなんて考えられませんけどね。ましてや勝手に解毒術の行使や呪術の補助をするなど……思えばシルフも似たような世迷言を言っていた記憶はありますが」

「……俺が戦ったようなスラグ娘だつて無機物に自我が宿つたつてタイプの魔物だろ？
なら自然と杖に意思が芽生えるつてこともあるんじゃないのか」

「ゴースト種は文字通りに何かしらの靈魂が根幹を成して魔素を寄り集める事で発生する魔物に過ぎません。この杖に意思があるというならどこぞの人間とかの魂が取り憑いて魔物化していると見るのが妥当ですが……」

半分は灰となつて消えてしまった俺の杖を手にとって観察するプロメステインだが、様子を見るにどうもそういう兆候がある訳じゃなさそうだ。俺も縁のある奴が最近になつて死んだとかの身に覚えなんて無いしな……

「まあ実際に杖が変化してるか、つてのは今はいいよ。でも俺がその時に聞いた声はもう収まったはずなんだ。それが今になつてまた同じような……いや、あれとは違う声だとは思うんだが……」

「それが貴方にだけ聴こえているらしい、というのも変な話ですね。修行中の身、ましてや人間……知識や魔法的素養において私が持つていないものを——失礼ながら事実として——貴方が持つているとは到底思えないのですが」

「それは俺も同感だけど……」

プロメステインに無く、強いて言えば恐らく大抵の人間にも無くて、だけど俺にはある。その何かが“声”の聞こえる聴こえないを分けているんだろうとは思うが、差し当

たつて思い浮かぶような事はとりあえず無いな。

——俺が今日まで大切にしていた杖には、確かに魂が宿っていた。壊れてから気付いて何だつて話だけど、それはとても良い事なんじゃないだろうか。

「相変わらず肝心なところでフワつとしてるんですから……もつと緻密な検証と証明の精神を心掛けてください」

「そういうのは全身スタボロで死にかけてる時にやるもんじゃねーよ……」

全く、何にせよ今はそれより気にする事が山積みだろうが。様子が普通じゃないマクニアの事もそうだし、ここでリタイヤしちまった俺らのせいで生きて帰つてこれるか分からないエリックも心配だ。

結局はお前の肩に全部を預けちまったのが残念だが……頼むぞ、どうか無事に戻ってきてくれ。

???????

「……終わった、のう」

最後の交錯の後、立っていたのは果たしてクイーンドラゴンの方だった。生命力の全

てを捧げて今にも朽ち果てそうになりながら膝を突くエリックに対し、彼女は確かに自らの足で立っていた。だが……

(これを「勝った」と、言えるのかの)

首筋の肉を半分ほど吹き飛ばされておいて。巨剣アレスを半ばから真つ二つに蒸発させられておいて、得られた結果が僅かに攻撃を逸らす事だけだったなど。

折られた剣の柄を握り、近くの地面に吹き飛ばされて突き刺さった刀身の先を屈んで拾い上げながら考える。血液をどくどく溢れさせる首の傷からはハッキリと骨が露出していた。人間ならば明らかに致命傷と断言できる深手……だが、それでも、彼女にとつて死に至るまでの傷には及ばなかったというだけの話。

魔物の生命力は桁外れ——それが神代に飛躍した竜の女王ともなれば尚更だった。

しかし同時にこんな想像をしてしまう。もし自分が彼と同じ人間で、同じ人間として生きてきた自分が彼と出会い、そしてまた同じように戦わねばならない運命にあったとしたら。

同族との戦いですら敗北を喫する事は無かった。何者にも勝ち続けてきた。それでも認めよう。この戦いに於いて自分は、負けた。

だがそれは——自分が魔物で、彼が人間だったからこそ、なのかもしれない。

自分が同じ人間に生まれていたならば、結果は何か違っていただろうか。

(人間、か……)

弱者たるそれらを喰らい続けてきた一生だった。長い長い、果てしなく永きに渡る時の中……。

後悔などというくだらない感情を抱いた訳ではない。魔物としての覇道を限りなく極めた黄金色に輝く自らの生涯の足跡には深い満足を感じている。

だが、だからこそ。そんな自分が見落としている物があつたとすれば、あるいはそこに答えがある。言葉には言い表せないその実感が心の中にただ浮かんだという、たつたそれだけの事だった——

「最後に一つ、頼みがある」

「……聞こう」

敗者として当然の責務だと思った。何より彼女自身がそうしたいと思っていた。

果たしてエリックは女王と向き合い、彼の唯一の武器を差し出した。今の一合で大きく罅が走ったとはいえ、あれだけの戦いを経てなお一点の欠けも歪みも付けられなかった大刀。巨剣アレスにも劣らぬ至宝の業物であるとクイーンドラゴンは見抜いていたが……

「これを、アンタに預ける」

「……光栄な事じゃが、受け取れはせんよ。それを遺すべき儂よりも相応しい相手は他

にいる」

「オレは何も遺したくない。こんな所で死ぬオレにはその資格なんて有りはしない。特にアイツには、あの町には」

「……やはり貴様は……いや」

何か探るような目をしたクイーンドラゴンは——しかし首を振り、もはや武器として振るには危うい程に損壊したその大刀を受け取る。

内部から焼き焦がされ罅割れた腕を震えながら手放すエリックに対し、二振りの破壊された武器を手にした竜の女王は改めて言い渡した。

「貴様の命は、此処で終わった」

「……………」

「同時、儂の役目も果たされた。因縁の全ては既に解ほどかれた——貴様は、自由を手に入れたぞ」

そうして女王は去っていく。今度こそ戦いは終わりを告げたのだ。徐々に遠ざかっていく足音に目を閉じながら耳を傾けていたエリックは——やがて立ち上がり、ある場所へと向かつて歩き出した。

残された時間を使い、最後にやらねばならない事がある。

第45話

『お前さんには権利がある。これより儂はあのドワーフの町について知る限りすべてのことを教え聞かせることじやろう』

『その結果として何が起こり得るか、何を選択すべきであるのか……訪れたる時が我らを導くまでの間、ゆっくりと考えておくがよい』

長い長い時間を掛けて。

クイーンドラゴンは多くのことを私に教えてくれた。大昔に私達の先祖がした選択、天使に滅ぼされる故郷の運命。姉さんが長として受け継ぎ、そして隠し続けることを決めたドワーフ一族の秘密。

信じがたい、というよりは実感が湧かないというのが正しい。あまりに大きな事実を受け止めきれていなかったからというのもあるのだろうけど……何より所詮は人質に過ぎない私なんかには、エリックがここに来ないというだけで殺してしまうような小娘ひとりに何故そんな事を教えるのか？

それが分からなかった。分からないから信じられなかった。信じたくないと思った。だけど私は、あるいは事実を受け止めきる前にその違和感で耳を塞いでしまいたかった

だけなのかもしれない。

鵜呑みにするには残酷過ぎる事実には、蓋をしておいたかっただけなのかもしれない。

だから私は叫んだ。指を差して女王を糾弾した。嘘だ、デタラメだ。だって、そう、本当のことを親切に教える理由なんてないじゃないか。権利がある？ 権利だって？

そんな事を言っておきながら、どうせ最後には私なんて死んでもいいと思っっているから人質になんて取っているんじゃないか……

『つと、言い忘れておった事が一つある』

『そもそもの話じゃがな。これから何がどう転ぼうと、お前さんを殺したりする事など決してないよ』

安心させるような、落ち着かせるような。ひどく優しい声色で私の髪を撫でる女王は、いけしやあしやあとそのような事を宣のたまったのだ。

『必要とあれば迷わずそうする。じゃが必要でないことまではせん。なあ、考えてもみよ。お前さんは窮地に立たされたあの小僧を前にしてどう振る舞った？ そう、この儂にさえ立ち向かうほどの勇氣を見せてくれたじゃないか！』

『儂の知ってるサラマンダーはのう、これだけ自分のことを想ってくれているお嬢さんを助けにこない契約者など「力を貸すに値しない！」と、そう立ちどころに見限ってし

まうじやろうて』

してやったりという顔で私の目の前にどっしりとあぐらをかいて座る竜の女王は胸の下で腕を組みつつ、さも自慢げにそう言ったのだ。

『儂は友だちが帰ってきたくれさえすればいいのじや。もしあやつがサラマンダーもお前さんも捨て置き逃げるようならばそれで善し……よしつて事あないか。お前さんだけはちと複雑な気分になるじやろうが……ま、そんな時や儂が責任もつてうちに帰してやるわい』

『でもなあ、さすがに立ち向かってくるぶんには殺すしかない。すこやし意地の悪い問題を出してしまつたという自覚はあるが……どのみち殺すしかなかつたあやつを、お前さんの勇気に免じて故郷に帰す道だけは残してやれたのじや』

そして女王は『自分のしたことの偉大さを分かつておらぬようだから言っておくが』と前置きして――

『お前さんがあの時に竜の女王の頭を棍棒でぶん殴るなどという無謀を冒さねば、その献身をあの場合で示していなければ。儂はこうしてお前さんを人質に取るということをすらしなかつたのじや』

『……ただし、この「慈悲」が報いられるか否かはお前さんの献身に対するあやつの無慈悲に掛かっている、というのが何とも難しく、皮肉な話ではあるのじやがのう』

——でも、それでもサラマンダーが、私を置いていくエリックの方に付いていったら？

自分でも震えていると分かるような細かい声は、しかし断言によつて掻き消された。『縁を切る。それはもはや儂の知っているサラマンダーではない』

『誇りを捨ててまであの男と心中したのであれば、好きにすればよいわ。儂の知つた事ではない』

言っていることは厳しいけれど、その真摯な表情は古くからの友人に対する確かな信頼を物語っていた。そんな事には絶対にならない、と……。

この私にそれほどまで信頼の置ける友人がいるだろうか。この期に及んでさえ私はエリックの事を何も分かっていない。来るのか、来ないのか。本当は来てほしいのか、来ないでほしいのか、自分の事すらもまだ分かってなんていないのに。

……来てほしい、なんて本当は思っちゃいけないと分かつてる。それはきつとすごく醜い感情なんだと思うから。だけど……分らない。自分のことも、エリックのことも。

だから今から予想できるのは一つだけ。

きつと私は、助けが来ても来なくても酷く取り乱してしまふんだろう。その時が来れば、必ず。

『だから、お前さんには知る権利があった』

『小僧が儂に戦いを挑みに来るにせよ、尻尾を巻いて逃げるにせよ、どちらにしても痛みを与える結果となつてしまうことは心から申し訳なく思う』

『だが忘れるな。用意を怠るな。お前さんは生きるのじや——真実を知つてあの町へと帰るからには、必ずや何かしらの決断を強いられる事にならう』

決断。選択。

次に故郷に立つた時。賢者たちと別れて、師匠の墓に花を供えて。時計台の上で姉さんと向かい合つて、もしかしたら隣にはエリックがいる。

その時に私は何を思っている？ 何を決める事を迫られる？ 今の私にはまだ分からない。だけど私はその時、きつと——

???????

「マ、ク、ニア……」

「……………」

目を開けた時、全ての結末を理解した。

ここにいるエリックは焼け跡だ。彼の命は、ここには無い。

体の各所が炭化してボロボロと崩れ落ちつつあるエリックを悲痛な目で見ている“賢者”が視界の端に映った。彼は、彼らは、ここに来てしまった。その過程はどうであれ、変えられない現実として目の前にあるものが結果としての全てだった。

「ほんつ、とに、馬鹿……」

何も見えない。今ここにいる彼の他には何も。頬を伝う涙とは関係がない所でそう感じた。

そして、死力を振り絞るような顔をして私の耳元で口を開くエリックは。

そして。

そして。

「お前の師匠は、オレが殺した」

虚ろな瞳でそう語るエリックの言葉を、初めは理解することが出来なかつた。

息遣いが触れ合うほど近くにいる。手を伸ばせば掴めるほどに彼の心を近く感じる。

だからこそ分かる。だからこそ分からなかった。

こいつは今、何を言っているんだ。

「それだけじゃ、ない。エバンス、アトム、フレイヤ……エドガーに、クラリス。最後に、そうだ……アツシズ。全員だ、全員をオレがやった……」

「だから、なに、言ってる」

ドウエルガの連続殺人事件、その被害者の名前は全員頭に入れてある。中には親戚もいるし、知り合いや友達だって何人もいた。

エリックの口からすらすらと流れ出ていく名前の数々はただの一人として変わらず彼らのものと符合する。

それは、つまり何だ。

考えがうまく纏まらない。何がどうなってる。

「あの町を、消し去らないといけなかった」

エリックの独白は私の理解など待たず、ただ滔々と口から漏れ出すように続いている。

「あの町の技術を、歴史を。結束を……信じるものを、法を、組織を、命を……ひとつずつ、細かく砕いて、葬り去る。それがローレンスから、オレが受けた……ただ、ひとつの、仕事……」

「あ……、な……」

「ドウエルガを、消す。それしか生き残る、道がないと、ローレンスが言っていた……それしか……」

生き残る。その言い方はやけに抽象的だったけど思い当たる節はある。

近い将来に天使の軍勢がドウエルガを滅ぼす。それは大昔の契約が原因で今の魔王様にも手を出せない、決して避ける事のできない災いなのだとかイーンドラゴンは言っていた。

だけでもし、もしドウエルガという町が無くなってしまうば？ ドワーフ族と人間は昔のように切り離され、女神イリアスがわざわざ手を下しにくる事も確かに無くなるのかもしれなかった。けど……

「……これで、オレたちが生き残れる保証なんて何も無い。ヤツらは散り散りになった全員を、地の果てまで追い、殺すかもしれない。オレが今までやってきたことは、無駄なのかもしれない……」

そうだ。そんな不確かな希望のために動くには残酷すぎる方法なんだ。理屈だけは分かる、けど私の知っているエリックはたったそれだけで仲間殺しに手を出すようなヤツじゃない……。

「だがローレンスは、あいつは、自分が死ぬことで計画を完成させようとした。最後の最

後に、ドワーフの首長あいつを人間の司祭長オが、殺せば……ドウエルガは決定的に引き裂かれてくれる、と考えた。その覚悟を聞いて……オレは、動いた。仲間を殺し続ける道を、自分で選んだんだ」

「……………」

「それでも、ここでオレは死ぬ。何も成せないまま……終わった、終わったんだよ。あそここの未来は閉ざされたが、代わりにもう誰も、死ぬ事はない。オレが手にかかる事はない。……だからお前に、ようやく、話せる」

「や、……」

やめて、と咄嗟に叫ぼうとした。

「だけどその一言は私の喉にべつとりと張り付いたまま、声として出ることなく——
「オレ達は、ずっとお前を愛していた」

何よりも残酷な台詞が、私の心の奥深くを抉るように突き刺さってきた。
救いたかった。守りたかった。そんな何よりも望んでいたはずの二人の真実ほんとうを前にして、それでも何と言つていいのかが分からない。

「頼む……ローレンスを止めてくれ。あいつは、誰かの手で罰を受けなきゃいけない。それを何よりもあいつ自身が願っているはずだ……」

「……そんな」

「ドウエルガは死ぬ……だがお前は、生きてくれ。それ、だけが……オレと、あいつの、希望……」

ふらりと、私の瞳を覗き込むエリックの体から力が抜け落ちる。覆い被さるように倒れ込んでくる罅割れた体の重さは驚くほどに軽くて――

その心臓は、止まっていた。

あまりにも呆気なく、私の目の前で。最後まで私を置き去りにし続けた彼はこの世界から消えていなくなってしまった。

声を荒げて私は泣いた。

今にも崩れ去りそうなその体を抱いて。

第46話

雄大に連なるゴールド山脈、その頂。

暁色に燃え上がる夕焼けが山々を紅く照らす風景を一望できる、雲の果てにすら届くばかりの聳え立つ絶境にて。

「やはり此処、か」

「……………」

先の戦いにより抉り取られた首筋の傷を既に塞ぎつつあるクイーンドラゴンは、久方ぶりに目に入れる友の背中へと声を掛けていた。

サラマンダー。揺らめく炎をその背に纏う四大精霊の一角にして今回の騒動の原因とも言える彼女は、濛々と煙を吐き出しながら線路に沿って遠ざかっていく地上の汽車をただただ遠い目で眺める。

橙に染まりながらこの地を去っていく黒鉄くろがねに果たして何を思うのか。数年という時をとある人間と過ごしたあの町へと帰還する列車にしかし、今や自分は乗っていない。そしてこれが正しく永遠の別れになるという事をサラマンダーは分かっていた。

「儂には一片の後悔も無い」

どかつと、その隣に腰を下ろした竜の女王は言う。サラマンダーとて女王とは長い付き合いだ、言葉の裏にある意図ぐらひは読み取れる。

かの契約者を殺したという結果に自分は何も後悔などしていない。だがお前はどうかののだ？ お前の選択次第では彼が死ぬ必要など無かった。できれば自分だつてこのような手段を取りたくはなかつたというのに、全てはサラマンダーが頑としてこちらの話を聞き入れなかつたがためにこのような事になつたのだ。

その真意とは何だ？ その決断をしてお前に欠片の後悔も無いと言い切れるのか？ これだけの意味をただの一言と眼差しに込めて語るクイーンドラゴンに対し、サラマンダーは静かに瞑目する。

「あの男の決断に、私は力を貸し続けた」

「うむ」

「決して正しい道を歩いた男ではない。心を砕き、狂気に身をやつしていたと言ってもいい。だが、それでも私は、力を貸し続けた」

「……………」

「確かに正しい道ではない。だが何よりも恐るべきは……………只でさえ危うい信念が自覚も無いまま捻じ曲がり、自らが選んだ道をも踏み外してしまう事だ」

一歩間違えばそうなる恐れが奴にあつた、と？

そう目線で問うクイーンドラゴンに、しかしサラマンダーは首を横に振る。

「結論から言えばそうはならなかっただろう。私を信用しているが故に柄にも無い人質の真似事などでお前が私を繋ぎ止めようとしたのと同じように、私の中でエリックはその覚悟を信ずるに足る男となっていた。奴の信念は何があつても曲がらなかつたらう……だが、それでも」

力を貸し続けた相手の行き着く先を、この目で見届けない訳にはいかなかったのだ。

その言葉に竜の女王は眉を顰める。これは果たして責任感ゆえの決断か、それともサラマンダー自身の弱さなのだろうか。

「奴の選択は私の責任でもある。だからこそ、奴の凶行がこの手を離れていく事を私は何よりも恐れたのだ」

「……………」

「これを私の、傲慢だと思ふか？」

幾星霜を生きた自然の化身にして、自らが生まれる遙か前より武人としての道を歩んできた尊敬すべき先達かつ好敵手。

そんな彼女は今や単なる友としての弱々しい微笑みを浮かべながら、さも不安そうに

問い掛けていた。

そう、それは罰を恐れる子供のよ様な表情で。

「……めんどくせえなあ」

しかしそれはそれとして、クイーンドラゴンはその懊悩を真正面からバツサリと切り捨てた。

何を言われたかを一瞬理解できずに呆けた顔を晒していたサラマンダーは当然の事ながら燃え上がるような勢いで顔を赤らめて怒り出した。全く文字通りにだ。

「……めつ、めんどくさいだど!?!」

「だってそーじゃろーが! どうせ素直に小僧から離れたたつて後からめそめそ悩むくせしてなーにを言つとる! あんなもんを誰がサツパリ解決できるかつつうの!」

「うツうるさい! 久々に会えたから人がせつかく腹を割って話したんだぞ、それを言

うに事欠いて……！」

「あーはいはい、きみだつて人の子なんじゃから時には間違える事もあるう！ 神様でもなければちよつとした事で不安になったりもする！ 次からはきちつとすりやええ話じゃないか！ でなけりゃ酒でも飲んで忘れちまおうぜ！」

「なんだその適当な励ましの定型句は！ それに私は人の子でもなければ神様だつて一応やつていた身だぞ、分かつてて言つてるだろう!? だいたいお前は昔からそういう所が……！」

ああだのこうだの、段々と話が逸れていつてるのにも気付かず二人の口喧嘩は白熱していく。

二人の仲を知らぬ者が見れば目を点にしてしまいそうな光景だったが、むしろこれが本来の彼女達の日常であるとも言えた。サラマンダーにとつては特にかもしれない。

ジメジメとした皮肉の応酬が主となるどこぞの水精と違い、真つ向から悪口をぶつけ合うような気質に合った喧嘩ができる仲間というのは彼女にとつて本当に貴重な存在だった。その関係はその関係でどうなんだと思われる事もあるが、友と噛み締めるそのやり取りは紛れもなくサラマンダーが日常に帰つてきた事を実感させる象徴だったのだ。

「はあ、はあ……瀕死のババアがくそ生意気な……」

「ふう、何をほざくか……ふう、儂よりずっと年増の癖をしてからに……」

そうして暫く、互いに息が切れて悪口の鋭さも衰えてきた頃合いに。クイーンドラゴンはサラマンダーに指を突き付けてこう叫んだものだった。

「あーもう小難ツしいことをウダウダ考えてるようじゃからのう！ 儂の前で延々愚痴を垂れる前に一つだけハツキリさせておけ！」

「なっ」

「最後までエリッククの傍に居続けたことを、きみは心から後悔しておるのか!？」

そんな筈はない。

(……………)

唐突に向けられた問い掛けに対して咄嗟に思い浮かんだその一言が、今のサラマンダーにとつての全てだった。

初めは遠からずに訪れる。その時の、ドウエルガの決断を見届けるまでのつもりで就任の儀式に訪れた司祭長と契約を結んだ。だが祀神としてあの町を守護し、エリックと共に駆け抜けていったあの日々は彼女にとつて本当に楽しい思い出となっていた。

彼らが真実を知るまでの、あの三人組との日々。

最後まで彼に寄り添い続けた事は紛れもない自分の意思だ。ならばそこに後悔などある筈はない。

「……そう、だな。確かにそうだ。そんな筈はない」

ぼつりと、サラマンダーが呟いた直後。

まるで糸が切れるような勢いで仰向けに、クイーンドラゴンが音を立てながら倒れ込んだ。

「ああ……んツとに疲れた！ 最後の最後の大事な片が付いて気が抜けたわい、儂やもう寝るぞ！ こっから何年かは起きんから五月蠅うるさくするなよ！」

「……そうか、もうお前が女王を続けるのもこれが最後なんだな」

少しの沈黙の後——サラマンダーは“ちよつとした悪戯”を思い付いたような顔をして静かに囁いた。

「お休み、おうらん桜蘭」

意識の狭間に呼び掛けられた一言に、竜の女王は少しだけ驚いたように片目を僅かに開く。

「……久しく、その名で呼ばれる事は無かったのう。長く、本当に長く……」

「お前は十分に一族に尽くしてきた。後の余生は好きなように過ごせばいい」
再びの沈黙が二人を包む。夜の帳が下り始めた紫色の雲居に星が瞬く中、ただ穏やかな時間が過ぎていく。

「あとの事は、頼んだぞ」

その一言に思わずサラマンダーは振り返った。

死闘を越え、斜に奔る赤黒い傷を深く首筋に残した女はどこまでも穏やかな、しかし臃げで虚ろな面貌のままに目を閉じていて。

「桜蘭？」

??????

前首長のローレンスが投獄された。

その報せはドワーフ一族の歴史に隠された真実、そして司祭長エリックの死と共にドウェルガを隅まで駆け巡る事になった。ローレンスの従妹として知られているマクニアの告発によって明らかになったそれは、些少の時も置かずして人々を混乱の渦に叩き込んだのだ。

露見した天界の脅威に対する恐れだけではない。遂に明るみに出た殺人者への怒りがあつた。

今回の件はドワーフ族にとつて最も尊敬される職人らの命と幾多の技術が失われたというだけではない。法を執行するべき立場の彼らに家族や友人を殺された者達……誰に向ければいいのかも分からないまま抱き続けていた彼らの計り知れない怒りは、死んだ司祭長に代わり沈黙を貫く元首長たるローレンスへと容赦なく向けられた。

残された彼女の部下と司祭団が混乱を収めようと動いたが、その腐心も虚しく遺族らによる暴動が起こるのも時間の問題かと思われた。

ドウェルガを引き裂くというローレンスの目論見は“本質の見えない不安”を裏で管理する誰かの存在が無くては意味を為さなかった。殺人の元凶や天界という外敵の存在が明らかになった今、人間とドワーフは混然とした反発と結束に支配されつつあつた。意図的に溜め込まれた不信と恐怖が最悪の形で暴走しようとしていたのだ。

だがその時、誰も予想しなかった事が起きた。

ドウエルガ時計台、地下留置場。そこに拘束されたローレンスの元へと憎悪をもって殺到しようとする人々、司祭団を始めとする体制側。両者の衝突がまさに起ころうとするその寸前だった。

その場にローレンスの従妹であるマクニアが割って入り、地に擦り付けるまで頭を下げたのだ。

大切な人を失った気持ちはよく分かる。

自分もそうだ、多くの友が殺された。

だけど、だけど、私にとっては。

それをやったのは、それでも家族で。

今でも、家族で。

叫び続ける、涙の混じったその声に人々は顔を見合わせた。

護れなかった者達、奪われた者達。大切な両方を同時に失った少女は、頭を差し出すようにただ懇願をしていて。

だからお願いだ、傷つけ合わないでくれ。

これ以上、あの二人の為に血を流さないでくれ。

だから、どうか。

長い長い間、マクニアはただ頭を下げ続けた。

彼女は多くの人々から慕われていた。常に快活で、面倒見が良く、努力を怠らない。その人柄を知る者は多い。それが誰よりも家族の様子を案じていたという事も。

他ならぬ家族の罪を告発し、それを地に頭を擦り付けてまで庇い立てるのに彼女がどれほどの気持ちを押し殺しているのかを、自分達はどれほど理解しているというのだろうか。

不信は消えない。恐怖は収まらない。だがマクニアという少女の今を前にした彼女の、怒りを叫ぶ声。それだけは少しずつ小さくなっていった。

そうして、やがて、人々が武器を下ろして立ち尽くすまでになったあと。

「……………」

ふらふらと立ち上がった彼女は、時計台の地下へと降りる階段に真っ直ぐ歩を進め

た。

「ごうん、ごうんと、正午を伝える鐘の音が遙か頭上の鐘楼より響く。マクニアは地下への階段をこつこつと一人で下りながら涙の跡が残る顔でぼんやりと、宙を眺めつつ思索に耽る。」

「これで良かったのか、これしか無かったのか。もう遅すぎる、答えの出ない問いだ。辿り着いたその牢の中には姉が居た。拘束された時のままの姿で四肢を鎖に繋ぎ止められながらダラリと俯く彼女には何の意思も気概も感じられない。」

「今の彼女が何を思っているかは分からない。ドウエルガを救う自らの計画が断たれ絶望しているのか、それともこれ以上の罪を背負う事が無くなったと心の底で安堵しているのか。」

「もはや何も喋らない彼女から問い正す事はできない。きつとこれからも同じなのだろう。木偶のように動かなくなってしまった彼女からは、これからも、ずっと。」

「姉さん」

「だから、だからこれは単なる独り言であり。」

「やっぱり、この町を捨てて他のどこかになんて、とてもあたしは出来そうにないんだ」
「墓前に捧げる、祈りの言葉であり。」

「だから、あたしは行かないよ」

最後の決断だったのだ。

マクニアが階段を上がり、立ち去って暫く。

銀髪の下ワーフは最後、ただ静かに目を閉じた。

??????

「なあプロメステイン」

「何ですか？」

「これで良かったのかね」

「さあ……」

ヨロギ村までの帰路、あの町から遠く離れたイリアス教圏のとある村落。

結局治り切ることなく包帯に覆われたままの右脚を気にしながら、がらがらと揺れる車椅子の上で俺は朝焼けに目を細めていた。

特大の混乱が容易に予想されるドウエルガではとても体を休められないだろうと判断した俺達はすぐにあそこを出発した。しばらくはここで傷を癒す事に専念するつもりだ。

車椅子を押してくれているプロメステインによれば時間さえ掛ければ完治するだろうとの事で、だからその辺りは特段に心配しちやいない。

ただ、それでも一つ気掛かりなのは。

「死ぬんでしょうね、彼女達は」

明け透けすぎる台詞に頭が痛くなる。それをやるのが俺達の神様だっていうんだから尚更だよ。

結局マクニアをあそこから連れ出す事はできなかった。あいつは、残された人達に寄り添うことを選んだから。

心中なんて馬鹿みたいな真似はやめたほうがいいですよと、プロメステインみたいなのは臆面もなくそう言ったがな……俺もあの時ばかりはマジでバカの口を黙らせてやりたいと思つたが……余所者の俺達には分からなくてもあいつにとっては、まだそこには数えきれないぐらいの大切な物が残されていたはずで。

真実を知ってしまった上で彼女が決断した事に横から口を出すなんてのは、俺にはできなかつた。

「……………」

次第に陽が昇り、何人かの村人は目を覚まして外に出始めているようだ。

俺の姿を見かけては決まって笑顔で頭を下げてくる。彼らは創世の女神イリアスの次に名高い賢者として俺を歓迎するばかりか、この脚の怪我を心配し、甲斐甲斐しく世話までしてくれる。曖昧な表情で手を振り返しながらも、俺はその長閑のどかな光景を妙な気分で見つめるのだ。

この人達の暮らしを以前より豊かな物にしたのは俺かもしれないが——ヒトより遙かに強大な魔物なんていう存在が蔓延る世界で自分達は守られていると、毎日を安心して生きていけると。心の拠り所として教えを与えられ、安らかに日々を送っていかけるのは間違いなく女神イリアスがいるからだ。

だからこそ俺はその極端な教義に不信感を抱きながらも、イリアス教は間違いなく人間の味方ではあるのだろうと納得していた。少なくとも否定的に見てはいなかった。それは確かだ。

だけど、今回の件はどうだろうか。

人間に友好的かどうかなんて関係ない。ただ魔物と関わりを持ったというだけで果実の腐った箇所を切り捨てるように、鼻を摘んで汚れた部分を排除するように簡単に殺戮をしてみせる。

神の善悪なんてのを推し量る方が傲慢なのかもしれない。少なくともこの世界ではそうだとされている。だけど俺は……

「なあ、プロメステイン」

「はい」

近くに誰もいない事を確認してから、俺は言った。

「天使の立場からして、どう思う。例えばこれはお前らしく言えばだけどき……真理つてやつを追い求めるのに、誰もが幸福で自由に生きられるよう努力するのに、人も魔物も無いと思うか？」

「当然です」

「ふはっ」

即答だった。自分の生まれつてのをあまりに考慮していない奴の回答で思わず笑いが漏れてしまう。

神の考えが善悪で測れないように目の前にいる天使の考えもその基準に無いのだろう。差別することが悪だと思うから隔意を持たないんじゃないやなく、隔意を持つ理由が己の中に無いからこんなにも簡単に自由を肯定する。断言ができる。

プロメステインの頭の中にあるのは倫理ではない。生まれた時から周りに吹き込まれてきた価値観すら全て跳ね除けてきた異常な精神が生んだ、何者にも縛られる事のない

い彼女だけの判断基準。

だから面白いのだと思う。だから俺は、こんな世界でも、自分の人生を捧げる相手が彼女で良かったと心から思うのだ。

「……いいですね、その顔」

「ん……？」

「私が好きな顔ですよ。そうですね、今度は何を見つけたんですか？」

何を見つけたと来たか。こいつの突飛な言動には慣れたものだが、今度はまた輪をかけて抽象的でよく分からない事を言いやがるな。

顎に手を当てて少しの間考える。そうだな、見つけた。見つけたか……強いて言うなら、そういえば。

「覚えてるよな、俺の人生を全て掛けた先にある物をいつかお前に見せてやるって。そう誓ったあの時の事を」

「ええ、昨日の事のようにはつきりと」

あの瞬間からだ、それこそが俺の生きる意味になったのは。俺を救ってくれたお前に報いる方法はこれしかないと思った。それは今でも変わらない。

そうして、現在。

人生の全てを費やしてでも為すべき目標とは何なのだろう？ 肝心のそれが何なの

かを俺は今日まで探し求めていた。だけど今ならそれが分かる気がするんだ。

「誰でもが理不尽に妨げられずに、自由を追い求められる世の中を作りたい。これからお前が独りでいる必要なんて全く無くなるぐらいの世界にしたい」

そんな世界を、お前に見せたい。

今回の件を通じて見つけた物があるとするなら、きつとそれに違いない。

一世一代の告白かという気持ちで俺はそう言った。が、次の瞬間——ぽかんと呆けた顔をしたプロメステインは、何を狂ったか突然、腹を抱えて笑い出したのだ。

「く、くくつ……ふ、あはは!! 夢は大きく、世界征服でもするつもりですか!」

「なっ、い、今のをどう解釈すりやそうなるんだよ!!」

「ふふつ……いえいえ、それぐらいする気でなければとても達成できない目標だということですよ。言うまでもなく、力で我々やイリアス様を退ける事は不可能と言っていいでしょうけどねえ」

俺の言った事がよほど可笑しかったのかくつくつと笑い続けるプロメステインを見て肩の力が一気に抜ける。どうやら俺は俺の想像以上に荒唐無稽な事を言ってしまったらしい。

「だけどまあ、やり方が一つしか無いなんて誰が決めた訳でもないだろ。どうすれば実現できるかなんて長い時間を掛けて考えていけばいいことさ。それこそ一生をかけてやってもいい。」

「何も天界に踏み入って女神の頭をぶん殴ろうって話じゃないんだぞ。俺には俺の考えがだな……」

「くふつ、あ、あははははは！ あの方の、頭を！ ぶん殴るつて！」

「待て馬鹿！ 揺れる！ 椅子押しながらツボってんじやねえよ！」

プロメステインがこんなに笑ってる所なんて初めて見るぞ、どうしちゃったんだよホントに。俺がたまに言うジョークにはいつもいつも無反応の癖してこういう時だけ爆笑しやがって……

「……落ち着けよ、なあ、落ち着け。いいか？」

「はあ、はあ、はい……」

「幸いにも俺はイリアス教の中で立場がある。そりや言っちゃまえばさ、俺がその気になればいくらでも向こうに貢献できる立場にあるつて事でもあるだろ」

今まではイリアス教への言及も干渉もなるべく避けてきた。それは率直に言や宗教つてもんが怖かったからだ。これは未だに俺が前世に価値観を引つ張られている要素の一つでもある。

「ただどこから本格的に力を入れて盛り立てて、とにかくイリアス教にとって重要な存在になる。そうすればいつかどこかでイリアスと直接交渉をして折り合いを付けることだって出来るかもしれない。そうすれば、俺達みたいな奴らの居場所だつてきつと作り出せる。」

「それで、出来れば、その中でイリアスの事についても知っていきたい」

「……………はあ」

「神様つてのはよく分からないけど……………それは俺ら人間が頭の中で作り出した怪物なんかじゃなくて、考えがあつて、感情がある。そうだろう？　俺からすればお前と同じでさ、わかり合う事だつて無理じゃないと思うんだよ」

「天使の次は神まで誑したふら込む気ですか。いやはや、何ともまあ……………」

「……………いや、例えばの話だぞ？　今はこれぐらいの事しか思い付かないつてだけだ。もちろん魔導の修行だつて続けるし、まあ……………お前に少しでも追い付けるように努力はするよ」

正直、相手の力の大きさを想像すればどれだけ命知らずで綱渡りな事をしようとしているのかつてのは何となく分かる気がする。

「ただ俺はこの目で見たんだ。鉄と結束と繁栄にかつて生きた町、ドウエルガという場所の歴史の最後を。同じ過ちを再び繰り返させないために、彼らが生きた事を無駄に

しない為に、前へと向かって進んでいきたいから。だから——

長く続いた修行の旅はここで一度幕を閉じる。
あの町で得た教訓を心に焼き付け、俺達の故郷のヨロギ村へと再び帰る時がやってきた。